序論

本稿は、人の移動に際して生じる被抑圧者や被支配者である移民に対する文化的な抑圧に注目する。人の移動を伴うグローバル社会で、移民への抑圧が断続的に行われている。移民への抑圧に注目することは国際文化学という学際的研究において大変重要である。なぜなら、今もなお移民への抑圧は、自己の文化による他者の文化（マイノリティーの文化）の管理や同化によって推し進められているからである[1]。マイノリティーの習慣や慣習に対する文化的な権力の行使が学際的に十分に分析され、それらの権力関係が批判されないかぎり、私たちの社会において紛争を解決することは不可能である[2]。

本稿はこうしたマジョリティーによるマイノリティーへの管理や同化についてアメリカの多文化主義と日系移民の歴史を検証するものである[3]。アメリカの多文化主義は、アメリカ内部の多様性を承認しながら、同時に多様な民族を統合する装置として機能してきた[4]。レイ・チョウが指摘するように、アメリカの多文化主義においては、「白人文化」による「白人以外の文化」の承認という、一方的な統合がアメリカ社会内部で進められ

---

[1] グローバル化がマイノリティーへの断続的な暴力を引き起こしていることについてアルジュン・アパデュライは詳細な議論をしている。彼は「日常生活と、その急速に変化するグローバルな背景とのあいだを媒介しているのは､いくつもの不安や不確実性である」と指摘し、マイノリティーという混ざりあった存在によって、ナショナルな市民性が不明確になる際、ナショナルな市民によるマイノリティーへの暴力が顕在化することを述べている。
アパデュライ,アルジュン（2010）『グローバリゼーションと暴力―マイノリティーの恐怖』藤原達郎訳　世界思想社　p.65

[2] 本稿では、マイノリティーを、社会的少数者、少数集団、少数派と定義し、マジョリティーを社会的多数者、多数集団、多数派と定義する。アメリカにおける日系移民はヨーロッパ系アメリカ人に対して、社会的に少数派であることから、本稿では日系移民をマイノリティーと定義する。また、本稿では、アメリカにおけるヨーロッパ系アメリカ人をマジョリティーと定義する。

[3] 本稿はキムリッカやバーシャらの多文化主義の捉え方を批判している。彼らの議論は多文化社会の中で国民の一員としていかにマイノリティーを迎え入れるかを検討することであった。詳しくは
Kimlicka, W., & Bashir, B. 2008. *The Politics of Reconciliation in Multicultural Societies*. New York: Oxford University Press を参照されたい。

[4] 多文化主義という言葉は 1980 年代後半から教育の場を中心に用いられるようになった。多文化主義という言葉は、職場や社会構造的に差別されてきたマイノリティーの地位向上のための指針として使われ、多様な文化をアメリカ社会の中で認めていくための理念として使われるようになった。しかし、アメリカが多文化主義を進める際、マイノリティーの文化が本質的な文化とみなされ、マイノリティーがアメリカへの貢献という形で語られていく。マイノリティーの地位向上であるはずの多文化主義が、多様性を管理し、国民化するための装置として機能している。
Chow, R. 1998. *Ethics and Idealism: Theory-Culture- Ethnicity Reading*. Indianapolis, IN: Indiana University Press

ている[5]。そこで本稿ではこうした一方的な統合[6]を進めていくアメリカの多文化主義言説[7]の問題を明らかにし、アメリカにおける主流派文化[8]が他の文化を承認していく際、実際に承認されなかった文化に注目する。

本稿では具体的に、マジョリティーによるマイノリティーへの抑圧[9]と統合の事例として、アメリカ多文化社会の中で主流派によって語られてきた日系移民の歴史に注目する。第二次大戦中、アメリカの日系移民に対して行われた強制収容を舞台に語れてきた日系移民の歴史に注目し、その問題を明らかにする。

1941 年 12 月 8 日、日本とアメリカが開戦し、翌年にはすべてのアメリカに住む日系移民が強制収容所に収容された。アメリカ社会では全米 10 カ所に日系移民の強制収容所が建設され、すぐさま強制的な収容が行われた。1980 年代に議論されるようになったアメリカの多文化主義言説[10]は、日系移民の強制収容所の経験について語っており、戦後、日系移民は「日系アメリカ人」としてアメリカに貢献してきたことを強調してきた[11]。

しかし全米 10 カ所に設置された強制収容所の中で特異な収容所がツールレイク強制収容所（以下ツールレイク・キャンプ）である。この収容所にはアメリカへの「不忠誠

---

[5] 同上

[6] 本稿では、マイノリティーが国民化されていくことを統合という。

[7] 一方的な同化を進めるアメリカの多文化主義の問題は現在も続いている。2016 年 11 月のアメリカ大統領選挙において、ドナルド・トランプとヒラリー・クリントンの選挙戦の演説が注目されている。トランプは、アメリカに住むすべてのイスラム教徒のデータベース化を提言している。また、国民が一致団結することで、再び強いアメリカを作ることを掲げている。多文化主義において問題とされる、多様性の管理と国民の団結が、トランプの演説において、繰り返されている。
クリントンも同様の演説内容を繰り返す。彼女は、党大会の受諾演説において、国の経済のために貢献している何百万もの移民に市民権を与えることや、再び全米国民が結束して、かつてないほど強いアメリカを目指すことを述べている。国に貢献する「善良な移民」に市民権を与えることや、多から一を作りあげるという多文化主義の統合の理念が、彼女の発言の中で繰り返されている。
New York Daily News, January 5, 2016, A year of Trump: The most controversial comments Donald Trump said in 2015,
http://www.nydailynews.com/news/national/donald-trump-controversial-comments-2015-article-1.2482124, 閲覧日 2016 年 10 月 3 日
CNN.Com, July 25, 2016, Hillary Clinton's full DNC speech (Entire speech),
http://edition.cnn.com/videos/politics/2016/07/29/dnc-convention-hillary-clinton-entire-full-acceptance-speech-sot.cnn, 閲覧日 2016 年 10 月 3 日

[8] 本稿では、ヨーロッパ系アメリカ人を中心とする文化をアメリカの主流派文化と定義する。

[9] 本稿では、マジョリティーがマイノリティーの文化や行動を押さえつけることを抑圧という。

[10] 本稿では、アメリカの多文化主義がマイノリティーを語り、記述することを、多文化主義言説と定義する。

[11] 米山裕（2000）「日系アメリカ人の創造」西川長夫、姜尚中、西成彦編『20 世紀をいかに越えるか：多言語・多文化主義をてがかりにして』平凡社　pp.120-143　p.141

者」と呼ばれる人々が集められた[12]。1943 年にアメリカ政府によって実施された日系移民に対する忠誠心調査は、アメリカに住む日系移民に対してアメリカ人であること（善良なアメリカ人であること）を確認するために実施されたものである[13]。この忠誠心調査に答えなかったものや、様々な理由から忠誠を拒否したものは「不忠誠者」と呼ばれた。本稿ではこうしたアメリカの「不忠誠者」と呼ばれた人々が集められたツールレイク・キャンプの歴史に注目する。このキャンプはアメリカの多文化主義言説において語られることがなかった、マイノリティーの中の更にマイノリティーの歴史である。本稿では、従来の研究において語られることがなかった従属的社会集団[14]として彼/彼女らを捉え、彼/彼女らの歴史をサバルタン史[15]として考察する。

そこで本稿ではマジョリティーによるマイノリティーへの抑圧や統合の中で語られることがなかった日系サバルタンの歴史に注目する際、重要となるサバルタンの歴史とは何かについても明らかにする。そして現在においてもなお、ツールレイク・キャンプのサバルタン史が多文化主義における日系移民の表象において語られることがなかったことを明らかにする[16]。アメリカ多文化主義言説において語られることがなかったツールレイク・キャンプのサバルタン史に注目することで、統合を意図するアメリカの多文化主義言説を批判する[17]。

更に本稿ではアメリカの多文化主義言説において語られることがなかったツールレイ

---

[12] 彼/彼女らはアメリカ社会において「ノー・ノーズ」や「ノー・ノー・ボーイ」と呼ばれてきた。

[13] 忠誠心調査は英語で Royalty Oaths と呼ばれ日系社会を混乱に招いた。
Lim, D. 1990. *The Lim Report: A Research Research Report on Japanese Americans in American Concentration Camps During World War II*. Kearny, NE: Morris Pub

[14] 従属的社会集団をイタリアの思想家であるアントニオ,グラムシはサバルタンと呼んだ。この用語は「下位の」という意味を有し、グラムシによって、支配階級の権力に服従する社会の底辺層を指して用いられた。サバルタンには農民や労働者、それに権力への接近に拒否するそれ以外の集団も含まれる。支配階級の歴史が国家において実現されてきたことから、歴史とはさまざまな国家や支配集団のそれであるとして、グラムシはサバルタンの歴史の編纂に興味を持ったのである。
本稿では、マイノリティーの中の更にマイノリティーの集団を従属的社会集団（サバルタン）と定義する。マイノリティーの中のマイノリティーである日系移民（従属的社会集団）は、統合を進める多文化主義において、「下位」の存在として扱われてきた。
アッシュクロフト,ビル、グリフィス,ガレス、ティフィン,ヘレン（2008）『ポストコロニアル辞典』木村公一編訳　南雲堂　p.248

[15] サバルタン史とは支配階級の歴史において、注目されなかった社会の底辺層（農民や労働者及び移民）の歴史である。

[16] 日米の日系移民史研究において、ツールレイク・キャンプを対象としたものはが注目されたものはほとんどない。

[17] 統合を意図する多文化主義において、ツールレイク・キャンプの歴史が登場することはなかった。詳しくは第 2 章で論じる。

ク・キャンプの被収容者らのインタビューを紹介する。ツールレイク・キャンプの歴史を語る上で、被収容者らの声は大変重要である。彼/彼女らの声は数少ないツールレイク・キャンプに関する歴史の証言となる。ツールレイクキャンプはアメリカの「不忠誠者」として、日系社会において差別されてきた[18]。しかし今回のインタビューで彼/彼女らは多文化主義言説において語られることがなかった多様なアイデンティティー[19]について証言している。これらの証言は特定のナショナリティーに帰属しないことを明らかにしている。本稿では 3 人のインタビューを分析することで、アメリカの多文化主義言説において語られることがなかった日系マイノリティーの歴史に注目する。これらの研究は日系移民史について批判的視座を提供するだけでなく、従来の日系移民史とは異なる視座を提供するのでる。

以上に指摘したように、本稿ではアメリカの強制収容所において今まで語られてこなかった人々とその歴史を再考し、アメリカの日系移民の歴史の中でも特異な強制収容所（ツールレイク・キャンプ）について分析することで、国際文化学の研究に貢献することを目的とする。

章構成

本稿は全 8 章から構成される。

第 1 章「国際文化学とマイノリティーの移民」では、国際文化学の概論に注目する。従来の国際文化学の概論的説明においてはマイノリティーの移民は十分に議論されてこなかった。マイノリティーに注目するためにはよりミクロな研究が必要であるが、従来の国際文化学の概論では、マイノリティーに十分焦点が当てられてこなかった[20]。特にマジョリティーがマイノリティーを統合したり、マイノリティーの文化的差異が排除[21]されている社会について、国際文化学概論では十分な説明がなされてこなかったのである[22]。

---

[18] 彼/彼女らは「ツーリアンズ」と呼ばれ、日系社会の少数派として差別されてきた。

[19] 本稿ではアイデンティティーを、自己が誰であるかを指すものと定義する。一般的にアイデンティティーとは変化することのない同一性を保証するものとされてきた。しかし、本稿では、アイデンティティーを人々の置かれている環境や社会状況によって変化するものと捉える。本稿では多様なアイデンティティーを、アメリカ人や日本人といったナショナル・アイデンティティーへの帰属とは異なるアイデンティティーと定義する。

[20] 第一章は国際文化学について初めて定義した平野健一郎の議論を参照する。
平野健一郎（2000）『国際文化論』東京大学出版会

[21] 本稿では排除を、ある集団が国家に貢献しない存在として扱われ、その存在自体を取り除くことと定義する。

[22] 平野の国際文化学についての議論は国際関係の中に文化を位置づけることを目的として

もしミクロな視点から社会的・文化的に抑圧されてきた人々に注目すれば、マジョリティーによるマイノリティーへの管理や統合、或いは排除が繰り返されている現実が明らかとなる。こうしたマイノリティーに対する統合や排除に注目するためには、国際文化学の概論上、よりミクロな視点が必要であることを第 1 章で明らかにする。

第 2 章「ナショナル・ヒストリーと多文化主義に登場する日系移民史の問題」では、アメリカにおける日系移民の強制収容所や日系移民の歩みについての語りが、ナショナルな枠組みにおいてのみ語られてきたことを批判する。まずネーション・ステートとナショナル・ヒストリーに関する先行研究を紹介する。ヘーゲルの『歴史哲学講義』とフランシス・フクヤマの『歴史の終わり』から、彼らの議論がネーション・ステートを基盤として語られていることについて言及する[23]。

続いて、ヘーゲルとフクヤマの歴史分析とアメリカの多文化主義言説との関係について述べる。ここではアメリカの多文化史を説明した日系知識人であるロナルド・タカキに注目する[24]。タカキの歴史観はネーションを前提としており、国家への貢献という形でマイノリティーが度々登場する[25]。アメリカ多文化主義の中で語られるマイノリティーは国民の歴史として語られてきた。多文化主義に登場する日系移民史が一方的に語られ、アメリカ内部に統合されてきた点を本章で明らかにする。

第 3 章「日系移民のサバルタン史：ツールレイク・キャンプ」では、国民の歴史の中で語られる善良な「日系アメリカ人」が生産されてきた一方、そうした歴史から排除されてきた人々に注目する。第二次大戦中、アメリカの日系移民は日本かアメリカのどちらかに忠誠を示すよう強いられてきた[26]。日本のルーツを持ちながら、アメリカに忠誠を示した人々はアメリカで「日系アメリカ人」と呼ばれている。つまり「日系アメリカ人」とは、日本にルーツを持ちながらアメリカ人としてのアイデンティティーを持つ人々である[27]。このような状況下でアメリカに忠誠を示した人々とは異なる経験をした日系移民

いる。つまり文化の政治性については十分な議論がなされていない現状がある。

[23] ヘーゲル（1994）『歴史哲学講義（上）（下）』長谷川宏訳　岩波文庫、フクヤマ,フランシス（2005）『歴史の終わり（上）（下）』渡部昇一訳　三笠書房

[24] タカキ,ロナルド（1995）『多文化社会アメリカの歴史：別の鏡に映して』富田虎男監訳　明石書店

[25] Takaki, R. 1998. *Strangers From a Differnet Shore*.New York: Little Brown and Company

[26] Christgau, J. 1985.*Enemies: World War II Alien Internment*. Lincoln, NE: iUniverse.com p.144

[27] 日系移民がアメリカ人として認識されるようになったのは戦後のことである。彼/彼女らはアメリカに忠誠を示し、善良な移民として認識されるようになった。

が存在した。そこで従来の「日系アメリカ人」像とは異なる経験をした日系移民を主人公とした二つの小説を紹介する。ジョン・オカダの *No-No Boy* とテレサ・ファンケの *The No-No Boys* である[28]。これらの作品はフィクションであるが、現実にあった事実を基に描かれている。作品に登場する日系移民は、ナショナル・ヒストリーにおいて語られることがなかったアイデンティティーの揺れ[29]に注目している。これらの小説を紹介し、小説の中に登場する人物の物語に注目することで日系移民のアイデンティティーが決してナショナル・アイデンティティーにのみ帰属していなかったことを明らかにする。更に従来の歴史において語られない人々がいることを検証していくため、日系移民のサバルタン史に注目する。日系移民のサバルタン史に注目する理由は以下のとおりである。

マイノリティーの更にマイノリティーである従属的社会集団（以下、サバルタン）は、これまでの歴史研究において十分に焦点が当てられてこなかった。アメリカの多文化主義においては、日系移民の強制収容経験と補償運動を表象するのみであった[30]。しかしイタリアの思想家アントニオ・グラムシのサバルタン論はサバルタンが置かれている状況に焦点を当てている[31]。

グラムシのサバルタン論は、サバルタンの声を歴史に反映させるための方法を提示している。グラムシはサバルタン階級の声を取り戻すためには、断片化された声を集める必要があり、このような作業を通してサバルタンへの回帰が可能となると指摘する[32]。第2章で論じるヘーゲルやフクヤマ、タカキらの歴史は、マジョリティーの歴史や社会的・政治的・文化的に権力を持った側の視点から語られてきた。しかしサバルタンの歴史は、マジョリティーの歴史に注目するのではなく、マジョリティーとマイノリティーとの力関係に注目する。本章ではサバルタン論で展開されるヘゲモニー（権力）[33]に注目するこ

---

[28] オカダ, ジョン（1979）『ノー・ノー・ボーイ』中山容訳　昌文社
Funke, T. 2008. *The No-No Boys*. Fort Collins, CO: Victory House Press

[29] 本稿では、日本人/アメリカ人のいずれかのアイデンティティーの選択を迫られた際、どちらのアイデンティティーにも帰属できないことを、アイデンティティーの揺れと定義する。

[30] 岡本智周はこうした多文化主義が表象する日系移民の問題を詳しく論じている。
岡本智周（2006）「多文化教育と日系アメリカ人のナショナルアイデンティティ」『筑波教育学研究』筑波大学教育学会 pp.47-63

[31] サバルタン階級に焦点を当てた分析として代表されるのはラナジット・グハの「サバルタンの歴史」である。同書はサバルタンの歴史的方法論とサバルタンが無視され続けてきた状況を明確に分析している。詳しくはグハ,ラナジット（1998）『サバルタンの歴史』竹中千春訳　岩波書店を参照されたい。

[32] グラムシ, アントニオ（2011）『歴史の周辺にて「サバルタンノート」注解（グラムシ『獄中ノート』著作集Ⅶ）』松田博編訳　明石書店　p.51

[33] ヘゲモニーについては第3章で詳しく論じる。

とで、マジョリティー側の支配によって語られることがなかった日系マイノリティーの歴史に注目する。

本稿でもグラムシのサバルタン論や、主に南アジアのサバルタン史を編纂したラナジット・グハ、 ギャーネンドラ・パーンデー、 シャンタル・ムフらのサバルタン・スタディーズから、多様な日系移民の歴史を考察する[34]。サバルタン概念を明らかにしたグラムシの権力概念に注目しながら、従来の強制収容に関する史実とは異なった日系移民によるサバルタンの歴史をみていく。

具体的には、本章第 3 節でツールレイク・キャンプのサバルタン史に注目する。ツールレイク・キャンプに関する資料は現在ほとんど残っていない。和書においては全く無い。そこで、現地で収集した資料やデータ、ツールレイク・キャンプについて書かれた数冊の書物を根拠として、歴史的考察を加える。まずツールレイク・キャンプの歴史について述べる。ツールレイクは強制収容所から隔離強制収容所として機能してきた[35]。この収容所が他の収容所とどのように異なり、この収容所に収容された日系移民の間でどのような葛藤があったかについて考察する。次に収容所内の構造をみていく。収容所を囲む鉄柵のフェンスと兵隊による管理、隔離収容所の中にある営倉の存在、殺害された人物等である。また、アメリカ政府は日系移民に対して忠誠心調査を行い、忠誠を示した者とそうでない者とに区別してきたが、更に 1943 年には日系移民に対して市民権の放棄をするかどうかの確認を行い、このことがツールレイクの収容者に混乱を生じさせた。このような市民権の放棄は、Renunciation と呼ばれている。アメリカ政府は日系移民に対して市民権を放棄させるかどうかの強制的な選択を迫ったのである[36]。これによりツールレイクの収容者は市民権を放棄する集団と放棄しない集団とに二分されることになった。本章では従来の日系移民史においてほとんど語られることがなかったツールレイク・キャンプとツールレイクの被収容者に焦点を当てた歴史をみていく。

---

[34] グハたちの視点は、グラムシの抑圧された人々を取り巻く環境を分析するという問題意識よりも歴史研究の方法論および、歴史叙述の問題としていかに進化させていくか、という点に重点をおいている。詳しくはグハ、前掲書を参照されたい。
ムフはサバルタン概念を援用しながら新しいデモクラシー論を展開している。それは「闘技的デモクラシー」論である。彼は「闘技的デモクラシー」の主体問題とグラムシのいう「サバルタン」論が接合されるとき、その理論的・実践的意義がより深化していくことを分析している。
詳しくはムフ,シャンタル（2009)『政治的なものについて』季報『唯物論研究』110 号を参照されたい。

[35] Miyakawa, E.T. 2002. *Tule Lake*. Victoria, B.C. Canada: Trafford Publishing

[36] Muller, E.L. 2001. *Free to Die for their Country: The Story of the Japanese American Draft Resisters in World War Ⅱ*. Chicago: University of Chicago Press

第 4 章「オーラル・ヒストリーの可能性と方法」では、日系移民のオーラル・ヒストリーに注目するために、オーラル・ヒストリーとは何かを明らかにする。本章第 1 節では、オーラル・ヒストリーの方法論を明らかにする。オーラル・ヒストリーの目的と方法について整理し、ナラティブ・インタビューやトランスクリプションといった質的研究の調査方法を紹介する。ここでは本研究で実施したインタビューの目的、意義、方法を説明し、どのように資料を収集したのかを説明する。

第 5 章、第 6 章、第 7 章ではツールレイク収容者のナラティブを紹介し分析する。ここでは、それぞれの主張をできる限り叙述する。それぞれのインタビューを通して、ツールレイク収容所に関する歴史叙述を行う。実際に 3 名のインタビュイーの証言を用いて考察する視点としては、ツールレイク収容所と忠誠心調査との関係、ツールレイク収容所の実態、ツールレイク収容者のアイデンティティーの問題、ツールレイク収容者が解放された後の排斥と抑圧についてである。これらの考察から、多文化史やナショナル・ヒストリーにおいて語れることがなかった日系移民の多様なアイデンティティーと歴史をみていく[37]。この分析からナショナルな枠組みや言説に回収されない多様なアイデンティティーが存在することを明らかにする。またそれぞれの証言はツールレイクについて異なる立場から話されている。これらの証言はアメリカの多文化主義の中で語れてきたナショナル・ヒストリーに登場する日系移民の歴史と一線を画す。ツールレイクの声を再考し、彼/彼女らのアイデンティティーが多文化主義言説において表象される日系移民とは異なることを明らかにする[38]。

第 8 章「ツールレイクのナラティブからみる多文化主義の問題」では、ツールレイクのナラティブにおいて明らかとなるナショナル・アイデンティティーに回収されない人々の経験から、アメリカの多文化主義言説を批判する。本章ではアメリカの多文化主義言説の問題を明確にし、多文化主義言説に登場しない彼/彼女らの声を通して、日系移民が戦後、多文化社会の中で国民国家による忠誠/不忠誠としてのレッテルを貼られてきたことを明らかにする。ツールレイクの被収容者らは、強制収容所での生活を終え、戦後、アメリカの多文化社会を生き抜いてきた[39]。ツールレイクの歴史と彼/彼女らの証言から再度、多文化主義を考察することで、日系移民が「善良な移民」/「善良でない移民」

[37] 移民の決定不可能なアイデンティティーについての省察は次章で考察する。
[38] 第 8 章でアメリカ多文化主義言説に関する現在までの議論を整理している。
[39] Kumei, T.I. 1996. Skelton in the Closet: The Japanese American Hokoku Seinen-dan and their "Disloyal" Activities at the Tule Lake Segregation Center during -World War II. *The Japanese Journal of American Studies*. No.7 pp.67-102

として生産され、「善良な移民」としてのみ表象されてきたことを明らかにする。

第一章　国際文化学とマイノリティーの移民

国際文化学の概論について初めて言及したのは平野健一郎である。2001 年に出版された『国際文化論』は、国際文化について研究する研究者や学生に影響を与えた。なぜなら大学や研究機関では国際文化学部や国際文化研究といった学問領域が構築されてきた一方、国際文化とは何かについて概論的に明らかにした研究はそれまでなかったからである[40]。また彼の書籍が出版されてからも、国際文化学の概論について詳しく説明した研究はこの書籍以外にない。そこで第 1 節では彼のいう国際文化とは何かについて紹介し本稿と国際文化学との関係を明らかにする。

1-1　国際文化学の定義とマクロな視点から取り残される人々

彼は、国際文化とは広義には国際的な関係を文化でみることと指摘する[41]。彼は国際文化を「国際関係を国境を越えるすべての行為が作り出す関係と捉え、個人もその行為の主体となりうると考える立場に連動して、文化を広く捉えることとする」と定義する[42]。「国境を越えるすべての行為」とは人・モノ・カネ或いは思想や慣習が含まれる。国境を越える行為主体には当然移民や難民も含まれる。こうした人々の行為そのものが国際的な関係に影響を与えるという見方はそれまでなかったのである。

彼の国際文化学の議論にはもう一つ注目すべき点がある。それは近代の国際関係が政治・軍事・経済に帰することを好んできたことに対して国際文化学が批判的視座を提供している点である。従来の国際関係は国家間関係の政治・軍事・経済の数的関係やこれらの力関係を分析することを主眼としていたが、彼の国際文化論はこれに対して各々の社会や文化的な側面から国際関係の読み替えを試みているのである[43]。

しかし彼は国際関係を文化からみる際に、文化を統一的な視点で捉えている[44]。例えば

---

[40] 彼以前の国際文化学に関する研究の代表的な著書に以下が挙げられる。以下の書籍は国際文化学に関する概論的説明を十分にしていない。
島根国士、寺田源一編（1999）『国際文化学への招待―衝突する文化、共生する文化』新評社

[41] 平野、前掲書　p.2

[42] 同上

[43] 同上

[44] 同上 p.3

彼は文化の普遍性や文化の個別性を強調している。彼の文化についての理解では、それぞれの社会には文化の個別性があることが自明の前提とされている。またそれぞれの社会には人々が生きるために必要な文化があり、だからこそ文化は普遍的であるという[45]。社会には固有の文化が既に存在しているという自明の前提は「それぞれの社会に固有の文化があり、多様な行為主体（社会）が国際関係に参与するありさまを考察できる[46]」と指摘する彼の主張からも明らかである。彼はそれぞれの社会において固有の文化が所与のものとして既に存在し、多様な文化が国際関係に参与していることを主張しているのである。彼の国際文化論は確かに、従来の国際関係（政治・軍事・経済による分析）とは異なる視点を提供している。しかし、彼のいう文化とは統一的なものであって、文化間の力の関係を十分に明らかにしているものではない。

例えばある特定の移民について考察すれば、彼/彼女らが維持する文化は一つではなく、多様であることが理解できる。ある特定の移民がある程度、政治・経済的に優位な状況にある場合は国際関係というマクロな学際分野の研究対象になり得るかもしれない。しかし移民の多くは政治・経済・文化的に劣位なままである。日本においても日本国籍のない人々は選挙に参加できないし、国内における差別と貧困を直接的に被るのは外国人労働者であることが多い[47]。つまり移民の歴史は、移住先の社会で貢献し、立派に成長を遂げた「勝者の歴史」であることがほとんどである[48]。平野は、それぞれの文化が国際関係に参与していることを前提に国際文化論を語っているが、ミクロな視点からの文化や文化間の力関係までは十分に明らかにできていない。

筆者は、平野が展開する学際的に新しい国際文化学が文化の普遍性や個別性に注目するあまり、文化間の力関係や政治・経済的に劣位な状況に置かれている人々の状況を十分に分析できていないと考える。そこで本稿では国際文化学において未だ十分に議論されていない、マイノリティーの移民の歴史とアイデンティティーに注目する[49]。マイノリティーの歴史とアイデンティティーに注目することは、平野が主張する「国際関係を国

---

45 同上
46 同上
47 日本における移民（中国人・日系ブラジル人外国労働者）についての差別と貧困について安田浩一はその現状を明らかにしている。
安田浩一（2010）『ルポ　差別と貧困の外国人労働者』光文社新書
48 このことは第 2 章でより詳細に議論している。第 2 章ではアメリカの多文化主義言説に注目し、移民の歴史が統一的に語られている問題に注目している。
49 この解釈を付け加えたのは筆者である。従来の国際文化学（論）では補完できないさまざまな社会的従属者やマイノリティーの置かれている状況、非行為主体に注目する国際文化学の新たな解釈である。

境を越えるすべての行為が作り出す関係と捉え、個人もその行為の主体となりうると考える立場に連動して、文化を広く捉えること」とする従来の国際文化学の解釈に新たな視座を提供する。その視座とはマクロな「行為主体」から取り残されたミクロな「行為主体」から、人々の抑圧に注目することである。平野は文化の普遍性や個別性から国際関係をみることができるというが、そこにミクロな視点は含まれていない。本稿で考察する日系マイノリティーの人々は平野のいう「行為主体」に含まれていないのである。本稿は日系マイノリティーに注目することで、それまで行為主体として語られてきた個人が一方的に語られてきたことを批判し、新たに社会的・文化的・歴史的に排除されてきた日系マイノリティーに注目する。現在まで語られてこなかったよりミクロな歴史を追究することで、国際文化学において十分に議論されてこなかったミクロな視点から日系マイノリティーを論じていく。

社会的/文化的に下位にあるマイノリティーは今まで十分に研究されてこなかった。平野の国際文化論の新たな解釈に加え、そこから取り残された人々の経験をミクロな視点から考察することで、従来の国際文化学では十分に研究されてこなかった日系マイノリティーの積極的な回帰を試みることが可能となる。

1-2　ミクロな視点からみる日系移民のサバルタン史

アメリカの多文化主義言説において語られてきた日系移民には問題がある。なぜなら日系移民の歴史は多様であり、彼/彼女らの経験は決して統一的で普遍的な歴史として語ることが不可能だからである[50]。そこで本稿では「国家への忠誠」を前提とした日系移民のアイデンティティーとは異なる経験をした人々の歴史と彼/彼女らのアイデンティティーに注目する。「国家への忠誠」と異なる日系移民の歴史に注目するためには、「国家への忠誠」を示した歴史とそこから排除されてきた歴史とを区別する必要がある。そのため、第 2 章ではアメリカの多文化社会の中で語られる日系移民の歴史に関する先行研究と、第 3 章では現在までの日系移民の歴史に関する先行研究を紹介する[51]。国境の問題や文化間に生じる力関係に注目するために、筆者は、現在まで十分に語られることが

[50] Hongo, F.M. et.al. *Japanese American Jouney: The Story of a People.* By the Japanese American Curriculm Project, Inc. San Mateo, CA: JACP

[51] タカキが語るアメリカ多文化史に登場する日系移民の問題は第 2 章で紹介する。また現在までの日系移民の歩みに関する先行研究は第 3 章で紹介する。

なかった日系マイノリティーの強制収容所の歴史とナショナル・アイデンティティーに回収されない人々に注目する。マクロな視点からは明らかにされない日系マイノリティーに注目するためには、彼/彼女らの歴史を発掘するだけでなく、アイデンティティーに注目する必要がある。そこで社会的に従属的立場に置かれた人々（サバルタン[52]）の歴史に注目したサバルタン論から日系マイノリティーの歴史とアイデンティティを研究する。本稿では国家間の狭間でアイデンティティーの揺れを経験した日系マイノリティのツールレイク・キャンプの歴史（ツールレイク史）に注目し、その歴史を描写する際、サバルタン論を援用する[53]。そして第 5 章以降で紹介する日系マイノリティのナラティブに注目し、彼/彼女らのアイデンティティーを分析する。これらのアイデンティティーを分析し、第 8 章で従来の多文化主義言説が日系移民を「善良な移民」として表象してきたことを明らかにする[54]。

サバルタンについては第 3 章で詳しく論じるが、本稿では従属的社会集団という定義でこの言葉を使用している[55]。グラムシはサバルタンを社会集団として考察してきた。グラムシの論文「従属的諸階級の歴史のために」では、従属的な立場に置かれているマイノリティーの歴史に注目するための方法が提示されている[56]。彼/彼女らをサバルタン集団として考察することで、従来語られることがなかったツールレイク・キャンプの歴史に注目することが可能となる。本稿では、日系移民を一括りにする普遍的で個別的な文化を論じるのではなく、よりミクロな視点からマイノリティーの多様な歴史を考察する。

1-3　ミクロな視点からみる日系移民のアイデンティティー

本稿では日系マイノリティーであるツールレイク被収容者の証言に注目する。本稿で紹介するいくつかの証言は人間のアイデンティティーと密接に関係している。従来、日系移民のナショナル・アイデンティティーはアメリカにあるとする多文化主義言説が主

---

52 グラムシ,アントニオ（2011）『歴史の周辺にて「サバルタンノート」注解（グラムシ『獄中ノート』著作集Ⅶ）』松田博編訳　明石書店　では、サバルタンを「従属的社会集団」と呼んでいる。ある社会において社会的な地位が低かったり、経済的に困窮している等、下位に置かれた人々を指す用語である。P.2

53 ツールレイク・キャンプの史実を第 3 章第 4 節に記述している。

54 サバルタンとサバルタン研究については日系サバルタンの歴史を紹介する第 3 章で詳しく論じる。

55 グラムシ,アントニオ（1999）「従属的諸階級の歴史のために」『知識人と権力：歴史的―地政学的考察』上村忠男編訳　p.110

56 サバルタンの歴史については第 2 章で更に詳しく論じる。

流であった[57]。しかしツールレイク・キャンプに収容された人々のアイデンティティーは決してアメリカへの忠誠を意味するものではなかった。彼/彼女らは特定のナショナリティーには回収されない経験やトランスナショナルなアイデンティティーを提供している。ポール・ギルロイは『ブラック・アトランティック―近代性と二重意識』の中で、現在のディアスポラや移民が、故郷と移住先との二重意識の中で生じるトランスナショナル・アイデンティティーを保持していることを明らかにしている[58]。日系マイノリティーであるツールレイクの被収容者らのインタビューも、まさにこの二重意識の中で生じる多様なアイデンティティーについて述べている。また上野俊哉は、国境を越える移民や被抑圧者のアイデンティティーに注目し、彼/彼女らがナショナル・アイデンティティーの揺れを経験していることを強調している[59]。本稿で論じる日系マイノリティーのアイデンティティーも、国家間の狭間でアイデンティティーの葛藤に陥った人々である。

ツールレイク・キャンプの歴史は統一的なものではなく、被収容者らの経験は多様である。よって、ツールレイク・キャンプの被収容者が同一のアイデンティティーを保持してきたことを論じることが本稿の目的ではない。そうではなく、彼/彼女らのアイデンティティーが多文化主義が提示する「善良な移民」という言説の外部にあることを明らかにすることが目的である。日系移民はアメリカではマイノリティー集団であっても、彼/彼女らのアイデンティティーは多様であり、この多様性を明らかにしていくためには、個々人の証言に注目する必要がある。まさにこの点で、よりミクロな視点が必要である。彼/彼女らの思考が同一ではないことや、多元的なアイデンティティーを保持していることが、よりミクロな視点から考察することによって理解される。今まで十分に語られることがなかったツールレイク・キャンプの被収容者のアイデンティティーに注目することは、同時に本稿におけるサバルタンの日系マイノリティーの語りを多様化することにつながる。そしてこのミクロな視点によって初めて、文化には差異があり、また個別的な文化そのものが、実は多種多様であることが理解できるのである。

次章では多文化主義に登場する日系移民がどのように表象されてきたのかに注目する。まずナショナル・ヒストリーがどのように語られてきたのかを明らかにし、更に自由主義や民主主義といったアメリカの理念の中でどのように歴史が語られてきたのかを解明

---

[57] Takaki, 1998　前掲書
[58] ギルロイ,ポール（2006）『ブラック・アトランティック―近代性と二重意識』上野俊哉他 月曜社
[59] 上野俊哉（1999）『ディアスポラの思考』筑摩書房　p.236

する。そしてアメリカの多文化主義が最盛期を迎える 1980 年代以降、多文化主義言説の中でナショナル・ヒストリーがどのように日系移民を語ってきたのかを考察する。

第 2 章　ナショナル・ヒストリーと多文化主義に登場する日系移民史の問題

前回の講演で私は次のように申しました。「歴史を研究する前に、歴史家を研究してください。」今は、これに附け加えて、次のように申さねばなりません。「歴史家を研究する前に、歴史家の歴史的および社会的環境を研究してください。」歴史家は個人であると同時に歴史および社会の産物なのです[1]。

アメリカにおける日系移民の歩みをみると、日米の狭間で揺れる彼/彼女らの複雑なアイデンティティーを垣間見ることができる[2]。彼/彼女らの経験やアイデンティティーの葛藤[3]をたった一つのモデルとして語ることは不可能である。しかしながら従来、日系移民は善良なアメリカの一民族としてアメリカ社会内部で語られてきた。20 世紀後半の合衆国で用いられてきた歴史教育の教科書には、たびたび日系移民が登場する[4]。国民統合の根拠とする「国民」の定義の中に、日系移民が頻繁に登場するのである[5]。日系移民のアイデンティティーはアメリカの歴史教科書によって「国民」の枠組みの中で語られてきた。多文化社会における日系アメリカ人は、日米の狭間で揺れるアイデンティティーの葛藤や困難よりも、彼/彼女らがアメリカの国民として活躍し、或いはアメリカ社会の従順な移民として語られてきたのである[6]。こうした移民と国民をめぐる統合の歴史叙述は、マジョリティーがマイノリティーを政治・経済・文化的に抑圧してきた状況を無視してきた[7]。マイノリティーの移民が本質的でなく、多様な文脈で語られることはなく、マイノリティーによるマジョリティーへの同化＝「国民化」という文脈で歴史が語られてき

---

[1] カー,E.H.(1962)『歴史とは何か』清水幾太郎訳　岩波書店　p.61

[2] Blight, E. 2001. *A Time to Choose*. Pacific Grove, CA: Park Place Publication

[3] 本稿では、アイデンティティーの葛藤を、日系移民がアメリカ人か日本人のいずれかのアイデンティティーを選択を迫られる際の葛藤と定義する。

[4] 岡本智明（2001）は、「『日系アメリカ人像』の変質：多文化教育と共同体統合に関して」『教育社会学研究』68　pp. 127-146 の中で 20 世紀 1952 年から 1999 年の 80 冊の歴史教科書やワークブックを収集し、「日系アメリカ人像」の変容と統合の過程を詳細に論じている。

[5] 同上

[6] Matsuo, D. 1992. *Boyhood to War: History and Anecdotes of the 442nd Regimental Combat Team*. Honolulu, HI: Mutual Publishing

Shimabukuro, R. S. 2001. *Born in Seattle: The Campaign for Japanese-American Redress*. Seattle : University of Washington Press

[7] Bragdon, H.W., and McCutchen, S.P. 1964. *History of a Free People.* New York: The Macmillan

Brown, R.C., Helgeson, C.A, and Lobdell, H.G. 1964. *The United States of America: A History for Young Citizens*. NJ: Silver Burdett

たのである[8]。このような状況で明確になるのは、二十世紀後半のアメリカで語られる多文化主義言説において、マイノリティーは国民と国家を前提としたナショナルな枠組みでのみ語られてきたということである[9]。

そこで第 1 節では日系移民がアメリカにおいて一国民として多文化主義の中で語られてきたことを批判的に考察するために、まずネーション・ステートとナショナル・ヒストリーの先行研究を紹介する。ここでは、ナショナル・ヒストリーを説明したドイツの哲学者ヘーゲルの『歴史哲学講義』を参考に、ネーション・ステートとナショナル・ヒストリーの問題を考察する。また、彼を考察するもう一つの理由として、多文化主義の歴史家フクヤマとタカキの議論が、ヘーゲルの歴史観を前提として展開されていることがあげられる。よって、まず、第 1 節ではヘーゲルと歴史学を考察し、彼の議論の中に登場するネーション・ステートの問題を批判的に考察する。次にフクヤマの『歴史の終わり』から、彼の議論も、ヘーゲルのネーション・ステートを基盤とした歴史観によって多文化主義の歴史を語っていることについて議論する。

第 2 節では、彼らの歴史におけるネーションの概念が基盤となって、アメリカの多文化主義が語られていることを明らかにする。ここではアメリカの多文化社会を分析するために、多文化主義の歴史家であり、日系知識人のタカキによる多文化主義言説に注目する。彼の歴史観もまた、ネーションを前提としており、国家への貢献という形でマイノリティーが登場する。本節ではアメリカ多文化主義の中で語られるマイノリティーがナショナル・ヒストリーの中で語られてきたことを批判的に検証し、多文化主義に登場する日系移民史がタカキらによって一方的に語られ、アメリカ内部に統合されてきた点を明らかにする。

2-1　ネーション・ステートとナショナル・ヒストリーの考察

2-1-1　ヘーゲルの歴史叙述とネーション・ステートの問題

---

[8] Gorton, A.F. 1996. *Mapping Multiculturalism*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press

[9]キムリッカは、マイノリティー側からマジョリティー側への権利要求に対し、国家形成を前提としてマイノリティー側の権利を承認するべきとするネーションを前提とした多文化主義を説いている。
Kymlicka, W. 2001. *Politics in the Vernacular: Nationalism, Multiculturalism, and Citizenship*. NY: Oxford University Press pp.225-238

ヘーゲル（1770 - 1831）は、歴史学と哲学とを関連付けた最も初期の歴史家である。彼は、『歴史哲学講義（上）（下）』において、歴史とは個別的な歴史記述ではなく、世界精神の発展として歴史が存在するとした[10]。上巻・序論において、歴史とは国民を前提として認識される世界であるとし[11]、国民を形成する個人は、理性的な人間であると明言している。そして各々の民族性を備えた個人が、国民として明確な理性を持った時にはじめて国民としての使命を果たすことができると主張している。個別的な経験や個の多様性は、歴史において必要でないことを指摘しているのである。

> 哲学的にふさわしい、価値あるものといえるのは…理性がこの世に現実に存在し、意識や意思や行為のうちに理性がみとめられるような状態をもって歴史のはじまりとみなすことです[12]。

彼にとって哲学的なふさわしさ、あるいは価値というものは、理性を兼ね備えた人間のみに与えられるものであった。理性的な人間を「精神の純良な状態[13]」と呼び、人間の精神の最も健全な状態が理性を備えた状態である点を強調してきたのである。精神の統一、共同体の精神、共同体の対象を認知した国民のみが、歴史を構築することができるとした[14]。

彼は国家を「個人が共同の世界を知り、信じ、意思するかぎりで、自由を所有し享受するような現実の場[15]」と定義した。そして「国家こそが、絶対の究極目的たる自由を実現した自主独立の存在であり、人間のもつすべての価値と精神の現実性は、国家をとおしてしかあたえられないからです[16]。」と主張した。人間の自由を体現できるのは国家のみであり、国家は自由を実現し人間の価値と精神の自由を担保する唯一のものとして国家を見据えていたのである。

ヘーゲルは個人が共同体を意識し、人とつながり、法と道徳にかなった国家生活を送ることが人間の自由であるとした。「国家が共同の生活を保障し、人びとの主観的意思が

---

10 ヘーゲルは『歴史哲学講義』において、世界精神と世界史との関係を解き、国家による世界史の構築を試みた。ヘーゲル（1994）『歴史哲学講義（上）』長谷川宏訳　岩波文庫
11 ヘーゲル、前掲書　p.26
12 同上　p.106
13 同上
14 同上　p.85
15 同上　p.72
16 同上　p.73

法律にしたがうとき、自由と必然の対立は消滅する[17]」と述べ、個人の意思は、法律によって保護され、法律を施行する国家によって個人も自由になると考えていたのである。ヘーゲルは、「自由とは、正義や法律のごとく、共同体全体にかかわるような対象を知り、それを意思し、正義や法律にふさわしい現実―国家―をうみだすことにほかなりません[18]。」と述べ、自由の名の元に国家や国民のアイデンティティーの正当性を強調している。

イギリスの歴史家 E.H.カーはヘーゲルの人間の精神の発展と自由への意思、或いは意思を体現する国家形成という歴史の発展を否定した知識人である。彼の最も有名な言葉は「歴史とは過去の諸事件と次第に現れて来る未来の諸目的との間の対話[19]」である。歴史とは、真実を明らかにするものではなく、現在にとってその過去が利用でき得るものかどうか、或いは現在にとって価値のあるものかどうかによって取捨選択されるものであると説いた。

カーが批判した歴史学の在り方は、歴史的客観性の否定、更には歴史の進歩の問題であった。彼の主著には、繰り返しヘーゲルの弁証法が登場し、進歩としての歴史批判を行っている。

> ヘーゲルは、歴史は進歩するものと見て、進歩しない自然から区別して、この困難を乗り切りました。ダーウィン革命が進化と進歩とを同一視することにより、つまり、歴史と同じく、自然も結局は進歩するものということにより、これで一切の困難が取り除かれたようにみえました。けれども、これは、進化の根源である生物的遺伝と、歴史における進歩の根源である社会的獲得とを混同することによって、益々重大な誤解への道を開くことになったのです[20]。

このようにカーはヘーゲルの歴史の進歩主義の誤算を問題としている。歴史の客観性、歴史の普遍性を解いたヘーゲルの歴史観は、自己満足に過ぎず、歴史の普遍性や客観性に潜む歴史化への取捨選択、歴史的に忘却された史実の問題を彼自身が明らかにすることができなかったのである。

歴史解釈の誤解を犯したヘーゲルの歴史観は、世界史の分類法に顕著に現れている。

---

[17] 同上　p.74
[18] 同上　p.107
[19] カー、前掲書　p.184
[20] 同上　p.168

彼が分類した世界とは、東洋世界（中国・インド・ペルシャ）、ギリシャ世界、ローマ世界、ゲルマン世界（キリスト教世界）であった。そしてゲルマン世界（キリスト教世界の原理）による国民国家の形成によって歴史は終焉すると主張した。

> 歴史に登場する民族がつぎつぎと交替するなかで、世界史がそうした発展過程をたどり、そこで精神が現実に生成されていくこと―それこそが正真正銘の弁神論であり、歴史のなかに神の存在することを証明する事実です。理性的な洞察力だけが、政令と世界史の現実とを和解させうるし、日々の歴史的事実が神なしにはおこりえないということ、のみならず、歴史的事実がその本質からして神みずからの作品であることを認識するのです[21]。

理性を備えた人間によって形成される歴史は、彼にとって普遍的世界であった。彼のみた理性的人間とは国民を前提としており、国民化されない人間については、彼自身歴史の中で洞察することはできなかったのである。それにも関わらず、彼は歴史に一定の進歩があるという矛盾した世界史の構築を試みたのである。

実際ヘーゲルは東洋世界において世界の歴史はまだ始まっておらず、人々は自由でないとし、歴史のはじまりは、ギリシャ世界、特にソクラテスの登場によって始まったとした。ローマ世界ではキリスト教が発展し、後のゲルマン世界ではプロイセン王国を持って、進歩の終わりとしている[22]。

このような西洋/東洋という歴史観について批判的な思想家がいる。吉本隆明は現代社会、特に国家の問題を取り上げる際には歴史的な枠組みを理解する必要があり、史観というものを拡張した考えを取り入れる必要があるとしている[23]。彼は

> その考察（ヘーゲルの考察）を見ますと、いまでいえば差別主義といわれるところがあるわけです。それは、ヨーロッパの本格的な近代化が始まった十七世紀から十八世紀以降の世界というのが、ヘーゲルの歴史哲学のいちばんの基準になっていたからです。そこではアジアというのは、ヨーロッパと貿易やその他のことで交渉がある限

---

[21] ヘーゲル（1994）『歴史哲学講義（下）』長谷川宏訳　岩波文庫　p.374
[22] 同上
[23] 吉本隆明（2012）『第二の敗戦記：これからの日本をどうよむか』春秋社　p.18

りにおいては問題になるが、それ以外は問題にならないというのが、極端にいえばヘーゲルの歴史哲学の主要な課題だったのです[24]。

と述べている。ヘーゲルは普遍的な歴史の中心を西洋に置き、近代化されたヨーロッパの国民国家を主体とした世界史の構築を試みた。西洋においてのみ、歴史は進歩し、最終的に国民国家が形成され、これによって、合理的な個と社会との完全な一致が体現されると考えたのであった。

ヘーゲルの歴史の進歩と国家主義或いはナショナル・ヒストリーの正当化に対して問題を呈する知識人がもう一人いる。国家主義の歴史観は国家間関係においてのみ分析可能であるが、地域研究や地域交流の歴史を洞察することで国家と異なる歴史を発見することができることを濱下武志は以下のように指摘する。

国家に最終的に収斂しそれにつながれてゆく地域研究は、現在問題とされるべき地域研究ではない。今問題とされるべき地域研究の課題は、国家や民族を相対化する方法としての地域論・地域研究を改めて検討することである[25]。

つまり濱下は、歴史研究と地域研究において、諸地域の多様な関係を分析し、国家理論や民族性を相対化していくような研究の地平を推奨している。また

これは、国家や民族がもつ―実際にはもっと観念化されるに過ぎないのであるが―求心性、集中性、均質性などの特徴が弱まり、国家がむしろ多様な内実にときほぐされ、EU などの地域を国家の上位に置く広域地域が登場したり、香港問題など、国家の下位に位置する地域に変動の焦点があてられている。また地域と地域の関係性は、主権国家の関係に比して、はるかに重層的・複合的な内実をあらわし始めている。とりわけ現代の地域論が含意する問題は、実際には多様な要因を内部に含んだ国家や民族が、単一性に抽象化されたことによって、排他性や優劣、さらに発展や国力の先後の序列化としてあらわれてきたという、国家を単位とした歴史の評価基準にたいする反省が

[24] 同上　p.19
[25]濱下武志（1997）「歴史研究と地域研究―歴史にあらわれた地域空間」濱下武志・辛島昇編『地域の世界史１―地域史とは何か』山川出版社　p.17

ある。他方、融通無碍な「地域」は、それを認識する認識主体の視覚によって形態化され可視化される対象となり、確たる歴史空間として登場することになる。さらにこの空間認識が地理的な実在と結びつき、政治地理的な空間が構成される[26]。

と指摘する。過去の地域研究、歴史研究の在り方が国家や民族という単一性に回収されてきた点を批判しつつも、ナショナルな枠組みの歴史を見直し、特定の地域史を考察することによってより「重層性」のある「複合的な内実」を発見することができ、国家や民族の単一性とは異なる、或いはこうした統一性を脱構築するような歴史空間が形成されるとしている。

こうして、地域研究は、国家論にみられる領土的・領域的な空間認識にとどまらず問題視覚によってあらわれる空間をさまざまに議論していくことを可能としている。けっしてまず地域があるのではない。むしろ歴史対象を「空間」という視点から取り上げ、地域の文脈をたぐりだしてゆく試みである[27]。

濱下はこのように、国家に捉われない、地域を主体とした空間を前提とした交流を洞察し、歴史を再考することを勧めている。決して国家に捉われることなく、市民社会や地域という場所や空間に重きを置いた研究の可能性を示唆しているのである。歴史研究とは必ずしもナショナルな枠組みにおいてのみ語られるべきものではない。

しかしながらヘーゲルは世界の歴史のあゆみは、理性的人間＝国民によって発展していくと論じた。その後の彼の歴史観は新ヘーゲル主義者らによって補強されることになる[28]。ヘーゲルの歴史観は次章で考察するイタリアの思想家グラムシが獄中ノートで批判したイタリアの歴史家ベネデット・クローチェの思想に影響を与えている。また次項で議論するフクヤマは、ヘーゲルの歴史観を前提として多文化社会の歴史を考察した人物

---

[26] 同上
[27] 同上
[28] キリスト教における合理主義的解釈を論じ、多文化的な統合による世界構築を論じたカナダの哲学者ジョン・ワトソンや、フランスの思想家で国家による歴史の構築を論じたアレクサンドル・コジェーブらは新ヘーゲル主義者として有名である。彼らはいずれも国家を前提として歴史を論じており、多文化主義における多元的文化を国家が統合する必要があると主張する。
コジェーブ,アレクサンドル（1996)『法の現象学』 今村仁司・堅田研一訳　法政大学出版局

であり、ヘーゲルの弁証法を元に、リベラルな多文化主義国家によって歴史は終焉を迎えると論じ、国家を前提とした世界史を叙述していくのである。

2-1-2　フクヤマの歴史叙述とネーション・ステートの問題

理性的な国民が形成する歴史をより現代のコンテキストに沿って議論したのがフクヤマである。フクヤマはアメリカの政治学者で日系三世の知識人である[29]。彼の主要な著書は『世界の終わり』である。冷戦後の世界の姿を示した著書である。この主著はアメリカの多文化社会を容認することを前提に執筆されている。一見すると『世界の終わり』は多文化主義についての議論をしていないようであるが、実際にはリベラルな民主主義体制を歓迎し、リベラルな国家のみがマイノリティーを含むさまざまな権利を承認できると指摘している[30]。

フクヤマはリベラルとは近代の民主主義の土台となる自由と平等であると考えた[31]。この主著ではリベラルについて自由と平等から説明している。ここでいう自由とは、現代の国際政治における自由主義的な経済原理（自由市場）である[32]。彼は経済思想における自由主義（資本主義）を社会主義に対置することで、世界的に自由主義が普及していることを力説し、これ以上のリベラルな民主主義体制はないことを指摘した[33]。

フクヤマが挙げるもう一つのリベラルとは人間が求める認知への欲望という平等な社会である[34]。人間とは認知を求めて闘う生き物であり、自由と平等という理念を達成するために人は戦うと説明した[35]。更に社会における平等の体現は、国家による人民主権と法の支配という原理の確立によって達成されると考えた[36]。

リベラルな民主主義体制とはリベラルな多文化社会であり、彼がアメリカの多文化社会を前提としてリベラルな民主主義体制を賞賛していることが次の叙述から明らかにな

---

[29] 1952年生まれの日系三世。彼はハーバード大学で政治学博士となった後、アメリカ国務省政策企画部次長となり、ワシントン・D・Cのランド研究所顧問を経て、ジョンズ・ホプキンズ大学教授となる。主著に『歴史の終わり（上）（下）』（2005）三笠書房、「アメリカの終わり」（2006）講談社BIZ、「政治の起源―人類以前からフランス革命まで」（2013）講談社等がある。

[30]フクヤマ,フランシス（2005）『歴史の終わり（下）』渡部昇一訳　三笠書房　p.60

[31] 同上　p.14

[32] 同上　p.17

[33] 同上　p.20-21

[34] 同上　p.21

[35] 同上　p.22

[36] 同上

る。

とはいえわれわれは、どうして近代のリベラルな民主主義は全人類をあまねく認知するなどといえるのだろうか？それは、リベラルな民主主義が万人のさまざまな権利を承認し、それを保護するからだ。アメリカやフランスなど自由主義国家に生まれた子供ならだれでも、まさにその国に生まれたという理由で、市民としてのさまざまな権利が与えられる。貧しかろうが裕福だろうが、黒人だろうが白人だろうが、その子供が裁判制度によって罰を受けているのでもなければ、だれもその生命を脅かすことはできない。

このようにフクヤマはリベラルな民主主義体制を賞賛しており、この体制によって歴史は終わりを迎えると指摘している。そしてアメリカのリベラルな民主主義社会の寛容さを承認しているのだ。一見すると、リベラルな民主主義は人々の権利を平等に承認しているように思われるが、その内実はかなり異なっている。なぜならこの叙述において、移民は含まれていないからである。日系移民の場合、日本からアメリカに移住した移民は、市民権を与えられなかった。移民は国民として認知されず、されるまでにはかなりの歳月を要したのである。更に、リベラルな社会においては、国民であっても国家から平等に権利が与えらているという保証はどこにもない。例えば、日系二世はアメリカの市民権は与えられたが、差別や偏見、貧困の連続であった。こうした経済的な格差や偏見、平然と黙視されるマイノリティーへの差別は、十分にマイノリティーの生命すらをも脅かしている。

次に国家と国民の権利について考察する。リベラルな民主主義社会において、国家は国民の権利を承認する。後に議論するアメリカの多文化主義言説からも理解されるように、国家は日系移民や他の善良な移民を民主化し、彼/彼女らの権利を承認してきた[37]。寛容なアメリカ社会による承認という形で、日系移民も日系アメリカ人として同化させられていったのである。この主著では、マジョリティーよるマイノリティーの権利承認を賞賛し、「国家が人民に権利を賦与し人民が国家の法の遵守に合意したとき、認知は互

[37] Hayashi, B.M. 2003. *Democratizing the Enemy: The Japanese American Internment*. Princeton, NJ: Princeton University Press p.108

恵的なもの」となると述べている[38]。そこでは人々は同じように権利を主張し、同一国民として権利の獲得を要求することが前提とされている。更に、人間とはたえまない抗争の発展段階によって、歴史を形成していくというヘーゲルの弁証法に倣って次のように説明する。

> 歴史はたえまない抗争のプロセスを通過するが、そこでは政治と同様に思想の体系も、みずからの内部的矛盾のために衝突し合い、ばらばらに壊れてしまう。そしてその代わりに、より矛盾が少なく、したがってより高度な体系が登場するのだが、その体系もまた新しい別の矛盾をうみだしていく―これがいわゆる弁証法である[39]。

ここでは世界は弁証法的に進んでおり、内部矛盾の存在する社会経済システムはいずれ滅びるという。フクヤマは、ヘーゲルの影響を受けたコジェーブとマルクスを資本主義者と社会主義者として対比させ、コジェーブの正当性を主張している[40]。

彼は歴史の発展が最終的には国民史となることを強調し、「歴史そのものは、近代自由主義国民国家の成立とともに終わりを迎える。」と述べ[41]、国民の歴史が最も普遍的な歴史であるとするヘーゲルの解釈を援用した。歴史学における進歩主義を賞賛し普遍的な国民史の構築を試みたのである。つまり国民を前提とするナショナル・ヒストリーが普遍的な歴史であることを強調した。

ヘーゲルは歴史において「野蛮」な人間が理性を持つことで国民となり、その共同体としての国家によって歴史が進展すると考えていた。フクヤマはこの点に注目し、人間が真に自由であるためには、国家の歴史を所与とみなすのではなく、逆説的に人間の諸権利が社会に認められてはじめて国家が成立すると考えた。それがアメリカを中心とする先進工業国のリベラルな民主主義体制の原動力であると指摘したのである[42]。しかし問題となるのは、こうした進歩的歴史が、マイノリティーである移民を排除してきたことに

---

38 フクヤマ『歴史の終わり（下)』前掲書　p.61
39 同上　p.117
40 コジェーブは、普遍的で均質な国家が国民を満足させているのが、リベラルな民主主義体制を維持する国家であると指摘した。フクヤマも基本的にコジェーブの主張を受け入れている。
コジェーブ,アレクサンドル（1987)『ヘーゲル読解入門：『精神現象学』を読む』上妻精、今野雅方訳　国文社
41 フクヤマ、前掲書　『歴史の終わり（上)』　p.124
42 同上　p.130

ある。歴史が進歩するということは、国民史が構築されるということである。ここでの国民史とは、善良な国民であり、国家への忠誠を示し、国家に貢献した人々の歴史である。マイノリティーは常にこうした国家への貢献を強制される。国家へ忠誠を示し、国家への貢献をしなければ、マイノリティーとしての日系移民が、国民として承認されることはなかったのである。

このように彼の普遍的歴史に関する主張は、リベラルな多文化主義に影響を及ぼしていると同時に、人々を更にリベラルな体制に動員している。リベラルな現代社会のあるべき姿について彼は次のように指摘し、合理性への自覚を持つよう促している。

> 人間の自由は近代的な立憲国家―これもわれわれのいうリベラルな民主主義体制―のなかで実現されることになっていた。人間の普遍的な歴史とは人間が完全な合理性に向かって徐々に進歩し、また、リベラルな自治政府のなかにあらわれているこの合理性への自覚的な意識を徐々に高めていくことなのである[43]。

「人間の普遍的な歴史」は「完全な合理性」を備えた人間の進歩によって達成される。人間は合理性に向かって進歩し、「完全な合理性」を備えた人間となる。フクヤマのこうした人間の進歩的な洞察は、アメリカの公民権運動にみることができる。彼はアメリカの公民権運動を念頭におきながら、マイノリティーによる闘争を「認知を求める闘争」という言葉に置き換えている[44]。

> 人間的な自由とは、人がみずからの自然的・動物的存在を乗り越え、自分の手で新しい自己を創造できたときにはじめて出現する。この自己創造プロセスを象徴するような出発点が、純粋な威信を求める死闘なのだ。とはいえこの認知を求める闘争は、正真正銘の人間的行為の発端ではあるが、人間的な行為そのものからはほど遠い。ヘーゲルのいう「最初の人間」たちのあいだで繰り広げられる血なまぐさい戦いは、彼の弁証法の起点にすぎず、そこから現代のリベラルな民主主義にいたるには、はるかな道のりが残されている[45]。

---

[43] 同上　pp.117-118
[44] 同上　p.242
[45] 同上　p.252

理性的人間や合理性を備えた人間は進歩する。そして最終的な局面として諸個人の権利が国家によって承認される社会が真に自由な世界である。

人類史或いは人間の歴史は、ある意味では、相互的かつ平等な土俵の上で認められたいという主君と奴隷双方の欲望を満たす方法の探求と見なすことができる[46]。

つまり主君と奴隷双方の関係において契約が結ばれるプロセスが歴史を進歩させる。そしてこの契約において国家は必然的にその対象である国民の権利を承認し、これによって何ら社会の矛盾は生じないという。つまり国民をめぐるアイデンティティーの葛藤、或いは国民化されない事象について彼は全く論じなかったのである。このことはマイノリティーの移民にとって恐怖である。なぜなら、マイノリティーである移民は、自己を創造しなければならず、威信を求めて死闘しなければならないからである。日系移民がよく使用する言葉がある。”No more Gaman for us” (私たちにもう我慢はいらない)という言葉である。この言葉は、日系移民の歴史と深く関わっている。度重なる差別と抑圧の中で、日系移民は我慢してきた。公民権運動と共に、日系移民も立ち上がり、差別是正運動に参加していく。しかし、こうした我慢の歴史を日系移民が好んで選択してきたのではない。アメリカ社会の中で、怒り・不満・不平をぶつける場所がなかったのである。強制収容所はまさにこうした我慢を強いる典型的な歴史である。

こうしたマイノリティーの視点がこの主著には欠落している。ここでは歴史的考察の中で何度も勝者という言葉が使用されている。そして繰り返し、合理性を備えた人間が国民であることを強調する[47]。つまり合理性を備えた人間は国民そのものであり、リベラルな多文化社会においてマイノリティーは「認知を求める闘争」を繰り返す。「リベラルな自治政府」である国家によって承認された者のみが、勝利の歴史を勝ち取った者となる。そうした人々が真に人間の自由を勝ち取れるとまで公言しているのである。

彼は理論的にいえば、社会がリベラルな民主主義体制に移行するためには戦争が必要であると主張する。彼は戦争の可能性について「社会制度の合理化をうながし、文化の

[46] 同上　p.253
[47] 同上　p.258-260

違いを越えた均質な社会構造を作り出すための大きな要因である[48]」と指摘し、民主主義のための戦争を容認している。そして民主主義の正当化のために、国家を構成する国民も死を賭けて戦うという。彼は「はじめに『死を賭けた戦い』ありき」の中の冒頭で、ヘーゲルの『精神現象学』から次のような引用をしている。

> 生命を賭けることによってのみ自由は得られる。生命を賭けることによってのみ、自己意識の本質とはたんに生きているということではなく、その最初にあらわれた姿そのものでもないことが試され、そして証明される…生命を賭けなかった個人も、一人の人間として認められることは確かだが、しかしそういう人は、自立した自己意識として認められるという真理には到達したことにならないのである[49]。

ここから汲み取れるように、生命を賭けて自由を求める人間を歴史上、最初の人間と考えていた。生命を賭けることによってのみ生命が証明されるというのである。歴史はこの「認知を求める闘争」によって進展する。歴史の終わりとは、世界がリベラルな民主主義体制によって完全に達成されることであった。フクヤマはアメリカやフランス以外の他の共産主義や社会主義体制として存続する国民国家を批判するため、あえてリベラルな民主主義国家体制を賞賛せざるをえなかった。しかしアメリカのような寛容な多文化社会が平和に達成されてきたかというとそうではない。認知を求めて戦った公民権運動、差別是正運動はアメリカ内部の矛盾を明らかにし、ある意味でアメリカの中心的な文化からみれば混乱を生じさせたのである。

> 彼（最初の人間）はたんに他者から認められたいだけでなく、一人の人間として認められたがっているのである。そして本来の人間としてのアイデンティティーを構成するもの、つまりもっとも根本的かつ独自な人間の特質とは、自分の生命をあえて危険にさらすという点である。したがって「最初の人間」は、他の人間と出会うたびに激しい戦いを引き起こし、相手に自分を認めさせようとして自分の生命を賭けるのである[50]。

---

[48] 同上　p.137
[49] Hegel. 1967. *The Phenomenology of Mind*. trans. J.B. Baillie. New York: Harper and Row p.233
[50] 同上　p.245

「最初の人間」は認知を求めて戦う。それは国家間同士で行われる戦争も同様である。争いはすべてリベラルな民主主義を達成するための方法であり、目的を達成することによって健全な社会が構築されると彼は信じていた。しかし、こうした彼の主張はリベラルな民主主義体制によって排除されてきた人間の存在を無視している[51]。アイデンティティーの闘争において勝者のみが存在するわけではない。

ここでの思想における問題点は、全てが国民国家を前提として議論されている点である。アイデンティティーの闘争、認知を求める闘争はすべて国家による承認を前提としているのである。フクヤマのいうアイデンティティー闘争とはその存在を主張するための闘争ではなく、国民化への闘争であった。ヘーゲルやフクヤマの議論を中心に論じてきたが、コジェーブやクローチェらヘーゲリアンの議論は、国民を前提とした文化並びに歴史の解釈であった。ここでは国民と国民との狭間で揺れるアイデンティティーやこうした国民化への弁証法的な歴史の中で排除されてきた人々に注目されることはなかったのである。

2-1-3　ネーション・理性・歴史の問題

カーはヘーゲルやフクヤマらのように歴史を規定し、歴史には一定の方向性があると指摘する見解について次のように指摘する。

> ヘーゲルはその絶対者を世界精神という神秘的な姿で現わし、歴史のコースを未来へ投げ入れずに、これを現在で終わらせるという大きな誤謬を犯しました。彼は過去に向かっては連続的な進化の過程を認めながら、不均衡な話ですが、未来に向かってはこれを拒否いたしました[52]。

カーはヘーゲルの世界精神或いは理性的で神秘化され超越的人間の存在を明白に批判している。そして歴史の終焉を規定したこと、そしてその終焉を迎えるまで何ら矛盾することなく、国民の共同体である国家の樹立をもって歴史が幕を閉じるとする見解を批判

[51] Simpson, C.C. 2001. *An Absence Presence: The Japanese Americans in Postwar American Culture*, 1945-1960. Durham. NC: Duke University Press
[52] カー、前掲書　p.181

する。国家の樹立をもって歴史が幕を閉じるとする見解は、カーのいうように大きな誤謬であった。というのも、ヘーゲルは国民国家の成立によって、そしてフクヤマはリベラルな多文化社会を実現する国家によって歴史が終焉を迎えると考えていたが、実際に彼らの論じた歴史は、戦争や紛争を容認し、マジョリティーによるマイノリティーの同化を容認してきたからだ。つまり真に自由な社会の構築のためには戦争やむなしとする立場を擁立しているのである。自由を求める闘争において戦争や国内紛争は致し方なく、国民化に向けた同化のプロセスはすべて歴史の最終地点である真に自由な人間を作り上げるためのプロセスであると考えていたのである。ヘーゲルやフクヤマの議論においては、未来への展望を見出すことはできない。いかに矛盾なく健全な国家が存続しているか、そして健全な国家が存続している今こそが歴史の極点であると彼らは考えていたのである。

カーは続けて歴史家が分析する手法は未来と過去との対話であると指摘する。そして双方の対話によって歴史は一層進んだ段階に発展するという。

> 主要なゴールが立憲的自由および政治的権利を組織することと思われていた時代には、歴史家は過去を立憲的および政治的な見地から解釈しておりました。ところが経済的および社会的な目的が立憲的および政治的な目的に代って現れて来ますと、歴史家は過去の経済的および社会的な解釈を始めるようになりました[53]。

つまり歴史家自身の社会的な背景、歴史家らのゴール、或いは歴史家の周辺を取り巻く政権や政治体制によって、歴史は常に変更されるのである。まさに「立憲的および政治的な見地」を重要視する社会において、ある一定のゴールが定められれば、必然的に歴史もそのゴールに沿って変更される。また歴史家は、歴史をどのように解釈するかについて、「経済的および社会的な目的」が重要視されれば、以前の立憲的な見地からの歴史解釈は経済的あるいは社会的な歴史解釈に余儀なく歴史が変更されるのである。このように中立的で客観的な歴史があるとする歴史家の解釈を批判しているのである。歴史は彼らの目的によってその解釈も変容する。カーはそのような歴史を「成功の物語」であると指摘する[54]。そして「成功」という言葉を言い換えて、「最も役にたつもの」と述べ

---

[53] 同上　p.184
[54] 同上　p.187

た[55]。これは歴史における判断の基準を「普遍的妥当性を要求するような原理」のように、中立的で全ての当事者の経験を客観的に語れるものが歴史であるとする基準ではなく、歴史家にとって「最も役に立つもの」として歴史を論じたのである。

歴史家にとって「最も役に立つもの」が歴史であるとカーは主張したが、このことは今まで論じてきたヘーゲルやフクヤマらの議論の根幹にある彼らの目的に一致する。ヘーゲルにとって「最も役に立つもの」は国民国家の成立であった。なぜなら彼の目的は国民国家を崇拝することにあったからである。そのためには歴史において唯一合理性を備えた人間の共同体である国家が、歴史上最高の主人公である必要があった。そして彼は国民国家を唯一の歴史の主体とみなしたのである。

一方、フクヤマにとっては、冷戦後のリベラルな国民国家体制を賞賛することが彼の目的であった。彼がリベラルな民主主義国家を賞賛するとき、それと対置するソ連を置き、彼らが如何に民主主義的でなかったかについて言及するのである[56]。それはマルクス主義を信望する国民国家であり、そのイデオロギーの問題であった[57]。彼は、「最も役に立つ」歴史をリベラルな民主主義と定義したのである。つまりリベラルな民主主義を維持する国々を賞賛することがフクヤマが歴史を叙述する目的だったのである。

> ヘーゲルやマルクスが挙げている二つか四つの文明、トインビーが挙げている二十一の文明、文明は勃興、衰退、崩壊を経過して行くという、文明を人間の一生のように見る理論―こういう図式はそれ自体としては無意味なものです[58]。

カーは歴史を人間の一生のように見る傾向を批判している。ヘーゲルにせよ、フクヤマにせよ、国民国家ありきの世界史の構築は意味を持たない。それよりも彼らが何をどのような目的で語ってきたのか、そしてその目的において語られたものと語られなかったものの歴史を分析することに意味がある。歴史の進歩と終焉論をもってきて、リベラルな多文化社会を擁護する国家を賞賛するのは問題であり、こうして歴史の表舞台から姿を現さなかった人々は忘却されてきたことに注目する必要がある。マイノリティーの日

---

[55] 同上
[56] ソ連に対する批判は多くの場合、民主主義的でない国家として登場する。アメリカ、イギリスに対置する国家として共産主義国がたびたび登場する。『歴史の終わり（下)』　p.81
[57] ソ連のみならず、南アフリカの内戦が生じる国家についても彼は言及している。同上
[58] カー、前掲書　p.172

系移民史を論じていく際、彼らが国民国家の言説の中で語られなかった要因を、彼/彼女らの歴史から考察することには意義があるのだ。

カーと同様に国家を主体とした歴史の叙述について批判的な知識人がいる。フランスの思想家で歴史家のミシェル・フーコーは、歴史を論じる際の系統について分析している。彼は系統をセリーといい、セリーによる分類が歴史においてどのように機能しているかを考察した[59]。

> 歴史は、記録を組織化し、截りとり、区分し、秩序あるものとし、いくつかのレヴェルに分け、系を打ち立て、十分に適合するものとそうでないものとを区別し、諸要素を見定め、統一性を明確にし、所連関を記述するものとなる[60]。

フーコーは歴史における進歩主義や歴史そのものの解釈が中立的で客観的な事実であるとする歴史学の傾向を批判した人物である。彼の思想は歴史学的な分析の手法をとっているが、その内実は歴史そのものの語りを批判するものであった。『狂気の歴史』においては、それまで西洋世界において当然のこととして存在していた人間の逸した行動＝狂気は神霊によるものと考えられていたが、その後、精神病とみなされるようになった経緯を歴史的に研究している[61]。また、『監獄の誕生―監視と処罰』では、近代以前における処罰＝刑罰と近代以後のそれについてどのように変容していったのかを論じている。近代以前の処罰は、犯罪者に対して実質的に行使されるものであった。しかし近代以降、犯罪者に対する処罰は大きく異なるようになる。それは彼らを監獄に収容し、社会的に更正させるものとなった。これにより近代以降の犯罪者たちは異なる方法で処罰されるようになる。監獄に入れられることで、権力者に監視され、従順な身体であることを強要されるのである。これを彼は、パノプティコン（一望監視施設）と呼ばれる刑務所で説明したのであった[62]。

彼の歴史に対する批判は一貫している。それは近代以降、特に国民国家の発展において、歴史は重要であったとする主張である。彼は歴史の記録そのものが如何に加工されるかについて考察した。記録は切り分けられ、分配され、そして諸々のセリーに打ち立

---

[59] フーコー,ミシェル（2012）『知の考古学』慎改康之訳　河出書房新社　p.12
[60] 同上　p.18
[61] フーコー,ミシェル（1975）『狂気の歴史』田村俶訳　新潮社
[62] フーコー,ミシェル（1977）『監獄の誕生』　田村俶訳　新潮社

てられていくのである。

以上のように、カーやフーコーらの歴史批判は的を射ている。歴史は切り分けられ、一つの物語として語られるようになる。ヘーゲルやフクヤマは普遍的な歴史を語り、一方でカーやフーコーは普遍的歴史を批判した。マイノリティーの日系移民史はまさにこうした普遍的歴史によって排除されてきた歴史である。カーやフーコーのように、中立的で客観的な事実としての歴史を批判しなければ、マイノリティーの日系移民に注目することは不可能である。本稿は、カーが批判した中立的な歴史による語りの問題や、フーコーが解明した歴史を構築する際の記録の切り分けの問題を援用する。なぜなら、彼らはナショナル・ヒストリーの中で人々がどのように語られてきたのかという表象の問題に注目したからである。そこで次節では、アメリカの多文化主義言説とはそもそも何かについて研究した後に、日系移民の歴史が多文化主義の歴史においてどのように語れているのかを批判する。より具体的な多文化主義と日系移民に関するコンテキストから、多文化主義言説の問題を省察していく。

2-2　ナショナル・ヒストリーと多文化主義によるマイノリティーの統合

1980 年代の後半に入ってアメリカでは新たな「多様性」の概念が議論されるようになった。多文化主義（multiculturalism）という概念が積極的に議論されるようになったのである。文化の「多様性」を尊重する新たな概念としての多文化主義は、アメリカにおけるマジョリティーを中心とした従来の国民意識の変容を促そうとする試みから誕生した[63]。当時の社会背景は政治にしろ文化にしろアメリカの主流派はヨーロッパ系文化を中心とするものであった。多文化主義が議論されるまでは多様性が漠然と奨励されたが、アメリカ内部の社会ではマイノリティーに対する差別構造が併存していた。多文化主義はこうした差別構造に対するアフリカ系やアジア系の差別を是正する運動によって生じたと言われる[64]。初期の多文化主義はマイノリティーに属する民族や文化を包摂する多文化社会を目指した。つまり多民族社会の新しい概念として多文化主義が注目されるようになったのである。しかし多文化主義はマイノリティーの中のマイノリティーや、グル

[63] 井上達夫（1999）「多文化主義の政治哲学－文化政治のトュリアーデ」油井大三郎、遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ－揺らぐナショナル・アイデンティティー』東京大学出版会 p.88
[64] 戴エイカ（1999）『多文化主義とディアスポラ』明石書店　p.38

ープすら持たない人々の文化的な裂け目を、「多文化」という寛容性を帯びた言葉の中に融合していくという国民統合の理論として打ち出されるようになった[65]。

2-2-1　リベラルな多文化主義にみる統合の問題

その後、1990 年代に入るとさらに多文化主義が促進されるようになる。この概念は、現在でも広くアメリカ社会において歓迎され続け、教育機関においても多文化主義の議論が積極的に行われている[66]。特に高等教育においては多文化理解を進める教育の一環として、様々なルーツを持つ民族を積極的に取り上げ、様々な文化から成り立つアメリカとして現在でも展開されているのである[67]。

なぜ多文化主義が周知され、大衆に受け入れられたのか。多文化主義の概念が広く受け入れられた理由には国内の多様な文化の理解を目的とした教育が強く影響している。これは「多文化」、「多民族」というキーワードを扱った教育であるが、この教育のケース・スタディーとして日系移民が登場するのである。多文化主義を浸透させるための多文化教育として 1990 年以降アメリカの歴史教科書に、歴史的に抑圧され続けたアフリカ系アメリカ移民とマイノリティーであるアメリカの日系移民が記載されることとなったのである[68]。

森茂岳雄は「アメリカの歴史教育における国民統合と多文化主義」の中で、多文化教育が実践してきたモデルとしての日系移民を次のように指摘している。

> （日系移民の）補償運動への勝利という歴史的出来事は、これら開発の進められている日系人学習の性格を大きく規定するものであった。すなわち補償運動への勝利がアメリカ人としての日系人のエスニック・アイデンティティの強化に強く作用したように、多文化教育としての日系人学習は、日系人という一エスニック集団の固有の経験

---

[65] 油井大三郎（1999）「いま、なぜ多文化主義論争なのか」、油井大三郎、遠藤泰生編、前掲書

[66] ホリンジャーは、多文化主義が国家の分裂を引き起こしていることを危惧し、全ての民族が文化的差異を超えて国家に帰属するべきであると述べた。
Hollinger, D.A. 1995. *Postethnic America: Beyond Multiculturalsim*. New York: Basicbooks

[67] Petersen, W. 1971. *Japanese Americans: Oppression and Success*. New York: Random House

[68] 森茂岳雄（1999）「アメリカの歴史教育における国民統合と多文化主義」油井大三郎・遠藤泰生編、前掲書　pp.175-176

を尊重しながら、それがすべてのアメリカ人が共有できる歴史的経験であるという認識に立って、国民統合を志向する多文化教育の一つの象徴的事例であるといってよい[69]。

森茂は日系移民がアメリカにおける歴史教科書において語られてきた理由に「社会統合」と「共有できる歴史」を挙げている。日系移民を通して「共有できるもの」つまり「共感的理解」をアメリカ人が持つことによって、「アメリカ人としての国民意識」を強調していったのだ[70]。それではなぜアメリカにおいて日系移民が多文化主義の概念の中に組み込まれるようになったのか。

その理由は彼/彼女らのアイデンティティーがアメリカにあったとする一連の言説に由来する[71]。実際に日系移民を取り上げる歴史教科書は、日系移民が政府の不正義によって「強制収容」され、日系移民のアイデンティティーが喪失されたという歴史的出来事を取り上げてきた。そして戦後、彼/彼女らが立ち上がり政府に対して「強制収容」に対する補償運動を行い、それによって補償運動の勝利がもたらされたという日系移民の歴史を記載したのである。こうした日系移民の歴史はアメリカの歴史教科書のカリキュラムとして公式に位置づけられるようになった[72]。このようにしてアメリカにおける多文化主義は、移民という存在を重視し、多文化主義の中で各々の歴史的ルーツや共存性を再確認することを、実際には多文化教育の中で可能とさせてきたのである。アメリカにおけるマイノリティーの歴史は、アメリカ社会全体の歴史の一部として語り直され、現在も「多様な民族の貢献」という文脈で語られている。

しかし多文化主義者らが生産する日系移民に関する歴史的言説は、強制収容が行われるまでの日系移民のアイデンティティーの葛藤と国民化されない人々を分析してこなかった。リベラルを主張する多文化主義者らは一部の日系二世がアメリカに対する忠誠を示してきたことを強調し、「国家への貢献」という善良な日系アメリカ人のモデルを生産してきたのである[73]。強制収容の記憶から生じた彼/彼女らの経験は、多文化主義による

---

[69] 同上　p.176
[70] 同上　p.177
[71] Tanaka, C. 1982. *Go for Broke: A Pictorial History of the Japanese-American 100th Infantry Battalion and the 442th Regimental Combat Team*. Richmond, CA: Go for Broke, Inc
[72] 同上　p.176
[73] Chang, T. 1991. *"I Can Never Forget": Men of the 100th /442nd*. Honolulu, HI: Sigi Productions, Inc

統合の理論の中で忘却されたのである。これによって日系移民に生じたアイデンティティーの揺れは、深く議論されないまま放置されてしまった。また多文化主義は日系移民に生じた自分がアメリカ人なのか、或いは日本人なのかといったアイデンティティーの葛藤を単なる過去の差別と偏見、そして政府の不正義という言葉で解決してしまったのである[74]。

こうした日系移民の語りは、ヘーゲルやフクヤマらによる国家的な歴史の語りと一致する。多文化主義に登場するするモデルは、人々を一つの国民として統合させるための理論として機能してきた。カーやフーコーらが明らかにした歴史は、歴史そのものの語られ方であった。カーは、歴史そのものが一定のゴールに向かって語られると指摘した。多文化主義も同様に、国民を統合するという目的のために日系移民を一つの善良なモデルとして表象してきたのである。多文化主義を進めるアメリカにおいて、歴史家らは日系移民を表象する際、「善良なアメリカ人」とそうでない人々とに分類した上で、日系移民を表象してきたのである。つまり多文化主義は、「善良な日系移民」を生産すると同時に、「善良でない日系移民」を生産し、前者をアメリカのモデルとして表象してきたのである。

今なお続くアメリカにおける移民排斥の動き（特に市民権を持たない不法移民と呼ばれる人々に対する）は強化され続けている。受け入れ社会が強化しようと試みるのは政府なりマジョリティー側に属するものによる統合であり、自らの社会的状況・利権に対する維持と拡張である。移民が受け入れ社会において何ら遜色がない場合、もしくは利害関係が一致する限りにおいては彼/彼女らは容認される。このような統合は受け入れ社会による利害関係に留まらず、受け入れられる側にとっての利害関係と一致することもしばしばである。この利害関係における理論については、経済的側面よりもむしろ政治的、文化的側面を強調しておかなければならない。

例えばイタリアの思想家グラムシは、このような（管理する側と管理される側の）利害関係は知的権力とそれを構成する文化的な影響力が強化されることによって展開されるという理論を打ち出している[75]。グラムシの「ヘゲモニー」の概念は、純粋に経済的な影響よりもむしろ、知的権力にある。知の権力についてはグラムシの「知識人と教育」

---

[74] 岡本智周（2008）『歴史教科書にみるアメリカ』学文社
[75] グラムシ,アントニオ（1995）『グラムシ・リーダー』フォーカチ,デイヴィド編、東京グラムシ研究会監修・訳　御茶の水書房

が参考になる[76]。支配階級にある知識人を中心とする構造的権力は「官僚的中央集権主義」の側にあり、移民分析においては彼/彼女らを管理する側の立場となる。彼らは逆の立場にあるマイノリティー側の知識人にマジョリティーに属する文化的優美さを植え付け、そして彼/彼女らを構造化される側のコミュニティーや地域に再度返し、マイノリティーの声を掻き消すのである。マイノリティー側の社会に属しながら、マジョリティーによる「ヘゲモニー」を維持する機能を持つ知識人を彼は「有機的知識人」と呼んだ[77]。

日系移民に関して多文化を扱った概念が問題となる理由は、統合され得ない人々が常に存在するところにある。グラムシの「ヘゲモニー論」は、明確な文化分析とイタリアにおける南北問題に関する地政学的な観点から理論化されてきたという意味で、統合され得ない人々の存在を分析するにあたっての有効性が認められる[78]。多様な文化として語られている文化そのものの力関係に注目するのがヘゲモニー論である。ヘゲモニー論から多文化主義を分析すれば、統合を促進する役割を実践してきた多文化主義によって、逆にアイデンティティーの異質性や文化的差異が無視され、日系移民の同化が促進されてきたことが理解できる。つまり多文化主義に潜むヘゲモニーを積極的に議論していかなければマイノリティーの中のマイノリティーという日系移民のケースを理解することはできないのである。明確にしなければならないのは、日系移民史の中で語られる規範的日系移民のアイデンティティーは常に規範として語られていることである。アメリカの多文化主義はアイデンティティーの葛藤に陥った人々を排除してきた。特に多文化主義の中で語られてきた「戦後の補償運動による勝利によって日系アメリカ人としてのアイデンティティーを取り戻せた」という言説は、アメリカにおけるマジョリティーに都合よく理解されてしまったのであり、その中でアイデンティティーの葛藤に陥った人々は無視されてきたのである。

2-2-2　タカキの歴史叙述とネーション・ステートの問題

アメリカのリベラル多文化主義はマイノリティーの権利を容認する役割を果たしてき

---

[76] 同上　p.377
[77] 同上
[78] グラムシは「南部問題についての覚え書」の中でイタリアにおける南部と北部の問題に焦点を当ている。経済的に北部より南部が劣っている現状を文化面から考察している。グラムシの南北問題に関する地政学的研究は、本稿第 3 章で紹介する。
グラムシ,アントニオ（1999）　前掲書　pp.1-45

たが、その一方で特定のマイノリティー・モデルを形成してきた[79]。ここでは実際にアメリカで論じられてきた多文化主義の言説から考察していく。具体的なテキストとしてタカキの多文化主義論を批判的に考察する[80]。統合を目的とする多文化主義言説について議論したタカキは、フクヤマと同様にリベラルな多文化国家を賛美する知識人であった[81]。彼はフクヤマと同様に、アメリカ内部のマイノリティーがアメリカ社会において認知されていない現状を批判し、マイノリティーこそがアメリカのために貢献してきたことを主張した。

第 1 項で明らかにしたように、フクヤマは歴史学における進歩主義を賞賛し普遍的な国民史の構築を試みた。フクヤマは歴史そのものは、近代自由主義国民国家の成立とともに終わりを迎えることを述べ、国民の歴史が最も普遍的な歴史であるとするヘーゲルの解釈を援用した。つまりナショナル・ヒストリーが普遍的な歴史であることを強調した[82]。彼の普遍的歴史に関する主張は、リベラル多文化主義に影響を及ぼしていた。彼は「人間の普遍的な歴史」は「完全な合理性」を備えた人間の進歩によって達成されるとした。フクヤマにとって「完全な合理性」を備えた人間とは認知を求めて闘争する人間であった。彼はアメリカの公民権運動を念頭におきながら、マイノリティーによる闘争を「認知を求める闘争」という言葉に置き換えている[83]。そして、「認知を求める闘争」における勝者が合理性を備えた人間であり、こうした人々による歴史が普遍的な歴史を作り上げると指摘した[84]。つまり、彼は合理性を備えた人間は国民そのものであり、リベラルな多文化社会においてもマイノリティーは「認知を求める闘争」を繰り返し、「リベラルな自治政府」である国家によって承認された者のみが、勝利の歴史を勝ち取った者とされる。そしてそうした人々が真に人間の自由を勝ち取れるとしたのである。

タカキはフクヤマと同様の議論をした。唯一異なるのは、フクヤマは政治哲学により

---

79 戴エイカ（1999)『多文化主義とディアスポラ』明石書店

80 1939 年生まれの日系三世。カリフォルニア大学バークレー校民族学研究学部教授で、アメリカ歴史学会の評議員を務めた。代表的な著書に『もう一つのアメリカン・ドリーム―アジア系アメリカ人の挑戦』（1996）岩波書店、『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』（1995）草思社がある。

81 詳しくは以下を参照されたい。
Takaki, R. 1998. *A Large Memory: A History of Our Diversity, with Voices.* New York: Little Brown and Company

82 第一項で分析したように近代国民史の礎を築いたヘーゲルは、国家と歴史が同一に語られるべきであると説いた。歴史上の出来事は、個人の特殊性から作られるのではなく、共同精神としての国家によって形成されるとした。国家形成の礎となる歴史は、共同精神（同一の国民）によって形成されると理解していた。ヘーゲル、前掲書　p.84

83 フクヤマ、前掲書

84 同上

歴史を描写しているのに対して、タカキはアメリカ内部のマイノリティーと彼らの証言から歴史を語っている点である。彼はアメリカの多文化社会においてマイノリティーの統合を賞賛した人物であり、彼の主著 *A Different Mirror: A History of Multicultural America* は「認知を求める闘争」について説明した一冊である[85]。彼はアメリカの自由主義が崩壊していることを批判した上で、アメリカの歴史は多くのマイノリティーらの国家への貢献によって支えられていることを主張した。更にタカキは第二次世界大戦中にアメリカにおけるマイノリティー達が敵国とアメリカ内部の差別是正のために戦ったとする一連の歴史を叙述した[86]。

タカキの歴史観はヘーゲルの国民による国民国家の歴史、そしてフクヤマのリベラルな民主主義の歴史の総体ということができる。もちろん彼も第二次世界大戦後のアメリカで語られてきた歴史に批判的視座をもっている。しかし、それらの歴史が最高官や白人兵士のヒロイズムを通して語られてきたことを非難しており、彼はそれとは異なる多文化主義の歴史を叙述するのである。それも底辺にいる一般大衆の声を拾い上げることによってアメリカ史の再構築を試みたのである。

> 第二次世界大戦に関する私たちの記憶は、アメリカ人としてのアイデンティティ―私たちは何者であり、私たちの国はいかなるものか―を考える上で、今でも重要な枠組みの一つと言えよう。しかし、この過去をいったいどうやったら忘れずにいられるのだろうか。歴史とは個々人が自ら体験した出来事と、知識として学んだ出来事の記憶の総和である[87]。

彼は一般大衆の声が歴史において不在となっている現状を批判しながら、アメリカに忠誠を示した多くのマイノリティーの歴史は、従来のアメリカ史にはないと批判する。また

> 我が国の軍事的、政治的指導者たちの生き様を通して、あるいは白人（アングロ・

[85] Takaki, R. 2008. *A Different Mirror: A History of Multicultural America.* New York: Little Brown and Company

[86] タカキは著書の中で大戦中のアメリカ内部のマイノリティーに注目し、彼らの兵役に焦点を当ててアメリカへの忠誠を誇張した。タカキ, ロナルド（2004)『ダブル・ヴィクトリー―第二次世界大戦は、誰のための戦いだったのか』大和弘毅訳　白艪舎

[87] タカキ、前掲書　p.13

サクソン）アメリカ人兵士による戦場での活躍や英雄行為、アフリカ系や日系といった米国者に独特な少数派の体験などを通して、戦争の歴史は語られ続けてきた[88]。

とした上で、「一般的なアメリカ人の実際の生活を通して、底辺から語られるものこそが歴史である[89]」とし、「一般的なアメリカ人」を想定していたのである。彼は底辺といいながら、アメリカへの忠誠を示し兵役についた「一般的」なアジア系やアフリカ系アメリカ人を想定していた。タカキにとってアメリカの多文化主義に含まれる人々とは、多様なエスニシティー[90]が存在しつつも確固としたナショナリティーに根差しているものであった。彼の多文化主義にはアメリカ人としてのアイデンティティーが所与のものであって、そこに意義申し立てを行う人は存在しなかったのである。彼は答えありきの議論（それはナショナリティーの完全な一致であり、ほとんど全ての抑圧されてきたマイノリティーがアメリカに忠誠を示してきたこと）をしていたのである。

彼の著作に関して多文化主義は国民統合の新たな理念にほかならないとする研究者もいる[91]。『ダブル・ヴィクトリー―第二次世界大戦は、誰のための戦いだったのか』は国民統合の理念が最も顕著に示されている彼の著作である。肌の色による差別を粉砕するために積極的にアメリカへの忠誠を示したオリジナル・アメリカンが登場し、硫黄島のインディアン・ヒーローが登場する。また、中国人、韓国系アメリカ人、インド、ドイツ、イタリア人等、彼/彼女らには差別による抑圧があったにも関わらず、第二次世界大戦において国外そして国内の差別のために兵士として戦ってきた史実を描いているのだ。

全世界から集まったアメリカ人は、海外と国内の偏見を打破するために戦い、血を流した。そんな彼らにとって戦争は「白人だけではなく、黄色も褐色も黒も、すべて

---

88 同上
89 同上
90 ファン・デン・バーグはエスニシティーと人種とは異なる意味をもった集団であると指摘する。バーグはエスニシティを「文化的基準にもとづき社会的に定義された集団」と定義し、人種を「身体的基準にもとづいて社会的に定義された集団」と定義する。エスニシティは言語や慣習、行動様式等の文化による集団として定義される。
一方人種は「身体的特徴」や「生物学的」要素にもとづいて定義された集団である。日系移民はアメリカ社会において、エスニック・マイノリティーであり、異なる人種として、「文化的」にも「生物学的」にも、区別されてきた。
Berghe, V.D., Pierre L.1967. Race and Racism: A Comparative Perspective. New York: John Wiley & Sons pp.9-10
91 遠藤はタカキの歴史観と多文化主義について詳細な議論を展開している。遠藤泰正（1999）「多文化主義とアメリカの過去―歴史の破壊と創造」油井大三郎、遠藤泰生編、前掲書 pp.21-57

の人々のために民主主義を護る」戦いであった[92]。

タカキの主張は、第二次世界大戦とは全てのアメリカ人が国内と国外の民主主義のために戦った正義の戦争であり、白人だけではなく、当時差別されていたマイノリティー達もアメリカのために戦ったことを記録することであった。タカキの歴史の語りは、多文化社会のアメリカを再認識し、賞賛し、ナショナルな枠組みでの団結を強固にした。彼は次の歴史叙述の中に、アメリカとしての明白な団結を求めているのだ。

> 人種隔離、軍需産業の人種差別、都市の人種暴動で引き裂かれていた様々なコミュニティのアメリカ人たちは、それでも“より完全な団結”を求めて戦った。…アメリカの歴史の大転換期となったこの時代に、アメリカの“天使”は明白に多民族社会たることになった。“四つの自由”を海外だけでなく、我々の社会の現実にもするべく戦った多様な人々は、国内の“勝利”のために未完の戦いに従事する我々すべてを一つに“結びつける絆”を創造したのである[93]。

彼のいう大転換期とは第二次世界大戦でアメリカが戦争に参戦したことである。そして、この時代においてアメリカ社会に団結が生まれたという。それは国内の差別されていた民族が、アメリカのために一致団結し、戦ったことを意味している。これによってアメリカは一つになり、より強固な国民国家が成立してきたことを彼は叙述しているのである。彼は全体としてすべてのマイノリティーがアメリカに忠誠を示してきたとする歴史を語った。それでは日系移民についてはどうだったのか。彼は日系移民についての記述も数多くしている。

まず彼は20世紀後半に日本からアメリカに移住した日系移民の歴史を紹介し、そしてその後、1914年にカリフォルニアで制定された外国人土地法（すべての帰化不能外国人に一切の土地所有を禁止する法案）や、その後、移民一世に生まれた二世の子供たちを紹介している。ここでも問題となるのが、彼のナショナル・アイデンティティーに関する歴史の記載である。一例を挙げれば次のように一世と二世の関係を叙述している。

---

[92] タカキ、前掲書　p.335
[93] 同上　pp.335-336

親たちは子供を通して、いつの日かアメリカに寛容の心を見出すことを願い、英語を話し、アメリカの学校教育を受けた第二世代が白人に日本文化を教え、移民世代の願望を伝えることを望んだ。つまり彼らを“仲介者”として、東を西に伝え、西を東に伝えることで、より大きな社会への“かけ橋”たらんことを願ったのである[94]。

彼の論じる多文化史の中の日系移民史は、国民国家にとって健全なモデルとなった。一世がいかなる差別に遭遇しても、それでもアメリカ人として子供たちを育て、日本とアメリカの架け橋になってくれることを望んだとする歴史叙述である。しかし、実際にはそれよりも複雑な状況であった。第二次世界大戦中、彼/彼女らは強制収容所に収容されることとなるが、一世と二世の関係は必ずしも良好なものではなかった。日本人性を重んじる一世とアメリカ人性を強調する二世との対立、或いは家族や日系コミュニティー間でアメリカに忠誠を示すグループと日本に忠誠を示すグループ、どちらにも示せないグループなど多様であった。市民権を持たない一世の母親が、自分の子供である二世がアメリカの兵士としてドラフトされることに悲痛な思いをした人も多い。こうした記憶は『私達の記録（Our Recollections)』にも残っている[95]。このように一世が二世を東西の架け橋として、しかもアメリカ人として育てたと決定づけることは問題である。

「お前たちはアメリカ人だ」と、一世は子供たちにくどいほど言いつづけた。「お前たちは親にはなかった機会に恵まれているのだ。学校に行って、しっかり勉強しろ。機会は逃すな。」[96]

一世が市民権を持つ子供に対して、チャンスが十分与えられていることが述べられている。しかし、このような一世ばかりではなかった[97]。彼は更に、日系移民が日系アメリカ人としてのアイデンティティーをすでに持っており、彼/彼女らは日本民族ではあるけれどもアメリカ人としてのアイデンティティーを備えていたと記載している。

---

[94] 同上　p.223
[95] 足立和歌子他（1986)『私達の記録（Our Recollections)』　湾東日系社会奉仕団
[96] タカキ、前掲書　p.224
[97] 日系移民の歩みをアメリカへの忠誠という語りではなく、アメリカへの批判として描いたナラティブも多数存在する。代表的なものとして以下を紹介する。
Uchida, Y. *Desert Exiles: The Uprooting of a Japanese-American Family*. Seattle: University of Washington Press

しかし二世は、完全な同化を、単に“アメリカ人”になりきることを欲していたわけではなかった。彼らは自分たちが二つの文化の複雑な結合体であることを意識し、そういう存在でありつづけたいと思っていた。アメリカ人に関して学校で学んだことはすべて彼らに根付き、アメリカ人としての意識は確かなものだった。にもかかわらず、多くの二世たちは親の文化を放棄することは望まなかった[98]。

タカキは全ての日系二世はアメリカ人としての健全なナショナリティーを保持しながら、一方で自分のルーツを忘れることなく、心の奥深いところで日本文化を尊重していると考えていた。彼の描く多文化社会は属性としてのナショナリティーと定住国としてのナショナリティーを前提として展開されている。彼の多文化主義における議論は、国家に忠誠を示すマイノリティーを認知し、アメリカ人として対等に認めるべきとすることであった。ここでもまたナショナリティーの狭間で揺れる日系移民のアイデンティティーは無視され続けている。

彼は更に、日系移民と第二次世界大戦における兵役について叙述している。日系移民は第二次世界大戦において、何の罪もなく強制収容所に収容された。政府は彼/彼女らの中で市民権を持つ二世に注目し、二世に兵役につくかどうか忠誠心調査を実施した。そこで志願した人々は米兵として戦争に参加したのである。しかし実際には、アメリカ兵として志願することを拒んだ人々が多くいた[99]。アメリカへの忠誠を示さず、日本に忠誠を示したものや、どちらに忠誠を示したらよいかわからなかったもの、日本に帰るためにあえてそうしたものもいた。しかしながら彼は日系兵士たちの活躍のみをアメリカ史の中で語っている。

日系兵士たちはヨーロッパ戦線の勝利にも貢献した。1942 年、西海岸でデウィット将軍が日系人の公正立ち退きを実行していた頃、ハワイではエモンズ将軍が二世部隊、第 100 大隊を編成していた[100]。

こうした語りは日系移民の国家への貢献のみを語り、歴史において語られない人々を排

[98] タカキ、前掲書　p.225
[99] Grodzins, M. 1956. *The Loyal and the Disloyal*. Chicago, University of Chicago Press
[100] 同上　p.237

除してきた。社会の底辺に存在し、歴史にも登場することがなかった日系移民の中のマイノリティーはほとんど注目されなかったのである。アメリカのリベラル多文化主義の中で語られる日系移民は、アメリカへの忠誠という文脈においてのみ語られてきた。これらの考察から明らかとなるのは、多文化主義がマイノリティーを管理するために機能してきたことであった[101]。

一見すると、アメリカにおける多文化主義はアメリカ国内の差別を解消し、すべてのアメリカ人に平等な権利を賦与することに貢献してきたといえる。しかし、アメリカにおける多文化主義は、文化的差異を承認することでアメリカ社会内部の分裂を招くということよりも、国民統合の理念として機能してきた[102]。アメリカにおいて多文化主義を謳う歴史として挙げられるフクヤマやタカキらの多文化主義言説は、同一国民としての共通の記憶、共通の歴史認識、共通の帰属意識という幻想を構築してきたのである。

2-2-3　多文化主義において語られない日系移民

『リキッド化する世界の文化論』を著したポーランド出身の社会学者ジグムンド・バウマンは、私達の生きる社会の中で生産される文化（ここでは音楽やテレビに至る通俗的なもの）の流行について興味深い考察をしている。彼によれば現代における流行とは進歩であるという。しかし、その進歩とは生活の改善の言説から個人の生き残りの言説へとシフトしているという[103]。近代における文化的な進歩とは命や生活に関わるものであったが、現在は歩調を合わせるものであるという。そこでは消費市場の巧妙な取り組みによって、文化が流行の論理に従うようになると指摘しているが、彼は同時に現代の人々は自分のアイデンティティーさえも、頻繁にそして素早く効率的に変化させる能力を身につけているという[104]。

同様に藤田結子は、『文化移民：越境する日本の若者とメディア』の中で、「国境をこえるメディアはトランスナショナル・アイデンティティの形成を促す」という仮説につ

---

[101] オーストラリアにおける多文化主義研究者の塩原良和も、多文化主義政策がマイノリティーである先住民族の管理として機能している点を指摘している。
塩原良和（2013）「エスニック・マイノリティ向け社会政策における時間／場所の管理―オーストラリア先住民族政策の展開を事例に」『法学研究』86(7): pp.125-164
[102] 森茂岳雄（1999）『多文化社会アメリカにおける国民統合と日系人学習』明石書店
[103] バウマン,ジグムンド（2014）『リキッド化する世界の文化論』伊藤茂訳　青土社 p.40
[104] 同上　p.41-42

いて、特定の条件下においてはそうであるという[105]。彼女はメディアという文化のツールを使用する利用者の個人的背景によっては、トランスナショナルなアイデンティティーが形成されやすいことを示唆している[106]。後に議論するこれらのトランス・ナショナルな議論は近年盛んに行われているが、本稿で紹介する日系移民のインタビュー等からも理解できるように、これらの議論は決して近年の事象ではない。過去、20 世紀初頭にアメリカに移住した日系移民やその子孫らからのインタビューを聞くと、彼/彼女らも当時の社会構造の中でどのようなアイデンティティーを選択すべきか、その時々の情勢によって適合させようと努力してきたことがわかる。それは必ずしも日米いずれかのアイデンティティーを選択するというものではなかった。

こうしたナショナル・アイデンティティーに回収されない人々を学術的にどのように理解すればよいのか。そのヒントとなるのが、社会構造によって決定付けられるアイデンティティーとは異なるものを持つ人々の「決定不可能性」とその可能性についてである。「決定不可能性の可能性」という言葉はジャック・デリダによって詳細に議論されており、彼の出自がディアスポラ的であることから理解することが可能である。デリダはフランスの哲学者として著名であるが、彼の出自はアルジェリアであり、このことが「決定不可能」という言語の可能性を示唆する一因となっている。デリダは 1930 年にフランスの植民地であるアルジェリアでユダヤ系の家系に生まれ、社会との間にある種の「差異」を感じていた。当時ユダヤ人にはフランスの市民権が与えられていたが、1942 年から翌年まで反ユダヤ法により彼もフランスの市民権を奪われる。著名な思想家であり哲学家であるデリダにとってこの出来事は彼の思想形式に深い影を落としたのである[107]。デリダにとってフランス語は「母語」と呼びうるものではなく、常に他者的なものであった。彼はパリに渡りそこで生活することになるが、これらの経験によって彼自身が「同一性の危機」に陥った。そしてこうした経験を通してデリダは移民についての非常に鋭い考察を残している。すなわち、移民は社会構造の中から脱した存在であり、国民という同一的で統合を意図する社会から脱していると[108]。デリダはこの同一的でない存在を

---

105 藤田結子（2008）『文化移民：越境する日本の若者とメディア』新曜社　p.234
106 同上
107 デリダ,ジャック（2005）『デリダ、脱構築を語る』谷徹、亀井大輔訳　岩波新書 pp.169-170
108 デリダは哲学や文学などのさまざまなテキストを読解して、そこにさまざまな概念の二項対立や、それらの秩序関係が含まれることを暴きだした。この二項対立や秩序関係を最終的に支配しているのが、すべての現象を認知できるという現前の形而上学であった。これに対抗すべく、デリダは特権的・中心的に価値づけられている決定的なものが、実は根源的で

否定的にとらえるのではなく、逆説的に非同一性の中に実は可能性が秘められていることを示唆した。彼は自らの青年時代を次のように語っている。

> そこでの（アルジェリア）教育システムは、少なくとも原理上、権利上は「本国」のそれと完全に同一のものでした。同じ規範、同じ価値、同じ言語モデルでした。あの学校は共和主義者たらんとしていました。…あの学校はアルジェリア人たち自身を排除しようともしたのです！[109]

彼はアルジェリアにおいてフランス文化と教養を学んだ。しかし彼の出自から生じる「異質性」を、フランス/アルジェリア/ユダヤとの狭間で感じ続けてきた。そして逆に彼はその「異質性/異邦性」の経験を積極的に議論するのである。「異質性/異邦性」が生じる理由としてデリダは言語による社会構造を挙げている。彼は表象するもの（シニフィアン）と表象されるもの（シニフィエ）の関係について分析している。言語の持つ意味作用を分析するデリダの考察によって、現在では言語によって構成される社会構造としての「確かなもの」を「ずらす」作用を認識することが可能となった。ここでデリダの言語構造の分析を明らかにするには、表象されるもの（シニフィエ）と表象するもの（シニフィアン）の関係にみられる完全なズレについて論じなければならない。そして、なぜこのようなズレが生じるのかについて、デリダは対立する記号とシニフィアンとの間の決定不可能性に由来すると説明している[110]。

例えば多文化主義は統合を意図するアメリカ社会において、日系移民の歴史を紹介し、アメリカ社会の内部でマイノリティーを表象してきた。多文化主義は単なる言葉ではなく、多様性を容認する寛容な言葉としてアメリカ社会で歓迎されてきた。しかし寛容なイメージを提供する多文化主義が日系移民を表象するときに、日系移民の忠誠を強調することで、忠誠/不忠誠とに分類し、日系移民を忠誠的なマイノリティーとして美化して

はないことを明らかにする。そして特権的・支配的な価値づけからすれば説明できない「決定不可能」な言語や存在にデリダは注目するのである。つまり「決定不可能」性とは、二項対立や秩序関係の支配そのものを脱構築する可能性がある。この概念をデリダは「決定不可能性の可能性」と呼んだ。
同上　p.187
Smith, J.H. and Kerrigan, W.Derrida, 1984. *Taking Chances: Derrida,Psychoanalysis,Literature*, :Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press p8

[109] デリダ,ジャック、ルディネスコ,エリザベート(2003)『来るべき世界のために』岩波書店、p.161

[110] 同上　p.218

しまうのである。例えば第 2 章で論じたタカキの多文化主義言説はその例といえる。日系移民によるアメリカへの貢献という美化された日系移民の表象によって、多文化主義は日系移民を一括りにし、彼/彼女らの歴史を美化してしまう。20 世紀の初頭から移住し定住の志向を強めてきた日系移民にとってのアメリカにおける生活は排斥という苦悩の連続であり、アメリカへの忠誠/不忠誠という枠組みによってのみ、日系移民を分類することは不可能であった。こうした社会状況であったにも関わらず、多文化主義は日系移民をアメリカに忠誠的なマイノリティーとして表象してきたのである。さらに多文化主義においては、日系移民がを善良なモデルとして利用されてきたことを第 2 項で議論してきた。多文化主義という言葉が日系移民を表象するとき、多文化主義は、日系移民を善良な一つの集団として生産すると同時に、日系移民の内部に存在する文化的な差異を封じ込める。つまりシニフィエとしての日系移民の存在が、シニフィアンである多文化主義という寛容な意味を持った言葉によって表象されるとき、日系移民の文化的な差異は排除される。

こうしたシニフィエとシニフィアンとのズレを考察すると、彼/彼女らを表象してきた日系移民という言葉自体についても考え直す必要が出てくる。なぜなら日系移民という言葉が、彼/彼女らを表象すること自体にズレが生じるからである。日系移民を一つの民族として扱うことで、日系移民の内部にある文化的差異やアイデンティティーの差異を同化してしまうのである。そこで多文化主義の中で語られない、或いは歴史に語られない主体を積極的に語るには、次章で展開するサバルタン研究を通して日系移民を語る必要が出てくる。そうしなければ日系移民の内部に存在する文化的差異を研究することができない。

ここまでの議論をもう一度整理していくと、多文化主義において日系移民は、「善良なアメリカ人」として表象されてきた[111]。多文化主義は「善良なアメリカ人」として日系移民を表象し、日系移民の主体（シニフィエ）の存在そのものを無視してきた。もし多文化主義が語る「善良な日系アメリカ人」をすべての日系移民が受け入れたとするならば、表象するものとしての「善良なアメリカ人としての日系移民」と表象されるものとしての日系移民との関係において問題は生じない。すなわち、日系移民が「善良なアメリカ人」であるとするならば、シニフィエとシニフィアンとの関係においては問題が生

[111] Bass, H.J., Billias A.G., and Lapsansky E. J. 1983. *America and Americans*. NJ: Silver Burdett

じないのである。

第2章の議論では、日系移民は国家に貢献するマイノリティーとして表象されてきた。しかし、日系移民の多様なアイデンティティーが存在するとき、多文化主義が日系移民を「善良なアメリカ人としての日系移民」として表象する行為によって、多様な経験を通じて過去を生きてきた日系移民と、表象によって形成された日系移民のイメージとの間に、矛盾と差延[112]を生むのである。

日系移民の場合、多文化主義が語る日系移民の表象の問題は、「善良なアメリカ人」でない日系移民を生産し、同時に空間的に排除してきた。また多文化主義の歴史においては、時間性を重視するアメリカの統合という共通の歴史に関して「善良なアメリカ人」として日系移民を語ることで、そうでないものを生産し、歴史的に排除してきた。歴史的に排除したということは、アメリカという社会空間において排除しただけでなく、同化できなかった日系移民を歴史的にも排除してきたのである。日系移民のマイノリティーが現在までアメリカ社会で語られてこなかったのは、多文化主義が彼/彼女らを空間的に「他者化」しただけでなく、歴史言説において時間的にも「他者化」してきたからである。このように、日系移民を統一的で均質なエスニック・グループとする多文化主義の言説は、「善良なアメリカ人」になれなかった、あるいは日本にもアメリカにも従属されなかった日系移民を表象することが限りなく不可能であったのである。

デリダは言語による社会構造が人々を同一化していくことについて次のように述べている。

同一性に属すものや、また大概これと結びついた共同体的なものへの崇拝には、つ

---

[112] 高橋哲也（1998)『デリダ―脱構築』講談社。多文化主義が日系移民を表象する際の問題について、筆者が差異という言葉を使わず差延という言葉を使って説明する理由は、差異と差延という二つの言葉の意味作用が異なるからである。差異という言葉が「空間的差異化」のみを意味するのに対して、差延は「空間的差異化」と「時間的差異化」の両方を表す意味を持つ。デリダによれば、シニフィエは常にシニフィアンに表象される。シニフィアンは表象するものであるから、シニフィエ自体を完全に表象することは不可能である。この場合、シニフィエは不完全に表象されており、シニフィエはシニフィアンによって空間的に差異化される。また同様にシニフィエが不完全にシニフィアンに表象されていることからシニフィエは不在であり、シニフィアンとシニフィエとの間に時間的なズレが生じるのである。空間と時間の差異についてもともとフランス語の動詞 differer は、「異なる」と「時間的に遅らせる」という二つの意味を持つ言葉である。そこでデリダは空間と時間の両義的な意味を持つ差異を差延（differance）として説明した。一般的に使用される差異（difference）と差延（differance）は発音上、全く同じため知覚されず、文字として書かれることではじめて意味を持つのである。

ねに不信を抱いてきました。政治的なものと領土的なものとのあいだの、ますます必然的となってきている分離を、私はつねに喚起しようと努めています[113]。

ここでの政治的なものとは主権国家による人間の規範化であり、領土的なものとは主権国家による領土の支配を意味する。国民国家の規範化は、人間を「国民」として扱いながら境界を領土に設け「国土」として扱ってきた。こうして国民国家は「国民」と「国土」を所有することで一つの歴史として語ることを可能としてきた。この主権国家による政治的で領土的な「国民」や「国土」の規範化をより明るみに出すことによって、「同一性に属するもの」や「共同体的なもの」に対して批判的な視座を持つことが可能となる。デリダの言葉はまさにシニフィエとシニフィアンとの間の「揺れ」と出口のないアポリアについての思考そのものの喚起を意味している。

本章は日系移民の表象の問題に注目した。ヘーゲルとフクヤマは普遍的な歴史を語り、タカキは日系移民を「善良なアメリカ人」として表象してきた。これに対して、カーとフーコーは普遍的な歴史を批判した。カーは一定のゴールのために歴史が語られること、フーコーは人々を分類した上で歴史が語られることを明らかにした。彼らの議論は日系移民の表象の問題に批判的視座を提供した。多文化主義は、善良な移民とそうでない移民とに分類し、日系移民を「忠誠的移民」として表象した。まさに、多文化主義は多様な背景を持つ人々を統合するため、「善良な移民」を生産すると同時に「善良でない移民」を生産し、「善良な移民」のみを歴史言説において表象してきたのである。

デリダは更に、人々が表象される際、表象するものと表象されるものとの「ズレ」を明らかにした。デリダはこの「ズレ」自体も、表象するものの権威によって生産されていることを明らかにした。日系移民が「善良なアメリカ人」として表象される一方、「善良でないアメリカ人」が生産されてきた。そして、忠誠/不忠誠という表象によって、日系移民の文化的な差異を封じ込めたのである。

本稿は、「善良なアメリカ人」として日系移民が表象されてきたこと、そして忠誠/不忠誠という分類によって、日系移民が表象されてきたことを批判するために、個の視点から日系移民の多様性を考察する。そのためには、表象によって生産されてきた「善良な日系移民」とは異なる、日系移民のサバルタン史から、彼/彼女らの歴史を再考する必要がある。

---

[113] デリダ,ジャック・ルディネスコ,エリザベート、前掲書　p.32

サバルタンの歴史とは、今まで語られなかった歴史の空白と断絶との関係の中に身を委ねることで、近代によって固定化されたヴィジョンと権威的な表象行為に対して抵抗するための力を生産する。それは現在まで行われてきた日系移民の研究とは一線を画す。多文化主義の暴力性を暴くためには、リベラルな普遍主義が覆い隠してきた日系移民に対する暴力の歴史と解釈を抉り出す批判的視座が必要とされる。

また日系移民に対する歴史的解釈に対する批判的視座を提供するためには、普遍的な国民史の中で語られることがなかった個の視点からの考察が重要となる。日系移民の個の歴史と普遍的な歴史から排除されてきたツールレイク・キャンプの考察を通して、多文化主義の暴力性を暴いていく。

次章で行う日系移民のサバルタン史は、多文化主義言説において語られることがなかった日系移民の歴史である。ツールレイク・キャンプという歴史的に排除された史実を紹介することで、国民の統合と排除を行う多文化主義の問題を明らかにする。

第 3 章　日系移民のサバルタン史：ツールレイク・キャンプ

本章では、第 2 章で考察したようにナショナル・ヒストリーと多文化主義の歴史という従来の研究において語られる善良な「日系アメリカ人」が生産されてきた一方、そうした歴史からこぼれおちるサバルタンの歴史に注目する。まず、第 1 節ではアメリカのナショナル・ヒストリーや多文化主義の歴史、そして日系移民研究において見落とされてきたアイデンティティーの葛藤の経験を具体的に考察するために、二つの小説を考察する。一つは、ジョン・オカダの *No-No Boy* である。次にテレサ・ファンケの *The No-No Boys* の小説に注目する中で、この二つの文学作品の中に登場する日系アメリカ人が日本とアメリカ、二つのアイデンティティーの狭間で苦悩したことを分析する[1]。これらの作品はフィクションであるが、作品に登場する日系移民は、ナショナル・ヒストリーにおいて語られることがなかったアイデンティティーの不確実性を表象している[2]。次にこうした従来の歴史において語られない人々がいることを更に理論的に検証していく。ここでは従来のナショナルな枠組みにおいて語られることがなかった歴史研究について包括的に議論されてきたサバルタン研究を援用する。サバルタン研究はある社会構造において歴史的に忘却された史実に着目し、社会において被抑圧者或いはマイノリティーに注目する研究である。そこで、二つの小説が提示するような国民のアイデンティティーに回収されることができなかった日系移民や、従来の日系移民の表象とは異なる日系移民に注目するため、サバルタン論を援用し、日系移民のサバルタン史を具体的に考察していく。

そのためにまず第 2 節でサバルタンとは何かについて説明する。グラムシが使用したサバルタンという用語の意味と、彼がサバルタン概念を構築することで説明しようとし

---

[1] オカダ, ジョン（1979）『ノー・ノー・ボーイ』中山容訳　昌文社
Funke, T. 2008. *The No-No Boys*. Fort Collins, CO: Victory House Press

[2] 小説以外では、アイデンティティーの不確実性を著した著作として以下のものが挙げられる。
Kashiwagi, H. 2005. *Swimming in the American: A Memory and Selected Writings*. San Mateo, CA: Asian American Curriculum Project, Inc
Michi, W. 1976. *The Untold Story of America's Concentration Camps*. New York: William Morrow
Yamato, I. 1997. *Morning Glory, Evening Shadow: Yamato Ichihashi and his internment writings, 1942-1945*. Edited, annotated and with a biographical essay by Chang, G. Redwood City, CA: Stanford University Press

た権力概念について詳しく考察する。またグラムシが指摘したサバルタンの歴史を考察するための方法論が、日系マイノリティーの歴史とどう関係していくのかについて考察する。

第 3 節で現在までの日系移民の歩みを紹介する。サバルタンである日系移民の歴史に注目する前に、今まで研究されている日系移民の歩みについてまとめる。本節では日系移民の歩みについて年代ごとに詳細に説明することで全体的な日系移民の歩みを把握する。

第 4 節では日系移民の強制収容やアイデンティティーに関する言葉がアメリカでどのように使用されているのかを考察する。アメリカでは強制収容を説明する際に、公には強制収容を意味する言葉を使用せず、避難や仮移転という言葉を使用してきた。この言葉の問題を考察することによって、現在でも日系移民の強制収容や日系移民の歴史が美化されて語られていることを批判する。このことは次節で行うサバルタンの歴史であるツールレイク史が注目されてこなかったことと深く関わっていることを明らかにする。

第 5 節ではツールレイク・キャンプの数少ない資料や証言から、日系移民のサバルタンの歴史に注目する。具体的にはインタビューで得ることができた資料や写真から考察する。ここではツールレイクの開設に関する史実や収容所内の構造や機能、支配者側がどのように管理していたのかを説明する。実際にツールレイク・キャンプ内で何がおきていたのかを明らかにし、キャンプの中で生じたさまざまなトラブルにも焦点を当てる。これらの分析を通して、サバルタンであるツールレイク・キャンプの被収容者の歴史を紹介する。

3-1　多文化主義における「日系アメリカ人」の生産と失敗

3-1-1　善良な「日系アメリカ人」

善良な「日系アメリカ人」にとって、アメリカに忠誠を示さない日系移民は厄介な存在であった。日系移民はアメリカに忠誠を示し、アイデンティティーへの帰属を確かなものとしていった。しかし、実際には一世は市民権を持っておらず、日本に忠誠を示したものや日本に帰還することを強く望んでいるものも多かった[3]。二世は更に複雑でその

[3] Takei, B. 2005. Legalizing Detention: Segregated Japanese Americans and the Justice Department's Renunciation Program. In *A Question of Loyalty: Internment at Tule Lake*.

ような両親を持っていることから自分のアイデンティティーの行方がわからなくなったものもいた[4]。このような状況下において日系社会では、JACL（Japanese American Citizens Leage 日系アメリカ人市民同盟）が論じるようなアイデンティティーの葛藤に陥ることなくアメリカへの同化を進めた人々と、アイデンティティーの葛藤に陥った人々との間で大きな乖離が生じていた[5]。

しかし、多文化主義の歴史においてはこうしたアイデンティティーの葛藤に陥った人々が注目されることは全くなかった。事実、善良な「日系アメリカ人」が生産される一方で、異なるアイデンティティーの葛藤に陥った人々の活動や彼/彼女らをテーマとした小説が存在する。特に、善良な「日系アメリカ人」と異なるアイデンティティーの揺れは当時のアイデンティティーの葛藤を舞台にした小説において顕著である。これらの小説は、1960 年代以降になってようやく注目を集めるようになった。

二つの小説には当時の日系移民を取り巻く社会空間が描かれている。日系移民を主題とした小説は物語であるが、この物語の中に当時の日系移民を取り巻く社会状況が顕著に現れている。物語の中に記述されている社会状況とは、日系移民に向けられた国民化へのプロセスである。そして物語の中では、日系移民が国民化へのプロセスに失敗するという複雑な社会空間を顕著に現している。つまり小説は単なる物語ではなく、その物語の内部に当時の社会空間が色濃く残されているのである。こうした小説と当時の社会空間との関係についてエドワード・サイードは次のように説明する。

> わたしはここで小説―あるいは広い意味でいう文化―が帝国主義の「原因」となったといわんとしているのではない。そうではなくて、ブルジョワ社会の文化的産物としての小説と、帝国主義そのものは、おたがいに相手なくして考えることができないとういうことである[6]。

Oregon Institute of Technology, Klamath Falls, OG: Journal of the Shaw Historical Library pp.75-105

[4] Hosokawa, B. 1969. *Nisei: The Quiet Americans*. San Diego CA: Intentional Productions

[5] JACL はアメリカ国内最古で最大のアジア系アメリカ人人権団体である。この団体は日系移民（主に二世）の人権が阻害されてきたこと、そして日系移民（主に二世）がアメリカに貢献してきたことを主張してきた。
Hosokawa, B. 1982. *JACL in Quest of Justice*. NY: William Morrow and Company

[6] サイード,エドワード（1998）『文化と帝国主義 1』大橋洋一訳　みすず書房　p.151

サイードは、小説と社会空間との密接な関わりを提示している。サイードは、小説そのものが社会を生産するのではなく、小説自体に当時の社会空間（サイードにとってはイギリス・フランス・アメリカの帝国主義）の影響が色濃く残っていると指摘している。彼は、「小説が権力関係の不均衡を強調したり容認しているかどうかを確認するには、読者が個々の作品からその兆候を実際に拾い上げてみなければならない[7]」という立場を取っており、小説の中に含まれる権力関係の不均衡に注目している。つまり物語である小説には、帝国主義という権力構造がその物語内部に含まれている。こうした帝国主義や植民地主義に関わる小説や文化、歴史を批評するポストコロニアル研究は当時の社会背景と権力関係を詳細に論じているのである。20 世紀後半、特に第二次世界大戦が終わると、それまで植民地であった地域では、次々に独立を果たすようになった。こうした旧植民地に残るさまざまな課題を把握するために始まった文化研究が、ポストコロニアリズムである。ポストコロニアルの研究の旗手サイードが書いた『オリエンタリズム』によって、ポストコロニアリズム理論が確立された[8]。サイードは、ヨーロッパで書かれた小説に、アジア・アフリカなど植民地の国々がどのように描かれているか、旧植民地の国々の文学ではどのように旧宗主国が描かれているかを研究した[9]。また、旧植民地の文化がいかに抑圧されてきたかといった視点や、旧植民地と旧宗主国との関係性に着目し、西欧中心史観への疑問を投げかけ、旧植民地文化の再評価のみならず、西欧の文化を問い直す視座を提供した[10]。日本では、ヨーロッパとの関係、アジアの植民地との関係においても考察の対象になる。

ポストコロニアル研究においてサイードが指摘するように、権力関係の不均衡に対して抵抗する役割を担う小説が存在するのである。

---

[7] 同上　p.153

[8] サイード,エドワード（1986）『オリエンタリズム』今沢紀子訳、板垣雄三・杉田英明監修　平凡社

[9] 同上

[10] こうしたサイードの研究は後の代表的なポストコロニアル論者に影響を与えた。西洋世界の代表的論者としては、ガヤトリ・スピヴァク、 ホミ・バーバ、 ステュアート・ホールらがいる。また日本の代表的論者では姜尚中、本橋哲也、菊野夏野らが著名である。
姜尚中（2004）『オリエンタリズムの彼方へ―近代文化批判』岩波書店
菊野夏野（2010）『ポストコロニアリズムとジェンダー』青弓社
スピヴァク, G.C.（2011）『ナショナリズムと想像力』鈴木英明訳　青土社
ホミ,バーバ（2005）『文化の場所――ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美訳　法政大学出版局
本橋哲也（2002）『カルチュラル・スタディーズへの招待』大修館書店
Hall, S. 1997. *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, London: Sage

次項で登場する日系移民の小説は、いずれも第二次世界大戦中に実行された日系移民に対する強制収容とナショナル・アイデンティティーの強制に対して、抵抗し答えなかったもの、アイデンティティーの葛藤に陥ったもの、或いはノーと答えたものを表象している。つまり小説を通してサバルタンの歴史を再考することが可能である。

3-1-2　ジョン・オカダ *No-No Boy* が意味するもの

1957 年にオカダによって書かれたこの小説は、当初注目されることはほとんどなかった。オカダは 1923 年シアトルで日系二世として生まれた。ワシントンおよびコロンビア大学を卒業後、第二次世界大戦に従軍している。1970 年に心臓発作で死去しているが、この作品が彼にとって唯一の小説である。この本は 1979 年に中山容によって日本語訳されており、中山自身もこの作品に登場するイチローの複雑なアイデンティティーの葛藤を

> 『ノー・ノー・ボーイ』に描かれている世界、まさに同時代人であるヤマダ・イチローの苦悩は、私たちの問題でもある。ひとつの民族文化をこえて、なにか新しいアイデンティティがあるだろうと放浪する孤独な魂がある[11]。

と本書のあとがきで指摘している。主人公であるイチローは端的にいえば、日本とアメリカという二つのナショナル・アイデンティティーの狭間でアイデンティティーの葛藤に陥った人物である。イチローのアイデンティティーはアメリカ人でもなく日本人でもなかった。彼は誰なのか、何人なのかを追い求めてストーリーが展開される。彼の両親は日本からアメリカに移住した日系一世であった。日系一世はアメリカの市民権を持つことができなかった。彼/彼女らは敵性外国人としてアメリカ社会内部で差別された。そんな中、強く自分は日本人であるという自覚を持つ一世達も少なくなかった。その一人が、イチローの母であった。彼女は第二次世界大戦中に、全米の日系移民に対して行われた忠誠調査において、イチローがノーノーと答えたことに誇りを持っていた[12]。なぜな

---

[11] オカダ、前掲書　p.323

[12] 特に以下の二つの質問が、彼/彼女らの後の人生を大きく変えることとなった。以下の質問にノーノーと答えた人々は「ノー・ノーズ」あるは「ノーノーボーイ」と呼ばれるようになる。

らアメリカに忠誠を示さず、兵役にも就かなかった彼を、彼女は日系アメリカ人の誇りと思っていたからである。この小説の物語はイチローがノーノーと答えたことで強制収容所から刑務所に投獄され、戦争が終わり、出所したところからはじまる。イチローの母は、彼を、「あるべき日本人の姿」「理想的日本人」としてみており、彼女の友人に自慢げにイチローの話をしている。彼女は、戦争が終わっても、日本が負けたということを信じていない。「忠臣にして名誉ある日本国民である貴下へ」と書かれた手紙の内容を信じ、いつか日本軍がアメリカに「外地在留の皇国人民」を必ず迎えにくると信じて止まないのである。彼女の狂信ぶりは次の発言からもうかがえる。

> 「そう、わたしは死ぬわ、おまえが、自分からアメリカの軍隊に入るって決めたら、わたしは死ぬよ。おまえが、自分からアメリカの軍隊に入ろうなんて気を起すような考えをしだして、日本人でなくなりだしたら、わたしは死ぬさ。おまえに鉄砲の玉があたるよりずーっとさきにわたしは死ぬよ。でもおまえは入らないさ、わたしの息子だからね。」[13]

彼女はイチローを自分と同様に「善良な日本人」とみていた。なぜなら彼は兵役につかなかったからである。しかしイチローは違っていた。彼は日本人でもアメリカ人でも日系アメリカ人でもなかったのだ。

彼の父親は彼のよき理解者である。しかし日本の敗北を受け入れられず、頑なに日本人であることを主張する母親に気疲れし、アルコール中毒になってしまった肩身の狭い父である。そんな父をイチロー自身は特に嫌っていない。父とイチローはママが病気であることを知っていた。

イチローの弟は、母親に真っ向対立し、家族を捨てて自分はアメリカ人として兵役につくことを望んでいる。弟はイチローを軽蔑し、彼が戦争中に兵役に就かなかったこと、アメリカを裏切り、刑務所に送られたことを恥じている。学校では兄のせいで差別され、兄のせいで自分の人生がうまくいかないと信じているのである。

質問 27「あなたは命令があれば、いかなる地域であれ合衆国の軍隊として兵役につきますか?」
質問 28「あなたは合衆国に忠誠を誓い、国内外のいかなる攻撃に対しても合衆国への忠誠を誓い、また日本の天皇・外国の政府・組織への忠誠と服従を誓って否定しますか?」
[13] オカダ、前掲書　p.122

イチローは自暴自棄になったわけではなかった。父、母、弟のこうした異常性は、すべて自分のせいではないかと考えていた。イチローのナショナルなアイデンティティーは、日本人であることを主張する母親、アメリカ人になりたがる弟の狭間で完全に揺れていた。自分が誰であるのか、自分の居場所はどこにあるのかという問いがこの物語にいつもついてくるのである。

この作品は決して日系移民のみに感動を与えたのではない。この小説が再度出版される契機となったのは、アジア系アメリカ人らがこの小説の中に特別の価値を見出したからである。フランク・チンはこの小説のあとがきの中で自分たちを取り巻く社会が、自分たち（アジア系アメリカ人）をコントロールしていると指摘している。

> アジア系アメリカ人は自己憐憫と、「アジア系アメリカのアイデンティティ危機」という豪勢な理論のまわりをただうろうろしてきた。それは大量生産的布教活動でわれわれを改宗させようとして以来ずーっとつづいている。文明は宗教を基盤にしていて、一番いいのは、ひとつの神をあがめることだという考えが普及してからずーっとそうだ。キリスト経の宣教師はわれわれが同朋の女に接するのも否定し、キリスト教に改宗したものだけに婚姻を認めた。そうやってわれわれの人口までコントロールした。二十年代には、自分がだれなのかわからないようなアジア系アメリカ人世代がうまれた、いまだにそのままだ。ジョン・オカダは、この「アイデンティティ」の危機が、トータルには現実であり、同時にどうしようもなくインチキだ、ということを、いまでも多くのキ色人間(原文ママ)には強烈すぎて読むのがおそろしい、この本で示している[14]。

このように、チンはこの小説の重要性をアジア系アメリカ人が置かれている社会状況から説明している。チンは中国であれ、アメリカであれ、日本であれ、ナショナルな枠組みによって強制的に強いられる、アイデンティティーの付与を批判している。そしてこの本がそうしたナショナルなアイデンティティーを強制してきた「現実」を描き出している点を称賛している。また同時に、こうしたアイデンティティーの強制は、個人を規定し、個人を管理しようとする現実を「どうしようもなくインチキ」と表現することで、この作品が、マイノリティーへの強制的なアイデンティティーの強制に対して批判的な

[14] 同上　p.156

視座を提供しているとする。『ノー・ノー・ボーイ』は、日系移民のみならずマイノリティー集団やアイデンティティーの葛藤に陥った人々に連帯感と感動を与えるのである。

この作品において、イチローの決定不可能なアイデンティティーが最も端的に示されている部分がある。それは母親がいつか日本が必ず船で迎えに来てくれることを信じないイチローに対して、いずれイチローも私の言っていることを信じるようになると諭した時にイチローが返答した時の状況だ。

> ノー、とイチローは自分にいってきかせ、母がカーテンをわけて、店に入るのをじっと見送った。私があなたの息子だった時期もあった。あなたが母親の笑顔をみせては、光輝くはがねのやいばをもって主君を守った勇猛で残酷な武士たちの話とか、川で桃をみつけて家にもちかえると、おじいさんが真っ二つにわり、その中から元気な男の子がころがり出て、おじいさんといっしょにとてもよろこぶおばあさんの話なんかしてくれた、でも私にはおもいだせない時期もあった。私がその桃から生まれた少年で、あなたがそのおばあさんで、二人はニッポン人でニッポン人の感情とニッポン人の誇りとニッポン人の考え方をしていた。その頃は、たとえ私たちがアメリカに住んでいたにしてもニッポン人のやり方でなにもかもやり、感じ、ニッポン人でいることが平気だった[15]。

当初イチローはニッポン人が何であるのかに問いを持つことはなかった。当たり前のように母からニッポンについて聞かされ、「日本の昔話」、「日本の勇敢な武士」、そして「ニッポンの勇敢なこころ」について受け入れていたのかもしれない。しかし、刻々と状況が変化する。

> そしてそれから私は半分だけニッポン人の時代がきた。アメリカ生れで、アメリカで育ち、アメリカで教育をうけてしまえば、アメリカの街頭や家にいるアメリカ人の中に入って話したり、ののしったり、飲んだり、タバコを吸ったり、遊んだり、なぐりあったり、みたり聞いたりし、その一部になり、アメリカを愛せずにはいられなくなってるからだ。でもまだ愛し足りなかった[16]。

---

[15] オカダ、前掲書　p.37
[16] 同上　pp.37-38

イチローにアメリカ人として生きようとする意識が生まれたのは、やはり二世はアメリカの市民権を持っていて、その市民権を放棄することはできず、そしてアメリカ社会の中でアメリカ人としていきるよう仕向けられるような状況にあったからである。ごくごく普通の青年のように、英語で会話し、飲み、タバコを吸い、友人と絡むことが彼らの周囲の常識であったのである、しかしそれによってすべての日系二世はアメリカ人となったわけではなかった。

> というのもあなたはあいかわらず、半分私の母で、それゆえ私は半分ニッポン人だった。そして戦争になった。すると人びとは私にアメリカのために戦えと云った。私はあなたと戦うほどに強くはなかったし、あなたである自分の半分の方がアメリカである半分より大きくつくられていた[17]。

イチローは完全に混乱していた。母がニッポン人であるということ、そしてイチローは自分の半分はニッポン人であると意識させられていた。この半分だけニッポン人であるということは、血縁を意味していた。私がニッポン人なのではなく、母がニッポン人で私はその子供であるから、ニッポンの何かを半分は持っていなければならないとイチロー自身考えていた。イチローはアメリカ人として生きるように試みてもそうすることはできなかった。その結果、アメリカのために戦うという義務を彼は放棄した。

> 私の全部を見ることも感じることもできなかった。それで本当のことがわかった時にはすでに機を逸していた。あなたはもうそこにはいなかったが、私の半分は私自身で、残りの半分は法によるアメリカ人だった。というのは政府は利口で強いから私がアメリカのために戦えなかったわけを知りながら、私の出生権を奪いはしなかった。でも法の名においてのみアメリカ人というのでは十分じゃあない。半分だけアメリカ人で、もう半分が空っぽだったと気がついているだけでは十分じゃあない。私は、あなたの息子でもなく、ニッポン人でもなく、アメリカ人でもない[18]。

---

[17] 同上　p.38
[18] 同上　p.38

彼はニッポン人とアメリカ人との狭間でアイデンティティーの葛藤に陥った。半分だけニッポン人かも知れないと思ったイチローは、そのときは、「私の全部を見ることも感じることもできなかった」のである。しかし、その後、本当の自分に気付いた。自分の中に母がいないということに気付いたのである。イチローはもう、半分ニッポン人でもなかった。半分はイチロー自身で、もう半分は法によるアメリカ人であったのだ。しかし、この法による半分だけアメリカ人ということもイチロー自身ははっきりと認識していた。それは政府によって強制されたアメリカ人としてのアイデンティティーであった。それは所与のものではなく、そう仕向けられたものであった。イチローはそのことを十分に理解していた。そして、最終的に彼自身が誰であるのかに気付くのである。それは、母の息子でもない私であり、その私はニッポン人でもアメリカ人でもないということであった。それが何を意味しているのかは明確ではないが、逆説的にいえば、ナショナル・アイデンティティーに回収されない決定不可能なイチロー自身のアイデンティティーであったのである。この小説を読み深めていくことで、イチロー自身、あるいは当時のマイノリティーのアイデンティティーの葛藤を理解することができる。日米という二項対立で決して片づけることができない、アイデンティティーの不確実性をイチロー自身が表象しているのである。このことは、ナショナルな枠組みによってのみ人間が規定されないことを意味している。

3-1-3　テレサ・ファンケ *The No-No Boys* が意味するもの

ファンケはアメリカの市民に向けて第二次世界大戦で実際に生じた出来事を題材に小説を書いた人物である。ファンケによる小説 *The No-No Boys* は 2008 年に出版された。本書で登場する主人公はタイ・シモダという日系二世の少年である。そのモデルとなっている人物の一人が、筆者が 2009 年から 2014 年にかけてインタビューを行ってきた日系二世のマサオ・ヤマサキである。ヤマサキは現在、カリフォルニア州のサクラメントで生活している。この本は洋書であり、日本語での訳がない。よって引用箇所については全て筆者による日本語訳を付している。本書はヴィクトリー・ハウス・プレスとうカリフォルニアの出版社から出版されており、主に教員が生徒に歴史を教えるための教材として使用されている。またこの小説は戦争の経験を子供たちに伝える教材としても使用されている。本書の主人公のモデルであり、筆者がインタビューを行ってきた日系二

世のマサオ・ヤマサキもカリフォルニアを中心とした各所で、戦争体験の記憶を子供たちに語っており、ツールレイク・キャンプの経験を後世に残している人物でもある。本書はヤマサキ、ジョージ・ナカノ、メアリー・カワノの経験を元に小説化されており、三人の収容所に関わる体験を通して、タイ・シモダという主人公の物語が展開されている。著者であるファンケは本書の中で次のように述べている。

> ホーム・フロント・ヒーローズ・シリーズから二冊目の本としてザ・ノー・ノー・ボーイズを出版したことには理由があります。私はそれまで第二次世界大戦を正しい戦争と学んできました。しかし、この出来事（第二次世界大戦中に日系移民に対して強制収容が行われたこと）を知り、それがはっきりと誤りであったと理解したのです[19]。

ファンケがこの作品を執筆したのは、日系移民に対して行われた出来事をファンケ自身が学んだ際に正義の戦争とされていた第二次世界大戦に疑問を持ったからであった。正義の戦争とされた先の大戦を再考するために彼女はこの小説を執筆したのである。本書は「もしあなたが突然家を奪われ、そして知らない土地に連れて行かれたらどうしますか。」[20]というファンケのメモからスタートする。次に第二次世界大戦における日系移民の歴史を概観し、続けて 1943 年のツールレイク・キャンプという特殊な収容所の出来事について説明している。アメリカに忠誠を示さなかった人々が集められたツールレイク・キャンプでは様々な問題が生じていた。多くの日系移民が強制収容に対して憤りを感じており、収容所内で問題をおこしていたという事実であった。ツールレイク・キャンプには日本国を全面的に打ち出して抗議する集団を形成し監視員らに処罰されるグループや、監視員らに密告するイヌとよばれるグループなどもいた。しばしばこの収容所ではグループ間の対立が生じていた。しかしファンケはもし自分に同じことが生じたならば絶対に許せないし、同じことをしたという[21]。

彼女はヤマサキが「3 年半も私は自分の国によって収容所に入れられた…そして私は全く何も悪いことをしていなかった」ことを紹介している。ヤマサキが彼自身の経験を語る理由は、「このような不正が二度と行われないようにするため」であると彼女は述べて

---

[19] Funke, 前掲書 In Acknowledgement, About the Author
[20] 同上　p.5
[21] 同上　p.6

いる[22]。

主人公であるタイは、サクラメントの出身で両親は豆腐屋を営んでいた。暮らしはさほど豊かではなかったが、自分たちの家があり、ラジオがあり、遊び場と友人がたくさんいた。毎日野球をしたりして遊んでいたのだ。タイは他のアメリカ人と同じように遊び、自分が日本人であるなどと感じたことがなかった。しかし、1941 年 12 月、日本による真珠湾攻撃によって日米開戦がはじまり、そのわずか二か月後に日系移民に対して強制収容が行われたのである。収容所にいくまでにアメリカ政府は日系移民に対して数日の猶予しか与えなかった。そして大きな袋一つだけ渡し、それが彼/彼女らが収容所に持っていける唯一のものであった。ある人々は隣町の知り合いにものを売ることができたりした。しかしほとんどの人々はそんな余裕はなかった。タイの場合、豆腐を作るのに必要な機材等は全て置いて、仮収容所に向かったのである。

仮収容所からツールレイク・キャンプに収容され、列に並んだバラックで生活をするようになった。タイは大好きだった野球のカードも持ってこられず、サクラメントの日本人町を恋しく思うばかりであった。バラックには共同のトイレやシャワー室があった。収容所はあたり一面、列になったバラックだらけだった。皆ここを自分の家として考えようと思った。しかしそれは難しかったという。皆、外に出たら何をしようかそればかり考えていたのだ。タイの母はここを出たら日本風のキッチンで調理する夢をみていた。姉は早く外に出てボーイフレンドと行くダンスクラブの夢をみていた。兄のベンは外に出たらどのような車を買うかばかり考えていた。タイはスポーツの大好きな 14 歳であり、収容所の中では泥の上でのバスケットボールを嫌っていた。そして早くインドアのフルコートでプレイする希望を持っていた。

しかしそのような希望を持てる夢をみることができるのも束の間であった。タイの家族は慎ましく収容生活をしていたのだが、徐々に家族に亀裂ができはじめるのであった。ある日、タイが帰ってくると、兄のベンと父親とが猛烈な口論をしていた。兄が父の首に手をあて父の首を締めるような仕草をしたとき、父は右の手のひらを上にあげ、その手でそのままベンをたたいた。それはまるで父がベンに理解させようとするような仕草であった。彼らは、1943 年に政府が実施した忠誠心調査について口論をしていたのだ。

忠誠心調査について後に議論するが、この小説のシーンでは、ベンが忠誠心調査にノーと答えると両親に言ったのであった。父は彼に忠誠心調査にイエスと答えるように何

[22] 同上

度も説得した。なぜなら父がアメリカ人としてのアイデンティティーを持っているからではなかった。その理由は、父は子供たちに不自由のない生活を与えたかったからであった。ここでもし、成人であるベンが忠誠心調査にノー・ノーと答えたならば、彼は後の人生においても、「ジャップ」として差別されるにちがいないと考えていた。父はベンに戦略的にアメリカ人であるように振る舞えと言ったのである。タイやベンは日系二世であり、市民権をもっていた。国籍はアメリカであり、話す言葉は英語であったが、両親の日本語を理解し、そのルーツを理解していたのでありアメリカ人でありながら日本人でもあった。しかし次第にベンはアメリカ人であるよりも日本人であることを好んだのである。彼はもし自分がアメリカ人であるとすればなぜここに収容されているのか疑問に思っていた。そのようなやりとりが次の父とベンの会話から明らかになる。
父はベンに「ここは監獄ではない。」というと、

> まわりをみてみろよ。あの鉄柵が目に入らないのか。フェンスの上で監視する兵士が見えないのか。彼らは機関銃を向けて僕たちが逃げないように監視してるんだ。サクラメントに帰ることは許されているの。許可なしにここを出ていくことは許されているの。ならばここを何と呼べばいいんだ[23]。

とベンが答え、自分達が置かれている強制収容所という状況に対して怒りを感じていることを述べた。そしてこのような状況にさせたアメリカを許すことができなったのである。そして 1943 年に行われた忠誠心調査でアメリカに忠誠を示し、そのアメリカのために戦うなどベンには考えられなかったのである。その後、父は 18 歳になったベンに何度も忠誠心調査にイェス・イェスと答えるように促した。

しかし彼はその忠誠心調査にノー・ノーと答えたのである。そして家族は崩壊する危機に陥ったのである。というのもノー・ノーと答えた者は、ツールレイクに収容されるか、日本に送還されることになっていたからである。一方、ツールレイク収容所でイェス・イェスと答えた者は、別の収容所に移動させられた。つまりこのままでは、イェス・イェスと答えるタイの家族と、成人を迎えたベンとが離れ離れにされるという結果になる。そうこうしている中、ベンが監視員らに捕えられる。兄を救いたいベンであったが、トムという友人に自分自身の忠誠がまずどこにあるのかを考えろといわれる。彼は自分

[23] 同上　p.21

自身に次のように言った。

> 彼（トム）に僕の気持ちがわかるはずもない。彼にとってはどこに忠誠を示すは簡単なことだ。彼はイェス・イェスと答えた。それが答えだったんだ。彼は戦争にいくことにサインした。もし軍が彼に声をかければ彼はいくだろう。彼はこの国のために戦うだろう。この薄汚いキャンプに僕たちを閉じ込めているにも関わらず、彼はこの国のために戦争にいく。彼は言っていた。そうすることが白人たちに自分たちの忠誠を示す唯一の方法であると[24]。

トムはタイにアメリカに忠誠を示すよう言った。しかしタイはそのことに違和感を感じていたのである。それは日本に忠誠を示したかったからではなかった。

> トムにとっては何の問題でもない。答えは決まっている。でもベンやそして今の僕にとってはまったくクリアになっていない。僕は父に反抗したくない。しかし日本のスタイルでは兄に反抗することも問題なんだ。トムは僕に自分のアイデンティティーはどこにあるのかはっきりしろと言った。でもこんな状況でどうやってはっきりさせればいいんだ。トムもベンも頑固な父も正しい。でも同時に彼らは間違っている[25]。

日本に忠誠を示すというベン、実際にアメリカに忠誠を示したトム、そして頑固な父に挟まれて、タイは自分自身のナショナルなアイデンティティーの行方を模索するがみつけることはできなかった。タイは、トムやベンや父がナショナルなアイデンティティーを明確に打ち出さなければならない状況下において、彼らの主張を認めている。アメリカ人でありながら強制収容所に放り込まれたベンの怒りと、その反動として出てきた日本人というアイデンティティーを選択しようとしたこと。トムのようにアメリカ人として認められたい、そのためには忠誠心調査でイェス・イェスと答え、自分たちが日系アメリカ人でありアメリカ人の一員であるという選択をしたこと。父のように自分たちはアメリカ人ではないが、今後自分たちがアメリカ社会の中で生き抜いていくためにはアメリカ人であることを選択しようとした。タイは彼らの主張をすべて受け入れた。そし

---

[24] 同上　p.102
[25] 同上　pp.102-103

て彼らの自分は何人であるかという選択を理解しているのである。しかし「でも同時に彼らは間違っている」というタイの言葉からも理解できるように、タイは彼らがさまざまな理由によりナショナルなアイデンティティーを選択することを間違いだと言っている。如何なる理由であれ、そうしたナショナル・アイデンティティーの選択によって、タイの家族やコミュニティーが分断されようとしているからである。トムはいったい君は何人なんだという問いについて、タイ自身はいずれのナショナルなアイデンティティーを選択することはできなかったのである。そしてナショナルなアイデンティティーの決定によって日系移民の社会に内部で混乱が生じていることを彼ははっきりと理解していたのである。

タイが柔道の大会に参加して、友人のシェグに勝つことでこの物語は終了する。トムは泣く家族らの前で、そしてタイや兄のベン、タイの両親らに見送られて戦争にいく。おそらく戦争では戦地の最前線に送られたことだろう。タイもおそらく二度と彼には会えないだろうという。ベンが家族の元に戻ってきたことを両親は喜んだ。そしてタイが出場する柔道の決勝戦で家族全員でタイを応援し、見事優勝する。ここで物語は終わるのだが、最後に彼は嵐の日におきた父との出来事を回顧する。

> 僕は「このクソキャンプが大っ嫌いだ」と叫んだ。パパは「我慢、タイチロウ。我慢だ、いつの日かこの戦争は終わるんだから。」と言った。
> パパはもちろん正しい。いつか戦争は終わる。そしてツールレイクはいい思い出になる。この柔道の大会のことやバスケットボールを友人としたいい思い出だけが残る。そしてある日、ママが山で僕に言ったように「あなたが思うほど、このキャンプは悪くない。」ということもそうだ。苦難の中、みんな一生懸命生きていることを言ってくれた。でも僕はこの苦しみをどう耐え抜けばよいのだろうか。「シカタガナイ」[26]。

物語の最後はこれで終わっている。タイとタイの両親らが、その後、ベンと共に生活したかどうかは定かではない。この物語はやはり兄のベンがノー・ノーと答え、タイの家族がイェス・イェスと答えたことで一つの家族が分裂し、タイ自身がそのナショナルなアイデンティティーを規定しようとする忠誠心調査やナショナル・アイデンティティーの狭間で苦悩してきたことが題材となっている。小説にはその後、「ツールレイクの本当

[26] 同上　p.142

の子供たちに会う」というチャプターがある。この本はフィクションであると述べたが、そのチャプターからこの本の題材となった人物の経験と物語とが忠実に照らし合されていることがわかる。もはやフィクションや物語としてこの小説を片付けることは不可能である。小説の中に決定不可能なアイデンティティーの持ち主となった人々が映し出されているのである。そのチャプターには以下の内容が含まれている。

ジョージ・ナカノは著者（ファンケ）の体育の先生であった。ザ・ノー・ノー・ボーイズを書こうと思った時、まずファンケは彼をよんでインタビューをした。ナカノの家族はノー・ノー・ボーイズではなかった。彼はツールレイク・キャンプに収容されていなかった。別のキャンプであったが、ナカノの姉はキャンプの中で病気で亡くなっていたことを知った。彼女はそのことを、小説の中で登場するタイの従妹に照らして描写している。タイの従妹も小説の中では、ツールレイク・キャンプで収容されている間に病気で亡くなるのである。このようにこの小説自体はフィクションではあるが現実の体験を元にキャンプまでの経緯、キャンプ中にあった出来事を描写している。

マサオ・ヤマサキは最も主人公のタイに類似していた人物である。おそらくタイのアイデンティティーの葛藤やタイの性格までもが１４歳のヤマサキに類似していると考えられる。まず彼はサクラメント出身で、カリフォルニア州サクラメントにはジャパン・タウンがあった。ジャパン・タウンとは日本町でその日本町には多くの日系移民が集まっていた。生活するために必要なほとんどすべてのものを賄えるような町を形成していた。またこうした日本町は、現地の人々からの差別や排日から逃れる役割もあった。現在もその町並の少しは残っているが、ヤマサキの両親はタイの父親と同じように豆腐屋を営んでいた。そして彼はスポーツの大好きな少年であった。彼の両親はツールレイク収容所に収容された。そして彼の家族は一緒に生活するために 1943 年に行われた忠誠心調査においてノー・ノーと答えたのであった。ヤマサキ家族らは実際に、ノー・ノー・ボーイズとなったのである。そしてツールレイクに長い間、収容されることになる。この小説の中でツールレイク・キャンプでの経験が忠実に描かれているのもおそらく彼の証言によるものではないかと推測される。これらのことから、この小説はヤマサキの経験を元に作成されていたことがわかる。

また、この小説の表紙にある少年もヤマサキをモデルとして描かれている。こうしたことからこの小説はフィクションではあるが、実際に第二次世界大戦において強制収容された日系移民のオーラル・ヒストリーに従って描かれていることが理解される。

この小説は明確なヴィジョンとして日系移民の戦時中の苦悩を描いている。そしてタイという主人公をとおして、個人のアイデンティティーがナショナル・アイデンティティーに回収されることを自明の前提としてきた従来の歴史を否定している。また、国民性によって地域やコミュニティーが分裂する状況を説明し、物語全体を通してナショナル・アイデンティティーとは何なのかについて問いを投げかけている。筆者はなぜ、ベンとタイらの家族がその後どうなったのかを描かなかったのか。物語の途中でベンとタイらの家族との分裂がすでに生じていた。しかしその後、彼らがどうなったのかについては描いていないのである。それよりも、ベンと父との間に挟まれたタイのアイデンティティーの揺れに着目して物語が進められているのである。このことは著者がタイをとおして、読者にナショナル・アイデンティティーとは何なのか、本当に自分が日本人かアメリカ人かを決定することによって幸せになるのかといった問いを投げかけているようである。この小説自体が戦争に反対する内容のものであるかどうかは定かではないが、ナショナリティーに属さない人々の複雑な人生を描いている小説であり、それは決定不可能な日系移民のアイデンティティーであった。

3-2　日系移民のサバルタン史

イチローやタイらの経験は決して特殊なものではない。当時、強制収容所に収容された日系移民の状況を理解すれば、イチローやタイらの経験は誰に生じてもおかしくなかった。このような状況においては、日系移民が何人であるかは忠誠心調査によってのみ、決定されるはずがない。タカキのように、「善良なアメリカ人」として表象される日系移民とは異なる経験がこの小説に描かれている。またアイデンティティーの葛藤という特異な経験がタカキの学術的対象として語られることもなかったのである。フクヤマならばこうしたアイデンティティーは弁証法的にナショナル・アイデンティティーにいずれ回収されると指摘するに違いない。しかし現にアメリカ政府やアメリカの多文化主義言説は、国家的な支配によって善き国民を形成するためにマイノリティーらに忠誠の行方を決定させ、国民であるものと国民でないものとを区別する政策を行った。それにより多くの日系移民は家族やコミュニティーの分裂を招いたのである。これらの経験が無視され続けている要因は上述した知識人らによる国家を補強するような研究手法そのものにある。つまりアイデンティティーの歴史と個々の経験の乖離は、知識人らによる表象

の問題として考察することが可能である。

清水耕介はこうした国家による強制的なアイデンティティーを批判したうえで、グローバル化における多様なアイデンティティーの分析を行っている。彼はアイデンティティーを国家より小さな領域を単位としたアイデンティティー、国家を拠り所としたアイデンティティー、そして世界市民というアイデンティティーに分類している[27]。またこうしたアイデンティティーは重層的であり、労働者としてのアイデンティティーの形成や、女性というアイデンティティーの形成、或いはトランス・ジェンダーなアイデンティティーの形成、或いは地域的なアイデンティティーが存在すると指摘する。特にトランス・ジェンダーや地域のアイデンティティーは三つのアイデンティティー構造における国家より小さな領域を単位としたアイデンティティーとして理解される。イチローのケースでいえば、国家を拠り所としたアイデンティティーの失敗により、国家に属さない孤立したアイデンティティーを形成していった。つまり清水が指摘するように決してナショナルなアイデンティティーによって決定付けられないアイデンティティーが存在する。

こうした国家に属さない歴史の研究を包括的に行っているのが、ポストコロニアル研究者のスピヴァクやパーンデー、グハらのサバルタン研究である[28]。また国際関係学の論者においては、ロバート・コックスや スティーブン・ギルといったネオ・グラムシアンと呼ばれる学派である[29]。彼/彼女らはサバルタンという用語を積極的に使いながら非国家の歴史を構築している。

サバルタンという用語が世界的に注目を集めたのは、スピヴァクの主著『サバルタンは語ることができるか』であった[30]。これによって国際政治学、国際政治経済学、国際関係学、ポストコロニアル研究等の学際的諸分野において、サバルタン研究が注目されるようになった。スピヴァクはこの主著の中で、インドにおける女性の声なき声が無視され続けてきた状況に注目する。インドの声なき彼女らがおかれている社会的状況を、ポストコロニアリズムとフェミニズムから分析したのである[31]。彼女はこの主著の中でも、インドの抑圧された女性を指す言葉としてサバルタンを使用している。本稿においても

---

[27] 清水耕介（2003）『テキスト国際政治経済学』ミネルヴァ書房 p.234
[28] グハ、前掲書
[29] Cox, R. 1996. *Approaches to World Order.* Cambridge: Cambridge University Press
Gill, S., & Law, D. 1988. *The Global Political Economy: Perspectives, Problems, and Policies*. Baltimore: Johns Hopkins University Press
[30] スピヴァク, G.C.（1988）『サバルタンは語ることができるか』上村忠男訳　みすず書房
[31] 同上

サバルタン論を援用するが、まずサバルタンの定義から論稿を進めていく。

3-2-1　サバルタンとは何か

最も初期にこの語を使用したのはイタリアの思想家、グラムシであった[32]。サバルタン（subaltern）という用語は「下位の（of inferior rank)」を意味する[33]。本章ではサバルタンの用語を、特定的に二つを指す言葉として使用したい。まず一つ目は、国際社会において、階級・年齢・職業・性別に関係なく、日系移民を含む民衆がその社会において従属している状況を指す一般的な言葉として用いる場合である。この言葉は、アイデンティティーの葛藤に陥った人々に押し付けられるアイデンティティーの支配、あるいはマイノリティーの人々を同化させようとする状況、知的生産活動における特定の主体化（モデル化）といった状況を指す。二つ目は、この用語をいかなる階級・年齢・職業・性別であれ、アメリカ社会において従属している状況にある人々を指す言葉として用いる。具体的には、日系アメリカ人の中でも、同化されなかった人々、あるいはアイデンティティーの葛藤に陥った人々、日系移民史の中で主体化されることなく、歴史的に排除されてきた人々を含む。

次に本稿において日系移民の歴史をサバルタン論から研究する理由を明らかにする。多文化主義の中で語られてきた日系アメリカ人性を批判するために、ここでは具体的にグラムシのサバルタン論と日系移民の関係について論じる理由を三つ挙げる。グラムシのサバルタン論を援用する理由の一つ目は、サバルタン論は社会的被抑圧者に焦点が当てられている点である。社会的被抑圧者はこれまでの歴史研究において十分に焦点が当てられてこなかった[34]。特に国家の歴史的語りにおいては全く注目されることがなかった。1 章ではネーション･ステートと多文化主義言説において語られる日系移民の歴史に焦点を当てたが、こうした歴史的考察は従順な「日系アメリカ人」として一方的に語られ、多様な日系移民のアイデンティティーやコミュニティーといった視点は排除されてきた。グラムシはこうした、歴史において主体化されない階級に焦点を当ててサバルタン論を

---

[34] サバルタン階級に焦点を当てた分析として代表されるのはグハの「サバルタンの歴史」である。本書はサバルタンの歴史的方法論とサバルタンが無視されて続けてきた状況を明確に分析している。詳しくはグハ,ラナジット（1998)『サバルタンの歴史』竹中千春訳　岩波書店を参照されたい。

展開している[35]。

二つ目の理由として、グラムシのサバルタン概念の考察は、社会的被抑圧者の声を歴史研究においていかに反映させ得るのかという点を明らかにしている。グラムシはサバルタン階級の声を取り戻すためには、断片化された声を集める必要があり、このような作業を通して社会的に「下位の」人々の歴史に注目することが可能となるという[36]。彼は、サバルタンを主体化させる方法論を展開しており、決して統一的ではないにせよ、断片的な歴史の証言を収集する必要性を指摘している。これは日系移民の歴史の中でもいままで十分に議論されてこなかったツールレイク・キャンプに注目することと関係する。

三つ目の理由は、サバルタン論はサバルタン階級の歴史的統一性を目指しているのではなく、支配者と被支配者、抑圧者と被抑圧者との関係や関連を詳細に分析し、それらの二項対立に潜むヘゲモニー概念に注目する点である。サバルタンの主体化と同様に重要となるのは、サバルタンの主体化がなぜなされなかったかという点の検証である。「主体の不在」の要因として権力の問題が考えられるが、グラムシはヘゲモニー（権力）に注目している。グラムシにとってヘゲモニーとは支配集団による知的、道徳的、政治的な指導権を意味する[37]。グラムシのヘゲモニー論の要点は、ここで知的、道徳的、政治的な「指導権」が暴力的な強制からのみ生じるのではなく、従属集団の合意を巧みにとりつけることを通じて生じるという点である[38]。この点を踏まえて斉藤日出治はヘゲモニーとは「支配階級が被支配階級から支配への積極的な合意を調達し、それによって社会秩序の再生産を確保する社会的な力能のこと」と指摘[39]する。グラムシは支配階級が被支配階級の合意をとりつけるヘゲモニーの概念を援用することによって、サバルタンの理論を補強しているのである。

サバルタン論のヘゲモニー概念を説明するモデルが、グラムシの論文「南部問題にか

---

35 グラムシ（1999）、前掲書　p.111-115

36 グラムシ，アントニオ（2011）『歴史の周辺にて「サバルタンノート」注解（グラムシ『獄中ノート』著作集Ⅶ）』松田博編訳　明石書店　p.51

37 グラムシは、「イタリアにおける国民と近代国家の形成と発展のなかにあっての政治的指導の問題」の中で、政治的指導におけるイタリアの国民と近代国家形成過程を分析した。その中で政治的指導者や知識人が従属集団の合意を知的・道徳的・政治的に得ることで指導権を掌握する過程を考察している。グラムシはこの論文の中で政治的指導者らが行った文化的な合意をヘゲモニーの装置と呼んでいる。
グラムシ（1999）「イタリアにおける国民と近代国家の形成と発展のなかにあっての政治的指導の問題」、前掲書　pp.63-92

38 同上

39 斉藤日出治（2010）『グローバル化を超える市民社会：社会的個人とヘゲモニー』新泉社　pp.191-192

んするいくつかの主題について」である[40]。この論文は、グラムシが書いた唯一まとまった政治的分析であり文化的分析である。このなかでとりあげられるのは、グラムシの同志たちがイタリア南部について考え、イタリア南部に向けて行動をおこし、イタリア南部について研究するとき逢着するであろう地理的難題であり、南部の社会崩壊は、その研究のほとんどが不可能なものになっているが、逆説的に、だからこそ北部の理解のために重要な鍵をにぎっている[41]。グラムシの分析はイタリアの政治に関わる戦術性だけでなく、それを超えたものがある。それはグラムシが社会生活の地域的・空間的・地理的基盤から権力の問題を明らかにしたからである[42]。グラムシはイタリア南部の出身であり、南部は北部に対して文化的にも経済的にも劣位に置かれていた。特に南部は貧困な地域でイタリアの華やかな文化イメージはそのほとんどが北部で形成されてきた。グラムシはなぜ南部が常に北部に対して劣位な社会状況に置かれているのかをこの論文で明らかにしている。

グラムシは社会史や現実のありようは、地理的観点から把握されるものであって、これはグラムシが議論を展開するときの用語をみればすぐに理解できる。その中心的な用語は「領域」「ブロック」「地版」が支配的である[43]。グラムシはイタリアにおける北部と南部との分裂に注目し、停滞にあえぐ国民的労働運動をめぐって何をなすべきかという課題にとっての根本問題が北部と南部の関係にあることを執拗に言及している[44]。また南部は大多数の未分化な農民大衆に対して、かたや北部は地主や最高度の文化事業といった、両者のいちじるしいコントラストを記述している。そしてイタリアの著名な歴史家クローチェに注目する。クローチェは南部特有の知識人であり、クローチェはイタリア南部の出身であるにも関わらず、みずからの崩壊しつつある南部の環境には知らぬ存ぜぬを決めこんで、ヨーロッパやプラトンにつらなることのほうを選ぶ。グラムシは南部知識人が北部の文化的優位性に慣れ親しむことで、南部が社会的にも経済的にも未だ下位にあることを記述した[45]。

---

[40] なおグラムシの論文の邦訳タイトルは訳者によって若干異なっている。「南部問題についての覚え書」が付されているものにグラムシ,アントニオ（1999)『知識人と権力　歴史的―地政学的考察』上村忠男編訳みすず書房　pp.1-45 がある。
[41] サイードは『文化と帝国主義』の中でグラムシの南部問題に関する論文の重要性を示唆している。サイード　前掲書　p.107-108
[42] グラムシ（1999)、前掲書
[43] グラムシ（2008)、前掲書
[44] グラムシ（1999)、前掲書　pp.1-45
[45] 同上　p.29-30

そしてグラムシはこの論文でピエロ・ゴベッティに注目する。彼はイタリアの活動家であり、知識人でもあった。ゴベッティは北部プロレタリアートと南部農民との連携をさせることで、文化の組織化によって北部と南部とを連帯させたのである。そして南部問題を、そこに北部プロレタリアートを導入することによって、伝統的な地盤（つまり南部をイタリアの未開とする伝統的な観点）とは異なるべつの地盤としてうつしかえたのである[46]。つまりサバルタン論は、北部と南部という明確な地理的観点と二項対立(北部による南部の支配)における政治経済的、そして文化的な権力概念を分析する明瞭な方法論を示している。

このことは日系移民研究において重要な位置を占める。というのは、日系移民はアメリカの統合という機能を果たしてきた多文化主義の中で、中心化されたマジョリティーという立場から常に承認されてきたからである。

次にアメリカ社会内部においてマジョリティー側が日系移民を選定し規定することで「日系アメリカ人」として彼/彼女らを語ってきたことをサバルタン論から明らかにする。

3-2-2　グラムシの権力概念と歴史

サバルタンはグラムシによって執筆された論稿「従属的諸階級の歴史のために」で使用された言葉である。この論稿のタイトルは storia dei gruppi sociali subalterni　とされており、グラムシの造語であるサバルタンがこれにおいて初めて使用された[47]。サバルタンは日本語では「従属的社会集団」[48]であり、社会的被抑圧者や歴史の表舞台に登場することがなかった人々を意味している。

さらに彼の論稿をみていくと、サバルタンの歴史を研究する際の方法が明確に示されている。グラムシはまず冒頭で、「従属的社会集団の歴史は、必然的に、断片化された（disgregato)、そしてエピソード的（episodico）なものであらざるをえない。[49]」と指摘している。つまり、サバルタンの歴史とは、統合された歴史的痕跡や、客観的で必然的な歴史的痕跡によって明らかにされる歴史とはなりえず、常に普遍的歴史に対して統

---

46 グラムシ,アントニオ（1978)「南部問題にかんするいくつかの主題」山崎功監訳『グラムシ選集』第二巻　合同出版　p.161
47 グラムシ, アントニオ（1999)『知識人と権力―歴史的・地政学的考察』上村忠男編訳　みすず書房　p.110
48 同上
49 同上

一性がなく、物語的な要素が多く存在するということである。また、サバルタンが歴史の中で展開する活動についてもグラムシは言及している。

> これらの社会集団が歴史のなかで展開する活動にも、たとえ暫定的な水準においてのものであるにしても、統合へと向かおうとする傾向が存在していることは疑いないが、この傾向は支配的社会集団の発動するイニシアティブによってたえず粉砕される[50]。

サバルタンの活動は常に支配的社会集団によって排除されており、彼/彼女らによる反乱や蜂起ですら、常に支配的社会集団の影響を受けて失敗に終わっているというのだ。しかし、だからこそサバルタンの活動に注目する意味があるとグラムシはいう。サバルタンの側から発揮される自律的なイニシアティブの痕跡は、そのひとつひとつが歴史家にとって計り知れない価値をあたえるのである[51]。そしてそのようなサバルタンの歴史はモノグラムというかたちをとってしか書ききれないということ、そして収集困難は膨大な量の資料を要求することをグラムシは強調している[52]。

ここで一つの問いが生じる。そもそもグラムシが指摘する歴史的統一性とは何を意味するのかという問題である。端的に説明するとグラムシにとっての歴史的統一性とは国家そのものであった[53]。国家というかたちをとって統一性を持った歴史が顕在化され、支配的社会集団や指導的階級を主体とする歴史は、最終的に国家の歴史として形成されるのであった。さらに、なぜ歴史的な統一性は国家によって回収されなければならないのかという問いも生じる。この点について更に詳しく彼の論稿に沿って、考察を加えたい。

グラムシが獄中において執筆した論稿の中で頻繁に「有機的」という言葉が登場する。「有機的」とはある社会集団において自律的に達成される価値や常識であり、国家に係る政治家や官僚によって発揮されるイデオロギーというよりも、ある社会に住む人々の統一的で全体的な価値や倫理を念頭においた言葉である。グラムシは国家ないし、政治的社会と、ある特定の社会において形成される共通の価値や倫理、道徳である「有機的」生成物とが一致することで、歴史的統一性が達成されると考えた[54]。よって、指導的集団

---

50 同上　p.111
51 同上
52 同上
53 同上
54 同上

の価値や倫理、道徳と大衆のそれとが一致することでより強固な歴史的統一性が生産され、国家の歴史を形成するのである。一方、「有機的」価値や倫理を持たないサバルタンの活動は国家に転化しえないかぎりにおいて、統一性を欠いていて、統一的な存在とはなりえない。よって、サバルタンの歴史とは、明確には国民史とはかけ離れた歴史、或いは支配的諸集団によって常に抑圧された歴史の痕跡しか残されないのである。端的にいえば、国民史を研究する知識人や国民史を学ぶ人々にとって、サバルタンの歴史は断片化されており、国民史にとって、サバルタンの歴史は不連続な機能をなしている。

グラムシはここで、サバルタン研究における二つの重要な効果を紹介している。

> 支配的な政治的形成体へのかれらの能動的または受動的な参入。これらの政治的形成体の網領に影響をおよぼし、自らの要求を受け入れさせようとする試みと、そのような試みが解体と確信あるいはまた新たな形成の過程を惹起するうえでもつ効果[55]。

これは被抑圧者が抑圧者に対して経済的・政治的・文化的に支配されている状況下において、被抑圧者が抑圧者による政治的形成体を受け入れたり、それに順応するように機能したりすることである。また被抑圧者が抑圧者の構造を受け入れることは、同時に自らの要求を改善させるよう働きかけることでもある。日系移民にとって特にツールレイク・キャンプに収容された人々の中で、日本の国家へ忠誠を示す同朋団に参加したり、或いはアメリカへの忠誠を示し兵役に志願するといった支配的な国家体制への参入を試みた集団がいた。彼/彼女らは自らの地位を向上させるため、あるいは権利を主張するため、積極的にアメリカ人であることを主張したり、彼らに従順であるよう行動したのである。またこれらの集団によって、アメリカへの忠誠を示さない人々が収容されたツールレイク・キャンプにおいても、対立するグループが形成され、更なる困難を招いた。日本に忠誠を示す社会集団は、アメリカへ忠誠を示した集団、或いはアメリカ政府に対して自らの権利主張を行った集団にとって、「不忠誠」として扱われた[56]。そして不忠誠の者は従順なグループにとって決してよい存在ではなく、日系移民史における他者とし

---

[55] 同上　p.112

[56] Collins, D.E. 1985. *Native American Aliens: Disloyal and the Renunciation of Citizenship by Japanese Americans During World War II.* Westport, Conn.: Greenwood Press

て葬り去られたのである。

アメリカで最も大きな日系組織が、JACL(Japanese American Citizens League)である。JACL は戦後、日系移民の強制収容を受けて、すべての日系アメリカ人がアメリカへの忠誠を示していることを強調し、連邦政府との合意を進めてきた[57]。現在においても JACL は主要な日系組織であり、政界にも影響を与え得る程の政治的な力を保持している[58]。

支配的社会集団である連邦政府は戦時中、日系移民を統制するために、彼/彼女らに忠誠心調査を行い、従わない人々を監禁し管理し、更に戦後、連邦政府は日系移民を統制するために JACL との交渉を進めてきた[59]。JACL はその際、日系移民のアメリカへの忠誠を強調することで、アメリカ政府と JACL との双方で戦後補償の合意を得たのである[60]。このことはグラムシが挙げる同意と統制に深く関係している。マイノリティーである日系移民は常にアメリカ政府によって同意と統制を維持させられており、彼/彼女らの同意と統制を進めていくために、JACL は連邦政府との合意を進めてきたのである。つまり、日系サバルタンは、連邦政府と JACL という二つの支配的社会集団によって支配されてきた。

支配的社会集団である連邦政府は忠誠心調査に敵対する日系移民を収容する正当性を担保するために、ツールレイクの収容者を必要とした。そして戦後、強制収容に関する戦後補償において連邦政府は、政府に従順な態度をとった JACL を取り込むことによって、「一世も二世もよきアメリカ社会のよき成員として貢献してきたこと」を強調[61]したのである。JACL は戦後、日系移民を代表する最大の組織となった。グラムシが指摘するように、支配的社会集団である JACL はサバルタン階級に同意と統制を行ったのである。そして同意と統制に抵抗する勢力は、危険因子である以上、歴史上排除されてきたのである。

---

[57] Hosokawa, B. 1982. JACL in Quest of Justice: The History of the Japanese American Citizens League. NY: William Morrow and Company p.156

[58] JACL は 1929 年、アジア系アメリカ人の権利を守るために設立された組織であり、マイク・ホンダやノーマン・ミネタといった著名な政治家を支援してきた。

[59] Azuma, E. 2005. *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America*.New York: Oxford University Press

[60] Hosokawa、前掲書

[61] 森茂岳雄・中山京子（1998)「多文化社会アメリカにおける国民統合と日系人学習 ： 日系人学習の授業案の分析」『東京学芸大学紀要　第三部門　社会科学』49　pp.157-172 p.167

従属的社会集団の側から発揮される自律的なイニシアティブの痕跡は、そのひとつひとつが全体史をめざす歴史家（storico integrale）にとっては計り知れない価値をもっているというべきであろう。そしてこのことからは、そのような［従属的社会集団の］歴史はモノグラフ（monografia）のかたちをとってしか書きえないということ、また、そうしたモノグラフはそのひとつひとつがしばしば収集困難な膨大な量の資料を要求するということが帰結する[62]。

サバルタン階級の歴史は断片的であり、統合され得ない史実としてその痕跡を残しており、第 2 章で明らかにしたアメリカ多文化主義言説に登場する日系民史とは異なる歴史的視座を提供する。マイノリティーのひとつひとつの痕跡が全体史に与える影響は計り知れない。ツールレイク・キャンプの歴史はこのサバルタンの断片化された歴史である。筆者はこのことを念頭におきつつ、本章においてサバルタンとしての日系移民の歴史に注目する。

ツールレイクの歴史は、アメリカ日系移民史の中に位置づけられなければならない。なぜなら、ツールレイクはアメリカ社会において実行された強制収容と深く関わっているからである。

第 3 節ではまず、現在まで十全に分析されている日系移民の歩みを考察する。その中で従来の歴史叙述において、強制収容所に関わる史実を考察する。第 4 節では日系移民の歩みの中でまだ語られていないツールレイク・キャンプの歴史に注目する。ツールレイク・キャンプをサバルタン論から考察することで、今まで明らかにされてこなかった日系移民の史実に注目する。

3-3　現在までの日系移民の歩み

多文化主義の中で語られた日系移民のケースは、アメリカ内部における「強制収容」によるアイデンティティーの崩壊と、戦後の補償運動の勝利による日系アメリカ人としてのアイデンティティーの復活を強調するものであった。多文化教育の一環として日系移民を扱ったこれらの教材は、日系移民に関する複雑で重層的な文化の性質や差異、そしてアイデンティティーの問題を無視している。

[62] グラムシ（1999）、前掲書　p.112

多文化教育においては、移住初期から強制収容までの彼/彼女らのアイデンティティーに注目しなかったのである。この問題を明らかにするためには、日系移民に関する現在までの研究を再度考察していかなければならない。そして、そこから浮かび上がる周縁化された存在と社会に対する抵抗の運動をみていく必要がある。こうした一連の作業によってのみ日系移民を一つの規範として扱う多文化主義に対する批判的な視座が可能となるといえるであろう。

3-3-1　日系移民の歩み

日系移民の研究に関する資料は多数存在するものの、資料として残っていない個々の体験が多数存在する。現在までの日系移民に関する研究において坂口満宏やハルミ・ベフはアメリカの日系移民に関する多くの資料を扱いながら、彼/彼女らの歩みと現在の状況について社会学的アプローチを試みている[63]。これらの研究の多くは、外務省資料として残っている二次資料を中心に調査され、それぞれのフィールドと外務省資料との比較によって論じられている[64]。以下がこれらの研究における日系移民史の年表である。

---

[63] ベフ,ハルミ(2001)『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院
坂口満宏(2001)『日本人アメリカ移民史』不二出版

[64] 外務省領事移住部『わが国民の海外発展－移住百年の歩み』(カリフォルニア大学バークレー校図書館より現在相愛大学図書館収蔵資料)

アメリカ日系移民史の年表（概略）

1894	明治政府、移民保護法を制定し、移民取扱業務を民間に委託
1907	アメリカ西海岸で排日運動が強まる
1909	ハワイ・オアフ島で、不当労働に対する日系移民の大ストライキ
1913	カ州、外国人土地所有禁止法案が制定
1920	ハワイ・オアフ島で再び大ストライキ カ州で「帰化不能外国人」の借地権を禁止する法案が制定
1922	合衆国最高裁、日本人を「帰化不能外国人」と規定 ケーブル法制定、これにより「帰化不能外国人」と結婚した妻も市民権喪失
1929	日系二世の組織、全米日系市民協会（ＪＡＣＬ）組織される
1941	ハワイ真珠湾攻撃、開戦と同時に日系の代表者をＦＢＩが連行（逮捕者多数）
1942	2月ルーズベルト大統領、日系を強制収容する命令を発令、強制的に駆り集められ、カ州、アイダホ、ワイオミング、ユタ、コロラド、アリゾナ、アーカンソーの計10ヶ所に11000人以上を収容。
1943	ハワイ二世による第100大隊編成、442部隊も編成。ヨーロッパで活動
1945	日本敗戦、日系移民強制収容から帰還
1982	デトロイトでビンセント・チンが日本人と間違われ殺害される
1990	強制収容に対する補償運動の勝利
2001	ワシントンで日系アメリカ人記念碑が設立 テロ以後の国内でのアラブ系に対する暴行事件に対し、全米市民協会による抗議の声明を発表

（外務省資料、坂口満宏作成年表、移民史Ⅲ[65]　筆者抜粋、下線は筆者による）

年表による移民史の概要は以下のようなものである。

1866年に日本では鎖国令が解かれ、これによって貿易商人、留学生などの海外渡航が

[65] 坂口、前掲書。ベフ、前掲書。外務省領事移住部、前掲書。今野敏彦・藤崎康夫（1986）『移民史Ⅲ』新泉社

許可された。1868年にはハワイへの出稼ぎ移民153名がホノルルに到着した[66]。その後、日本政府はハワイ王国と移民協定を結んで、1885 年「官約移民」（政府と政府の契約によって行われた移民）を送った。第一回目の官約移民の数は 944 人であるとされる[67]。この制度によって後に多くの日本移民（一世）がハワイへそしてハワイからアメリカ本土へと移動していったのである。1884 年から続いた「官約移民」は 1900 年に日本政府によって禁止される[68]。アメリカ政府は多くの移民がハワイやカナダからアメリカに移り住んだことから、1900 年に一時的にカナダ・ハワイからのアメリカへの移民を禁止する[69]。また 1902 年にはアメリカ政府によって制限つきながら渡航禁止が緩和され再び日本からの移民が増加する[70]。

日露戦争が終結した 1905 年、カリフォルニア州で「黄禍論」が高まり、「日韓人排斥協会」が誕生する。この協会はアメリカの労働組合を中心として構成されていた。中国からの移民と同様に、日本からの移民も現地の労働者階級を中心として社会的抑圧を受けることとなる。翌年には、サンフランシスコで「東洋人学童排斥法案」が通過する[71]。日本の子供達を現地の公立学校に入学させない法案である。また 1907 年には約 38000 人の日本移民がハワイからアメリカへ転航し、当時の米大統領であったセオドア・ルーズベルトはハワイからの日本移民のアメリカ本土への渡航禁止令を出す[72]。またこの年、アメリカ政府は「日米紳士協定」を結んで日本政府による日本からの渡米に対する旅券発行の停止を盛り込む協定を結んだ。これにより一時的に移民は減少する[73]。さらに 1913 年にはカリフォルニア州で「排日土地所有禁止法案」が通過する。これは移民の一切の土地所有が認められなくなる法案であった[74]。農業を中心として生活する日本移民(一世)にとってこの法案は死活問題であり、彼/彼女らは急遽、米本土で生まれた市民権を持つ自分たちの子供（二世）や現地の親日的な人々に土地を所有してもらうよう要請した[75]。

1920 年に入ると反日の感情はますます強くなる。1920 年に「写真結婚婦人」の渡米

---

66 今野・藤崎、前掲書　p.203
67 同上（一回目の官約移民の数については、外務省資料では約９５０名となっている。）
68 外務省領事移住部、前掲書　p.622
69 今野・藤崎、前掲書　p.409
69 同上
70 同上
71 同上　pp.409-410
72 同上　p.410
73 今野・藤崎、前掲書　p.204
74 外務省領事移住部、前掲書　p.625
75 坂口、前掲書

を禁止する。また一般投票によって「第二次カリフォルニア州排日法案」も制定され、借地権を奪われ土地を借りることも法律上規制された。これによって日本移民（一世）には土地の所有どころか、土地を借りることも禁止された[76]。1922 年には米国大審院で日本人の帰化不能の判決が下された。日本移民（一世）は「帰化不能外国人」となったのである[77]。翌年には「排日移民法」が実施される。1941 年には「日米修好通商条約」が撤廃され、日米の貿易が凍結されるとともに、両国は太平洋戦争へと突き進んだ[78]。アメリカでは 1942 年、フランクリン・ルーズベルト大統領が行政命令第 9066 号に署名、ロスアンジェルスの日系移民はマンザナ収容所へ移動、後に軍事地域の日系移民 11 万人の立ち退きを完了する[79]。1943 年にはハワイの日系 2 世による 442 部隊が編成され、米軍として前線で活躍する。これによって戦後、アメリカ政府による日系移民への対応が見直されることとなる[80]。1945 年連邦警察官が全成人日系移民に面接し「忠誠心調査」を行っている[81]。後に終戦によって日系移民への軍事制限は撤廃され、収容所から日系移民は開放された。

アメリカ政府は 1949 年になって日系移民に対する法による「敵国人扱い」を終結する[82]。またこの年、日本人帰化法案が両院で成立したにも関わらず、トルーマン大統領は署名を拒否した[83]。日米で日米安全保障条約が発効された年、ウォルター・マッカランの「日本人帰化法」が成立する。これによって全人種にアメリカへの帰化権が与えられることとなった[84]。また 1924 年から続いた排日移民法をこの年に撤廃している[85]。全米の新聞に「ジャップ」の差別語の適用を禁止する記事を勧告したのもこの年である[86]。1979 年、アメリカ政府は日系移民の立ち退きを命じた行政 9066 号を正式に廃棄した[87]。戦後 34 年が経過してからの出来事である。1982 年にはデトロイトでロナルド・イーブンズが、日本人と間違えて中国系アメリカ人のヴィンセント・チンを暗殺する[88]。2001 年にはワ

---

76 外務省領事移住部、前掲書　p.627
77 同上　p.628
78 坂口満宏作成「年表・日系アメリカの歩み」、ベフ、前掲書　p.233
79 同上
80 今野・藤崎、前掲書　p.206
81 同上　p.413
82 同上
83 同上　p.414
84 同上
85 同上
86 同上
87 ベフ、前掲書　p.234
88 田中道代（2001）『アメリカの中のアジア』社会評論社　pp.86-96

シントン特別地区において日系アメリカ人記念碑が建てられた[89]。9．11 以降、アラブ系のアメリカ人に対する暴行事件があいつぎ、全米日系市民協会は真珠湾攻撃後の人種偏見と政治指導による誤りを繰り返さないように声明を発表した[90]。

以上が簡単なアメリカにおける日系移民の歩みである[91]。ここまでの日系移民の歩みをみても、彼/彼女らがマイノリティーの他者として排除され、抑圧されてきたことが理解される。しかし、ここからは更に日系移民に対する抑圧の中で注目されていないマイノリティーの中のマイノリティーに注目する。そのためには、強制収容所に関するできる限りの詳細を分析する必要がある。

3-3-2　日系移民の排除：アッセンブリー・センターを中心に

1941 年 12 月 8 日、日本によるハワイの真珠湾攻撃によって日米両国に宣戦布告宣言が出され、その一か月後の 1942 年 1 月 15 日、全米の代表的一世ら約 600 人がモンタナ州ミゾラ抑留所へ収容された。その後、太平洋沿岸の日系移民約 12 万人が全米 10 カ所に収容された[92]。全米 10 カ所の中で特殊な収容所であったのがツールレイク・キャンプである[93]。ツールレイク・キャンプに関する資料は大変少なく、ツールレイクを主眼として書かれた書物はほとんど存在していない。『米国日系人百年史』においては、「日系移民の不忠誠組」や「日本主義団」を掲げた日系移民が集められた収容所として紹介しているが、詳細はあまり記述されていない。また、『北米百年桜』は一世の半生を主眼としているため、強制収容所に関する情報が大変少なく、ツールレイクすらも取り上げていない。よって和書におけるツールレイクの研究は全くなされていないのが現状である。

一方、洋書においてはいくつかの資料が存在している。特に重要な資料としては *Second Kinenhi: Reflections on Tule Lake*[94]や *Tule Lake Revisited: A Brief History*

---

[89] ベフ、前掲書　p.235
[90] 同上
[91] 日系移民史については前述のとおり『わが国民の海外発展－移住百年の歩み』、『移民史Ⅲ』、『日本人移民－1 カナダ・北米大陸』を参考にしている。
[92] 伊藤一男（1969）『北米百年桜』北米百年桜実行委員会 p.1062
[93] Tule Lake はアメリカ本土において多くの日系移民が「ツーリーレイク」と発音しているが、『米国日系人百年移民史』では、「ツールレイク」と表記されているため、本稿においてもこの名称を採用している。加藤新一編（1961）『米国日系人百年史』新日米新聞社 p.313
[94] Tule Lake Committee. 2000. *Second Kinenhi: Reflections on Tule Lake*. San Francisco: Tule Lake Committee

and Guide to the Tule Lake Concentration Camp Site[95]が挙げられる。この 2 冊は Tule Lake Committee によって書かれたものであり、近年の運動として、Tule Lake を後世に伝えようとする活動が盛んである。

ツールレイクはオレゴン州とカリフォルニア州の州境にある、インディアンの古戦場として歴史的に名高い土地である。昔は湖底であったことから、樹木一本もない荒涼とした所である[96]。次章で行う筆者によるツールレイク・キャンプの被収容者へのインタビューでも仮のバラックを再現したツールレイクの施設経験の会話から、砂嵐の厳しい土地で洗濯や調理などはほとんどバラックの中で行っていたことがわかっている。ツールレイクを知らない現地の日系移民も多く、ましてや日本においてツールレイクの資料がないことから、ここでは現存する資料やインタビューの内容から、できる限りの詳細を記述しておく。

ツールレイクの歴史を議論する前に、日系移民の強制収容に至るまでの経緯を考察したい。

ツールレイクは現地の日系移民や歴史家らにとって、「忠誠登録問題」をおこした者、あるいは Loyalty Oath （忠誠心調査）における「不忠誠者」が集められた収容所という認識があった[97]。このような理解については国家への忠誠か不忠誠かという歴史的言説によってつくられてきた虚構といえるが、このことについては後のインタビューによる分析から考察するとして、ここでは強制収容に至るまでの経緯を分析する。日米の開戦から二か月後の 1942 年 2 月 19 日、ルーズベルト大統領が行政命令 9066 号を発令し、これにより日系移民は強制的に駆り集められた[98]。

9066 号の発令は多くの日系移民を混乱させた。ほとんどの日系移民が土地を奪われ財産を奪われることになった。政府は 3 月 11 日に WCCA(Wartime Civil Control Administration)すなわち、戦時民事管理局による民間官史を組織して強制収容を実行支配した[99]。まず、12 万人の人々を強制的に連行することが困難であったことから、WCCA による支配のもと、15 カ所の Assembly Center（アッセンブリー・センター）にほぼすべての日系移民が収容された。

---

[95] Takei, B. and J, Tachibana. 2012. *Tule Lake Revisited: A Brief History and Guide to the Tule Lake Concentration Camp Site*. San Francisco: Tule Lake Committee

[96] こうしたツールレイクの地理的な特徴については 2014 年に行った調査をもとにしている。

[97]加藤、前掲書　p.313

[98] 年表は坂口満宏によって作成された。詳しくはベフ、前掲を参照されたい。

[99] 加藤、前掲書　p.303

立退き日系人集合所開期と最高人員

州名	場所	開設	最高収容人口
アリゾナ州	メイヤー	5月7日	245
ワシントン州	ブヤラップ	4月28日	7390
オレゴン州	ポートランド	5月2日	3676
カリフォルニア州	メリスビル	5月8日	2451
	サクラメント	5月6日	4739
	タンフォーラン	4月28日	7816
	ストクトン	5月10日	4271
	ターラック	4月30日	3661
	サリナス	4月27日	3586
	マーセ	5月6日	4508
	バインデール	5月7日	4792
	フレスノ	5月6日	5120
	ツラレ	4月20日	4978
	サンタアニタ	3月27日	18719
	ポモナ	5月7日	5434

加藤新一編（1961）『米国日系人百年史』新日米新聞社[100]

このようにして、政府は日系移民の立ち退きをより迅速に確実に実行するために集合所という名目で日系移民を管理した。日系移民は政府によって登録され、上記の集合所と期日に指定された通りに移動することとなった。立ち退きの集合場所が決定されると、だいたいそれから 2 日後に手で持てる程度の身の廻りの荷物を持ち、自動車を持つものは自分でドライブし、持っていないものは指定の時間に指定の場所へ集合しバスで収容された[101]。加藤は自己の自動車で入所した者は WCCA が高価な値段で売却したことや、日系移民が家財道具等も売却したとしているが[102]、収容所に監禁された人々の話を聞くと、実際はそうではなく、ほとんどの場合、手に持てる分だけの荷物を持ち、土地や家

[100] アッセンブリー・センターに関する資料の統計は加藤によって詳細に分析されている。この図は加藤の『米国日系人百年移民史』をもとに筆者が加筆した。加藤、前掲書　p.303
[101] 加藤、前掲書　p.304
[102] 同上

財道具が戻ってくることはなかったという[103]。

ここまで強制収容に関する経緯を述べてきたが、9066 号の発令は強制収容所への移送という意味合いがあったのかどうかは重要である。9066 号は陸軍当局に日本人を立ち退かせる権限を与えるものであった[104]。これは「必要に応じて米国内に軍事区域を指定し、その地域に居住する者で、合衆国の国防に害があると認められる者は、市民、外人の別なく強制的に立ち退かす権限を陸軍省に与える[105]」法令であった。つまり強制収容所に日系移民を連行する法令ではなく、陸軍省にその立ち退きの有無の権限を委譲する行政命令であった。しかし、その直後にアッセンブリー・センターが建設され、日系移民の収容が実行されたことから、9066 号は、軍隊による保安地域からの立ち退きという名のもとで、敵国外国人並びにその子孫らを収容する権限を軍に与えた行政命令であった。9066 号は日系移民の中でも市民権を持たない一世を立ち退かせる行政命令であり、同様にアメリカで出生し市民権を獲得している二世も日系人ということから、この行政命令の該当者となった。しかし、日系移民の歴史において 9066 号が注目される一方、この行政命令以前に立ち退き令が出されていたことはあまり注目されていない。

1941 年 12 月 11 日、太平洋岸は戦局地点と宣言され、防衛司令官デウィット中将が任命された[106]。彼は日系移民の立ち退きを斡旋した人物であった。1942 年 1 月 29 日、米国司法省は次々に日系移民に対する法令を発表し、軍事的に重要とみられる港湾、飛行場、発電所の敵国外国人を立ち退かすことを発令したのである。またデウィット中将も大統領の 9066 号の発令直前、陸軍省に日系移民の立ち退き令を勧告している[107]。彼が日系移民を排除していったことを端的に表現した言葉が残っている。

> ジャップはジャップなのだ。忠誠であろうとなかろうと危険極まりない存在である。忠誠如何を知る道がない。米国市民であるに拘わらず、彼らは理論的に日本人であってそれを変えることはできない。一片の紙を与えたのみで変わるものではないのである[108]。

---

103 このようにほとんどすべての日系移民が収容所に監禁されたことによって財産を失った。収容所から解放され、知人に預けた土地が戻ってきた例は大変少ない。
104 同上　p.294
105 多くの文献に 9066 号の翻訳が存在するが、ここでは加藤、前掲書　p.306 を引用している。
106 同上　p. 294
107 同上
108 これは下院海軍文化委員会での証言である。詳しくは加藤、前掲書　p.295 を参照された

デウィット中将の言葉は、日本人と日系移民を一括りにし、すべての日本人とその子孫たちは市民権の有無に関係なく、同一の敵性外国人であると指摘している。彼の発言からも理解されるように、強制立ち退きを支えていた論理は、保安地域からの日系移民の撤退ではなく、日系移民を敵人とする国民国家の理論であった。

こうして、政府は敵性外国人として日系移民を管理した。世論においても日系移民を敵視する言説の強まりから、この法案が発令された[109]。9066 号の発令は、日本人=敵性外国人という言説を生産したばかりではなく、すべての日系移民を国民国家言説における日本人として一括りにすることで、彼/彼女らを監禁し排除したのである。

3-3-3　アッセンブリー・センターと強制収容所への送還

強制収容所を仮収容所や転住所と呼ぶ人々が多くいるが、官公庁の文書やアカデミックな場における Camp の呼称は「強制収容所」或いは「監獄」が相応しい。なぜなら、日系移民の歴史を考察すれば彼/彼女らが好んで収容所に入所したわけではなく、或いは自らの身の保全のために入所したわけではないからである。アメリカでは日系移民が強制収容所について語る際に Camp ではなく Center と呼ぶことが多い。なぜなら日系移民の強制収容所は公式には Relocation Center（転住所）と呼ばれているからである。すべての収容所は公式に Camp を使用せず、Center となっている。これは当時の政府が強制収容所の存在を隠蔽し、日系移民の保全のための仮収容所と定義づけていたからである[110]。つまり官公庁が名付けた Center という表現やアカデミックな場で呼ばれる Center という呼称は、日系移民が強制的に収容させられた意味を隠蔽しているのである。よってアカデミックな場においては、center という「転住所」を意味する言葉よりも、camp という「強制収容所」「監獄」を意味する言葉の方が、より適切に当時の日系移民の状況を説明できる。

日系移民の収容所入りは 1942 年 3 月 21 日がはじめとされており、場所はロサンゼル

い。

[109] 同上

[110] WCCA は強制立ち退きと強制収容には何ら関係がないにも関わらず、立ち退きをしなかった日系移民にアッセンブリー・センターへの収容を強制し、後にそこから日系移民を強制収容所に連行したのである。

ス北方のマンザナア（Manzanar War Relocation Center)であった[111]。これを管理したのが、西部防衛司令部の機関として作られた WRA（Wartime Civic Control Administration）で、戦時民事管理局である[112]。この組織が中心となって後に以下のすべての収容所を管理することとなった。

強制収容所とその人口

収容所名	州名	開設（1942）	最高収容人口
トパーズ	ユタ	9 月 1 日	8130
ヒラリバー	アリゾナ	7 月 20 日	13348
ボストン	アリゾナ	5 月 8 日	17814
グラナダ	コロラド	8 月 27 日	7318
ハートマウンテン	ワイオミング	8 月 12 日	10767
ジュローム	アーカンソー	10 月 6 日	8497
マンザナア	カリフォルニア	6 月 21 日	10046
ミネドカ	アイダホ	8 月 10 日	9396
ローワー	アーカンソー	9 月 18 日	8475
ツールレイク	カリフォルニア	5 月 27 日	18789

加藤新一編（1961）『米国日系人百年史』新日米新聞社[113]

アッセンブリー・センターに収容された日系移民は上記の収容所に収容された。本稿ではアメリカの多文化教育の中でほとんど注目されることがなかったツールレイクに注目するので、ツールレイクの収容人員について概観する。ツールレイクは最高収容人口が最も高い。その数は 18789 人である。開設も二番目に早いが、開設された当時は他の収容所と全く同じ目的のために設置された。それは他の施設と同様に日系移民を管理するためである。しかし、後にツールレイクは他の収容所と全く異なる人々を管理し投獄するための施設となった[114]。

---

111 加藤、前掲書　p.307
112 同上
113強制収容所に関する資料の統計は加藤によって詳細に分析されている。この図は加藤の『米国日系人百年移民史』をもとに筆者が加筆した。加藤、前掲書　p.328
114 Ditman, D. 2005. Difficult Choices in Dangerous Times: The Yasui Family in World

日系移民が強制収容されるまでの間も、彼/彼女らは日系というだけで人種差別を受けてきた。1940 年代の初期までに、彼/彼女らは政治的・経済的・社会的に排除され続けたのである[115]。真珠湾攻撃が生じたとき、日系移民は落胆と恐怖とに苛まれた。西海岸に集中していた日系移民の人々に対して、FBI は即座に日系移民の主要人物をリストアップし逮捕し、尋問したのである。連日、アメリカ社会では出版物と放送によって日系を「敵性人種」として取り上げた[116]。この当時の偏見について、ツールレイクに収容されたヘレン・マツダは次のように述べている。

> 学校の校長先生は「アメリカ合衆国は日本と戦争をしましたが、このことはアメリカに在住する日系の人々と何ら関係がありませんし、ここにいる日系の人々にはどうすることもできないのです。」といいました。しかしながら、私たちの生活するこの社会において、日系と白人に大きな亀裂が生じていたのです。私の白人の友人はパールハーバーの次の日、スクールバスで私の隣に座らなくなったのです[117]。

マツダが述べるように、日系移民にとって真珠湾攻撃後の日系社会の状況は最悪であった。日系移民=敵性人種とする言説が至るところで繰り返されたのである。しかしこうした状況は真珠湾攻撃の地点で最悪に達したわけであり、それ以前にも数百のアジア系移民を排斥する運動や法律が制定されてきた。後にインタビューで紹介するツールレイクに収容されたジミー・ヤマイチは真珠湾攻撃直後の土地の売り払いについて、*Second Kinenhi: Reflections on Tule Lake* の中で次のように証言している。

> テッド・メイヤーという農作物の買い付けをしていた人とは 4 年の交流があった。テッドと私の父は取引相手以上のよい友人関係であった。パールハーバーの後の水曜日、テッドが突然私の父に会いにきた。聞けばテッドは彼のボスから火曜日に急いでロサンゼルスに来るように言われていた。そこで彼のボスに「テッド、すぐに日系の

War II. In *A Question of Loyalty: Internment at Tule Lake*. Oregon Institute of Technology, Klamath Falls, OG: Journal of the Shaw Historical Library pp.26-27

[115] Tule Lake Committee. 2000. *Second Kinenhi: Reflections on Tule Lake*. San Francisco: Tule Lake Committee p.23

[116] 同上

[117] この証言はヘレン・マツダによるものであり、原文は英語であるため筆者が翻訳した。詳しい原文については *Second kinenhi: Reflections on Tule Lake* p.23 を参照されたい。

人々が所有する農園に行って、状態のいい農園を選び出せ。君がほしいものすべてだ。私達はいい農園をすべて買う。私達はカリフォルニアから全てのジャップを追い出す」といわれた。テッドははるばるロサンゼルスから私たちの農園に運転してきて「ヤマイチ、君たちみんな、カリフォルニアから追い出されるぞ。」と言った。父は信じなかったが、テッドは「このことは必ずおこる。準備をしておくんだ。」と繰り返した。私たちは運が良かった。立ち退きを言い渡された時にはすでに土地の売買は済んでいた。彼のおかげで相応の値段で売ることができたのだ[118]。

ヤマイチは大変な苦労をしたが、それでも事前に情報を伝えてくれたテッドのおかげで最悪の状況にはならなかったという。情報を知らなかったほとんどの日系移民は土地や家財を売ることもできなかったり、あるいはその土地を預けても戻ってこなかったのである。このような状況の中で人々は渋々WRAの指示に従い収容所へと投獄されることになった。他にも立ち退きに際して多様な状況があったと推測されるが、全ての日系移民は管理され、指定されたアッセンブリー・センターから強制収容所へと連行されたのである。

次節では前述したように今までアメリカの多文化史においてほとんど注目されることがなかったツールレイク・キャンプに焦点を当て、そのサバルタンの歴史に注目する。

3-4　言葉による統合と排除

本節ではサバルタンの歴史であるツールレイク・キャンプに注目する。アメリカ多文化史の中で排除されてきたサバルタンの歴史とはツールレイク・キャンプの歴史そのものである。なぜならこの強制収容所ではアメリカ政府に対して異議申し立てをした人々が隔離されてきたからだ。そして現在まで勝者の歴史とは異質な史実として、このキャンプの存在は社会的にも歴史的にも排除されてきた。

サバルタンの歴史を語る上でレジスタンス（抵抗）の存在は大変重要である。なぜなら日系移民史の場合、レジスタンスの存在は多文化主義の中で語られるアメリカ史の中

118 ジミー・ヤマイチはツールレイクコミッティーの中心的人物である。彼の活動は戦時中の強制収容体験を後世に伝えることである。この証言の原文は英語であるため筆者が翻訳した。詳しい原文については *Second kinenhi: Reflections on Tule Lake* pp.23-24 を参照されたい。

では排除され続けてきたからである。グラムシは、サバルタンの方法論的諸基準の中で、諸集団（サバルタン）の歴史的な活動は、たとえそれが一時的なものであっても、統一的な傾向があることは確かではあるが、この傾向は支配諸集団の主導性（イニシアティブ）によって常に打ち砕かれることを指摘している[119]。そして

> したがってこの歴史の周期が、成功によって完結し、達成された場合にのみこの傾向は明らかとなる。サバルタン諸集団は、反乱や蜂起の場合においてもなお常に支配的諸集団の主導性のもとに置かれている[120]。

と指摘する。支配者と被支配者が現実に存在している社会において、グラムシは人間社会のマクロな歴史は、支配者の主導性によって歴史が語られ、支配者側は被支配者側の歴史を排除してきたことを明らかにしている。歴史は、支配者側の成功によって完結し或いは達成された場合においてのみ、統一的な歴史として語られるのである。この歴史観をグラムシは批判し、「完結し、達成」された歴史よりも「人間社会を分裂させている内部矛盾」に注目[121]した。グラムシのいう「内部矛盾」に注目するとは、支配と被支配、指導と非指導をめぐる複合的なヘゲモニー関係・ヘゲモニー闘争の視点」に注目[122]することである。つまり支配者に対抗する勢力やサバルタン集団の動向など複合的視点からサバルタンの歴史を考察することである[123]。

筆者はアメリカカリフォルニア州にあるサンノゼ・ジャパニーズ・アメリカン・ミュージアムの創設者であるジミー・ヤマイチに 2014 年 1 月、インタビューを行った。彼はツールレイク・キャンプでの収容経験があり、生き証人としてこのキャンプの史実を語る重要な人物である。その中で、彼が経験したツールレイク・キャンプについて語ってくれた。そしてこのキャンプの被収容者である彼/彼女らも日系移民史並びにアメリカ多文化史に抗するレジスタンス（抵抗組織）であったと語ってくれた[124]。

日系移民史の中でレジスタンスについて詳細に書かれた歴史書がある。*Resistance:*

---

119 グラムシ（2011)、前掲書　p.31
120 同上　p.31
121 同上　p.32
122 同上　p.33
123 同上
124 ヤマイチはツールレイクの被収容者として、またアメリカの語られない日系移民史を語る活動家として著名な人物である。

Challenging American's Wartime Internment of Japanese-Americans にはアメリカの日系移民史の中でも、兵役を拒否した人々の歴史が書かれている。その冒頭で彼/彼女らの歴史を記述する意図をこの本の筆者であるウィリアム・ホリは次のように指摘している。

> 歴史を書くということは公正で中立的なものとみなされているが、後世に伝えられている一般的歴史のほとんどはある結末の一部分しか語っていないのである。そしてある結末について適切に評価されるには数十年という歳月が必要となる。しかし依然として、このような歴史の功績に反して歴史家は他の語られない歴史に興味を持つ。さらに、こうした歴史を書くということは、従来の歴史を横断し、従来の歴史に影響を与えるのである。この本はそのことについて書かれたものである[125]。

ホリが指摘するように後世に伝えられる一般的歴史はある結末の一部でしかない。つまり日系移民史における歴史の公正性、中立性は第 2 章で述べたように、国民を前提として語られる歴史であり、ホリに言わせればその歴史はある歴史的事実の一部でしかない。ホリは続けてこのような歴史の功績を批判的に考察することが重要であると指摘している。そのためには従来の歴史を横断しながら今まで語られてこなかった歴史を再考する必要がある。従来の歴史の功績に対抗するためにレジスタンスの存在を研究することの必要性をホリは強く主張している。

そこで本節ではサバルタン集団の歴史に注目するために必要不可欠である支配者と被支配者とのヘゲモニー関係に注目するために、連邦政府によって行われた忠誠心調査や市民権の放棄といった問題をより鮮明にし、それに抵抗してきたレジスタンスの歴史に着目する。そのためにはまず、サバルタン諸集団である日系移民のレジスタンスやツールレイク・キャンプの被収容者らを歴史的に排除してきた問題の根幹にかかわる日系移民の強制収容を表現する言葉について考察する。

具体的に第 1 項では、従来アメリカで語られてきた強制収容に関する歪曲法について言及する。一般的に言われている日系移民の強制収容は英語表記では寛容性を帯びた別のニュアンスをもった言葉として表現されてきた。寛容な言葉によって表現された日系

---

[125] Hohri, W. et al. 2001. *Resistance: Challenging American's Wartime Internment of Japanese-Americans*. Kearney, KE: Morris Publishing p.1

移民の強制収容に関する言葉は、アメリカの人々にとって強制収容は当時戦時下において必要不可欠で致し方なかったという意味を含有してきたのである。このような強制収容に関するアメリカでの言葉の使用方法と使用された言葉の意味との問題について批判的視座を提供しながら、当時の日系移民が管理され拘束されてきた史実を明らかにしていく。

第 2 項では、レジスタンスとして活動したツールレイク被収容者とツールレイク・キャンプに注目する。ツールレイク・キャンプに関する出来る限りの資料を収集し、このキャンプの詳細を考察する。本章で論じてきたように、サバルタンの歴史は国家に回収されておらず、断片化されている。よって、ツールレイクに関する断片化された資料を収集し、本章と次章で分析する。

本節では具体的にツールレイク・キャンプとは何かについて論じる。ここではツールレイクの歴史を概観しながら、この収容所が設置されるに至った経緯とその機能について詳細に分析する。そしてツールレイクで生じた管理する側と管理される側との問題を明らかにし、彼/彼女らが管理側に対してどのように抵抗してきたかを明らかにする。次に、収容所内の構造・機能・管理についてより具体的に分析する。強制的に移住させられた人々はどのような生活を送っていたのかについて、資料をもとに考察し、収容所内で生じた事件や活動に焦点を当てながら、収容所内で生じた統合と排除を考察する。

これらの研究を通して今まで焦点がほとんど当てられてこなかったサバルタンの歴史に注目し一元的に語られてきたアメリカ日系移民史に対して新たな視座を提供する。

3-4-1　言葉の歪曲法

ここではツールレイクの歴史を再考する前に、強制収容に関する用語について説明する[126]。ツールレイクの歴史はサバルタン論が示唆するように、支配諸集団の主導性によ

[126] ここでは日系移民のオーラル・ヒストリーをデジタル化した Densho という日系組織による強制収容所に係る用語の解釈を援用している。Densho は日系移民に対して 1000 件以上の聞き書きをしており、それらの詳細をデジタル化してホームページに掲載している。Densho は第二次世界大戦中に投獄された日系移民によるオーラル・ヒストリーの文書化を最初の目標に、1996 年に開始された非営利団体である。この団体は強制収容に関する出来事を通して、教育保全に取り組んでおり、日系アメリカ人の第二次世界大戦の強制収容にアクセス可能な主要な要素を維持し後世に伝えるために、デジタル技術を使用してホームページに掲載している。この団体は、日系移民の歴史的な経験を、グローバル化社会における民主主義、不寛容、戦時化における歴史認識、公民権と市民権の問題を探求するための手段とし

って歴史的に排除されてきた。ツールレイクの歴史は、支配者側が日系移民を従属させるために実施した忠誠心調査に対して「ノー」という抵抗の痕跡を残した。しかし、第二次世界大戦中に日系移民が受けた強制収容経験は、アメリカで様々な言葉によって説明されており、それらの言葉は支配者側によって常に美化された言葉として使用されている。支配者側が使用する美化された言葉によって、「日系移民の強制収容は彼/彼女らの生命を守るためのもの」であり、「生命を守るために避難させた」という意味としてアメリカ社会で理解されている[127]。美化された言葉の使用によって、支配者側に対して抵抗の痕跡を残したツールレイクの歴史は覆い隠され、アメリカ社会やアメリカの日系移民研究においても日系マイノリティの歴史が注目されにくい要因となっている。

アメリカでは現在まで、日系移民が経験した収容の歴史を説明する正式な用語を用いることについての合意には至っていない。しかし現在まで日系移民の戦時収容を表象する言葉には幾分か問題がある。なぜならアメリカでは日系移民の強制収容の経験を concentration Camp（強制収容所）という言葉を使用するケースがある一方、大抵の場合は relocation Camp（転移収容所）という言葉が使われている。この言葉は 1940 年代、連邦政府と米軍の当局者の間で合意された言葉である。米国における日系移民に対して、彼/彼女らを排除する一連の出来事を記述するために、実際には強制的に収容したにも関わらず、転移という言葉を使用するという euphemism（婉曲法）が使用された[128]。婉曲法とは否定的な意味を持つ言葉を歪曲し、実際にはそれほど否定的な意味がなかったかのように認識される言葉の言い換えである。

また強制収容所に係る言葉だけでなく、彼/彼女らを移動させる言葉として evacuation（避難）という言葉が積極的に使用され、この言葉も本来の意図とは異なる意図をもって使われた。1942 年、日系移民は強制的に西海岸から排除され、西海岸に戻ることを禁止されていた。政府はこの出来事を、自然災害による避難のような意味合いで説明するために evacuation（避難）という言葉を使用したのである。日系移民の安全のための措

て、これらの材料および関連するリソースを提供している。この団体は、批判的思考を刺激するために、また従来語られることがなかった多様な歴史の意識を拡大して倫理的な意思決定スキルを開発するために、或いはこれらの要素を現在および、将来に受け継いでいくために、オーラル・ヒストリーのリソースを奨励している組織である。
Densho: The Japanese American Legacy Project. *Terminology and Glossary*, http://www.densho.org/default.asp?path=/assets/sharedpages/glossary.asp?section=home, 閲覧日 2014 年 10 月 31 日

[127] 第 7 章、インタビュイーC はこのことを簡潔に証言している。

[128] Densho: The Japanese American Legacy Project. *Terminology and Glossary* 前掲書

置として移動させる（避難）という言葉を使用したのである。

しかし、民間人による戦時移転及び抑留米国議会委員会（CWRIC）は、一連の強制移動の動機が、人種的偏見、戦争ヒステリー、そして政治的リーダーシップの失敗によって生じたことを指摘している[129]。日系移民に対する強制収容は、日系移民を隔離・監禁することでアメリカ社会から排除するために実施され、更に政治的リーダーらが何も考えず「日系」というだけで排除しようとしたことが原因だった。

更に他の要因として西海岸で労働する日系移民を排除することにより、経済的利益を目的として強制的な移動を行ったとする見解もある[130]。例えばアメリカカリフォルニア州サリナスは日系移民が移住してから強制収容までの期間、花の栽培で多大な収穫を得ていたし、アメリカ西海岸で働く日系移民全体をみても、鉄道や農業の収穫作業、庭園関係の労働において活躍していた。鉄道などの労働は比較的安価ではあったが、自らの日系コミュニティーを作ることが可能なほど経済的にも力をつけてきた。こうした日系移民の労働や土地を奪うために強制的に排除したとする見解もある[131]。

こうした強制収容に至る要因を考えても、この evacuation（避難）という言葉が支配者側による美化した言葉であることが理解できる。更にこの言葉が誤っているのは、避難には自主的な意味合いが含まれているにも関わらず、実際には日系移民は西海岸から追放され彼/彼女らが戻ってきた場合は逮捕の対象となっていたことである。つまり避難という言葉とは到底いえず、exclusion（排除）と mass removal（大量除去）が最も適した表現であるといえる[132]。これらの排除や大量除法という言葉には強制的に人々を隔離し、一掃する意味がある。日系移民はわずか数日の間に手に持てる荷物のみを持って移動させられたのである。それにも関わらず未だに避難という言葉が使用されている[133]。

また、relocation（転移）や detention（引き止めや抑留）という言葉が度々使用されているがこれらの言葉は forced removal（強制除去）、exiled（追放）、incarceration（監

---

[129] 同上

[130] Herzig-Yoshinaga, A. 2010. *Words Can Lie or Clarify: Terminology of the World War 2 Incarceration of Japanese Americans*. Torrance, CA

[131] 同上

[132] 同上

[133] 以下の政府関係の調査書においても、避難や避難者と表現されており、Concentration Camp ではなく Relocation Center と記されている。詳しくは以下を参照されたい。
Burton. J. F. et al. 1999. Confinement and Ethnicity: An Overview of World War II Japanese American Relocation Sites. *Publication in Anthlopology*. 74. Tucson, AZ: Western Archeological and Concentration Center, National Park Service, U.S. Department of the Interior

禁や投獄)、imprisoned（収監）の婉曲法である[134]。

第二次大戦中、アメリカ政府は日系移民 12 万人を強制的に転移所に収容し、その後、強制収容所に収容した。当時のアメリカ社会では日系移民はすべて敵性外国人として扱われ、抑圧されてきた。戦争が終わり、アメリカ社会内部では公民権運動を経験してきたにも関わらず、日系移民を記述する際に一般的に使用される用語として internment（抑留）が使用されており、これらの言葉が現在、日系移民の強制収容所に誤解を招いている。Densho は

> internment（抑留）は、戦争の際に敵とみなした人間に対して法的に許される拘留を指している。これがアメリカ市民に適用された場合、それは問題である。なぜなら投獄された日系移民の 3 分の 2 は、米国市民であったからである。「抑留」としてアメリカ社会では認識され、一般的にも使用されている用語であるが、Densho では軍や司法省が経営するキャンプにおいて拘束された法を犯した人々といった特定の場合を除いて、より正確に incarceration（監禁）を好んで使っている[135]。

と指摘している。internment（抑留）と incarceration（監禁）とでは意味が異なる。Densho が指摘するように、抑留は戦争の際の敵として拘束するという意味である。つまり米国における日系移民の両親のもとに生まれた米国市民である日系二世らは敵性外国人ではない。それでも未だにアメリカ社会では日系移民に対する強制収容経験を抑留として説明することが多い。

3-4-2　日系二世と「日系アメリカ人」

本稿においては、日本からアメリカに移り住んだ人々を日系一世、アメリカで生まれた第二世代以降の人々を日系二世・三世、そしてそれらの中で日本に一時的に帰国し、再度アメリカに戻った人々を帰米と呼んでいる。そして彼/彼女らの総称を日系移民としている[136]。本稿において、なぜ「日系アメリカ人」と呼ばないかというと、「日系アメリ

---

[134] これらの言葉の批判については、Takei, ibid. p. v を参照している。
[135] Densho、前掲書 筆者翻訳
[136] 日系一世を日本移民とする学者もいる。また、日系移民とは一般的に日本から海外に移り住んだ人々を呼ぶ呼称である。坂口、前掲書

カ人」と呼ぶ場合には、当時市民権が与えられなかった日系一世はそこから除外されるからである。「日系アメリカ人」とは、アメリカの市民権を持つアメリカ生まれの日系二世やアメリカの市民権を取得した日系移民を意味する[137]。このことは、「日系アメリカ人」としてのアイデンティティを持っていたということではなく、法律上、彼/彼女らはアメリカの市民権があったことを意味する[138]。つまり市民権を持てなかった一世に対して二世は市民権を持っていた。一方、大半の日系一世は収容されるまでにすでに何十年もの間、アメリカに住んでおり、家族と地域社会の中で生活していた。Densho では、日系一世の多くは日本に戻る計画はなく、許可されていれば帰化市民になっていただろうと指摘している[139]。

Densho はこの状況をよりわかりやすく説明するために(日系一世に係る移民法が改正された 1952 年まで、彼/彼女らは帰化できず外国人のままであった状況を明確にするために)、あえて日系一世と二世の状況の違いを強調する用語として二世以降の日系移民を「日系アメリカ人」と呼んでいる[140]。このことは非常に重要である。アメリカの多文化主義言説の中で登場する日系移民のアイデンティティーは、日系アメリカ人性を備えた集団として語られてきたからである。日系アメリカ人の歴史とは「日系アメリカ人」のアイデンティティーがアメリカ人性に依拠しており、政府への忠誠と貢献という形で語られてきたアイデンティティーの歴史を意図するものであった[141]。これに対して、Densho はアメリカ人性に依拠した「日系アメリカ人」ではなく、法律に依拠した「日系アメリカ人」として「日系アメリカ人」を使用している。

本稿では、日系移民のナショナル・アイデンティティーはアメリカにあるとする従来の「日系アメリカ人」言説を批判するために、敢えて日系二世以降の人々を「日系アメリカ人」と呼ぶことを控えている。Densho が指摘するように、法的な意味で「日系アメリカ人」を使用することには賛同できるが、現に「日系アメリカ人」が法的意味よりもアメリカ人性に依拠して使用されている以上、この言葉を使用することに慎重になるべ

---

137 JACL 等の他の日系組織は政府の不正義を明確にするため、日系二世に市民権があったことを強調し、日系アメリカ人としてのアイデンティティーを持っていたにも関わらず強制的に収容させたことを批判してきた。なお、Densho の場合、市民権を持っていたことを強調するためにあえてわかりやすい用語として日系アメリカ人を使用している。詳しくは以下を参照されたい。
Hosokawa, B. 1982. *JACL in Quest of Justice*. NY: William Morrow and Company

138 同上

139 Densho、前掲書

140 同上

141 岡本、前掲書

きである。ツールレイク・キャンプの歴史を考察すると、一世や二世、あるいは帰米に関係なく、彼/彼女らの経験は多様である。そして彼/彼女らのアイデンティティーを特定のナショナリティーに回収することも不可能である。一世や二世、帰米らのアイデンティティーを彼/彼女らが何世かによって特定したり、その傾向を把握することは極めて困難である。

このような理由から Densho のように法律上の解釈として「日系アメリカ人」を使用することは理解できる。しかしアメリカ人性に依拠した「日系アメリカ人」という表現には問題がある。第 2 章で論じたように、「日系アメリカ人」という言葉は、アメリカの多文化主義言説において語られる善良な日系移民を前提としており、このことはアメリカのマジョリティーがマイノリティーを管理するために使用した言葉である[142]。

このように日系移民を表象する言葉は、サバルタン論が明らかにしているように常に支配者側の主導性によって決定されてきた。しかしこうした日系移民を表象する言葉について Densho や日系マイノリティーは否定的である[143]。マジョリティー側は彼/彼女らの経験を伝える強制収容に係る言葉や日系移民を歪曲し、マイノリティーの歴史を排除してきたことを知っているからである。

次に支配者側の主導性に対して抵抗した幾つかの史実に注目する。これらの史実はグラムシが指摘するように、断片的であり一貫性を備えもった歴史ではない。しかし、ツールレイク・キャンプという特異な強制収容所の資料を収集し、まとめることによって、日系マイノリティーの歴史を再考することが可能である。そしてこのツールレイク史は、グハらのサバルタン・スタディーズが試みるサバルタン史への問いである「歴史そのものの範疇をもう一度疑ってみる」ことに貢献する[144]。ツールレイクの歴史は、アメリカに貢献した歴史として語られる日系移民史のみならず、国民を前提とした多文化主義言説そのものの範疇に対して批判的な視座を提供するのである。

3-5　ツールレイク・キャンプとは何か

3-5-1　ツールレイク・キャンプの開設

---

142 タカキ、前掲書

143 後のインタビューでは日系マイノリティーのナラティブを分析しており、従来の日系移民の歴史的な言説とは異なる経験を分析している。

144 グハ（1998)、前掲書　pp.3-8

Civil Liberties Public Education Fund[145]

ツールレイク・キャンプはカリフォルニア州モドック地区に建設された。これはオレゴン州クラマスフォールズから約 35 マイル、ツールレイクの町からは 10 マイル離れている。この町は英語表記では一語で表記されていて Tulelake となるが、収容所の場合は Tule Lake という二語表記になっている[146]。1942 年 4 月からこのキャンプの建設がはじまり、5 月 25 日に 500 人の日系移民がピュアラップ仮収容所からここに集められ、建設を手伝った[147]。当初、このキャンプにおける大半の収容者は、マリスヴィル、パインデール、ポモナ、サクラメント、サリナス等、カリフォルニアを中心とする日系移民であった。加えて、サン・ジョアキン・バレーからの収容者は、仮収容所に待機することなく、直接この収容所に監禁された[148]。

当初のツールレイク・キャンプは問題と人々の不満に満ちていた。なぜなら開所僅か 5 か月で人々が暴徒化したからである。理由は不十分な食糧事情であった[149]。その後、日常生活を送る上で必要不可欠な資材の不足により、多くのツールレイク被収容者は政府とその管理を行っていた WRA に対して不満を持つようになる。その不満がピークと

---

145 Civil Liberties Public Education Fund(CLPEF), *Education Resources: Tule Lake*, http://www.momomedia.com/CLPEF/index.html, 閲覧日 2014 年 11 月 22 日

146 Russell, J & Cohn, R. 2012. *Tule Lake War Relocation Center*. Scotland: LENNEX Corp

147 Jacoby, H.S. 1996. *Tule Lake: From Relocation to Segregation*. Crass Valley, CA: Comstock Bonaza Books

148 Burton、前掲書　p.282.

149 Kowta, M. 1976. Tule Lake War Relocation Project. In Archaeological Overview for the Mt. Dome and Timbered Craters Regions, North Central California, by Janet Friedman, Appendix 1. MS on file, California Historic Resource Information System, Chico, CA: California State University

なったのは、1943 年のことであった。この年、WRA が行った全ての日系移民に対する忠誠心調査（loyal か Disloyal か）によって、この収容所は大混乱となった。国家に対する忠誠心の判別によって、収容所内では政府への敵視と管理局に対する不満がピークにまで達したのである[150]。その最中に、忠誠心調査によって大きな事件が生じる。このことは、サバルタン論が提示する支配者側により発動されるサバルタンへの主導性である[151]。しかしこの主導的発動に対して、ツールレイク・キャンプの被収容者たちは蜂起しようとしたのである。

1943 年 2 月 19 日、ツールレイク・キャンプで忠誠登録を強制されたことに反感を持った 17～18 歳の 35 名の日系二世が、徴兵局に登録する意思がまったくないことと、日本への送還或いは帰国には何時でも署名するといった抗議文を WRA に手渡した[152]。彼らは、管理局までデモ行進を行った。彼らの行動は明確にアメリカへの忠誠を示さず、日本への忠誠を示したものではなかった。収容所に監禁されていることへの憤りと怒りを持って、抵抗した行動であった。しかし、これに対し、管理局側は見せしめとして 35 名を検挙するため、収容所の近くに駐屯していた約 200 名にも及ぶ陸軍の一個中隊を派遣することを決めた。そしてデモから 2 日後の 2 月 21 日夜に一斉検挙に踏み切った[153]。これに対してツールレイクでは更に抗議する者が増えた。

それから二か月間で 100 人以上が WRA に抗議し逮捕され、（Civilian Conservation Corps 通称 CCC）という 5 マイル程離れた施設に拘束されたのである[154]。このこともあってツールレイク・キャンプでは 3000 名の二世が、忠誠登録の質問 27 と 28 を「ノー・ノー」若しくは無回答とした。徴兵に応じたのは僅か 59 名であった。息子が徴兵に応じた家族は、他の被収容者から邪険に扱われ、食堂内に「イヌの席」と書いた札を立て、その席で食事をすることを強要されたという歴史書も残っている[155]。

連邦政府の調査によるとツールレイクは他のキャンプと比較しても不忠誠とみなされた割合が最も多かった。例えば他の収容所では不忠誠という刻印を押された人々は全体の 10 パーセント程であったのに対して、ツールレイクでは 42 パーセントの人々が答え

---

150 Burton、前掲書
151 グラムシ（1999）、前掲書　p.110
152 同上
153 渡辺正清（2001）『ヤマト魂 アメリカ・日系二世、自由への戦い』集英社　pp.146 - 153
154 Burton、前掲書
155 渡辺、前掲書

ない、或いは No と答えている[156]。これらの結果から 1943 年夏、この施設は他の収容所とは異なる名称となり、そして新たに厳重な警備と管理が行われた。実質的にはツールレイク・キャンプは強制収容所から隔離収容所へと施設の名称が変更された。英語では Relocation Center から Segregation Center に変更された。当初、ポストン・キャンプも候補地の一つとして挙がっていた。しかしその数の多さからツールレイクに決定したのであった。

忠誠心調査以前からいたツールレイクの被収容者は、他のキャンプからツールレイク・キャンプにくる人々のためにブロックを解放する必要があった。ツールレイクの元収容者の内、6000 人が他のキャンプに移り、8500 人が残った。そして 8500 人の内 4000 人がツールレイクに自ら残りたいと WRA に要求し、希望通り残ったのである[157]。

隔離収容所となった後、ツールレイクでは急いで新たなバラックの建設が進められた。新たな収容者を隔離するために WRA は多くの人員を動員し、建設に充てさせた。1944 年春には、収容者が 18000 人となり、WRA が管轄する収容所の中で最大となった。隔離所となったため、警備兵を増員し、装甲車を 8 台追加させた[158]。更に、兵士付きのタワー・ガード、鉄柵が増設された。これらは農場等の外部と隣接する境界に設置された。このように、ツールレイクが隔離収容所となってから、警備の警戒レベルも引き上げられ、彼/彼女らは実質的に敵性外国人という扱いを超え、犯罪者以上の扱いを受けるようになった。サバルタン論が指摘するように、指導的階級の統一性は国家という形態をとって維持され、マイノリティーは彼らに管理され社会から排除される[159]。

しかしながら、ファンケの小説にもあったように、彼/彼女らはそうした不安と葛藤しながら日々の生活を維持してきた。ツールレイクの被収容者は自らの置かれている状況に不満を持ちながら、収容所生活を送っていたのである。

ツールレイクの被収容者は黙って抑圧された収容所生活を受動的に受け入れているわけではなかった。サバルタン論が提示するように、ツールレイク・キャンプの被収容者の歴史には、サバルタンの側から発揮される自律的なイニシアティブの痕跡がある[160]。

---

156 Burton、前掲書
157 同上
158 Drinnon,R. 1987. *Keeper of Concentration Camps: Dillon S. Myer and American Racism*. Berkley: University of California Press p.110
159 グラムシ（1999）、前掲書　pp.111-112
160 同上

1943 年 10 月、被収容者の農業労働者がトラック事故で死亡した[161]。亡くなった犠牲者の妻に対する代償があまりにも少なかったことから、収容所内で働いている日系移民が大規模なストライキをおこしたのである。彼/彼女らはただでさえ低賃金で働かされている上に、このような事故がおき、亡くなった犠牲者の妻に対する十分な補償がなかったことに異議申し立てをしたのである。これに対し、管理局は他のキャンプから 234 人の日系移民を集め、彼らが働いていた農場で働かせ、管理側によるスト破りを実行させた。スト破りを実行した他のキャンプから来た日系移民は、管理側から当時の収容所内の日系移民に対して 10 倍以上の報酬を得ていたという[162]。

ストライキを行った彼/彼女らの声はこのような管理側の支配によって掻き消されてきた。しかしツールレイクの被収容者はこのような管理側の支配に屈することはなかった。再度管理側による不正行動と不正管理、ストライキを実行する権利を奪われてきたことに対して声を上げた。

しかし管理側はこのストライキに対して、軍隊を投入した。ツールレイク・キャンプのサバルタンはまたしても支配者側の主導性によって排除された。軍隊は軍隊のジープ、マシンガン、催眠ガスを使用し彼らのストライキを封じ込めた。そして疑いのある人々は逮捕されたのである[163]。以下の写真はツールレイク・キャンプに建設されたバラックの写真である。

Tule Lake Concentration Camp, California. Courtesy of the National Archives and Records Administration

161 Burton、前掲書　p.283
162 同上
163 同上

このバラック以外に新たな管理施設が建設された。ストライキの封じ込めに対して、キャンプ内での不満が増大し、キャンプ内にあるほとんどの仕事を人々はボイコットした。彼/彼女らのボイコットに対して、ツールレイクの管轄権が WRA から、軍警備へと移行した。これにより更に厳しい管理が成されたのである[164]。WRA から軍警備へと移行されることによって、サバルタンの自律性は更に支配者側によって紛糾された。

軍警備は管理所と収容者との間に、フェンスと 5 つのタワーが設置された。そして、stockade（営倉）を建設させた。そしてボイコットした人々や、逮捕された人々を孤立させるため、この営倉に監禁させたのである。つまりこれはツールレイクにおける二重の管理であった。以下は営倉の写真である。

Stockade jail at Tule Lake[165]

Stockade jail at Tule Lake[166]

このボイコットによって 350 人が牢屋に監禁された。また 1200 人もの一世は、

164 同上
165 同上 p.309
166 同上

Department of Justice（司法省）のキャンプに送り込まれた。1944 年 1 月、このままではボイコットを続ければキャンプ内の食糧事情等にも影響すると考え、投票し、これ以上ボイコットをしないようにキャンプ内の被収容者に指示した[167]。その後、軍部による管理から WRA の管理へと再び移行した。しかし、営倉だけは軍隊が管轄したのである。こうした活動は、キャンプに対する不正義を正すためであった。

しかし 1944 年 5 月にふたたびキャンプ内で緊張が走った。5 月 24 日、被収容者の一人が警備員に打ち殺されたのである。この時期に、収容所管理者は、ツールレイクでのすべての集会を禁止し、学校、職場、スポーツ、リクレーションが閉鎖となった。

更に政府は日系移民に対して市民権を放棄できる法律を制定し、日系移民に対してその意向を確認した。これは renunciation（市民権の放棄）と呼ばれている。これによって、ツールレイクでは更なる混乱が生じたのである。ツールレイクでは、親日的な団体や、日本に帰国を希望する親も多かった[168]。また家族が別々にならないように、あえてツールレイクに留まった人々も多かった。そのため、この市民権の放棄に関する調書はツールレイクの家族や社会を二分するような混乱を与えたのである。5 千人以上の二世がアメリカの市民権を破棄することになった。

これらの理由からツールレイク・キャンプは、閉所されたのが最も遅く、1946 年 3 月まで開設されたのである。ツールレイク・キャンプの徴兵拒否者であるジミー・ヤマイチは Densho でのインタビューの中でこのような状況を以下のように再考している。

> （収容所内の）農場でのストライキが、問題の一部でしたね。作物は植えられていたんですが、誰も収穫しない。養豚所も閉鎖された。食糧事情は悪くなる一方でした。それはもうひどくて、ある時なんか、各食堂に、カリフラワーが一箱ずつ届けられただけなんてこともありましたよ。300 人用に一箱ですよ。それで花の部分を切って、葉っぱのところは残しておくんですね。葉っぱで何をしようっていうのか？考えたもので、それをきざんで、漬物を作ったんです。もう食べ物を要求して、大騒ぎになりました。少しずつ何か運ばれてくるんですが、とにかく皆を食べさせるために、何とかしないといけない。管理側は我々にちゃんとした食事を与えてないんですから、皆

---

[167] 同上 p.283

[168] Densho、「日系アメリカ人：日系アメリカ人の辿ってきた道を追うオンライン歴史資料館」、http://nikkeijin.densho.org/reference_ch4_04_tule_lake.html、閲覧日 2014 年 11 月 24 日

怒って、それで奉仕団（即時帰国奉仕団、親日派の団体）の人達がもっと力を持つようになったんですよ。「ほら、あいつらは戦わないだろ？管理側と戦わない。だから、こんな扱いを受けるんだよ。」と言うふうにね。そこで力をつけていったんです。管理側がますます弱くなる、陸軍はひどい食事を送ってくるので、彼らにしてみれば、もっとたくさんの人をグループに引き入れる武器が揃ったわけです。それをうまく利用しましたね。だから短期間の間に、あれだけたくさんの人を引き入れられんたんです。それから、管理側が 200、300 人の奉仕団員を捕まえて、400、500 人にもなりました。皆追い出して、収容所を落ち着けようというわけです。団員達は柵に入れられて、それからビスマルクに送られて、それからニューメキシコのクリスタルシティーでしたね。グループ全体を分裂させて、国内中に散らばしたんです。それで問題解決ってわけです。[169]

ヤマイチは当時の食糧事情がいかに大変であったかを説明している。政府に対する批判が奉仕団への参加を誘導したと指摘している。しかしそうした声すら、管理側はそれらの要求を受け入れず、逮捕・監禁・移送を行ったのであった。当時のツールレイク被収容者にとっては、自らがこのような不忠誠の刻印を押されたキャンプに抑留されていたことで、日米関係の悪化によって自分たちが殺されるという恐怖もあったという。そしてツールレイクという監獄の中に更なる監獄を建設していたことはアメリカにおける多文化主義言説の中でも語られることがなかった史実なのである。

ツールレイク・キャンプは、日系移民にとって苦悩の連続であった。日系移民のサバルタンは WRA のトラック事故に対して声を上げてきた。日常生活における食糧事情の悪化に対してもデモやストライキをおこすこで、支配者側に対して生活の改善を訴えたのである。支配者側に対してサバルタン側が声を上げたことは、「従属的社会集団の側から発揮される自律的なイニシアティブの痕跡は、そのひとつひとつが全体史をめざす歴史家にとって図りしれない価値をもっている[170]」ことを証明しているのである。サバルタンの歴史は、ツールレイク・キャンプの歴史がそうであるように「モノグラフのかたち」をとってしか書きえないが、そのひとつひとつの痕跡が、アメリカの多文化史の中で語られる国家の歴史に対して批判的な視座と、多文化主義言説のような統一的な語り

169 同上
170 同上

に対するアンチテーゼとなるのである。

次にツールレイク・キャンプの様子をより詳細に説明するために、収容所内の構造や機能、管理を考察する。

3-5-2　収容所内の構造・機能・管理

ツールレイク・キャンプが開設されたのは 1942 年のことであり、当時、何もないところから建設が進められた。ツールレイクは周囲に木も水もない枯れた土地であった。敷地内では急ピッチで作業が進められた。まず 20×100 フィートの敷地が計測され、その中に一つのバラックが建設され、中は四つの部屋に仕切られた[171]。このバラックというものは人々が生活するための小屋のようなものである。今でいう仮設住宅のようなものであるがそのイメージとはかけ離れている。このバラック建設に使用された資材についての詳細が残っている。ここで明らかとなるのは、バラックに使用された資材は建物用としては不十分な素材ばかりが使用されていたということだ。これらに使用された資材は乾ききり縮まった木材であった[172]。またこれらの資材には無数の裂け目があり、こうした資材によって建設された壁によって、床や室内の壁、天井に外からのほこりが舞い上がってきたという[173]。

夏期には熱く乾ききった風が室内に入り込み、寒い時期には冷たい強風が入り込み、更に外壁はタール・ペーパー（防水用）が巻かれていただけであった。つまり断熱材等は全く敷かれていなかったのである[174]。室内は電球がたった一つだけ用意され、極寒の地で耐えるための石炭ストーブが一つ、簡易ベッド（軍隊用のもの）とブランケットが備品として与えられていたが、それ以外家具は全くなかったという[175]。また棚、椅子、テーブル、キャビネットそして部屋を区切る仕切りも何もなかった[176]。

収容所では WRA が日系移民を効率よく管理するために、彼/彼女らをユニット（グループ）ごとに生活させた。ここでいうユニットとは 250～300 人が共同で生活するグループのことである。ツールレイク・キャンプに関する資料を調べると、一つのユニットに

---

171 Takei & Barbara、前掲書　p.5
172 同上
173 同上
174 同上
175 同上
176 同上

一つの食堂、洗面所、トイレが与えられていたことがわかった。そして彼/彼女らは一ユニットに提供された有限の共有施設を利用して生活していた[177]。シャワーやトイレを使用する時には列ができ、壁やドアは不足していたためプライバシーは存在していなかった[178]。ツールレイク委員会のメンバーによると、ツールレイクの跡地を計測し、当時のトイレ、シャワーの状況を再現したところ、これらの間にある仕切りが存在していなかったという。つまり、彼/彼女らにはプライバシーが無かったことが理解できる。

次にツールレイク内にあったバラックの状態を述べる。縦が約 6 メートル、横が約 30 メートルのバラックがあり、一つのバラックに四つの部屋があるため、一部屋の大きさは約 6×7.5 メートルであった。この一部屋に一家族が住むわけであるがこれは十分なスペースであるとは到底言えない。また、資材等を写真から確認すると、こうした施設の素材は安価なものが使用されており、ツールレイクの気候を考えれば、耐久性の乏しい施設である。居住する施設というよりは小屋である。以下は第 5 章で分析したインタビュイーB が所持している模型である。16 のバラックがあり、それぞれ左右 8 つずつ並んでいる。つまり一つのエリアに 64 家族が生活していたことになる。

177 同上
178 同上　p.6

ツールレイク・キャンプとバラック[179]

バラックに囲まれている 5 カ所の建物は、上から女性のトイレ、男性のトイレ、女性のトイレ、ランドリー、その下がアイロニング・ルームである。この写真には記載されていないがこれ以外に、食堂とレクリエーション・ビルディングがあった。その大きさは他の資料から推測すると、バラック約一つ分（20×100 フィート）であった[180]。

上写真の下部にあるのは一つのバラックを 4 等分した模型図である。6×7.5 メートルの空間は一家族が生活するには狭すぎる。リクリエーション・ビルディングでは同一ブロックの人々が教会、学校、集会として使用することが許可されていた。これらのバラックや共用施設の間には敷石など何もなく、雪解けや雨の日には水浸しになっていた[181]。共用施設での混雑は避けられなかったし、シャワーやトイレ、洗面所は人が溢れ、壁とドアが不足しており、隣同士の様子がそのまま見えた[182]。64 家族が一つのエリアでトイレ、食事、洗面を共用していたのである。当然ながらプライバシーというものは存在していなかったが、一方でキャンプ内の監視員の室内にはこれらの施設が全て備わっていたという[183]。被収容者は気候に関わらず歩いて外の共用施設まで行かなければならなかった[184]。

---

179 インタビュイーB が独自に作成したツールレイク・キャンプの模型。
180 Burton、前掲書
181 Takei & Barbara、前掲書　p.6
182 同上
183 同上
184 同上

以下はヤマイチが作成したバラック内部である。

Japanese American Museum of San Jose[185]

バラック内部は至るところに隙間風が吹き、そして建物自体は木を貼り合わせただけの構造であった。ツールレイクの気候は寒暖の差が激しく、定期的に砂埃が舞うため、室内で洗濯物を干したり、仕切りを作るために部屋の上部に何本もの紐が張られていた。ベッドは大変固く、板の上に薄いシーツが被せられているような簡易ベッドであった。一部屋に一つだけ明かりと暖炉が配備されていた。このレプリカには廃材のようなもので作成した棚や絵等が飾られていた。過酷な状況の中で少しでも家族の空間、或いは自分の空間を豊かにするための工夫を垣間見ることができた。

185 当時の施設を再現したものが Japanese American Museum of San Jose にある。この施設はツールレイクの被収容者ジミー・ヤマイチが再現した施設である。

Japanese American Museum of San Jose[186]

上の写真は様々な理由から兵役を拒否した人々である。ヤマイチを中心として展開されるサンノゼの博物館では、多文化主義において語られることがなかった人々の資料を保存し、後世に伝えている。彼らの全てがツールレイク・キャンプに収容されたわけではないが、こうしたマイノリティーである日系移民の経験は、多文化主義が語る忠誠/不忠誠という単純なモデルに回収されない人々の生の活動として理解できるのである。

本節ではツールレイクに関する資料を収集し、整理しながらその歴史を概観したが、その中で明らかとなったのは支配者側/被支配者側、管理する側/管理される側の中でツールレイク・キャンプの被収容者が生き抜いてきたことであった。また本章では JACL のように日系移民の側にあっても支配者側と協力的関係を維持したものや、あるいはツールレイク被収容者らの内部矛盾も生じていた。そしてツールレイク・キャンプの歴史は、サバルタン論が提示するように、統一的なものではなく、彼/彼女らの痕跡は、従来の忠誠かどうかを判断し、善良な日系移民のみを表象する多文化主義に対して批判的な視座を提供するのである。

日本の日系移民研究においても和書ではこのような歴史書はなく、本稿では全て洋書やアメリカの日系移民機関が公表している史実を元にツールレイク・キャンプの歴史を考察した。このことからもアメリカ社会において注目されることのないツールレイク・キャンプのサバルタン史は重要であり、日本においても今後研究が進んでいくことが期待される。

本節ではサバルタンの歴史としてツールレイク・キャンプの歴史を記述し、サバルタ

[186] Japanese American Museum of San Jose, Draft Resistance

ンという集団の歴史から考察したが、次章ではツールレイク・キャンプの被収容者ら個人のナラティブを分析する。これらナラティブの語りはまだ十分に語られていないナショナル・アイデンティティーの決定不可能性を提示している。筆者が行ったツールレイク・キャンプに関するインタビューとその分析を行うことで、ツールレイク・キャンプの歴史ではみえてこない個人の複雑な状況やアイデンティティーに注目する。

第 4 章　オーラル・ヒストリーの可能性と方法

第 1 章から第 3 章で論じてきたように、マイノリティーの声が歴史の舞台に登場することは今までほとんどなかった。マイノリティーの多様な視点や経験、或いは思考を歴史に登場させることについて多くの歴史家達が否定的であったことを論じてきた[1]。実際、一般的な国民の歴史において登場する人物や事象は、近代ナショナリズムとの関連を示唆するものばかりであった[2]。このように、現在まで語られてきたアメリカの多文化史や国民史は社会的に排除された個人の事例をほとんど取り上げることがなかったのである。社会的に排除された人々の歴史は国家の歴史において注目されてこなかった。一方である特殊な史実や個人の記録が注目されるのは、それらが国家との関わりや国の歴史の中心的な関心事となる場合のみであった。

しかし近年になってようやく歴史において排除され周辺化されたマイノリティーの声を記録する方法が注目されるようになった[3]。例えば、エルヴィン・ゴッフマンは、『アサイラム―施設被収容者の日常世界』の中で、刑務所、収容所、隔離収容所といった全

---

[1] 第 2 章で述べたように、近代国民史の礎を築いたヘーゲルは『歴史哲学講義（上)』の中で国家形成とその歴史の形成過程を合理性を備えた人間による歴史として理解していた。彼は個人の特殊な意思によって歴史が形成されるのではなく、共通の国民性によって歴史は形成されると指摘する。彼はいずれの国民国家にも存在する「服従や暴力や支配者への恐怖」という共通した国民の感情的なつながりがあることを理由に、「未開な国家においても、個人の特殊な意思がよしとされるのではなく、特殊なものがすてられて、全体の意思が本質をなすものとされています」と理解していた。つまりヘーゲルにとって歴史上の出来事とは、個人の特殊性から作られるのではなく、共同精神によって作られると考えていた。国家が形成されたり、或いは国家形成の礎となる歴史が形成されるのは、総じて共同精神によるものと理解していた。ヘーゲル、前掲、『歴史哲学講義（上)』p.84

[2] こうした近代ナショナリズムの歴史の問題を提示し分析したのがイギリスの政治学者 E.H. カーである。国際関係と国民との関係について、カーは『ナショナリズムの発展』(原著は *Nationalism and After*) の中で詳細に分析している。彼はルソーによる「国家」と「人民」との同一視にいち早く注目し、近代ナショナリズムの形成過程を考察した。カー, E.H.(2006)『ナショナリズムの発展』みすず書房　pp.12-15

[3] 排除や抑圧の歴史を解放するため、オーラル・ヒストリーやナラティブ・アプローチによる歴史の再検証が行われている。
それ以前にも抑圧者の声に注目した研究がある。例えば、イギリスの社会学者であるポール・ウィリスは『ハマータウンの野郎ども―学校への抵抗・労働への順応』の中で、労働階級の子どもたちが通う学校について考察している[3]。ウィリスは労働階級が優勢を占める学校に在籍する、学校に反抗する生徒グループの実地調査をおこなった。彼はハマータウンの生活史に注目し、生徒との面談をおこない、子どもたちの声を紹介し分析することで、学校に対する反抗の様相を明らかにした。原著書には、*Learning to Labour* という表題がつけられている。

制的施設、とりわけ精神病棟の施設について、被収容者の視点から考察している[4]。この著書でゴッフマンは、施設において被収容者が効率的に管理され、刑務官や職員に支配されていく実態をフィールド調査と彼/彼女らのインタビューや生活史から解明している[5]。これらの研究によって、抑圧された声（とりわけナラティブ・インタビューやオーラル・ヒストリー）による従来とは異なった歴史的分析が可能となった[6]。本章では近年のオーラル・ヒストリーやナラティブ・インタビューが従来の歴史にどのような影響を与えているのかを分析し、本章において紹介する日系移民のナラティブ・インタビューとオーラル・ヒストリーとの関連を議論する。本章では筆者の行ったナラティブ・インタビューを考察している。そのインタビュー内容の分析は、直接的に過去の歴史を顧みる作業である。そのため、本章ではオーラル・ヒストリーの方法論を明確にし、その方法論を援用することで、日系移民の中の更にマイノリティーに属する人々の多様なナラティブに焦点を当てることを試みる。第 4 章は以下のように構成される。

第 1 節でオーラル・ヒストリーによる方法論を明らかにする。第 1 項ではオーラル・ヒストリーとは何かについて考察する。ここでは本章で扱うオーラル・ヒストリーの定義を提示する。第 2 項ではナラティブ・インタビューの方法論を提示する。ナラティブ・インタビューの方法論は先行研究や実際に行ったインタビュー調査を元に作成している。第3項ではそれらのインタビューをどのように記録化したのかについて詳細に議論する。これによってオーラル・ヒストリーの方法論とその目的を簡潔に提示すると同時に、ナラティブ・インタビューによる調査方法が、抑圧された日系移民のマイノリティーの存在を明らかにしていくための方法として最も適していることを明確する。

4-1　オーラル・ヒストリーによる方法論

---

[4] ゴッフマン,エルヴィン(1984)『アサイラム―施設被収容者の日常世界』石黒毅訳　誠信書房

[5] こうした徹底した経験主義に基づく社会学の手法は、社会学者ハーバート・ブルーマーによって提唱された。彼は『シンボリック相互作用論―パースペクティブと方法論』の中で、社会理論の概念のあいまいさに言及し、社会理論が実際の経験を明らかにしていない点を強調した。そこで徹底した経験主義に基づく調査やオーラル・ヒストリーの視点を取り入れたのである。
ブルーマー,ハーバート（1991)『シンボリック相互作用論―パースペクティブと方法論』後藤将之訳　勁草書房　pp.182-199
ゴッフマンの著書においても、こうした経験主義に基づき、被収容者らの声が頻繁に引用されている。マイノリティーのナラティブが考察の対象となっているのである。

[6] トンプソン,ポール（2002)『記憶から歴史へ―オーラル・ヒストリーの世界』酒井順子訳　青木書店

近年になってオーラル・ヒストリーという言葉が引用された論文や著作が多数出版されている。オーラル・ヒストリーは言葉の通り、口頭による歴史を意味する。オーラル・ヒストリーは多様な学問領域で使用されている言葉であるが、いくつかの定義を確認しておく必要がある。本稿において筆者は、抑圧者の歴史と被抑圧者の歴史を分けて考察し、抑圧者の歴史が総じて国民国家を前提として語られている点を批判してきた。そして被抑圧者の歴史、あるいはマイノリティーの歴史をサバルタン論や史実を元にした文学作品に登場する人物を通して考察してきた。彼/彼女らのアイデンティティーの決定不可能性について考察してきたのである。しかし更にこの論稿を進めていくためには、より詳細にツールレイク・キャンプの元収容者の声を集める必要がある。なぜなら彼らの声は今まで注目されてこなかったツールレイク・キャンプに関する貴重な資料となるからである。そして歴史的にみてもまだ十分に分析されていない事象であるからである。元収容者らの声はツールレイク・キャンプという迫害されたサバルタンの歴史に息吹を与え、生きた歴史の証言となる。サバルタン化されたマイノリティーのアイデンティティーに着目するためには、当事者の声に着目する必要があり、そのことは被抑圧者やマイノリティーの歴史を再構築していくことにつながる。

日系移民の歴史は従来、日系移民の中でもマイノリティーの歴史として語られている問題を第 2・3 章で批判してきた。日系移民研究における従来の歴史とは、マイノリティーという名の下で語られてきた勝者の歴史であった。そこではマイノリティーの中のマイノリティーが語られることはなかったのである[7]。本稿においてはその勝者の歴史の中で語られることがなかった人々に注目した。そこで本稿では、人々の語りに注目する研究方法としてオーラル・ヒストリーを援用する。しかしオーラル・ヒストリーは様々な研究領域と視点から援用されているため、ここではまず多様にある定義の中から本稿で援用するオーラル・ヒストリーの定義を明確にしておく。つまりどの定義がマイノリティーに注目する本稿において重要であるかを明確にしておく必要があり、質的調査研究の中でどの調査方法でインタビューを行い記録したのかを明らかにする。

4-1-1　オーラル・ヒストリーとは何か

[7] ここでのマイノリティーの歴史とは、強制収容の中で注目されてこなかったツールレイク・キャンプの事象と、ツールレイク・キャンプに収容された人々の歴史を指している。

オーラル・ヒストリーは、欧米を中心として 1970 年代に新しい歴史学の手法として、市民、女性、エスニック・マイノリティーの歴史などの研究分野において積極的に採用されるようになった[8]。その後、日本でも研究手法として広く定着しつつある。

初めに本稿で援用するオーラル・ヒストリーの定義を引用しておこう。本稿においてはオーラル・ヒストリーを「人々の語った過去の経験を基に歴史学を組み立てていく方法[9]」と定義する。今回筆者が実施したインタビューの対象者は、研究者や専門的立場の人々ではなく、日系移民として強制収容についての経験をした人々であった。2009 年から 2014 年まで実際にインタビューを行ったのは 30 人程であるが、インタビューを行ったいずれのインタビュイーも日系移民を研究する専門家ではなく一般の市民である。

酒井順子によるこの定義以前には、御厨貴の著書『オーラル・ヒストリー』が、オーラル・ヒストリーを「公人の専門家による、万人のための口述記録[10]」と定義していた。御厨は「公人の声」を公の体験と位置付けているが、これは政治家や官僚などの調査を念頭においているため、狭義の定義といえる。御厨の定義で問題となるのは、オーラル・ヒストリーの対象が国家官僚や公務員といった「公人」や専門家という限定された対象になっている点である。ここではオーラル・ヒストリーの対象者が専門家でなければならない理由が見当たらない。

一方酒井による定義は、語り手が専門的立場であるかどうかを問うことなく、多様な語りによる過去の回顧と検証を試みる定義といえる。オーラル・ヒストリーでは、研究の対象に関係する人であれば、彼/彼女らの社会的地位や立場に全く関係なくインタビューが行えるよう、対象者は常に開かれている必要がある。つまり酒井の定義にある「人々の語った過去」における「人々」は、その対象者の専門性に特定することなく、自由に開かれた対象者ということになる。対象者が定義によって一切の縛りを受けないことが、オーラル・ヒストリーにおいては重要である。

更に酒井は対象者という観点と歴史という観点を結び付けて考えている。声は記録として残るが、記録として残すだけではなく、それをもとに「歴史学を組み立てていく」

---

[8]廣谷鏡子、松山秀明（2012）「オーラル・ヒストリーを用いた新しい放送史研究の可能性」『放送研究と調査』NHK 放送文化研究所　62(1)　pp.46-55　p.46

[9]酒井順子（2008）『市民のオーラル・ヒストリー―歴史を書く力を取り戻す』かわさき市民アカデミー出版　p.5

[10] 御厨貴（2007）「オーラル・ヒストリーとは何か―「語り手の浸透」から「聞き手の育成」へ―」御厨貴『オーラル・ヒストリー入門』岩波書店　p.4

と明言している。そのためには 3 つの要素が必要となる。まずは声を集めることである。これは次に説明するナラティブ・インタビューで詳細に議論している。ナラティブ・インタビューでは対象者を定めインタビューを行うことが重要である。次に酒井のいう「記録」の作業である。ここでは雑多な情報の中から声を取捨選択する必要がある。なぜなら対象者の声の中には分析対象とは異なるものが含まれているからである。そして最後にその声を歴史学の中で考察することである。これによって従来の歴史の語りを再考することが可能となる。

酒井は実際にインタビューを行う対象者を限定することなく、或いは声を聴き取るだけでなく、記録し、その記録を歴史として組み立てる一連の作業としてオーラル・ヒストリーを位置付けた。このような理由からここでは酒井の定義を元に、オーラル・ヒストリーを分析する。

オーラル・ヒストリーに関する情報の公開については御厨の研究方法は卓越している。例えば、テープに録って大切に保管し、公開する旨をインタビュイーに確認するよう説明している[11]。オーラル・ヒストリーはインタビューを取り、公開することが前提となっているためこうした公開や保存の許可を得る作業を論じている。またオーラル・ヒストリーの限界、例えば過去の歴史について語れることと語れないことが当事者に存在している場合やインタビューに該当する歴史的語り自体をクロスチェックすることなどもここで提示されている。

次にオーラル・ヒストリーの利点を述べる。オーラル・ヒストリーには、「人々の語った過去の経験」に注目するため、そこからインタビュアーは新たな歴史的発見をすることが可能である。オーラル・ヒストリーは、文字資料から得ることができない多くの情報を得ることが可能である。例えば日系移民のインタビューにおいては、強制収容の経験について、彼/彼女らが過酷な環境におかれていたことや、それまで知らなかった史実を知ることができ、それまでの文字資料からは理解できなかった歴史を、彼/彼女らの声から発見することができる。ナラティブによる史料が単なる史料として扱われるのではなく、オーラル・ヒストリーが一つの歴史へのプロセスや方法として理解されることも重要である。このような声によって、現在まで注目されてこなかった多様な史実を得ることができ、歴史学的にもそれらの声を反映させることによって、歴史自体を再考することが可能である。

[11] 同上　p.11

次にオーラル・ヒストリーにおける聴き取りと歴史について考察する。ポール・トンプソンは聴き取ったものを歴史化する方法がオーラル・ヒストリーであると指摘する[12]。つまり彼はインタビューをとおして拾い集められた声を、歴史の中に構築していくという歴史叙述の方法としてオーラル・ヒストリーを考えていた。彼のこのような解釈を更に進め、オーラル・ヒストリーの可能性を展開したのが桜井厚や武田徹である[13]。「一人の声」から「公共的な声」として限りなく構造的に分析できるのがオーラル・ヒストリーであるとする武田は、よき作品化のためには誠意あるインタビューに加えて構築についての理解が必要で、巧みな語りの解析と、作品化における的確な再構築の技術が要求されることを指摘している[14]。つまりオーラル・ヒストリーの可能性は、その声をただ書き写すだけでは全く意味がないということである。インタビュイーの声には様々な意図（インタビュイーの意図するものだけでなく、社会的な背景やインタビュイーの認識）が含まれており、それらの意図は時には何層にもなっている。そこでは社会と個人とを関係づけるヒントが含有されており、個人と社会とを結びつけるもの、或いは引き離すものが何であるのかを構造的にインタビュアーが分析する必要がある。つまり、声はある集団を一般化するための手法というよりも、その声を通して、インタビュイーが何を伝えたいのか、どのような社会に身をおいてきたのか、そのような社会において個人がどのように抑圧されてきたのかについて分析するツールとなる。そこでは当然、インタビュアーによる解釈やインタビュアーが後に文字化していく上での作品化の作業も重要となる。これらの作業について武田は「能動的構築物としての作品化」という言葉を用いて、インタビュアーの能動的構築の作業を推奨している[15]。

4-1-2　ナラティブ・インタビューの方法論的研究

本稿の研究ではアメリカ多文化主義の言説を批判し、多文化主義の中で表象されてきた日系移民の問題を提示している。本章ではそうした多文化主義言説の中で表象されてこなかった決定不可能な日系移民のインタビューに焦点を当てている。よって本研究は

---

[12] トンプソン、前掲書
[13] 桜井厚（2002）『インタビューの社会学』せりか書房、並びに武田徹「作品化の技術」御厨、前掲書を参照されたい。
[14] 武田「作品化の技術」、御厨、前掲書
[15] 同上　p.94

質的研究であり、インタビューを行った人々のオーラル・ヒストリーに注目している。以下は近年の質的調査研究の方法論である。

質的調査で用いる具体的な手順については、クランディニン・マウスタカスが「ナラティブな研究者が行うこと」の見取り図を作り上げており、マウスタカスは質的調査における現象学的な方法が持つ哲学的な見解と手順を説明している[16]。アンセルム・ストラウスと ジュリエット・コビンはグラウンデッド・セオリーの諸手順を、更にハリー・ウォルコットはエスノグラフィー、ロバート・ステイクは事例研究の諸手順を明らかにしている[17]。それらを踏まえて以下のように質的調査を要約した。

4-2-1　調査研究の種類

1. エスノグラフィー

ここでは研究者が、手つかずの文化集団は長期にわたってそのままの状態で研究するのだが、その際に収集されるのは、主として観察によるデータである[18]。研究プロセスは柔軟性があり、フィールドで遭遇した実際の現実に対応するように文脈に応じて展開していく[19]。

2. グラウンデッド・セオリー

研究協力者の観点に根付いた形で、プロセスや行為や相互行為に関する一般化された抽象的な理論を引き出すことにある。この研究プロセスはデータ収集、情報に関するカテゴリーの精製と相互関係を解明し、いくつかの段階を踏むものである[20]。この研究の特徴は研究途上で浮上してきたカテゴリーを用いた比較と、情報の持つ類似と相違を最大化させるような多様な集団における理論的サンプリングの二つである。

---

[16] Moustakas, C. 1994. *Phenomenological Research Methods*. Thousand Oaks, CA: Sage.
[17] Straus, A., & Corbin, J. 1990. *Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Techniques*. Thousand Oaks, CA: Sage
Wolcott, H.T. 1999. *Ethnography: A Way of Seeing*. Walnut Creek, CA: AltaMira.
Stake, R.E. 1995. *The Art of Case Study Research*. Thousand Oaks, CA: Sage
[18] Creswell, J.W. 1998. *Qualitative Inquiry and Research Design: Choosing Among Five Traditions*. Thousand Oaks, CA: Sage
[19] Lecompte, M.D., & Schensul, J.J. 1999. *Designing and Conducting Ethnographic Research*. Walnut Creek, CA: AltaMira
[20] Strauss & Corbin、前掲書

3. 事例研究

研究者は、プログラム、出来事、活動、プロセス、一人或いは数名の個人を徹底的に探究していく。事例は時間と活動に関係しており、研究は一定期間を通じて、多様なデータを収集し詳細な情報を収集する[21]。

4. 現象学的研究

ここでは研究者は、ある現象に関わる人間の経験の「本質」を、研究協力者の描写に即して、明らかにしていく。そのためには「生きられた経験」を理解することが必要である。そしてその手順の中には、限られた数の対象に対して、意味のパターンや関係を生み出す集中的で継続的な関わりを通じて行われる研究が含まれる[22]。

5. ナラティブな研究

これは研究者が、諸個人の生活を研究し、彼らの人生のストーリーを明らかにしようとして、何名かの個人に質問を行う探求の一形式である。したがってここでの情報は、ナラティブな時系列に沿って研究者によって再び物語として語られたものである。最終的にはナラティブは、研究者の人生から見た視点と研究協力者の人生から見た視点が、結びついたものとなる[23]。

以上のように質的研究における調査においても 5 つの分類があり、1. 手つかずの文化を調査するもの、2. 協力者から得た資料をデータ化し比較するもの、3. 事例のデータを収集するもの、4. ある現象に関わる人間の研究の「本質」を調査するもの、そして 5. ナラティブを明らかにし解釈するものがある。これらの質的調査から筆者が選択した調査はナラティブな研究調査である。なぜなら現在まで十分に議論されてこなかった日系移民（特にツールレイクの被収容者の声）に注目するためにはナラティブ・インタビューが研究デザインとして適しているからであった。ツールレイクの歴史を再考するためには、被収容者体験と彼/彼女らを取り巻く社会について、研究協力者自身から語ってもらう必要があったからである。本調査では特に特定の出来事や現象を調査する事例研究

---

[21] Stake、前掲書
[22] Moustakas、前掲書
[23] Clandinin, D.J., & Connelly, F.M. 2000. *Narrative Inquiry: Experience and Story in Qualitative Research*. San Francisco: Jossey-Bass

や現象学的研究と重なり合う点はあったものの、基本的には特定の事例に関わった人々のナラティブに焦点を当てている。そこでナラティブ・インタビューの調査方法について次に議論する。

4-2-2　調査研究の目的・意図・目標

調査研究の「目的」

ナラティブ・インタビューにおいてまず必要となるのは、「目的」「意図」「目標」である。アメリカの歴史学を考察すると、日系移民や他のエスニック・グループの歴史はアメリカへの貢献或いは国民として表象される中で語られてきた[24]。従来の歴史はナショナル・ヒストリーが前提となっており、1980 年代に登場したアメリカ多文化主義においても、バックグラウンドの異なるエスニック・グループが如何にアメリカ合衆国に貢献してきたのかが前提となって議論されてきた[25]。しかし日系移民においてはそうした国民国家の枠組みにおいて語られないアイデンティティーの葛藤に陥った人々が存在した。彼/彼女らはアメリカでは「不忠誠者」として扱われてきた。アメリカの歴史・社会・文化の中で彼/彼女らは排除されてきた。そこでナラティブ・インタビューを通して「不忠誠者」が収容されたツールレイク・キャンプの詳細を調査することと、このキャンプに収容された人々が語るアイデンティティーの葛藤を調査することを目的に、ナラティブ・インタビューを行った。

調査研究の「意図」

これらの日系移民に関する抑圧された歴史（サバルタンの歴史）を再考するために、ツールレイク・キャンプに関する聞き取り調査を行い、ツールレイク・キャンプの被収容者の歴史的な意味を検討することを意図して調査を行った。ここでの調査では、ツールレイクに関する出来得る限りの詳細を語ってもらい、当時の収容所の状況や彼/彼女らのライフ・ヒストリーを通して、従来国民を前提として語られてきた歴史を批判し、断

---

[24] Takaki, R. 2008. *A Different Mirror: A History of Multicultural America*. New York: Little Brown and Company

[25] Schlesinger Jr., A. M. 1992. *The Disuniting of America: Reflections on the Multicultural Society.* New York: Norton

片化された歴史を収集することを意図して調査を行った。

調査研究の「目標」

事前に決められたアウトカムではなく、方向付けされないインタビューによって、決定不可能な日系移民のアイデンティティーを分析することを目標とした。そこで得られる情報は「個人の成功の物語」といった情報ではなく、当時から現在まで続く被抑圧者の情報である。そしてツールレイク・キャンプや彼/彼女らのナショナル・アイデンティティーの決定不可能性を分析することで、ナショナルな枠組みにおいて語られる善良な「日系アメリカ人」の表象とは異なる歴史を記述ことを目標とする。

4-2-3　調査研究の方法

2009 年 1 月 3 日から 7 日までに行った最初の調査ではカリフォルニア州を中心に 15 名に強制収容所の基本的な情報を得るためのナラティブ・インタビューを実施した[26]。その際に、あるインタビュイーからツールレイクという収容所の実態を知り、その後、ツールレイク・キャンプに関する史実と資料を収集しながら、2013 年には帰米や日本に戻った日系移民らにインタビューを行った。そして 2014 年 3 月 5 日から、スタンフォード大学ロナルド・ナカソネの協力の元、ツールレイク・被収容者のみを対象としたナラティブ・インタビューを 8 名に実施した[27]。場所はカリフォルニア州内のケア・ハウス、各インタビュイーの自宅、サンノゼ・ジャパニーズアメリカン・ミュージアムで実施した。また本稿では、各々のナラティブを詳細に考察するために、以下の手法から、3 名に絞って紹介し、各々の証言を分析する。

・ツールレイク・キャンプについての記憶がより鮮明であること

・ツールレイク・キャンプと忠誠心調査について、具体的な証言を得ることができたこと

[26] 2009 年のインタビューでは、スタンフォード大学ロナルド・ナカソネ、サンフランシスコ在住のセイコウ・フジモト、スタンフォード大学のマルタ・グリューゼンの研究協力を得て実施した。

[27] 2014 年には、この他にカリフォルニア州在住のベッティ・ニシ、 カレン・フジイ、サンノゼ・コミュニティー・リーダーのジミー・ヤマイチらの研究協力を得た。

・それぞれのインタビュイーの証言が重なっていないこと

3名以外のインタビュイーの証言も大変貴重なものであった。いずれのインタビュイーもツールレイク・キャンプの史実を多く含むものであった。8名のインタビュイーからツールレイク・キャンプの建物の構造や、生活等、多くの証言を得られることができた。本稿では、ツールレイク・キャンプに関する証言が鮮明であり、加えて忠誠心調査について具体的な証言が得られ、更にそれぞれのインタビュイーの証言内容が重複していないことを踏まえて、3名を選定した。

3名のインタビュイーと実施日時、実施場所は以下の通りである。

	実施日時	実施場所
インタビュイーA	2014年3月5日 14:00－16：00	インタビュイーAの友人宅
インタビュイーB	2014年3月5日 11:00－12：00	ケア・ハウス
インタビュイーC	2014年3月8日 10:00－12：00	インタビュイーCの自宅

研究調査を行う場所については細心の注意を払った。というのもジョン・クルスウェルが指摘するように、インタビューの場所はあるがままの状況で行われるのが通例であり、研究者、研究協力者が十分考え、深く没頭することが可能となる場所を設定する必要があったからである[28]。

また、今回のインタビュアーの質問とインタビュイーの応答は全て英語で行われた。これは証言を得ることができた人々の大半が英語を母国語としており、日本語での聞き取りは困難であったからである。また、全てのインタビュイーに研究調査のためのインタビューであること、そして名前を出さず、インタビュー内容を学術論文の中に引用すること等を明示した[29]。今回の調査では各研究協力者に名前を伏せるか否かの確認をした。すべての解答でインタビュイーの名前を伏せる必要は無かったが、個人のプライバシーと権利を厳守するため、本稿で紹介する3人のインタビューはそれぞれインタビュイーA、

[28]Creswell, J.W.（2007）『研究デザイン―質的・量的・そしてミックス法』操華子・森岡崇訳　日本看護協会出版会　p.202

[29] 筆者はこれらの研究調査の際に必要となる研究協力者への目的の言明について、Merriam, S.B. 1988. *Qualitaive Research and Case Study Applications in Education*. San Francisco: Jossey-Bass を参考にして調査を行っている。

B、C とした。これはインタビューの内容自体が個人に委ねられ且つ繊細な内容であるからである。

研究者は、情報提供者の権利、ニーズ、価値、願いを尊重する義務を負っている[30]。そこで

１）情報提供者に明確に伝わるように、研究自体を文書と言葉で説明[31]

２）研究協力者に協力の許可

３）論文としてインタビュー内容を引用することの許可[32]

を確認した上で調査した。

記録はすべてテープレコーダーによって録音された。この際の録音も研究協力者に許可を得て実施された。また同様に写真の許可も得た。ただし顔写真に関してはプライバシー保護の観点から、論文等には使用しないことを述べた。また資料として撮影した写真画像は掲載の許可を確認した。名前の記載については、8 名中 7 名が名前を記載することに同意した。1 名のみが実名の公表を控えたいとの要請があったため、その他のインタビュイーの名前も公表せずにインタビュー内容を引用する旨の同意を得た。

次に質問項目では事前に決められたアウトカムによってではなく、方向付けされていないインタビューを得るため、まず筆者の研究内容と今回の調査目的を説明した。ここでは筆者が「日系移民の歴史、特にツールレイク・キャンプの歴史を調査しているということ」と「従来の日系移民史は多数派の人々によって語られた歴史であるため、ツールレイクの歴史が学術的に注目されてこなかったこと」を挙げて調査の重要性を述べた。次に以下の質問をした。

・あなたが歩んでこられた人生について簡単に聞かせてください。

・ツールレイク・キャンプの詳細を聞かせてください。

---

[30] Marshall, C., & Rossman, G.B. 1999. *Designing Qualitative Research* (3rd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage

[31] 筆者は各々のインタビュイーと面識があり、事前に連絡できるインタビュイーには実施内容を文書にて連絡した。更に研究協力者ロナルド・ナカソネに全てのインタビュイーに文書での協力依頼をした。

[32] 本稿のインタビューは、博士論文として引用する際の条件（プライバシーの保護や証言内容の確認）について、筆者とインタビュイーで確認をとり、更に研究協力者を介して、明確な同意が得ている。

・あなたはツールレイク・キャンプの史実（語られ方）をどのように捉えていますか。
・ツールレイク・キャンプと忠誠心調査（ナショナル・アイデンティティー）についてあなたはどう考えていますか。教えてください。

筆者はインタビュイーの内容を方向付けることがないよう、またオープン・エンドなインタビューとなるよう、以上のような質問を設定した。

また、筆者はインタビュアーとしてその立ち位置に注意した。インタビュアーは、今回のインタビュイーらと面識があり、筆者がカリフォルニアで生活していた際、各々のインタビュイーらと日系コミュニティーを介して親交があった。筆者は、ツールレイク・キャンプについてインタビューすることは初めてであったことから、インタビュアーとして、調査のためにツールレイク・キャンプの詳細と、忠誠心調査について知りたいという点を強調した。インタビュアーは、インタビュイーのどのような証言に対しても、その証言内容を掘り下げるよう質問をした。

4-2-4　質的調査の利点と限界

以上までナラティブ・インタビューの方法論を述べてきたが、最後にナラティブ・インタビューの一般的方法と利点そして限界を指摘しておく。今回のナラティブ・インタビューはツールレイク・キャンプという過去の歴史を調査し再考することが目的であり、インタビュー・データ（ナラティブ・インタビューのデータ）をオーラル・ヒストリーの手法で分析するものである。その際のインタビューはエスノグラフィーのように直接現地に赴き、その生活集団を観察するものではないため、インタビュイーのフィルターを通した「間接的な」情報源となる。しかしこのことは同時にインタビュイーが実際に体験した事実として語っているために、歴史的情報として分析することが可能である。インタビューの利点と限界についてクルスウェルは以下の表で説明している。

質的データ収集のタイプ、オプション、利点、限界

タイプ	オプション	利点	限界
インタビュー	・対面：一対一で行う個人のインタビュー ・電話：電話によるインタビュー ・グループ：研究協力者のグループに対して、研究者が行うインタビュー	・研究協力者を直接観察できないときに、便利である。 ・研究協力者が歴史的情報を伝えることができる。 ・研究協力者が、質問の流れを「コントロール」できる。	・情報提供者のフィルターを通した「間接的な」情報となる。 ・ありのままの状況下ではなく、設定された「場所」での情報となる。 ・研究者の存在が、反応にバイアスを与える危険性がある。 ・人々の表現や認識は決して均質ではない。

Creswell, J『研究デザイン―質的・量的・そしてミックス法』表 10-2[33]

今回の調査では、基本的には 1 対 1 の対面でインタビューを行った[34]。クルスウェルが指摘するように本調査では、研究協力者の歴史的証言を得ることができ、またインタビュアーがある証言に対して質問することで、その詳細な証言を得ることができた。しかし表のように、それらの情報はインタビュイーのフィルターを通した「間接的」情報であり、ありのままの状況下ではない。実際にツールレイク・キャンプ内で観察をすることができないため、それらの情報は設定された「場所」での情報となった。

また「研究者の存在が、反応にバイアスを与える可能性がある」ことも本調査の限界として指摘しておく必要がある。今回のインタビューでは研究協力者に調査の目的を提

[33] Creswell、前掲書　p.208
[34] インタビュイーA と C の場合は彼/彼女ら以外のツールレイク・キャンプの被収容者と一緒にインタビューを行ったが、調査内容の中心は A と C に限られた。

示する必要があった。それはツールレイクの歴史がなぜ注目されてこなかったかであった。そのことに言明して調査を行ったため、インタビュイーはその要因について答えるよう求められていた。特にツールレイク・キャンプの歴史はアイデンティティーと深く関係しているため、インタビュアーの存在や立場によって、反応にバイアスを与える可能性があった。しかし今回の調査で筆者は研究協力者に対して、ツールレイク・キャンプを分類化して証言を得ようとしなかった。ツールレイク・キャンプの歴史を知りたいということ、そしてツールレイク・キャンプと忠誠心調査について、被収容者らがどう考えているかを自由に回答してもらった。よって研究協力者は、インタビュイーの考えや意図を曲解するような質問は行わなかった。

4-3　トランスクリプションと分析方法

アメリカにおいて、ツールレイク・キャンプを経験した日系移民のオーラル・ヒストリーは大変貴重である点については既に述べた。彼/彼女らの声が今まで十分に注目されなかったことから、今回のインタビューは、事前調査とは異なった解釈や事象の発見が可能となった。これらのインタビューの声をより効果的に利用する架け橋となるものがトランスクリプションである。ここでは本調査で得られたオーラル・ヒストリーのデータを記録することについて議論する。オーラル・ヒストリーの技法、特に記録について丹羽清隆は次のように指摘する。

> オーラル・ヒストリーにとって重要なのは、語られた言葉ですが、その言葉は、音声として空気を一時震わせて消えてしまいます。そのため、なんらかの媒体に録音しておかなければなりません。しかし、録音した音声だけでは流通性・閲覧性・検索性に乏しく、オーラル・ヒストリーを有効に幅広く活用するためには文字化することが必要になります。[35]

ここでは文字化の重要性を説明している。話し言葉を書き言葉に直す一連の作業をトランスクリプションという。まずは話し言葉と書き言葉の違いについて考察する。話し言葉は音声の属性として、大小、肯定、音声を持っている。言葉の継期時間や言葉と言

[35] 丹羽清隆（2007）「記録の技法（トランスクリプション）」御厨、前掲書　p.51

葉の感覚なども書き言葉と異なる。これらの話しの抑揚や感覚は文字化するとすべて消えてしまう。また相手の質問に対して、相手は「わかっている」という表情をすれば、当然ながら話し手はその内容を省略する。またその逆も考えられる。また話し言葉には実際に繰り返しや抑揚による意図の強調が含まれる[36]。

また、非言語による会話というものも存在する。例えば身振りや手振りや表情も話し言葉においては重要である。話し手が何を言いたいのかについて聞き手はそうした非言語コミュニケーションのツールによって相手の意図を聴き取れるのである。

一方、書き言葉にはひらがなやカタカナといった文字の異なり、或いはローマ字や数字などの文字の種類がある。そして文字以外にも記号が存在する。特に「句読点」や「括弧」は音声として語ることができず、これらの記号によって文の区切りや意味を正確に伝えることが可能となる。これらを踏まえてトランスクリプションをする必要がある。沖裕子は無作為に話しことばを文字化することに次のような警鐘を鳴らしている。

> 談話は、言語音のみの文字化では不十分である。文章は言葉のみで文脈が生成されることを目的に書かれるが、談話は、発話者の声そのものやしぐさ、服装など、複数の情報が同時並行的に情報伝達の媒体となって、時間的に添って不可逆的に進んでいる。コミュニケーションに関与する非言語情報については、必要であればそれらにも着目し、文字化を試みる必要がある。[37]

このように話し言葉による意味や非言語コミュニケーションにも注意しながらその意図を汲み取って文章化する必要がある。またインタビューの目的や利用法に即して、話し手に即して、臨場観を活かしながら、さまざまな工夫をすることによってオーラル・ヒストリーのトランスクリプションを作成することが可能である[38]。

本稿においてもインタビュイーの証言を全て紹介しているわけではない。まずテープレコーダーの音声をテープに起こし、その後、不要な音声や意味の通じない音声を切り取った。更に、それぞれのインタビュイーの証言はどれも貴重ではあったが、繰り返しとなる事象の音声や、繰り返しの表現は要約し、強調して語られた音声を中心に文章化

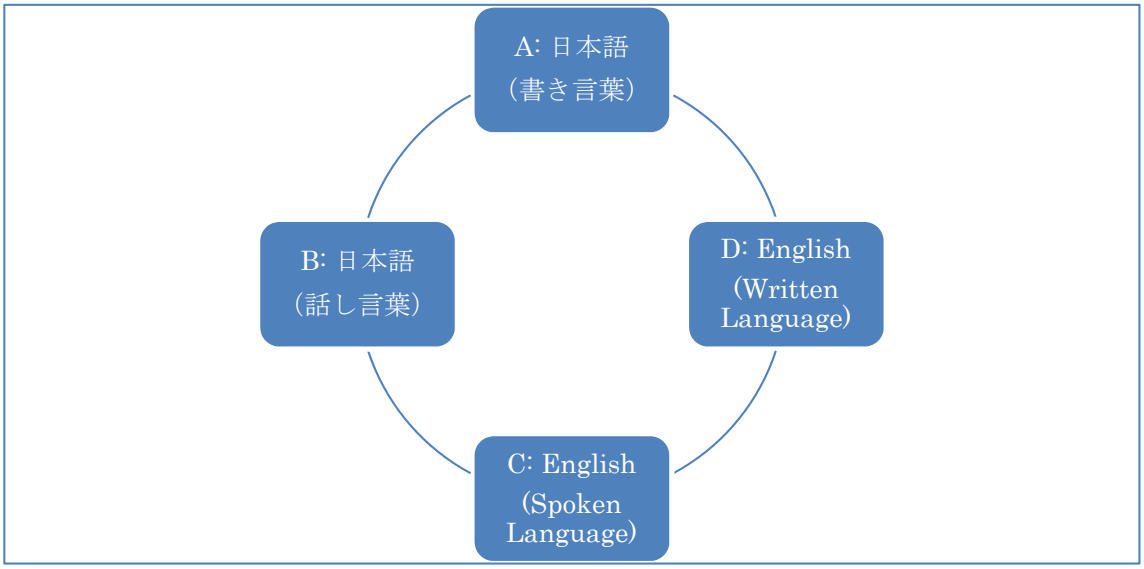
---

[36] ヴァーカス,マジョリー（1987）『非言語コミュニケーション』石丸正訳　新潮社
[37] 沖裕子（2006）『日本語談話論』和泉書院　p.20
[38] 丹波、前掲書　p.73

した。

更にオーラル・ヒストリーという観点から、できるだけ個人の経験談を紹介した。ツールレイクに収容された経緯、そして収容所経験、インタビュイーのツールレイクに関する意見・思考・主張、インタビュイーが行っているツールレイクに関する活動等を要約した。

次に翻訳の作業について議論する。以下は丹波が作成した翻訳とトランスクリプションの図である。



「翻訳・通訳とトランスクリプション」[39]

翻訳は、英語の書き方を日本語の書き言葉に変換すること、あるいはその逆である。通訳は話し言葉を日本語の話し言葉に変換すること、あるいはその逆である。トランスクリプションは話し言葉を書き言葉にすることである。本調査でもこれら通訳、翻訳、トランスクリプションの三つの方法を利用した。英語によるインタビュー調査を文字化する場合には、C: English (Spoken Language)からスタートし、stenography transcription（速記のトランスクリプション）を行い D: English (Written Language) として文字化した後に、翻訳して A: 日本語（書き言葉）にするケース（図でいえば反時計回り）と、C: English (Spoken Language)からまずは通訳をすることで B: 日本語の話し言葉に変換し、それからテープ起こしやトランスクリプションをすることで A: 日本語（書き言葉）にするケース（図でいえば時計回り）がある。今回の調査では C→B→A の

[39] 同上　p.53 を参照し筆者が作成した図である。

手順でトランスクリプションを行った。

通訳の際には、インタビュイーの証言を正確に理解して、それを日本語で理解できるように注意した。また、細かい点にこだわるのではなく証言の意図が理解できるようポイントを正しく捉えて通訳した後、文字化した[40]。

英語から日本語に通訳し文字化した際に、日本語の文章を英語に翻訳し直すと、元の英語と同じものが生成されることはない。これを翻訳の「非可逆性」というが、トランスクリプションに至っては音声から文字へと媒体を変換しているので翻訳以上に元に戻すことは難しい。文字は音声言語の平面図形化ではないため、音声を文字化すれば音声言語とは別のものがあらわれるため、文字は音声言語を記録するのではなく、言語情報そのものを貯蔵する[41]。本章の証言においても文字化を言語情報そのものの貯蔵を意図して作成した。

[40] 小松達也（2003）『通訳の英語、日本語』文春新書　p.6
[41] 犬飼隆（2002）『文字・表記探究法』朝倉書店　p.9

第 5 章　オーラル・ヒストリーの分析：インタビュイーA によるナラティブとディスクリプション

以上の質的調査による分析方法によって、ツールレイク被収容者 3 人の証言を分析する。本研究において特に重要である部分を抜粋し要約してナラティブ全体の語りを考察した。

5-1　インタビュイーAについて

インタビュイーA はカリフォルニア州に在住する二世で、インタビューを行った際にはインタビュイーの兄（彼もツールレイク被収容者）[1]も参加した。またツールレイク・キャンプでの出来事を風化させない活動に参加している日系 3 世の女性、日系二世の女性がオブザーバーとして参加した[2]。参加した二人の女性は筆者が 2009 年に初めてインタビュー調査を行った際の研究協力者である[3]。本章ではインタビュイーA のナラティブにみるツールレイク・キャンプでの出来事とアイデンティティーに注目する。

5-2　インタビュイーA のナラティブにみるツールレイク・キャンプの分析

インタビュイーA は収容所内での生活についてよく記憶していた。ツールレイク・キャンプの中にあったいくつかのグループについて特に印象的だったようである。

> ツールレイクでは（国民性を強調した）いくつかのグループがありました。私の一人の兄はツールレイクの中で日本を支持するグループにいました。また別の兄はアメリカを支持するグループにいました。つまりグループが異なっていたためよくロ

[1] 彼はより鮮明にツールレイクの記憶を持っていたが、現在は高齢のために聴き取りが困難なため、彼の弟に調査を依頼した。
[2] ここでの主たるインタビューの分析はインタビュイーAに限られている。他の参加者はオブサーバーとしてインタビューに参加した。
[3] 2009 年 1 月に行ったインタビュー（前述）ではカリフォルニア州において 15 名から強制収容所と日系移民に対する差別に関する聞き取り調査を行った。

論になっていたのです。

兄弟が日本を支持するグループとアメリカを支持するグループとに分かれてしまったことは、まるでファンケの小説に出てきた主人公の兄であるタイ（日本を支持）と、父（アメリカを支持）との関係のようである。バラックで生活する家族にとって兄弟が忠誠心によって口論となることは当時のツールレイク・キャンプではよくあったことなのかもしれない。インタビュイーA の父はキャンプで調理師として生活し、ツールレイクの敷地内にある畑で農作物も作っていた。しかしその敷地も兵士に常に管理されていた。毎朝作業に行くときはツールレイクの敷地であっても許可が必要であった。兵士から許可を得た収容者だけがトラックで移動して作業をしていた。そんな中、1944 年 5 月 24 日に事件がおきたのである。

> 1944 年 5 月 24 日に事件が起きました。ソウイチ・オカモトがトラックに乗って許可が必要な農園に行こうとしたとき、兵士が「止まれ」と指示しました。しかしそれに従わずトラックに乗ろうとして走っていくとすぐに兵士に撃たれてしまい、彼は命を落としました。こうした事件があったのです。

この悲惨な事件は Tule Lake Committee の史実にも書かれている[4]。そして

> このような事実がある以上、強制収容所は決して自由な場所ではなく、キャンプ内でも行動が制限され管理されているところでした。私たちはいつも監視員によって管理されていたのです。

とインタビュイーA がいうように、強制収容所には全くの自由がなかったのである。キャンプは

> 至る箇所にガードタワーがあり、管理が大変厳しかったのを覚えています。そこには常に兵士が銃を持って待機しており、私たちを監視していました。気候は寒暖の差が大変激しく、大変砂埃の多い場所でした。

[4] Tule Lake Committee、前掲書　p.22

と述べるように、管理されいつ撃たれるかもわからず、人間の生活する環境としては全く適していない場所であった。インタビュイーA の家族は、1945 年 10 月にツールレイクを出所し、キャンプに送り込まれる前は、インタビュイーA の父は一世で市民権がなかったため、土地を所有することができなかった。1940 年に 19 歳である兄の名前で土地を買い、その後、収容所に行くことになり、土地を手放したという。インタビュイーA は「日系人全体で 80 パーセントの人々が税を払えなかったので土地を手放したと聞いております。」と述べた。そして「税金が払えなかった理由は収容所の中で働くことができなかったからです。」といい、このことは当時の日系移民はキャンプで管理されただけではなく、所有するすべてのものも手放さなければならない状況を示しているのである。筆者と同行し一緒にインタビューに参加した日系移民女性活動家は

> 私はボランティアで小学校に行き、収容所の話を子供たちにする活動をしています。ある日、いつものように子供たちに、日系人が収容所に入れられるまでに所有していた土地の話をしたことがありました。彼らにその話をして税金を納める必要があったことを伝えると、ある小学生が次のように質問しました。「じゃぁ収容所にいる人達はどうやってお金を払うの？」この質問に私は再び驚かされました。小学生の子供が言ったその通りだったからです。彼/彼女らには払うための方法がまったくなかったのです。彼の言うように、税金を払えず、土地を手放した人は本当に多かったと思います。

といい、小学生の子供たちでも収容所に入れられた日系移民が税金を払えないことを理解したのである。ツールレイク・キャンプでは生活に必要なものを買う必要があまりなかったが、キャンプから出たときに、彼/彼女らには何も残っていないのである。インタビュイーA は、

> 私達もやはり土地を手放しました。出所後、家をみつけることが大変むずかしかったです。私達は日本に帰りたいと何度も思いました。しかし日本で生活する当てがなかったのです。現地の人々にはどこに行ってもまったく歓迎されませんでしたね。私達は出所後、何度も引っ越しました。一年間に数回引っ越したこともありました。

父は特に大変な苦労をしていたと思います。というのも仕事がまったくみつかりませんでした。彼はカリフォルニアで鉄道の仕事をみつけました。出所した時にはかなり年でしたから。鉄道の仕事は父にとって過酷で腰を二回ほど痛めました。しかしその他に仕事を選択することはできなかったのです。その翌年 4 月にはカリフォルニアのパーキンスでオキムラの小麦農園を手伝った。その年の 10 月に、フローリンに移り翌年の 9 月までそこで滞在した。サクラメントから南に 5 マイル程の場所です。一人での移動ではなく家族での移動であったため本当に大変でした。

と述べ、ツールレイク・キャンプが閉所され、解放されたからといってインタビュイーAの生活が改善されたのではないことを説明している。キャンプから出れば更に住むところもなく、安定的な仕事もない中で苦労の連続だった。インタビュイーA とその家族は職を転々としながらそれでも戦後のアメリカ社会を生きてきたのである。

5-3　インタビュイーAのナラティブにみるアイデンティティーの分析

インタビュイーAは、1941 年の日米開戦とともに彼の家族（両親と 8 人の兄弟）の生活が一変したことを述べているがその中でも忠誠心調査とアイデンティティーについての証言をここで紹介し分析する。インタビュイーA の両親は、彼も含めて家族と共に日本に帰りたいという意志があり、しかし一方で日本に帰っても誰も家族の世話をしてくれることがないことを述べた。そしてしょうがなくツールレイク・キャンプに行くことになったという。史実の通り、ツールレイク・キャンプは隔離施設になる前から存在していた。忠誠心調査の後で「不忠誠者」の集まる施設となったが、インタビュイーAの家族はその隔離施設になる前からすでにこのキャンプに収容されていたのである。

1941 年にアメリカと日本が戦争をはじめました。そしてすぐさま、私たちは仮収容所にいくことになったのです。そのとき、両親も私も日本に帰りたかったのです。しかし日本に帰っても私たちを世話してくれる親戚がいませんでした。私たちはしょうがなく、ツールレイクに収容されることになったのです。耳の遠くなった隣にいる私の兄もツールレイクには絶対に行きたくなかったと今でも言っています。

このように、1941 年の日米開戦と同時に日系移民は仮収容所に移送されることになった。A の家族は日本に帰りたかったが、帰る当てもなく仕方がなくアメリカに留まった。そしてツールレイク・キャンプではインタビュイーA の家族らにとって一番の問題である忠誠心調査が行われたのである。その当時の状況を彼は次のように述べている。

> ツールレイクについて問題と思いますのは忠誠心調査についてです。その忠誠心調査にも二つの問題がありました。一つ目の問題はアメリカへの忠誠を示しますかという質問、そして二つ目はアメリカのために兵役につきますかという質問でした。それらのいずれかにノーと答えた場合、ツールレイクに送られたのです。この調査は 1943 年に行われましたが、その前の 1941 年から私たちの周りでは、多くの日系人がアメリカに対して不満を持っていました。だから 1943 年の忠誠心調査の後に、このキャンプに忠誠的でない人々を集めたのだと思います。

この忠誠心調査によって日系移民は二つの帝国のアイデンティティーを強制させられた。従来の多文化主義言説では日系移民はアメリカに忠誠を示し、兵役についた「善良な日系アメリカ人」であった[5]。しかし、今回のインタビューの証言ではそうではないことが明らかとなった。調査は 1943 年に行われたが、収容された 1941 年から既に、彼の周りではアメリカに対して不満を持つものが多くいた。「多くの日系人がアメリカに対して不満を持っていました」というインタビュイーA の発言のように、収容される前から、日系一世は適性外国人という扱いを受けており、アメリカに対して好意的に思えるわけがなったのである。

> キャンプに入る前から私達は常に敵性外国人という扱いを受けてきたのですよ。当然ながらアメリカに対して従順でいれるわけがないと思います。

親が一世であり、敵性外国人であるということと子供は市民権を持つアメリカ人であることは制度上の違いの問題だけであり、二世も一世と同様に当時のアメリカ社会において排斥を経験してきた。そのことが「私達は常に敵性外国人という扱いを受けてきた」

[5] Magunuson, E. 1997. Ideological Conflict in American Political Culture: the Discourse of Civic Society and American National Narratives in American History Textbook. In *International Journal of Sociology and Social Policy*, Vol.17, No.6 pp.84-130

という言葉に込められているのだ。このような社会状況の中で忠誠心調査は彼/彼女らにとって非常に難しい選択となった。

忠誠心調査には二つの意味が含まれている。一つ目は二つの帝国に対する忠誠を忠誠心調査で決定できるということである。この調査は以下のことを前提としている。日系移民は日本からアメリカに移住した民族であり、彼/彼女らは日本帝国への忠誠を半分は示しているはずであるが、残りの半分の部分はアメリカに移住していることからアメリカへの忠誠を示しているはずという前提である[6]。しかし二つの帝国への忠誠があることはアメリカ社会にとって問題であり、それは受け入れられないことを前提としていた。そしてアメリカにある程度住んでいるのだからアメリカに忠誠を示すであろうということを前提ともしていた。そして更にアメリカに忠誠を示さないものは隔離し社会的に排除できると考えたのである[7]。これによって、忠誠心調査は日系移民にどちらの国家へ忠誠を示すかを決定させる装置として機能してきたのである。

二つ目は忠誠心調査によって、二つの帝国に対して個人（日系移民）がどちらの国民として生きていくか選択させるということである。つまり日本かアメリカのどちらかにナショナル・アイデンティティーを決定させるよう強いたのである。忠誠心調査は単に忠誠を示すための紙面上のものではなかった[8]。もし紙面上のものであったならばツールレイクの被収容者が「ノー・ノーズ」として差別され、歴史的に排除されることはなかったのである。つまり忠誠心調査はどちらの国家に忠誠を示すかだけでなく、どちらの国家に帰属するのか、どちらの国民性を持つのかを決定させるための装置として機能したのである[9]。インタビュイーAはさらにこう続ける。

> 政府は忠誠心調査を行いましたが、政府は私達が敵性外国人である以上、忠誠を示すものとそうでないものを見分けることを目的としていました。そしてもう一つの理由は、アメリカでも兵士が不足する中で市民権を持つ日系二世の労働力（兵力を含む）を必要としていました。そこで忠誠心調査の中で、アメリカの兵士として兵

---

[6] Tsukamoto, M. and Pinkerton, E. 1987. *We the People: A Story of Internment in America*. Elk Grove, CA: Laguna publishers p.126

[7] tenBroek, J., Barnhart, E.N., and Matson, F.W. 1975. *Prejudice, War and the Constitution: Causes and Consequences of the Evacuation of the Japanese Americans in World War II*. Berkley, Los Angeles and London: University of California Press p.149-151

[8] 同上

[9] Blight、前掲書

役につくための同意を得る調査を行ったのです。兵役についた多くの二世は戦地の最前線に送られたのです。

政府やマジョリティーの論理は日系移民を二分させ、従順な国民を歓迎するプロジェクトに成功したかのように見えた。しかしこれらの決定的なプロジェクトは一見成功してきたかのようにみえるが、インタビュイーA の次の証言でそのプロジェクトの不可能性が明らかとなる。

父はどういった意図かはわからないが、忠誠心調査にノーと答えました。私が推測するにおそらく日本に帰りたかったのだと思います。これは大変重要なことと思います。私の家族で父のみが忠誠心調査に答えました。これは忠誠心調査でしたが、それにノー・ノーと答えたことは不忠誠を意味するものではなかったのです。父が質問に対して答えたことは、ナショナル・アイデンティティーを決定するためのもの（アメリカに忠誠を示さず、日本に忠誠を示すこと）ではなかったのです。

ここで父の意図がわからないとインタビュイーA は指摘する。そして日本に帰りたいという希望からこの選択をしたことを指摘している。ここからナショナル・アイデンティティーを決定するために忠誠心調査にノーと答えたのではないことが理解できる。つまり政府の決定的なプロジェクト（アメリカへの忠誠があるかどうかのテストとどちらのアイデンティティーを選択するのかのテスト）に対して、そうではなく日本に帰りたいから敢えてこの選択をしたことを明らかにしている。今まで「見た目は日本人だけれども中身はアメリカ人」として日系移民のナショナル・アイデンティティーが語られてきた[10]。しかし忠誠心調査に「ノー・ノー」と答えたことは決して日本人であるとか、アメリカに忠誠がないといったことで片づけられることではない。インタビュイーA の父は「ノー・ノー」と答えることで家族で日本に帰ることを希望したのである。つまりこの証言は、ナショナル・アイデンティティーを決定づける忠誠心の外部に存在し、国家への忠誠という言葉では解決できない状況を説明しているのである。

その当時収容所にいる日系人は大変な苦労をしてきたのです。決して国家への忠誠

[10] 坂口、前掲書

という言葉では解決できない複雑な事情があったのだと思います。

この証言は日系移民のアイデンティティーを決定づけてきた言説「日本かアメリカか」では解決することができない当時の日系マイノリティーの状況を説明している。インタビュイーA はツールレイク・キャンプで実施された忠誠心調査を他の家族がどのように受け取ったかについて

実際に私の家族も周りの家族も、家族が共に生活するために何が最善かを考えて忠誠心調査に答えていたのではないかと思います。皆、家族が離れ離れになることを恐れて、この苦境を生き抜くためにアメリカへの忠誠を拒んだのだと思います。

と答えた。そして

父の姻戚は忠誠心調査で「あなたはアメリカ合衆国に忠誠を示すか」という質問に対して「私は私の神にのみ忠誠を示す」と答えたと言います。

と答えたのである。このことは姻戚のアイデンティティーがナショナルな枠組みの外部にあることを意味している。日本とアメリカが戦争に突き進んでいる最中、連邦政府は忠誠心調査によって人々の忠誠心がどちらにあるのかを判断しようとしたが、姻戚の「私の神にのみ忠誠を示す」発言は、姻戚のアイデンティティーがナショナルな枠組みでは決定することができないことを示しているのである。

インタビュイーA のオーラル・ヒストリーから理解できるのは、彼や彼の家族が決して国家への忠誠を前提にツールレイクに収容されたのではなかったということである。彼のような家族は決して少なくなかったのではないか。例えばザ・ノー・ノー・ボーイズに登場するタイ・シモダの家族もそうである。タイの父親は家族が引き裂かれないようにするため、あえて忠誠心調査にノーと答えたのである。またツールレイク収容所の生活が如何に厳しいものであったかを示唆する証言を得た。例えば高い鉄柵に囲まれ、人々が住みつかない過酷な環境の中で監視されてなければならなかったことや、忠誠心調査によって家族が引き裂かれそうになったこと等、ナショナルな枠組みで語られてきた多文化主義言説に登場する日系移民とはかけ離れた証言をインタビュイーA はしてく

れた。

第 6 章　オーラル・ヒストリーの分析：インタビュイーB によるナラティブとディスクリプション

6-1　インタビュイーB について

次にインタビュイーB のオーラル・ヒストリーに注目する。彼はサクラメントで生活する日系二世である。インタビィーB は各地の学校をめぐり、日系移民の強制収容所の経験を語る著名な人物で、ツールレイク・キャンプの模型地図を作成している[1]。この模型地図はツールレイク・キャンプのバラックがどのようなものであったのかを示す貴重なものである。またキャンプの敷地内の図や回りの鉄柵のフェンス、ガード・タワーに兵士が立って銃をかまえている図も作成している。また数多くのツールレイク・キャンプに関する写真を持っており、筆者がツールレイク・キャンプを知るきっかけとなった人物である。インタビュイーB のツールレイクを各地で語る活動によって多くの子供たちに当時の収容所の過酷な状況を理解する一助となっている。

インタビュイーB はカリフォルニア州サクラメントの日本町に住んでいた。サクラメントでは強制収容所が開設されるまで日系移民が集まって自分達の町を形成しており、その町の中で両親は豆腐屋を経営していた。300 以上の店舗が集っていたが、当時、なかなか現地の人々が彼の家族に商品を売ってくれなかった。そのため、日系移民は独自に集い日本町を形成したのである。インタビュイーB はカリフォルニアで生活する中で大変な苦労をしており、キャンプに入る前もアジア人への迫害が日常的にあることを指摘している。

> アジア人に対する排斥は主に日系人と中国人を対象にしていました。そのうちの一番厳しい法律は、中国人と日本人には市民権を与えないというものでした。一世の人々はそれによって市民権を与えられなかったのです。そして私たちを敵性外国人として扱い、一世が土地を所有することを完全に禁止しました。私はサクラメント生まれだったのでアメリカ人でした。私の両親は当然一世でしたので仕方がなく外国人扱いとなりました。

[1] これらの図は第 3 章のツールレイク・キャンプ史の中で紹介している。

中国人と日本人に対して市民権が与えられないということは、一世と二世の間で国籍が異なるということであり、インタビュイーB も二世としてアメリカで生まれたため、アメリカの市民権を持っていた。しかし市民権を持っていても両親が敵性外国人として扱われているため、「私たち」も排斥されてきたのである。他の日系移民と同様に、一世が土地を所有することを完全に禁止されていたため、インタビュイーB の兄の名義で土地を所有していた。インタビュイーは 1960 年に兵役についた。しかし望んでそうしたのではなく、生活が大変苦しかったためと証言している。韓国で医療班のメンバーとして兵役につき、決して国のために戦争に行ったわけではないことを証言した人物である。

インタビュイーB は強制収容所に行く前のアッセンブリー・センター（仮収容所）の話をし、続いてツールレイク・キャンプについて語った。

6-2　インタビュイーB のナラティブにみるツールレイク・キャンプの分析

インタビュイーB はキャンプに行く前に仮収容所で一か月生活した。その後、ツールレイク・キャンプが建設されたのである。キャンプの様子を彼は、

> キャンプには無数のブロックがあり、一つのブロックに数人（4～5 人）が生活していました。生活するバラックとは別に食べるところがあり、洗面所もありました。

と説明した。一つのブロックの中に暖炉が一つと軍隊で使用する固いベットがいくつか置かれていた。生活するバラックとは別に食べるところがあったのは、Mess Hall（食堂）である。この食堂では実際に被収容者が働いていた。インタビュイーB のいうように、洗面所もあったが、これらの施設にはプライベートがなかった。例えば、バラック内は一部屋になっており、それぞれの寝室を区切るものは何もなかった。そこで被収容者達はプライベートな空間を少しでも確保するために、布切れを天井から吊るした。また、シャワーやトイレも共同であった。シャワー室やトイレには壁がなくプライベートな空間がまったくなかったのである。更にはそこに行くまでの道は舗装されておらず、雪や雨の日は汚れながら歩いて行かなければならなかった。

もしも家族が多ければバラックを二つ与えられました。食堂で作業すればお金が手に入ったのですが、一か月＄16程度であって、一般的な家庭の収入の10分の1にも満たなかったのです。そして、お金を使うところもキャンプには当然ありませんでした。なぜならキャンプは監獄（ジェイル）だったからです。まさに監獄（ジェイル）でした。

バラックが二つ与えられたところで彼/彼女らの生活が改善されることは全くなかったのである。キャンプ内では一家族が多いケースが多かったという。そこである程度の人数（7～8人）を超えれば、もう一つのバラックが与えられた。実際に食堂の作業によって賃金を得ることができても、一般的な家庭の10分の1の収入では、キャンプに出た後の足しにはならないのである。また、インタビュイーB が指摘するように、お金を使うところがない以上、それはまさに監獄という他ないのである。

インタビュイーBはツールレイク・キャンプにはじめからいたので1943年の忠誠心調査のことをよく覚えおり、そのため後にキャンプ内に建設された stockade（営倉）についてもよく知っていた。監獄の中の監獄について以下のように説明した。

ツールレイクでは 21 人の二世が兵役を拒絶しました。そして彼らは別の牢屋に収容されました。更にツールレイクには悪い人間を集める収容所を建設しました。問題を起こした人々です。まさに監獄の中に監獄がありました。大変なキャンプだったのです。

この 21 人の兵役拒絶者というのは、1943 年に実施された忠誠心調査においてイェスと答えたが後に兵役を拒絶したケースや、また忠誠心調査後に18歳となりその際に兵役につく意思はあったが拒絶したケースと考えられる。一旦、兵役につくと答えて拒否した者、ボイコットした者、ストライキをおこした者を集めるために政府は監獄を建設した。それは他の被収容者への見せしめであり、キャンプ内の秩序を維持するためのものであった。インタビュイーB が指摘するように被収容者からすればまさに監獄の中の監獄だったのである。

6-3　インタビュイーBのナラティブにみるアイデンティティーの分析

インタビュイーB はツールレイクに収容された被収容者で B の父は忠誠心調査でノー・ノーと答えた一人であった。日本とアメリカのどちらかにアイデンティティーを示す忠誠心調査によってインタビュイーB の人生は大きく変化した。サクラメント出身の彼は当時の状況を詳細に覚えていた。「パールハーバーがあって、2 月 19 日にルーズベルト大統領が 9066 号を発令し、16 分の 1 の日系人の血が混じっているすべての日系人を収容所に入れたのです。」。この証言は日本からアメリカに移住した人々だけでなく、その混血もすべて収容所に入れられたということを意味している[2]。彼は収容生活までの状況を以下のように説明する。

> しかし注目すべきことは、それまでに 500 以上のアジア人を迫害する法律が執行されていたことでした。特にここカリフォルニアは排斥が厳しかったのです。アジア人に対する排斥は主に日系人と中国人を対象にしていました。そのうちの一番厳しい法律は、中国人と日本人には市民権を与えないというものでした。一世の人々はそれによって市民権を与えられなかったのです。そして私たちを敵性外国人として扱い、一世が土地を所有することを完全に禁止しました。

カリフォルニア州ではアジア人排斥の動きが強く、その矛先は中国と日本に向けられていた。そして彼/彼女らには市民権を与えず、敵性外国人の扱いを受けた。その後、収容されることになるが、「キャンプは監獄（ジェイル）だったからです。まさに監獄（ジェイル）でした。」と述べている。キャンプは日系移民を安全な場所に移す場所ではなく、収容し管理するところであった。政府は彼/彼女らを管理するために、全ての被収容者にアイデンティフィケーションを行った[3]。収容された人々はすべて身長と顔を写真で撮影され番号が付されたのである。

インタビュイーB はツールレイク・キャンプでも実施された忠誠心調査について次のように説明する。

---

[2] 行政命令 9066 号では日系移民という表記しかない。
Kiyota, M. 1997. *Beyond Loyalty: The Story of a Kibei*. Honolulu: University of Hawii'i Press

[3] The Shaw Historical Library. 2005. *A question of Loyalty: Internment at Tule Lake*. Oregon Institute of Technology, Klamath Falls, OG: Journal of the Shaw Historical Library p.75

よく考えてみてください。一世にとっては市民権もなかったのです。それなのにどうしてこのような質問に答えられるのでしょうか。みんな不満に思っていたはずです。なぜ強制収容所に行かなければならないのでしょうか。なぜ元の場所に帰れないのでしょうか。そう思うのは当然のことだと思います。私は長年忠誠心調査について考えてきました。なぜツールレイクの人々はアメリカに忠誠を示さなかったのでしょうか。

インタビュイーB は一世には市民権がなく、排斥も強い中でなぜアメリカに忠誠を示せなかったと指摘している。排斥に耐え収容所生活にも耐えている人々が、その状況に不満を持っているのは当然のことである。そのような状況の中でアメリカに忠誠を示せなかったと説明する。このことは「アメリカに忠誠を示さないということ」＝「日本に忠誠を示していること」に繋がらないことを意味している[4]。

私は長年忠誠心調査について考えてきました。なぜツールレイクの人々はアメリカに忠誠を示さなかったのでしょうか。それはアメリカへ忠誠を示さず日本に忠誠を示したのではありません。そうではなく、当時、彼らが置かれていた状況に対して抗議していたのではないでしょうか。日系移民の研究者や日系移民のグループは私たちツーリアンを不忠誠者といいます。しかし実際にそうといえるのでしょうか。例えば兵役につきたくない人々も多くいたはずです。

人間のアイデンティティーは所与のものではない。それは常に流動的なものである。インタビュイーB は忠誠心調査において期待される回答をしなかったことについて考えた。そしてインタビュイーB は、忠誠心調査の返答に肯定的でなかった理由として、ツールレイクの被収容者である彼/彼女がアメリカ社会に対する抗議の意思を示すためにこのような回答をしたのではないかと考えたのである。つまり、自らの忠誠を伝えたのではなく、当時の社会状況の中で、彼/彼女らが唯一できる対抗的手段として政府からの要求にノーと答えたのである。だからこそ、彼/彼女らがアメリカ社会で「ノー・ノーズ」と

[4] 例えばツールレイクの被収容者が日本に忠誠を示していたという史実は「ノー・ノー」＝日本への忠誠という構図の中で意図的に作られてきた。実際にはインタビュイーB のようにネーションの枠組みに回収されないケースが存在する。

呼ばれ、その言葉が意味する「不忠誠者」のレッテルに対して、声高に反論しているのである。それは彼/彼女らがアメリカ人としてのアイデンティティーを持っているからではない。そうではなくて、彼/彼女らが置かれている状況に対して「ノー」と答えていたのである。

> ノー・ノーと答えてツールレイクに収容されたことは、個々人によってさまざまな理由があります。その要因はさまざまあり、決して不忠誠という一つの帰結に至ることはできません。私の経験からいえることは、忠誠か不忠誠かという問題ではなく、日米の狭間で悩み、生きるために抗議し続けたということでした。それが結果としてはアメリカ人である二世にとって、よくない歴史と認識されてしまったのです。

スピヴァクが主著『サバルタンは語ることができるか』の中で女性の声なき声に耳を傾けることを主張した[5]。この証言の中身はナショナルな枠組みにおいて語られる「忠誠」の外部にある。ナショナルな枠組みにおいて決定されるアイデンティティーでは説明不可能な証言である。二つの帝国の間で揺れ動くインタビュイーB のアイデンティティーは、まさにディアスポラ的であり、そしてさらにナショナル・アイデンティティーによって決定付けられる諸々の言説に対して批判的視座を提供しているのである。結果としてこの出来事はよくない歴史となってしまった。しかし、彼の証言はスピヴァクのいう「声なき声」に限りなく近いといえる。

> 結果として強制収容所に入れられた私たちは抵抗する声すら奪われてしまったのです。

「不忠誠」の刻印によって、彼/彼女らの抵抗の痕跡は即座に消されてしまった。もはや収容所の中ではその声は届かなかったのである。ツールレイク・キャンプの被収容者のインタビューは当時の「声なき声」を回収することであった。このような意味においてはインタビュイーB の証言は、ナショナルな中で造られる社会構造にない決定不可能なアイデンティティーの可能性を示唆しているのである。

---

[5] スピヴァク、前掲書

インタビュイーB は B 自身の立場からツールレイクについて語ってくれた。それは忠誠/不忠誠ということだけでツールレイクの被収容者を判断してはならないということである。アメリカへの不忠誠という一つの帰結に至るとすれば、一方で日本への忠誠という見解に至ってしまう。そのことを彼は危惧しているのだ。国民を前提とした歴史においてはツールレイクの被収容者は不忠誠者として認識され、移民史から排除される。しかし彼の語りが明らかにしているように、政府が行うナショナリティーの決定に対して彼や彼の家族は抗議し、家族や仲間が共に生きられるように各々で決定を下した。そうした歴史は国家への忠誠という枠組みを超えて生きる人々の姿を映し出している。

第 7 章　オーラル・ヒストリーの分析：インタビュイーC によるナラティブとディスクリプション

7-1　インタビュイーC について

最後にインタビュイーC のオーラル・ヒストリーに注目する。初めインタビュイーC の両親はトパーズ強制収容所にいた。1943 年の忠誠心調査でノー・ノーと答えた両親は、家族でトパーズからセグリゲーション・センター（隔離収容所）であるツールレイクに移送された[1]。インタビュイーC はツールレイク・キャンプを「セグリゲーション・センター」と呼んでいた。「セグリゲーション・センター」と呼ぶことでこのキャンプが特異な施設であることを強調した。

インタビュイーC は収容所での記憶がほとんどなかったが、ツールレイク委員会（Tule Lake Committee）の中心的メンバーで、弁護士をしている。インタビュイーC はツールレイク・キャンプを風化させないために、pilgrimage（史跡）というツールレイク・キャンプのツアーを実施し、この史跡を巡ることでキャンプ内での劣悪な環境や、出来事を後生に伝えている。

インタビュイーC は幼少期にツールレイク・キャンプに収容されており、解放後、ツールレイクに関する数多くの証言を集めたり、アメリカ社会に対してツールレイク・キャンプに限らず、日系移民に対する強制収容所が如何に暴力的で、人々を抑圧してきたのかを語ってきた人物である。インタビュイーC は特に強制収容所に関する言葉の問題に注目していた。それは多文化主義の中で語られる善良な日系移民言説に対抗するような日系移民に対する暴力を暴いている。

7-2　インタビュイーC のナラティブにみるツールレイク・キャンプの分析

インタビュイーC は今までに 2000 人以上のツールレイク・キャンプの被収容者と対話

---

[1] トパーズ強制収容所の状況は村川庸子（1996）書評論文「『砂漠の宝石：トパーズの日系人強制収容』日系アメリカ人史研究のフロンティア」『敬愛大学国際教養学論集』6 pp.161-180　に詳細に論じられている。

し、ツールレイク・キャンプについて調査した。

私自身、収容所での記憶はあまりありませんが、被収容者の方々からお話を聞いたり、自分で調べたことを今日お話ししたいと思います。私の参加しているツールレイク委員会（Tule Lake Committee） は、アメリカの日系人社会の中でも特にキャンプについて活動している中心的人物ジミー・ヤマイチらが中心となっているボランティア・グループです。二年に一回、pilgrimage（史跡）というツールレイク・キャンプのツアーを実施しています。350～400 人がこの史跡ツアーに参加しています。ツールレイクの跡地には当時の収容所の一部が残されていますが、そのツアーでは史跡を巡ることでツールレイクの生活の一部を体験することができます。

ツールレイク委員会はツールレイク・キャンプを後世に伝えるための活動を行っており、筆者が第 4 章で明らかにしたツールレイク・キャンプのサバルタン史の中で使った資料のほとんどはこの委員会によって出版されたものである[2]。第 4 章で紹介したヤマイチはこの委員会の中心的人物で、インタビュイーC も委員会メンバーの彼/彼女らと活動している。この委員会は特に pilgrimage（史跡）を巡る活動に力を入れており、毎年多くが参加している。インタビュイーC はツールレイクの生活の一部を史跡から考察し、当時のツールレイク・キャンプの様子を次のように指摘する。

そこから体験できることは、キャンプ内での劣悪な環境や、ツールレイクの気候がいかに過酷であったかです。また施設の跡地から推察すると、当時のツールレイク・キャンプには各々のトイレにパーテーションがまったくなかったと想定されます。

第 4 章でキャンプの構造について説明したが、史跡を巡りながら、残存する当時の収容所の一部からトイレにパーテーションがなかったことを指摘している。またインタビュイーC は過酷な気候の中で人々が収容生活をさせられたことに対して語気を強く

[2] Tule Lake Committee. 2000、前掲書
Takei、前掲書
Tule Lake Committee. 2012. *Tule Lake Pilgrimage 2012: Understanding No-No and Renunciation*. Tule Lake Committee

して語った。キャンプ内でトラブルが生じた時は、

政府はツールレイクでの活動を鎮静化するためにキャンプ内に兵士を増員し、戦車を運びました。それはまさに監獄でした。そしてその中に更に「問題児」を軟禁する施設まで日系人に作らせました。私は弁護士ですので法律的なことを申しますが、やはり憲法上強制収容を実行することは不可能だったのです。政府はなぜツールレイクに日系人を収容するのかについての明確な理由を提示する必要がありました。しかしそうした理由はどこにも見当たらなかったのです。

このことはツールレイク・キャンプの歴史の中で記述したことと重なっている。人々を管理するためのあらゆる手法が実施されたのである。このことをインタビュイーCは

これは当然ながらマイノリティーの移民に向けられた暴力です。どれくらい長い間収容所内にいればよいのかもわかりませんでした。突然持てるだけのものを持って、移動しなさいと言われたわけです。学校も仕事もすべて失ったのは日系人です。土地もビジネスも全て失いました。移住してやっと手に入れた家具や他のものは全て失わなければならなかったのです。「これだけ持っていくので、あとは持って行ってください」とみんな言って自分達の家を後にしたのです。

と証言し、政府やアメリカ社会に対する不正義を主張している。次にインタビュイーCはツールレイク・キャンプに収容された経験から、強制収容所に関する言葉の問題に言及した。

まず日系人に対して行われた強制的な退去と収容について政府がどのように呼んでいるのかについてです。私は強制収容所が、転移所や避難所として語られていることに憤りを感じています。実際に日系人に対して行われた強制収容は、relocation（「転移」或いは「再移住」を意味する語）として語られたり、或いは evacuation(「避難所」或いは「疎開」という語)として語られてきました。これを私たちは euphemism(婉曲法)と呼んでいます。これは否定的な意味を持つ語句を直接使わず、別の言葉を使って否定的な意味合いを歪曲することを意味します。ですからキャン

プの不都合（強制的に日系移民を監禁したこと）を隠蔽しようとするためにこのような言葉が使われました。そして今でもキャンプを説明する際にこの言葉が使われています。

インタビュイーCはRelocationという転移や再移住を意味する言葉を日系移民に適用させたことや、実際には管理するための施設をevacuationと呼ぶことで非難や疎開を意味する言葉を使用したことを批判している[3]。インタビュイーC はこれらの表現をeuphemism（歪曲法）であると主張し続けてきた[4]。インタビュイーCは「キャンプの不都合（強制的に日系移民を監禁したこと）を隠蔽しようとするためにこのような言葉が使われました。そして今でもキャンプを説明する際にこの言葉が使われています。」と述べているように、日系移民に対する支配的な言説が今も続いていることを批判している。そしてこのような避難を意味するものはツールレイク・キャンプには全くなかったことを指摘した。

実際に政府は強制収容をrelocationとevacuationと呼んでいました。しかし実際はどうでしょうか。政府は強制的に日系人を立ち退かせました。evacuation では無かったのです。このevacuationという言葉は人々をある危険から回避させる或いは避難させることを意味します。しかし当時のアメリカの社会経済上の理由から政府やアメリカ市民は、彼ら日系人を危険人物、スパイ、敵性外国人として認識し差別していました。だからこそ退去させ、監禁しました。それにも関わらずこのこと（強制収容所）をevacuationという言葉で説明すること自体に問題があります。

このようにインタビュイーC は、当時のアメリカ社会においてアメリカ政府や市民からすれば、日系移民が「危険人物、スパイ、敵性外国人」であったことに言及し、これらの理由から彼/彼女らを退去させ、監禁したと主張した。それにも関わらず避難という言葉を使用することに怒りを感じているのである。

彼は更に、assembly center（仮収容所）についても言及している。

---

[3] これらの避難民という表現は政府関係の書物に顕著に表れている。
Myer, D.S. 1971. *Uprooted Americans: The Japanese Americans And The War Relocation Authority During the World War II.* Tucson, AZ: The University of Arizona Press p.30

[4] 詳しくはDensho、前掲書を参照されたい。

assembly center（仮収容所）も同じです。assemble というと何か人が集まり交流する場として認識されています。自発的に集まるという意味合いが強いのです。しかしこの仮収容所は劣悪な環境に強制的に日系人を移動させ、廃れた小屋に近い場所に日系人を強制的にかき集めたものでした。しかも収容所ができるまでの仮収容所で彼らは不安だらけでした。現在でもこうした言葉の問題によって日系人に対して行われた強制収容に対する誤解が生じています。

ここでインタビュイーC が「assemble というと何か人が集まり交流する場として認識されています。自発的に集まるという意味合いが強いのです。」と述べたことは、実際に日系移民に対して行われた強制的な移動が自発的に集まるという意味にすり替えられてきたことを意味する。インタビュイーC はこのような言葉の歪曲によって日系移民に対する強制収容が誤解されている現状を指摘した。インタビュイーC は多くのツールレイク・キャンプの被収容者と会話することで、これらの言葉が使用されている現状の問題を明らかにしているのである。

インタビュイーC はユダヤ系の人々に対して行われたホロコーストと日系移民に対して行われた強制収容を比較し、ユダヤ系の人々の悲劇と日系移民の悲劇との類似点を挙げている。

確かに「強制収容所」はユダヤ人に対して行われたホロコーストを意味します。アメリカのユダヤ人コミュニティーは日系人がこの表現を彼らの収容経験として使用することを否定しました。というのもユダヤ人の悲劇と日系人の経験とは異なっていて（日系人の場合ホロコーストは行われなかった）、まったく性質が異なるものであるという認識から、ユダヤ人の強制収容の歴史を過小評価することに繋がると考えたようです。

しかし私たちは強制収容という言葉を積極的に使っています。なぜなら私たちの強制収容所には高い鉄のフェンスがあり、ガードタワーがあり、中にいる人間を外に出さないように銃をもっていたからです。外にいる人々に向けて銃口が向けられていたのではないのです。まさに収容所の中の人々に向けられていたのです。それは私達にとって強制収容所であり監獄でした。

筆者は実際に強制収容所に関して調査をする中で、日系移民が concentration camp という言葉の使用について、特にアメリカのユダヤ人コミュニティーから使用を控えるよう抗議があったことを聞いていた。しかしインタビューをする中で、日系移民もユダヤ人と同様に強制的に収容され、もし日本が勝てば自分達は殺されるのではないかという恐怖の中で生活していたことを聞いた。インタビュイーC も指摘するよるように、ユダヤ人の悲劇（ホロコースト）とは異なっても、同様に生活する空間を奪われたことは類似しているのである。ツールレイク・キャンプのインタビューで、彼/彼女らは強制収容という言葉を積極的に使用していた。これは日系移民の歴史を過小評価することなく、政府やアメリカ社会の不正義に対して考え、抗議しているからである。インタビュイーC はこうした言葉の問題を通して、ツールレイク・キャンプを後世に伝えている。インタビュイーC は日系移民の強制収容経験が美化したり、風化させられたりすのは、それらを表象する言葉にあると考えている。そしてこのことを広く社会に訴えることによって、ツールレイク・キャンプの存在を社会に訴えかけているのである。次にツールレイク・キャンプとアイデンティティーの問題を分析する。

7-3　インタビュイーC のナラティブにみるアイデンティティーの分析

1943 年の忠誠心調査についてインタビュイーC は「イエス」と答えるか「ノー」と答えるかの選択について次のように証言している。

> もともとツールレイクにいた人々（1943 年以前に収容された人々）には選択肢がありました。ツールレイクから出て別のキャンプに行く選択もありました。おそらく政府はトラブルメーカーを一つのキャンプに収容させたかったのだと思います。政府は不忠誠の人間を一カ所に集めたかったのです。誰であっても忠誠心調査で少しでも危険とマークされた人々はこの収容所に連行されました。つまりこの調査に答えなかった人々も不忠誠者の刻印を押されたのです。或いはもし忠誠心調査でイェス（自分自身が兵役についた場合も含む）と答えた場合、「その代わり家族をキャンプから出して自由の身にしてほしい。」と主張した場合にも彼らの家族は不忠誠者と判断されました。

このように忠誠心調査では「ノー」と答えるか或いは答えない人々はすべて不忠誠者となった。そして証言にもあるように、その実態（アメリカに忠誠を示すかどうか）を政府が知りたかったのではなく、「忠誠的でない」と思われる人々を管理したかったとCは述べている。また、忠誠心調査に「イエス」と答えても、「その代わり家族をキャンプから出して自由の身にしてほしい。」と主張すればツールレイクに連れて行かれたことも指摘した。つまり政府は忠誠かどうかよりも、従属的でないものを一カ所に集めたかったことが理解できる[5]。

次に当時の日系移民が忠誠心調査の内容と回答について混乱していたことを語った。それはswear（誓う）という言葉であった。

私はツールレイクに収容された人々からこの忠誠心調査についてインタビューを取りました。そこで特に問題となったのは、質問項目 28 でした。この項目にある swear（誓う）という言葉を多くの日系人が重く受け止めたのです。質問項目 28 は「あなたは無条件でアメリカ合衆国に忠誠を誓い、外国や国内のいかなる攻撃からも合衆国を守り、また、日本国天皇をはじめ、いかなる外国の政府・権力・組織に対しても忠誠を示さず服従もしない、と誓えますか。」でした[6]。この中にある swear（誓う）という言葉は当時の日系人にとって、一度日本に忠誠を示した人が今はその忠誠を捨ててアメリカ合衆国に忠誠を示すことを意味しているように解釈されました。忠誠心調査自体が意味するものは、まず日系人を日本に忠誠を示している集団として捉えており、そして日本に忠誠を示している集団が今度はその忠誠を捨ててアメリカに忠誠を示すということを意味していました。アメリカ合衆国はそのように彼らを分別し、忠誠をアメリカに示させるよう仕向けたのです。

---

[5] 政府高官や役人が彼/彼女らをいかに管理していたかについては、WRA のトップを務めたマイヤーの自著 Myer　前掲書　p.81　を参照されたい。

[6]質問はアメリカに対する忠誠を確認するためのもので、全部で 33 項目あり、そのうち第 27 と第 28 が重要である。
第 27 項は徴兵年齢に達する男子に対して「あなたはいかなる場所にあっても戦闘義務を果たすために合衆国軍隊に進んで奉仕する用意はあるか」と質し、つづく第 28 項ではすべての収容者に対して「あなたは無条件でアメリカ合衆国に忠誠を誓い、外国や国内のいかなる攻撃からも合衆国を守り、また、日本国天皇をはじめ、いかなる外国の政府・権力・組織に対しても忠誠を示さず服従もしない、と誓えますか」が、突きつけられた。日本にもアメリカにも忠誠を示せない決定不可能な移民が「ノー・ノー・ボーイ」として誕生したのである。

このように当時の人々はこの swear（誓う）という言葉を重く受けとめてどのように答えるか深く考えていたという。一番苦労したのはどのように答えるかであった。

> しかし問題は、日系人がどのようにこの忠誠心調査に答えればよいかということでした。彼らの中には当然日本に忠誠を示していない人々も多かったですし、国家への帰属を意識していない人々が多かったと思います。つまり、国家への忠誠を示せなかった人々、或いは忠誠心調査に困惑し答えられなかった人々もツールレイクに収容されました。

この忠誠心調査の最終的な帰結は人々によってさまざまであった。

> 私の知人の女性は自分には小さな子供がいて兵役にはつけないと答えました。すると彼女らはツールレイクに送りこまれました。このように強制収容所内では個人の主張や立場は全く無視され、従わない者はすべて「不忠誠者」として人々を隔離したのです。そうした状況の中で彼/彼女らがいかに苦労したのかを想像することができるでしょう。

忠誠心調査はアメリカに絶対的な忠誠を示すかどうかを判断するものであり、忠誠/不忠誠という二項対立によって日系移民を選別したのである。そこでは個人の主張や立場は完全に無視され、従属的な人間とそうでない人間という二分法によって仕分け作業を行ったのである。

このように、サバルタンの歴史としてのツールレイク・キャンプの被収容者は、ナショナル・アイデンティティーの決定に対して悩み、そこに汲み込まれなかったことを意味しているのである。彼/彼女らの声（自らのナショナル・アイデンティティーの不確実性）は無視され、従順でないものは「不忠誠者」として隔離してきたのである。

忠誠心調査に関連して、史実ではほとんど語られていない renunciation（市民権の放棄）についても C は言及した。アメリカ政府は 1943 年にアメリカ市民である日系移民に対して市民権を放棄させる法案を制定した。これも彼/彼女らの忠誠を測り、国民化する方法であった。ナショナル・アイデンティティーの確認を政府は日系移民に仕向けたのである。

アメリカ政府は日系人に対して任意で市民権を放棄できる法案を制定しました。アメリカ政府には日本にいる米兵の捕虜を取り戻したいという考えがありました。戦時中に日本兵をつかまえ捕虜にしようとしたのですが、捕まえれば自殺する者が多かったため、日系人を人質にして日本にいる米兵捕虜と交換しようと考えました。そこで日系人にも市民権の放棄をさせて、日本にいるアメリカの捕虜を彼らと引き換えに交換しようとしました。このことはアメリカにとって利益がありました。アメリカ政府は日系人のグループを振り分けることができ、政府にとって不要な人々を送還することが可能でした。実際にツールレイク被収容者を中心に 5000 人ほどの人が市民権の放棄をしたのです。その時の混乱を想像できるでしょうか。私たちはこうして善良な日系人とそうでないものというふるいにかけられたのです。

彼/彼女らを国家が管理してきたことを決定付ける証言を得ることができた。このプロジェクトの目的は国民化を実行するためのものであった。そして国民化を実行する中で浮遊する決定不可能な存在がツールレイクの被抑圧者であった。彼/彼女らは「イエス」と答えれば問題化されなかった質問に苦悩し、統合を進めるアメリカ社会に対して抵抗し続けたのである。このような国民化に対抗するアイデンティティーの証言は、日米の狭間にある決定不可能なアイデンティティーであると同時に、彼/彼女らがアメリカの多文化主義言説によって語られなかったことを明らかにしている。
次章ではこれらの証言から、アメリカの多文化主義言説の問題を明らかにする。

第 8 章　ツールレイクのナラティブからみる多文化主義の問題

本章では、前章までのツールレイクのナラティブにおいて明らかとなったナショナルなアイデンティティーに回収されない人々の経験から、アメリカの多文化主義言説の問題を明らかにする。まずアメリカの多文化主義言説において語られることがなかった日系移民のアイデンティティーに注目する。日系移民は強制収容所に収容されるまで、幾度となく日米の狭間でアイデンティティーの葛藤に陥った。このアイデンティティーの葛藤について、多文化主義言説においては全く説明されることがなかった。次に、アメリカの多文化主義が登場する過程と、多文化主義言説において日系移民がどのように表象されてきたかについて述べる。また、日系移民がアメリカの多文化社会の中で表象される際、アメリカのマジョリティーによって彼/彼女らの文化や歴史が一方的に承認されてきたことを明らかにする。そこからアメリカの多文化主義言説が、移民の多様性を承認するのではなく、自らにとって良い歴史のみを承認してきたことを批判する。

これらの考察から、アメリカの多文化主義言説において語られることがなかった彼/彼女らの証言に注目し、日系移民が戦後、多文化社会の中で国民国家による忠誠/不忠誠として表象されてきたことを明らかする。ツールレイクの被収容者らは、強制収容所での生活から、戦後の多文化主義アメリカの時代を生き抜いてきた。彼/彼女らの証言や歴史は多文化社会の中で文化的差異を残している。ツールレイクの歴史と彼/彼女らの証言から多文化主義を考察することで、日系移民が多文化主義言説の中で善良な国民として「日系アメリカ人」として現実化され、或いは創造されてきたことが明らかとなる。

8-1　多文化主義が語らないアイデンティティーの葛藤

移住した初期の日本移民（一世）は、度重なる苦労の連続であった。第 3 章で紹介した日系移民の歩みの中で、彼/彼女らへの抑圧が繰り返されてきたことが明らかとなった。それは補償運動の勝利によってアメリカ人としてのアイデンティティーを取り戻せたという単純な多文化主義の理解では説明できない。なぜならば特に移住初期の 1900 年から 1945 年までのアイデンティティーの「揺れ」は想像を絶するものであり、現在のアメリカにおける多文化社会において「容認」されていても、彼/彼女らの複雑な経験と記憶を

抹消することは不可能だからである[1]。

日系移民のアイデンティティーの変容を大きく分けると、移住初期の 1900 年代から約 1920 年までの「日本人でいることが平気」だった時代、そして 1920 年代から約 1930 年までの「半分だけ日本人」の時代、そして 1930 年代以降「日本人かアメリカ人どちらかへの同一化」の時代に分けることができると坂口は指摘している[2]。この約 45 年間、日系移民は日本とアメリカという二つの対立する国家の間で、自らのアイデンティティーを求め続けた。

この約 45 年間、二つの国家に忠誠を示すという選択は日系移民にとって一方では調和を保ちながら他方では矛盾と対立を生んできた。なぜならどちらに忠誠を示しても、国家の利害関係によって日系移民の社会構造が構築されてしまうからである。

第 4 章で紹介した小説の中に登場するタイやイチローはまさに、青年が日米の狭間でアイデンティティーの葛藤に陥ったケースである。また、インタビュイーA は、両親が忠誠心調査に「ノー」と答えた理由について、日本に帰国したかったことを挙げている。また、インタビュイーA は、「決して国家への忠誠という言葉では解決できない複雑な事情があった」と述べるように、自分がどちらの国家へ忠誠を示すかという問題よりも更に困難な問題があった。それは自分のナショナル・アイデンティティーではなく、家族が共に生活をするための場所を確保するという問題であった。そのためには、家族が忠誠心調査に対して同じ回答をする必要があった。こうした家族や収容所内におけるコミュニティーが、忠誠心調査に影響を与えたのである。このように考えてみると、日本とアメリカ、どちらかに忠誠を示すということは、アイデンティティーの葛藤に陥った日系移民にとって困難な問題であり、よりよい環境で生きていくための戦略的な方法でもあった。

一方、忠誠心調査を行う国家の目的は移民の忠誠の行方ではなく、国家の利益であった。国益が移民の忠誠と結びつけば、移民は自らのアイデンティティーを変容させ国家に示すであろうし、実際に受け入れられるためにそうしたのである。しかし一向に改善されない当時の日米関係にあっては、アメリカにとって移民の忠誠の行方など無意味なものであった。日系移民が日本に忠誠を示しても自らを日本民族と信じても、疎外され

---

[1] 坂口は、特に 1930 年代のアイデンティティーの葛藤について詳細に論じている。坂口、前掲書

[2] 坂口満宏、前掲書　pp.17-42

たアメリカにおける日系人社会の構造が日本政府によって改善されることは全くなかったし、アメリカに忠誠を示しても改善されることはなかったのである。その最終局面として日米開戦時における日系移民の「強制収容」が行われたのである。この約 45 年間における日系移民のアイデンティティーの変容は大変複雑なものである。日系移民のアイデンティティーの葛藤と国民国家による統合の圧力との矛盾は、アメリカ全土の日系移民に対する暴力として顕在化していった[3]。二つの国家の間に挟まれて、日系移民のアイデンティティーは確立されることなく常に二つの構造のもとで「揺れ」を感じながら独自のアイデンティティを求め続けたのである。多文化主義における日系移民史の語りは、強制収容から補償運動に至るまでのアイデンティティーの変容に関する事例ばかりを取り上げてきた[4]。しかし移住初期のこの 45 年間は、強制収容や戦後の補償運動の時代よりも日系移民のアイデンティティーの葛藤が顕著な時期であったといえる。この時期のアメリカ社会は政治・経済・社会的抑圧の連続がその特徴であり、強制収容はその最終的帰結であったに過ぎない。

インタビュイーB は、忠誠心調査において「ノー」と答えてツールレイクに収容されたことについて、決して不忠誠という一つの帰結に至ることはないことを強調している。そして、政府が日系移民に対して忠誠を示させようとする行為自体が問題であると述べた。

インタビュイーC は、忠誠的でない者を管理するために、政府が忠誠心調査を行ったとしている。そこでは個人の主張や立場は全く無視され、従わない者はアメリカへの不忠誠者とみなした。

これらの歴史を多文化主義は放置し、強制収容と戦後の日系移民の勝利のみを取り上げている。つまり一部の日系移民によるアメリカへの忠誠と貢献を認識し共有するためだけに、多文化主義は日系移民を表象する。

アメリカの多文化主義言説が強制収容と補償運動という二つの事象を取り上げ、日系移民の忠誠と貢献を認識させたい理由は、移民国家アメリカの内部にいる諸民族の「統合」を進めるためである。つまり日系移民の強制収容と補償運動は、アメリカへの「忠誠」と「貢献」という文脈においてのみ語られているのである。

---

[3] 戸上宗賢（1986）『ジャパニーズ・アメリカン』ミネルヴァ書房　p.319
[4] 米山は、多文化主義における日系移民史の語りについて批判的考察を行っている。
米山　前掲書

8-2　多文化主義による日系移民の表象

アメリカが移民を同化させ、管理し、統合させたことは、歴史的にみて過去の出来事ではない。現在においても国家は多文化主義や多文化共生という理念の元で、多くの移民に同化を強いている[5]。「アフリカン・ディアスポラ研究」の中で戴エイカはオバマ大統領を例に挙げ、アメリカ内部の価値をめぐる闘争に言及している。まずオバマが掲げる人種問題に関していえば、彼の出自がディアスポラ的であり、アメリカ内部のマイノリティーの人々にとって彼の発言は正に人種主義の克服を意味するものであった。アメリカ内部のマイノリティーは喜びに満ち、長く皮相的になっていたアメリカ社会の価値（平等の精神）が蘇ったと戴は指摘している。しかしながら、オバマの言説は「理想のアメリカ」に向かう旅路への回帰を目指し、繰り返される「多から一をつくる」という建国の精神に言及するとともに「より完全な統合」を訴えた。既に彼は「多数者の言葉で語りはじめ」てしまったことを彼女は危惧しているのだ[6]。彼はもはやマイノリティーに属する立場にない。彼はマジョリティーに属した立場にあり、社会統合が成されたアメリカの中で国民国家言説を唱える提唱者なのである。繰り返される彼の発言の中に、批判しなければならない言説としての「統合」が存在するのである。

なぜオバマの演説や彼の言葉を取り上げる必要があるのか。それは現在のアメリカも過去のアメリカから連綿と続く基本的な「統合」の精神を持ち続けているからである。

移民の「統合」は現在の欧米諸国で共通してみられる現象である。岩渕功一は、欧米諸国で市民権取得にあたってのテストを実施することや、その際に、国の核たる文化と価値への同化と忠誠が制度化されるようになったと指摘し、多文化社会においては「統合」がより強調されるようになったことを批判している[7]。彼は現代の同化理論の問題を以下のように述べている。

> 「文化的に違うことを認めるとともに、政治・経済・社会的な平等を」というシティズンシップの論理に代わって、「違ってもかまわないが、国の核たる文化や価値観

---

[5] Turner, Graeme. 2003. After Hybridity: Muslim-Australians and the Imagined Community, *Continuum: Journal of Media and Cultural Studies*, 17(4) pp.411-418
[6] 戴エイカ、前掲書
[7] 岩渕功一（2010）『多文化社会の〈文化〉を問う　共生/コミュニティ/メディア』青弓社　p.10

を受け入れ、そして、どのようにこの国に利益をもたらすのかを明らかにせよ」という同化の論理が改めて台頭している[8]。

現代において移民に対する風当たりは更に厳しくなっている。シティズンシップの論理よりも同化の論理が強調されるようになったからである。現在の多文化主義を志向する国家や国民は移民を受け入れることの利益しか議論しなくなっている。移民は自らの移住先での活動が国家にどのような利益をもたらすのか監視される。このように、多文化主義という考え方には、その背後に移民の同化や統合、管理が見え隠れする。アメリカの多文化主義論争においても、同様に統合を意図する論争が展開されてきた。そして多文化主義はその中心的な議論の場を提供してきたのである。つまり現在の多文化主義論争の中においても「統合」という議論が繰り返されている。

アメリカの統合言説を支持する論者としてアーサー・シュレージンガーが挙げられる。彼は多文化主義が米国でアフリカ中心主義と同義に扱われ、アメリカの分裂を助長していると非難する[9]。彼にとっての多文化主義とは、アメリカを統一するための装置でなければならず、そこにアフリカを中心とした教育は必要ないと主張する[10]。つまり彼にとってのアメリカの中心は、政治にしろ文化にしろヨーロッパ的でなければならないのである。こうした彼の思考はアメリカのマジョリティーによって支持され、多文化主義の概念の中に国民の「統合」を含有させようとする思考を植え付けることとなった。こうして 1990 年以降積極的に促進された多文化主義という概念は現在もこの「統合」という理論によって維持されているのである。

8-2-1　多文化主義に表象される日系移民の問題

アメリカにおける多文化主義の過程を理解するためには、国民国家の存続に関わる重大な課題を理解しなければならない。その課題とは多様性の中から統合を見出すということである。フクヤマは、普遍的な歴史とは、人々が認知を求めて闘い、国家がそれを

---

[8] 同上　pp.10-11
[9] Schlesinger Jr., A. M. 1992. *The Disuniting of America: Reflections on the Multicultural Society*. New York: Norton
[10] 同上

承認し、国民として統合するプロセスそのものであると述べた[11]。つまり国家は移民を承認する際、常に国民として統合する。国家が人々を国民として扱うプロセスにおいて重要となるのが、ナショナルなアイデンティティーを持たせ、そのアイデンティティーを維持させるということだ。ナショナルなアイデンティティーを維持させるために国家は勲章やメダルを善良な国民に与える。フクヤマは、『歴史の終わり』の中で、メダルや勲章のために人々が戦うことを繰り返し強調し、国家への服従と国民化へのプロセスは本来人間に備わった必然的な本性であると主張する[12]。以下では、アメリカの多元主義や多文化主義の過程をみながら、多文化主義によってアメリカ人としてのアイデンティティーがどのように強調されてきたのかをみていく。

アメリカにおいて、「アメリカ人」としてのアイデンティティーを持続させることは、国家を維持する上で最重要の課題であった。アメリカでは、1970 年までは白人系住民の 60 パーセントがイギリス系であり、「アングロ・コンフォーミュティ」を同化の理想的なあり方としてきた[13]。この時代においては、ヨーロッパの文化がアメリカの中心であるという理論が通用していた。実際に 1960 年代になるまで、日系やアジア系、メキシコ系の移民には、白人と同等の権利は与えられていなかったのである。

多文化主義論争の中で中心的な議論として取り上げられたのが、「文化多元主義」と「多文化主義」である。前者はホラス・カレンによって提起され、この考え方は同化主義の下で同質なアメリカを目指すことをやめ、民族文化的多様性を積極的に認識していこうとするものであった[14]。カレンは 1920 年ごろにこの思想を提唱したが、その時代的背景には反黒人主義や反ユダヤ主義の根強さがあると考えられる。さらに民主主義を掲げるアメリカにとって、この文化多元主義こそが民主主義的であり、第二次大戦における敵国の全体主義的イデオロギーに対峙でき得るものとして全面に打ち出されたのである。つまり文化多元主義が誕生した後に、文化多元主義自体がアメリカ社会の国家統合の理念として機能していったのである。ここで批判すべき点は、多文化主義と同様に文化多元主義自体が国民国家の統合の機能を果たしてきたということである。

この議論におけるもう一つの問題は、カレンの提起した民族文化的多様性の推進であ

---

[11] 詳しくは第 2 章第 1 節第 2 項を参照されたい。
フクヤマ『歴史の終わり（下)』前掲書　p.61
[12] フクヤマ『歴史の終わり（上)』前掲書　pp.258-266
[13] 戴エイカ（1999)『多文化主義とディアスポラ』明石書店　p.39
[14] 同上

る。国家統合の問題と民族文化的な発想の問題を明確に分析しているのはホミ・バーバである。彼は近代における自我というアイデンティティーづくりに対して次のように警戒している。

> アイデンティティは決して先験的なものではないし、最終的な完成品でもない。それは常に全体性といったあるイメージに接近するいわくつきの過程でしかない[15]。

彼はこう強調し、民族性を強調した上での多様性をも批判している。民族性を強調する文化多元主義も自民族中心主義において統合されてしまうのである。つまり文化多元主義は自民族の文化を中心としながら民族性を肯定することで、特定の民族に属さない人々を排除してきたのである。民族性を肯定する文化多元主義の問題は、文化多元主義自体が民族的同化を積極的に進めてきたことにある。そして文化多元主義は民族的なアイデンティティーを強化しつつ、アメリカ社会においては多元主義や統合を意図する同化主義と同義に扱われてきたのである。

ツールレイクの歴史は、多文化主義による日系移民の表象から排除された歴史である。日系移民の歴史において、ツールレイク・キャンプやインタビュイーらの声が注目されることはなかった。インタビュイーらの証言からも明らかなように、彼/彼女らの歴史は日系移民史において、好くない歴史として排除されてきた。バーバが指摘するように、民族性を強調した多様性も、日系アメリカ人という国民性において統合されてしまうのである。

また、文化多元主義が積極的に議論されるようになると、自民族の統合が行われる一方でアメリカ市民の中心的な文化が主張されるようになる。アメリカ市民が共有すべき文化は多様性の中にある中心性を必要としたのである。その中心となる文化はマジョリティーを占める西欧文化でなければならなかった。こうして 1930 年代後半から 1950 年代にかけて、文化多元主義は国民国家の統合の理論に加担し、同化された諸々の文化は文化的な差異を失うと同時に均質化され、その中心にヨーロッパ的な文化が置かれたのである[16]。

一方で文化多元主義が国民国家の統合の理論に加担してきた 1950 年代に、アフリカ系

---

[15] Bhabha, H. K. 1994. *The Location of Culture*, London: Routledge, p194
[16] 戴エイカ、『多文化主義とディアスポラ』前掲書　p.42

アメリカ人による公民権運動が生じた。この運動は他のエスニック・グループにも影響を及ぼし、先住民、アジア系移民、メキシコ系移民などもアメリカ社会での正当な権利を主張するようになった[17]。しかし 1960 年代に入ってもアメリカ内部のマイノリティーの社会的地位は依然として低く、アメリカ文化が西洋文化を指すという神話が、相変わらずまかり通っていた[18]。教育者たちはその原因が西欧文明を中心とした教育制度にあるとして、「多文化教育」を通して改善しようと試みた[19]。多文化主義という言葉は、多様性の尊重を目的としておりしばしば文化多元主義と同義として扱われるが、この新しい考え方はアメリカ社会全体が一つの文化を共有しているという言説を解体するという意味での理解が当初はあった。つまり文化多元主義とは異なり、多文化主義はアメリカ文化として共有される文化ではなく、エスニックな文化を第一義的文化とし、中心となる文化ではなく、各々の文化を相対化しようという試みであった[20]。

しかし多文化主義はアメリカの国民統合言説を訴える論者からの批判に晒される。その代表的論者がシュレージンガーやデイヴィット・ホリンガーである。シュレージンガーはアメリカ社会に対する抵抗としてのアフリカ系アメリカ人の主張を、「アフリカ中心主義」であると非難し、分離主義に陥っているとしてアフリカ系住民の抗議に断固反対した。彼は他方でアメリカにおける中心的文化を主張し、それは西欧文化の優位性に基礎を置かなければならないと主張している[21]。彼の立場は単なる国家主義者とは異なり、文化的な多様性と寛容な形態を肯定するものであった。文化多元主義には一定の理解を彼は示しているが、公共の空間においてはアメリカ特有の「個人主義」「機会の平等」「自由」「成功」といったイデオロギーの共通意識によって、人々は「アメリカ人」という統一されたアイデンティティーの下にまとまることができると考えたのである[22]。

一方、ホリンガーは『ポスト・エスニック・アメリカ』の中で多文化主義を越えた議論を展開させようと試みた[23]。文化多元主義や多文化主義が重視する民族文化による文化的アイデンティティーを否定的に捉え、このような民族的要素が政治文化的に消滅してゆくことを期待している。彼は、属性にこだわることなく個人の自発性を重んじ、複合

---

[17] 同上　p.44
[18] 同上　p.48
[19] 同上
[20] 同上
[21] Schleisinger、前掲書
[22] 辻内鏡人「多文化主義のパラダイム」、油井大三郎・遠藤泰生編、前掲書　p.68
[23] Hollinger, D. A. 1995. *Postethnic America: Beyond Multiculturalsim*. New York: Basicbooks

的なアイデンティティーを尊ぶことを提起した。彼は文化多元主義を考案したカレンを批判し、カレンがユダヤ系の子孫としての民族性を強く意識し過ぎていたことまで批判するのである。

ホリンガーの主張は、バーバの議論における脱中心化のプロセスと重なりあう部分がある。それは脱民族性を説いたところである。しかしホリンガーの主張をよく考察すると、彼の主張が限りなくカラー（つまり人種）の優位性を意識していたことを認識することができる。

> 多くのヨーロッパ系子孫のミドルクラスのアメリカ人が、ポスト・エスニックといえるが合衆国は全体としては、この理想の方向からはるかに隔たっている[24]。

「ヨーロッパ系子孫」を標準的なアメリカ人として彼は想定し、そして白人以外のものをエスニックに固執した人間として差別化している。彼は結局のところ、アメリカはヨーロッパ系が中心であることを前提としており、それ以外の民族はいつまでもエスニックに固執した遅れた民族であると言う。彼は典型的なエリーティズムの立場から、「ポスト・エスニック・アメリカ」を語っているのである。非白人は「個人」を基礎におくアメリカの市民的共同体という理想を理解せず、人種と民族という集団的属性に呪縛されているのが問題であると認識しているのである[25]。彼が多文化主義を越えようとするのは、アメリカの内部における少数民族による主張が白人による優位性を揺るがすと考えたからである。実際に彼はアメリカの国民共同体を出入りする文化や民族について次のように指摘する。

> もしすべての連帯が究極的には原初的なものではなく構築されたものであるならば、アメリカの国民国家に関連して発展してきた文化的継続性は人工的だと宣言し、他の諸文化は真正だとする主張を額面通りに受け入れることは適切ではない。実際、市民的と民族的との区別は最終的にはなくなる。時の経過とともに市民的帰属が、究極的には民族的と認識される帰属をつくる助けになりうるからである[26]。

---

[24] 同上　p129
[25] 辻内鏡人、前掲書　p.70
[26] Hollinger, D. A.、前掲書　p.153

アメリカ社会の内部で抑圧され続けた人々が、アメリカ社会に対して抵抗し自らの抑圧された文化を主張するとき、彼はその主張を退け、従来のアメリカ文化を擁護する立場をとる。「市民的と民族的との区別はなくなる」という彼の主張は、抑圧され続けた人々の民族的な主張を掻き消し、彼/彼女らをアメリカ市民と同義であると扱うのである。

> 非常に多くのアメリカ市民に自分たちのことをアメリカ人と呼ぶようにさせた歴史は、アメリカにもたらされたディアスポラのアイデンティティの歴史とまったく同じように現実なのである[27]。

同じように彼は抑圧されてきた人々を巧みな表現によってアメリカ人と同義に扱おうとする。ヨーロッパ的とされてきた「アメリカ人と呼ぶようにさせた歴史」に対抗して、抑圧されてきた人々が「ディアスポラのアイデンティティの歴史」を主張されているにも関わらず、彼はこの二つの歴史を同一のものとして扱うのである。このように『ポスト・エスニック・アメリカ』での彼の主張は、「ヨーロッパ系子孫」を他者である白人以外の民族と対比させながら、自らの優位性を他者のアメリカへの同化という形で維持させようと試みたのである。

シュレージンガーやホリンガーの議論は白人系の文化を共有しつつ、他の文化を他者化するプロセスを提供した。結局のところ彼らの議論によって多文化主義は自己の文化を保護するために多様性を承認しているのである。

このように多文化主義においては、マジョリティーによるマイノリティーへの一方通行の承認が認められる。文化を承認する際に生じる権力の問題を議論しなければ、多文化主義の中で語られる日系移民の諸問題を分析することはできないのである。

8-2-2　多文化主義による「承認される文化」の問題点

文化的差異が至るところに存在するとき、多文化主義は多様性という言葉によって個々の文化を承認してきた。バーバは、文化的差異のダイナミックなプロセスを管理す

[27] 同上

る試みが多文化主義であるとしている[28]。バーバは文化多元主義も多文化主義も結局のところ、文化的差異を管理するものとして機能してきたことを批判している。それは多様性を管理することによって生じる権力の問題である。多文化主義言説による道徳的な承認は、マイノリティーの文化（バーバのいう文化と文化の中間）における浮遊性やハイブリッド性をかき消し、そしてマイノリティー文化自体を多文化主義の中で語らせ管理させる。日系移民の場合も、アメリカに忠誠を示さなかったものを多文化教育の中で記載することは一度もなかった。ツールレイクの歴史は、多文化主義の中で議論されることはなかったのである。

こうして社会構造の中で語られないものたちは、それ自体に対する言葉を失い、支配されていくのである。バーバは多文化主義者が文化の多様性の承認を行うかどうかの判断をし、多文化主義として新たに他文化を承認する過程を「文化的差異の封じ込め」であると指摘している[29]。

アメリカの多文化主義論争において、「承認される文化」を提唱した日系二世がタカキであり、第 2 章で論じたように、彼はアメリカの歴史が非常に断片的であるとして、様々なエスニック・グループの相互作用によってアメリカが形成されていったと主張した。そうすることで、彼は複雑なアメリカの肖像を描こうとしたのだ[30]。すべてのグループがアメリカの建設に貢献してきたとし、個別の体験を語ることによってアメリカ史を多元的に捉えなおそうとしたのである[31]。タカキが提唱する多文化主義は一見、多様性をマイノリティーの立場から認めさせようとする運動として捉えることができる。しかし、

> 世界中の岸辺からやって来たアメリカ人にとって、多様性こそがアメリカ社会形成の中核となっており、…異なるコミュニティーのそれぞれの歴史的記憶は、寄り集まって一つの大きな歴史の語りをつむぎだしてくれる[32]。

と指摘し、アメリカにおける共通した過去の構築を試みる。多元的に歴史を語ることに

---

[28] Bhabha, H. K. 1990. The Third Space. In J. Rutherford (Ed.), *Identity: Community, Culture, Difference* (pp. 207–221), London: Lawrence & Wishart
[29] 同上　p.208
[30] 戴エイカ、前掲書　p.52
[31] Takaki, R. 2008. *A Different Mirror: A history of Multicultural America*. New York: Little Brown and Company
[32] 同上　p.428

よって、特定の集団に属するアメリカではなく多様性を掲げる一元的なアメリカを創造しようとしたのだ。

タカキのいう「大きな物語」は、移民がアメリカに貢献するという前提で語られる。タカキは「多様性こそがアメリカ社会形成の中核」と指摘しながら、忠誠的で国益を生み出す「善良な日系アメリカ人」や「善良な移民」をアメリカの多文化史の中で語るのである。そこでは岩渕が指摘するような同化の論理が見え隠れする。「多様性」といいながら、従順な移民のみを語り、他方で従順でない移民を排除する。より多様なアメリカ社会において、ツールレイクの被収容者らは過去へと忘却される。

ここでの問題は、歴史的に異なった形で支配され続けた人々が問題視されることなく、異なる複数の文化が均質なものとして扱われることである。タカキの議論はアジア系アメリカ人を多文化主義の中で表象する具体的な例といえる。「寄り集まって」語られるアメリカのマイノリティーの歴史は、主流文化に対する抵抗としての作用がある。しかし主流文化に対する抵抗が、実はアメリカ文化という本質主義に陥っているのだ。多様性をさしあたりは排除せず、市民的徳を強化することによって社会的な統合を実現しようという一種の普遍主義的で啓蒙的な視点に立った議論といえるのである[33]。

ここまで多文化主義が「多様性」を主張すると同時に、社会統合を可能とし、また権力による支配関係の構造を隠蔽する作用を、多文化主義の仮定と論争の中で考察してきた。次にバーバのいう「文化的差異の封じ込め」が、多文化主義の中で語られる日系移民にどのように影響しているのかを、アメリカにおける多文化教育からみていかなければならない。タカキのようにすべてをアメリカに還元する本質主義的多文化主義は、本稿のツールレイク史やインタビュイーらの証言に限らず、アメリカという国家に属さない人々にとっての抵抗の運動を掻き消したり、一方で封じ込めることを可能としてしまったからである。

8-2-3　多文化教育による日系移民の承認

本項においては、アメリカの多文化教育の中で日系移民がどのように語られてきたかに注目する。多分教育において、日系移民の多様な歴史が語られることはなかった。アメリカ政府が行った日系移民に対する補償は、「条件つきの歓待」によって償われること

[33] 辻内鏡人、前掲書　p.70

になり、多文化主義論争の中で論じた日系移民は多文化主義教育の中でより強固に管理されていくことになる。その過程をここでは、歴史教科書を一つのテキストとして分析していきたい。ここで分析するのは、1960 年代の歴史教科書にみる日系移民の記載についてであり、*The United States of America: A History for Young Citizens* と *History of a Free People* の二つを取り上げたい。

> カリフォルニアの住民のなかには、州内の日系移民の数を懸念し始める者たちがいた。日系移民は非常に低い賃金で働き、したがって生粋のアメリカ人労働者から仕事を奪っていると主張された[34]。

ここでは日系人の労働に対する勤勉さを強調しつつ、その結果として日系移民がアメリカ人労働者の仕事を奪う「他者」として扱われている。労働に対する白人と日系人の価値観の相違をテキストの中で教えているのだ。人種による本質主義（「生粋のアメリカ人」と「日系移民」を比較する立場）を植え付けると同時に、アメリカ社会の周縁に存在する日系移民を野蛮なものとして表象している。また別の教科書では、次のような記述がある。

> 民間人の通常の権利が国家の安全のために侵略されるという唯一の重要な出来事があった。真珠湾攻撃に引き続く動揺状態のなか、10 万人以上の日系アメリカ人が太平洋沿岸の自らの家から追い出され、軍隊によって運営されるキャンプに集められた[35]。

ここでの強制収容に関する歴史的記載も問題含みである。なぜなら「唯一の重要な出来事」という表現は誤りであり、それはドイツ系やイタリア系、さらには南米からきた日系に対して行った強制収容の歴史を隠蔽するものであるからである。また強制収容が行われたのは真珠湾攻撃による動揺が原因であり、それがなければ強制収容は行われなかったといわんばかりである。同様に日系移民に対する排斥の延長上として強制収容が行

---

[34] Brown, R. C., Helgeson, C. A., & George, L. H. 1964. *The United States of America: A History for Young Citizens*. Morristown, NJ: Silver Burdett
Bragdon,H.W., & McCutchen, S.P. 1964. *History of a Free People*. New York: The Macmillan

[35] 同上　pp.71-72

われたという従来の日系移民が語る歴史性に全く触れていない。さらに、もう一つ指摘しなければならないのは、「日系アメリカ人」という表現である。アメリカで生まれていない日系一世は、当時日系アメリカ人ではなかった。彼/彼女らは帰化できず、日本人として扱われていたのである。そのことを記載せず、「日系アメリカ人」として扱うことは、まさに初期の多文化教育における社会統合の論理そのものである。

1980 年代に入ると権利の保障から締め出されていた日系移民は、国家の利益に直結する「忠誠心」や「貢献」という形で語りなおされる。そしてアメリカの内部へと日系移民は完璧なまでに包括されていく。

> 西海岸の日系アメリカ人たちがキャンプへ集められていたにもかかわらず、他の者たちは合衆国の軍隊に加わっていた。ハワイだけでも、16000 人の日系のアメリカ人が軍に徴兵されていた。…当初、軍は二世（アメリカ生まれの、日系移民の子孫）を受け入れなかった。軍がその方針を変更した時、アメリカに自らの忠誠を証明することを決めた何千という者たちが入隊した。…1944 年 6 月、第 100 歩兵隊はその時イタリアで活動を開始した第 442 連帯の部隊となった。この戦闘部隊の隊員たちの戦いぶりは、勇敢さと向こう見ずな英雄的行動を伴うものであり、それは彼らの決死のスローガン「当たって砕けろ」に約言されていた。戦闘犠牲者は膨大だった。1700 人以上が死亡し、およそ 5000 人が負傷した。彼らはまた、合衆国軍のなかで最も多く受勲した部隊の一つである[36]。

この歴史的描写は決定的に日系移民をアメリカの中に包括された形で描いている。ここでは一部の日系移民の貢献を全面的に主張し、彼らの「特殊性」を「当たって砕けろ」のスローガンで完結させていったのである。

その後 1990 年以降のアメリカの歴史教科書では、アフリカ系アメリカ移民とマイノリティーである日系移民が記載された[37]。これらの移民を取り上げる歴史教科書は、日系移民が政府の不正義によって「強制収容」され、日系移民のアデンティティが喪失されたという歴史を紹介している[38]。またそれらは同時に戦後、彼/彼女らが立ち上がり政府に

---

[36] 同上　pp.74-75
[37] Berkin, C., Miller, C.L., Cherny, R.W.,and Gormly, J.L. 1999. *Making America: A History of the United States*, MA: Houghton Mifflin Company p.836
[38] 同上

対して、「強制収容」に対する補償運動を行い、それによって補償運動の勝利がもたらされたという一連の日系移民の歴史を記載するものであった[39]。日系移民の歴史はアメリカのテキストの中で公式に位置づけられたのである。このことは次のようなアイデンティティーの仮定を示唆するものであった。

第二次大戦中、日系移民は「強制収容所」に収容された。これによって日系移民のアイデンティティーは完全に失われてしまう。しかし戦後、彼/彼女らは立ち上がり不等な「強制収容」に対する補償運動の勝利においてアメリカ人としての権利を勝ち取った。これによって日系移民はアメリカ人としてのエスニック・アイデンティティーを確立した[40]。こうして多文化教育の中で日系移民が語られ、表象されるようになったが、1980年代の歴史教科書との相違点は「国家主義的語り」から「革新的語り」への移行であった[41]。1990年代の語りは、市民社会の正義を根拠として日系移民を記載しており国家の不正義を強調することで、人間の普遍的権利を認めていこうとするイデオロギーにある。しかしこの「革新的語り」は国家主義の語りを避け、アメリカ市民としての正義を主張する、いわば代価的な装置として機能している。その意味では今まで批判してきた多文化主義と同一のものであり、市民的正義を全面に打ち出した社会統合の機能を多文化教育が担ってきたということはいうまでもない。

現在のアメリカにおいてもこのことは明白である。オバマは抑圧されてきたという彼独自の経験を語り、そこに共通のアメリカを導きだそうとしている。オバマの言説も多文化主義も現在のアメリカの社会に、「多から一をつくる」ことを可能にしようと試みている。

アメリカにおける多文化主義は自らの帝国主義的文化に対して批判的立場をとってきたといえるだろうか。寛容なベールを纏った文化的支配としての多文化主義は、ナショナルなアイデンティティーを強化していくと同時に自己に対する批判や否定を免れてきたのではないか。同様に日系移民に関して言えば、マイノリティーとはいえアメリカに属したそれらの人々は国家批判を生み出す視点を持ってこなかったと言えるのではないか。これまで述べてきたように、日系移民はマジョリティーを批判する一方で自国の本質的文化主義を批判してこなかった。つまりアメリカの多文化主義は「日系アメリカ人

---

[39] 森茂岳雄「アメリカの歴史教育における国民統合と多文化主義」油井大三郎、遠藤泰生編、前掲書
[40] 油井大三郎・遠藤泰生編、前掲書
[41] 岡本智周、前掲書　p.80

性」を生産することを可能としたのであり、日系移民の「日本人性」を生産することも可能にした。そしてこのことは、ツールレイクの被収容者らの証言からも理解されるように、「アメリカ人性」も「日本人性」にも属さない、或いは重視しない人々を疎外することに成功してきた。このような近代の国民的概念の正当化といかなる国家に属さない「他者」の生産という排除の構造をどのように脱すればよいのか。

まず行われねばならないのは無批判な包摂プロセスを試みる多文化主義に対して批判的視座を持つことである。歴史の中で語られない被抑圧者や、多文化主義の暴力的な歴史の分析を通して、歴史的に語られてこなかった人々を再度歴史的・文化的観点から考察し直し、「他者化」された日系移民の側から多文化主義を語ることが可能となる。インタビュイーBは、「他者化」された日系移民の側からの語りを次のように述べている。

> ツールレイクの収容者は抑圧された状況の中で、忠誠心調査をさせられました。彼らはその時点で生きるために最善の方法を考えただけです。しかし共通していえることは彼らの選択がアメリカに対する抗議と抵抗を意味していたということです。しかし結果として強制収容所に入れられた私たちは抵抗する声すら奪われてしまったのです。

強制収容所において、彼/彼女らの声は掻き消されてしまった。しかし、ツールレイク・キャンプの歴史と証言が、多文化主義による日系移民の表象の外部に存在していることを明確にしている。「他者化」された日系移民の語りは、国家の包摂プロセスに対して明確な「ノー」を政府に対して突き付けていたのであり、アメリカへの忠誠/不忠誠に対する答えではなかったのである。多文化主義による日系移民の表象が忠誠/不忠誠を生産し、同時に忠誠/不忠誠に必ずしも当てはまらない、ツールレイク・キャンプのサバルタンを排除してきたのである。

8-3　ツールレイク・キャンプからみた日系移民の文化的差異

日系移民に関する歴史教科書における議論では、研究者や知識人自らが属する「自己の文化」とは明確に区別される「他者の文化」の存在が、「正当」な分析対象として学問領域の中で定義されてきたことを物語っている。多様化された状況においては、空間的

に移動する人々を「他者」と定義し、そうした前提において分析がなされる。此処に「他者」の文化が侵入するとき、研究者や知識人は我々と研究対象である彼らの空間との境界を設けた上で「他者」とされる彼女/彼らの文化を容認してきた。それが多文化主義においては日系移民を「善良なアメリカ人」として語った理由である。多文化主義という言葉の権力関係を理解するためには、誰が誰について、どのような権威を持って知を生産しているのかを問うていかなければならない[42]。「他者」を語る主体としての「我々」と「彼ら」との位置関係、そしてそれらの間に生じる力と知の関係を問わなければ、結局のところ多文化主義は「リベラル・多様性・寛容性」というイメージの生産/再生産に終わってしまう。もしそうなれば「リベラル・多様性・寛容性」は多文化主義という言葉の表面的な意味を表しているにすぎない。そして多文化主義の中で語られてきた日系移民を正当化し、語られなかった人々を排除することに繋がってしまう。そうならないためには、多文化主義という言葉の意味よりもその政治性や実効性を分析することが求められるのである。

米山はアメリカにおける多文化主義において

> じっさい、多文化的現実が「問題」とされるのは、本来そこにいるはずのない文化的・社会的少数派が、目立った存在―それは必ずしも多数派というわけではない―として権威化された位置を占めるようになって以来のことである。たとえば合衆国における教育の現場は、生徒の側からみれば、これまでも常に多文化的、多人種的、民族的であった。「多文化主義」が教育の現場で取り沙汰されることになったのは、マイノリティーが教師の側に立ち、カリキュラムを定め、知の分配に関わりはじめたことが教育の「危機」として受け止められるようになってきたからである。文化的・社会的少数者が、知識を受理する側、国民化される側、啓蒙される側に置かれていたときには、多元性や複数性が意識されてはいても、今日のようなかたちで問題化されることはなかったのである[43]。

と指摘する。アメリカにおける多文化的状況は、日系移民たちが日本からアメリカへ移住し定着化するまでの間に既に存在していたといえる。米山は多文化主義者らが知の分

[42] 米山リサ、前掲書　p.15
[43] 同上　p.16

配を教育の「危機」として受け止めたことが、教育の現場において多文化教育が取り入れられた要因としている。多文化主義者らにとってリベラルな社会とは自由を容認することにあるので、アメリカ社会は多文化主義の有効性が最も発揮される舞台となるであろう。多文化主義は正に異質なものが声を持った瞬間にそれらを容認する機能であり、その機能を多文化主義が提供してきた。また多文化主義者らはアメリカのようなリベラリズムを推進する社会において、その有効なイデオローグ的機能を果たしてきたのである。

多文化主義の恩恵を受けているのは、国境を行き来する企業でもある。人材の確保や消費者の開拓、企業国家における生産性の観点からみればまさに多文化主義のイデオロギーは有効性を持っているといえよう。安価な労働力を求める資本が国境を越える時、人種・宗教といった差異を取り込んだり容認するには、多文化主義の「寛容性」が最大限に生かされるのである[44]。

自由主義的な前提から文化の多元化を推進したり、企業や商業の生産関係において推進される多文化主義の問題は、文化間に生じる差異や矛盾を管理しつつ、それを封じ込める機能自体にある。アベリー・ゴートンはこれを「多様性の管理」として指摘し、人種や階級や性差によって生じる不均衡を多文化的状況の問題として問いただすことなく、逆に隠蔽し効率的に管理しているという[45]。日系移民の歴史が多文化主義言説の中で取り上げられることによって、日系移民はアメリカ社会に歓迎されるようになったが、ツールレイク・キャンプの歴史や、厳しい排斥、家族を取り巻く複雑な日系移民の個の状況は、多文化主義の機能の中で隠蔽されてしまったのである。こうしたの文化的差異についてバーバは

> 文化的差異が表象するのは、単に文化的価値における対立する内容や敵対する伝統のせめぎ合いだけではない。文化的差異は文化における評価と解釈の過程に、継続的で非共時的な意味作用の時間による、突然の衝撃を導入する[46]。

---

[44] 米山リサはこうした企業の利権と絡んだ多文化主義を「コーポレイト多文化主義」と定義し、リベラリズムの体系と絡んだものを「リベラル多文化主義」としている。
[45] Gorton, A.F. 1996. *Mapping Multiculturalism. Minneapolis*, MN: University of Minnesota Press
[46] バーバ,ホミ(2005)『文化の場所』法政大学出版局　p.275

と指摘する。文化的差異とは民族や宗教による対立ではなく、文化観における解釈不可能性からなる衝撃を意味する。つまり文化的差異の分析が求めるのは特定の学際的な言説の変形を促すことである[47]。これは前述した「他者の文化」の存在を「自己の文化」から分析するといった多文化主義の一連の研究を批判するものである。いかに「自己の文化」の内部に「他者の文化」を当てはめるかが多文化主義における課題であった。しかし「突然の衝撃」の「導入」や「非共時的な意味作用の時間[48]」は、それまで当然視されていた「自己の文化」が文化的差異によって解体され、異種混沌性の中で「自己の文化」自体が問い直されることを意味している。多文化主義の統合という機能に従属しないツールレイクの歴史は、当然とされてきたアメリカの多文化社会という「自己の文化」に対して、「突然の衝撃を導入」する。つまり現在までの多文化主義的な「日系移民」の語りに対して、抑圧されたツールレイクの被収容者、或いはツールレイクの歴史から多文化主義を批判することが可能となるのである。

> （文化的差異が）文化テキストの学際性の中に入り込むと、生気する文化形態を所与の言説的因果関係や起源によって説明することが不可能になる[49]。

国民の「深層」にまつわる言説や所与とされてきた国民の歴史は、文化的差異による衝撃によって問い直される。ツールレイクの歴史と証言から明らかとなる文化的な差異は正当とされてきた多文化主義そのものの語りを変容させる。ツールレイクの証言に関していえば、バーバのいう文化的差異とは多文化主義の中で語られなかったアイデンティティーの「揺れ」である。

日系移民にとってのアイデンティティーは二つの国家が生み出す社会的構造の中で「揺れ」てきたことを考察してきた。彼/彼女らのアイデンティティーは新たな国民として構築されることもなく、日本からは疎外されアメリカ社会からは周縁化される存在となっていったのである。

こうしたアイデンティティーの葛藤は現代のポストコロニアル研究において重要な位

---

[47] 同上　p.276

[48] 文化の規範が支配的文化によって設定されるときに文化は閉ざされたものとして規定されてしまう。閉ざされたものとしての文化は、時間と空間を前提とする文化の規範化によって解釈されてしまう。これに対して文化的差異は、支配的文化が前提とする時間と空間的設定を問いなおす働きがある。

[49] 同上

置を占めている。例えばバーバは国家によって固定化されないアイデンティティーの流動性について「ある者にとっては、非決定論の原理こそが、人間の意識的な自由を理解可能なものとする[50]」と述べる。つまり固定化されない移民のアイデンティティーに注目することが、人間が抑圧される諸々の状況から解放される手立てとなることを主張している。ツールレイクの被収容者らの主張や分析こそが、抑圧から解放への道標となるのである。バーバはその可能性について次のように指摘する。

> ポストコロニアルな視点は、植民地にまつわる第三世界諸国からの証言や、東と西、北と南といった地政学的区分の中での「少数派」の言説から生まれる。この視点は近代のイデオロギー言説に介入し、それが不均等な発展と、さまざまな国民や人種や共同体や民族の示唆的でしばしば不利な歴史に、ヘゲモニー論的な「規範性」を与えようとするのを許さない[51]。

彼の主張は難解であるが、これまで指摘した多文化主義の一連の言説をみれば「規範性」との類似点から彼の議論を明確に理解することが可能である。多文化主義やそれに纏わる主体は、国民や人種を所与のものとみなした上で、ヘゲモニーを維持する「善良なモデル」として日系移民を「規範化」してきた。そして三人のインタビュイーのような「善良なモデル」に属さない人々は規範化にとって不利な歴史として、多文化教育から排除されてきた。しかし多文化主義を批判的視座から考察することによって、バーバのいうダイナミックな文化的差異の運動と「規範性」を対置する新たな可能性が開かれる。つまり統合を進める多文化主義において語られなかったツールレイクの存在を考察することで、構築された「規範性」から脱することが可能となるのである。その可能性は歴史が下した判決―従属、支配、ディアスポラ、強制追放―に抵抗した者たちからこそ、生と思考についての教訓を得ることができるのである[52]。

---

[50]Derrida, J, 1984. *Taking Chances :Derrida,Psychoanalysis, Literature*, Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press, p8
[51] バーバ、前掲書　p.289
[52] 同上　p.290

結論

本稿は主として日系移民の歴史において特に従来の語りとは異なった歴史、或いは排除されてきた歴史を理論的/実証的に考察してきた。本稿はこれにより従来の国際文化学の定義上、今まで十分に議論されてこなかった下位におかれた移民に注目することで国際文化学に貢献することを主眼とした。

第 1 章では国際文化学の概論を説明し、現在までの国際文化学の定義では、よりミクロな視点が不在となっていることを明らかにした。そして抑圧された人々をミクロな視点から研究することが国際文化学において重要なパースペクティブになることを述べた。本章では、従来の歴史において語られることがなかった日系移民への抑圧に注目することで、本稿が国際文化学に貢献することを明らかにした。

第 2 章ではヘーゲル、フクヤマ、タカキの代表的著作『歴史哲学講義』『歴史の終わり』『ダブル・ヴィクトリー―第二次世界大戦は、誰のための戦いだったのか』を中心に、「ナショナル・ヒストリー」と「多文化主義に登場する日系移民の問題」を扱った。本章では、ヘーゲルの「理性的人間と歴史」についての記述と、フクヤマの「理性的人間による認知を求めた闘争」との記述を詳細に分析し、彼らが国民的な語りから歴史を構築していったことを批判した。次に、タカキのアメリカ内部のマイノリティーに関する語りに注目した。ここではタカキの歴史記述が、国民を生産すると同時に、国家の物語を生産してきたことを批判的に検証した。具体的にはタカキによる日系移民についての語りが、彼/彼女らがアイデンティティーの葛藤に陥ることなく、「善き移民」として語られていることを批判した。本章では、ヘーゲルとフクヤマの記述は最終的にはタカキの歴史叙述によって、全てのマイノリティーがアメリカに貢献する物語として語られていることを批判した。タカキの記述は、ネーションの物語が色濃く残されており、その語りの中では国家への貢献という形でマイノリティーが完全に統合されている。タカキのアメリカ史の記述において、アメリカの多文化主義に登場する日系移民が一方的に語られ、アメリカ内部で統合されてきたのである。

タカキの歴史言説や一見日系移民の歴史と関連付けられないヘーゲルやフクヤマを批判したのは、多文化主義言説に内在するネーションの概念自体が決して新しい概念ではなく、ネーションをより強固にするための新たな装置（代替装置）であったことを明らかにするためであった。

第 3 章では、善良な「日系アメリカ人」が生産されてきた一方、そうした歴史から排除されている人々に注目するため、日系移民のサバルタンの歴史に注目した。まず日系移民のアイデンティティーの多様性に注目した二つの小説、オカダの *No-No Boy* とファンケの *The No-No Boys* の文学作品に注目した。オカダの作品は日米でも有名で日系移民の複雑なアイデンティティーの揺れに注目した小説である。一方、ファンケの作品は、本稿の中心的な議論となるツールレイク・キャンプを舞台にしており、小さな出版社から発行されている小説のため、今まで日本でもアメリカでも全く注目されてこなかった。この二つの小説にみる多様なアイデンティティーに注目して分析を行った。二つの小説はナショナル・ヒストリーにおいて語られることがなかった日系移民のアイデンティティーの多様性について描かれている。従来の歴史において語られない人々がいることを更に理論的に検証していくため、次節ではサバルタン論を援用した。

サバルタン論は社会的被抑圧者と彼/彼女らが置かれている状況に焦点を当てた理論である。まずサバルタンとは何か明らかにし、次にサバルタン論が、支配者/被支配者、抑圧者/被抑圧者といった二項対立に潜む権力関係を明らかにしている点を説明し、これらの権力関係から、全米 10 カ所に設置された日系移民の強制収容所の中でもほとんど語られることがなかったツールレイク・キャンプに注目した。

ツールレイク・キャンプに関する断片的な資料を、現地（カリフォルニア州）で収集し、資料と人々の証言からこれらの歴史を整理し、分析を加えた。ツールレイクは 1943 年強制収容所から隔離強制収容所となったことから、隔離収容所の歴史を再考した。ツールレイクが設置された要因だけでなく、収容所内の構造、収容所内の生活等を明らかにした。ツールレイクはアメリカ政府が日系移民に対して行った忠誠心調査と関わりが深いことから、忠誠心調査とツールレイクとの関係についても省察した。本章ではアメリカの多文化主義において語られることがなかったツールレイクのサバルタン史を記述した。

第 4 章では、オーラル・ヒストリーを考察することで、歴史的に排除されている日系移民に注目するため、その方法を整理した。本章の冒頭ではオーラル・ヒストリーの方法を紹介した。オーラル・ヒストリーの目的と方法を明らかにし、ナラティブ・インタビューやトランスクリプションといった質的研究の調査方法について述べた。これらの研究方法を援用して、次章ではツールレイク収容者の声を分析した。

第 5 章 6 章 7 章では、ツールレイク収容者のナラティブを紹介した。ここでは、それ

ぞれの主張をできる限り叙述し、それぞれのインタビューを通して、ツールレイク収容所に関する歴史を紹介した。実際に 3 名のツールレイク・キャンプ被収容者の証言を用いた。ツールレイク・キャンプと忠誠心調査との関係、ツールレイク収容所の実態、ツールレイク収容者のアイデンティティーの問題、ツールレイク収容者が解放された後の排斥と抑圧、言葉の問題についてのナラティブを紹介し、分析した。多文化史やナショナル・ヒストリーにおいて語れることがなかった日系移民の多様なアイデンティティーと歴史に焦点を当てた。

第 8 章では、第 4 章のツールレイクのサバルタン史と第 5 章 6 章 7 章の証言から、多文化主義の問題を扱った。本章ではアメリカの多文化主義言説の問題を明確にし、多文化主義言説に登場しない彼/彼女らの声から、日系移民が戦後、多文化社会の中で国民国家による忠誠/不忠誠としてのレッテルを貼られてきたことを明らかにした。ツールレイクの歴史と彼/彼女らの証言から多文化主義を考察することで、日系移民が多文化主義言説の中で十分に語られなかったことを明らかにし、多文化主義言説において、善良な国民として日系移民が「日系アメリカ人」として創造されてきたことを明らかにした。

第 1 章から第 8 章をとおして、アメリカの多文化主義の中で語れてきたナショナル・ヒストリーに登場することがなかったツールレイクの声を再考し、彼/彼女らのアイデンティティーが決してナショナルな網の目だけに絡み取られることなく、アメリカの多文化社会の中で存在していることを照らし出したのである。

日本語文献

上利博規（2001）『デリダ』清水書院

足立信子（2008）『ジャパニーズ・ディアスポラ：埋もれた過去・闘争の現在・不確かな未来』吉田正紀、伊藤雅俊訳、新泉社

足立和歌子他（1986）『私達の記録（Our Recollections）』　湾東日系社会奉仕団

アパデュライ,アルジュン（2010）『グローバリゼーションと暴力―マイノリティーの恐怖』藤原達郎訳　世界思想社

伊藤一男（1969）『北米百年桜』北米百年桜実行委員会

犬飼隆（2002）『文字・表記探究法』朝倉書店

井上達夫（1999）「多文化主義の政治哲学－文化政治のトュリアーデ」、油井大三郎、遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ－揺らぐナショナル・アイデンティティー』東京大学出版会

岩渕功一（2010）『多文化社会の〈文化〉を問う　共生/コミュニティ/メディア』青弓社

上野俊哉（1999）『ディアスポラの思考』筑摩書房

ヴァーカス,マジョリー（1987）『非言語コミュニケーション』石丸正訳　新潮社

ウィリス,ポール『ハマータウンの野郎ども―学校への抵抗・労働への順応』山田潤訳　筑摩書房

オカダ,ジョン（1979）『ノー・ノー・ボーイ』中山容訳　昌文社

衞藤瀋吉・公文俊平・渡辺昭夫（1982）『国際関係論』東京大学出版会

遠藤泰正（1999）「多文化主義とアメリカの過去―歴史の破壊と創造」油井大三郎・遠藤泰生編、『多文化主義のアメリカ－揺らぐナショナル・アイデンティティー』東京大学出版会

岡本智周（2001）「20 世紀後半の米国歴史教科書に表現された「日系アメリカ人」像の変質：多文化教育と共同体統合に関して」『教育社会学研究』第 68 集　pp.127-146

岡本智周（2008）『歴史教科書にみるアメリカ』学文社

沖裕子（2006）『日本語談話論』和泉書院

御厨貴（2007）「オーラル・ヒストリーとは何か―「語り手の浸透」から「聞き手の育成」へ―」御厨貴『オーラル・ヒストリー入門』岩波書店

カー,E.H.（1962）『歴史とは何か』清水幾太郎訳　岩波書店

カー, E.H.(2006)『ナショナリズムの発展』みすず書房
外務省領事移住部『わが国民の海外発展－移住百年の歩み』(カリフォルニア大学バークレー校図書館より現在相愛大学図書館収蔵資料)
姜尚中（2004)『オリエンタリズムの彼方へ―近代文化批判』岩波書店
木内信敬（1992)『総合研究　アメリカ』実教出版
菊野夏野（2010)『ポストコロニアリズムとジェンダー』青弓社
木原淳子（1995)『日系アメリカ人いま開く心の扉』自分流文庫
ギルロイ,ポール（2006)『ブラック・アトランティック―近代性と二重意識』上野俊哉他　月曜社
ギルロイ,ポール(1997)「どこから来たかじゃねえんだよ、どこにいるかなんだ～ディアスポラ的アイデンティティの弁証法」藤永泰政訳『現代思想』青土社　6月
桐谷正信（1999)「多文化的歴史学習としての日系人史学習:『新しい社会史』による分析」森茂岳雄編『多文化社会アメリカにおける国民統合と日系人学習』明石書店 pp.71-87
グハ,ラナジット（1998)『サバルタンの歴史』竹中千春訳　岩波書店
グラムシ,アントニオ（1978)「南部問題にかんするいくつかの主題」山崎功監訳『グラムシ選集』第二巻　合同出版
グラムシ,アントニオ(1995)『グラムシ・リーダー』デイヴィド・フォーカチ編、東京グラムシ研究会監修・訳　御茶の水書房
グラムシ,アントニオ（1999)「イタリアにおける国民と近代国家の形成と発展のなかにあっての政治的指導の問題」『知識人と権力―歴史的・地政学的考察』上村忠男編訳　みすず書房
グラムシ,アントニオ（1999)「従属的諸階級の歴史のために」『知識人と権力：歴史的―地政学的考察』上村忠男編訳　みすず書房
グラムシ, アントニオ(1999)『知識人と権力―歴史的・地政学的考察』上村忠男編訳　みすず書房
グラムシ, アントニオ（2011)『歴史の周辺にて「サバルタンノート」注解（グラムシ『獄中ノート』著作集Ⅶ)』松田博編訳　明石書店
クリフォード,ジェイムズ(1998)「ディアスポラ」有本健訳『現代思想』青土社 6月
クルースウェル, J.W.（2007)『研究デザイン―質的・量的・そしてミックス法』操華子、

森岡崇訳　日本看護協会出版会
コーエン,ロビン(2001)『グローバル・ディアスポラ』駒井洋、角谷多佳子訳　明石書店
小坂修平（2004)『現代思想』ナツメ社
コジェーブ,アレクサンドル（1987)『ヘーゲル読解入門:『精神現象学』を読む』上妻精、今野雅方訳　国文社
コジェーブ,アレクサンドル（1996)『法の現象学』 今村仁司・堅田研一訳　法政大学出版局
ゴッフマン,エルヴィン(1984)『アサイラム―施設被収容者の日常世界』石黒毅訳　誠信書房
小林陽一（2001)『ポストコロニアル』岩波新書
小松達也（2003)『通訳の英語、日本語』文春新書
今野敏彦・藤崎康夫（1986)『移民史Ⅲ』新泉社
サイード、エドワード（1995)『知識人とは何か』大橋洋一訳　平凡社
サイード、エドワード（1998)『文化と帝国主義１』大橋洋一訳　みすず書房
斉藤日出治(2010)『グローバル化を超える市民社会：社会的個人とヘゲモニー』新泉社
斎藤眞・杉山恭・馬場伸也・平野健一郎（1984)『国際関係における文化交流』日本国際問題研究所
酒井順子（2008)『市民のオーラル・ヒストリー―歴史を書く力を取り戻す』かわさき市民アカデミー出版
坂口満宏（2001)『日本人アメリカ移民史』不二出版
桜井厚（2002)『インタビューの社会学』せりか書房、並びに武田徹「作品化の技術」御厨貴『オーラル・ヒストリー入門』岩波書店
清水耕介（2002)『市民派のための国際政治経済学―多様性と緑の社会の可能性』社会評論社
清水耕介（2003)『テキスト国際政治経済学―多様な視点から世界を読む』ミネルヴァ書房
清水耕介(2006)『グローバル権力とホモソーシャリティ―暴力と文化の国際政治経済学』お茶の水書房
シム,ステュアート（2006)『デリダと歴史の終わり』小泉朝子訳　岩波書店
徐京植(2005)『ディアスポラ紀行』岩波新書

鈴木慎一郎(2009)「ディアスポラについて、つねに複数として、かつ横断的に思考する」、白臼陽監修・赤尾光春・早尾貴紀編（2009)『ディアスポラから世界を読む』明石書店

スピヴァク, G.C.（1988)『サバルタンは語ることができるか』上村忠男訳　みすず書房

スピヴァク, G.C.（2011)『ナショナリズムと想像力』鈴木英明訳　青土社

戴エイカ(2001)『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』明石書店

戴エイカ(1999)『多文化主義とディアスポラ』明石書店

タカキ, ロナルド（2004)『ダブル・ヴィクトリー―第二次世界大戦は、誰のための戦いだったのか』大和弘毅訳　白艢舎

タカキ, ロナルド（1995)『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』(1995) 草思社

タカキ,ロナルド（1995)『多文化社会アメリカの歴史：別の鏡に映して』富田虎男監訳　明石書店

タカキ, ロナルド（1996)『もう一つのアメリカン・ドリーム―アジア系アメリカ人の挑戦』岩波書店

高橋哲哉(1998)『デリダ―脱構築』講談社

武田徹（2007)「作品化の技術」御厨貴『オーラル・ヒストリー入門』岩波書店

田中道代(2001)『アメリカの中のアジア』社会評論社

丹羽清隆（2007)「記録の技法（トランスクリプション)」御厨貴『オーラル・ヒストリー入門』岩波書店

チョウ,レイ(1998)『ディアスポラの知識人』本橋哲也訳　青土社

陳天璽（2001)『華人ディアスポラ：華商のネットワークとアイデンティティ』明石書店

辻内鏡人（1999)「多文化主義のパラダイム」、油井大三郎、遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ―揺らぐナショナル・アイデンティティー』東京大学出版会

デリダ,ジャック（1999)『法の力』堅田研一訳　法政大学出版局

デリダ,ジャック（2000)『ポジシオン』高橋允昭訳、青土社

デリダ,ジャック(2001)『言葉にのって』林好男、森本和夫、本間邦雄訳　筑摩書房

デリダ,ジャック（2001)『たった一つの、私のものではない言葉－他者の単一言語使用』守中高明訳　岩波書店

デリダ,ジャック(2002)『有限責任会社』高橋哲也、増田一夫、宮崎裕介訳　法政大学出版局

デリダ,ジャック＆ルディネスコ、エリザベート（2003）『来るべき世界のために』藤本一勇、金澤忠信訳　岩波書店
デリダ,ジャック（2005）『デリダ、脱構築を語る』谷徹、亀井大輔訳　岩波新書
デリダ,ジャック、ルディネスコ,エリザベート(2003)『来るべき世界のために』岩波書店
戸上宗賢（1986）『ジャパニーズ・アメリカン：移住から自立への歩み』ミネルヴァ書房
トンプソン,ポール（2002）『記憶から歴史へ―オーラル・ヒストリーの世界』酒井順子訳　青木書店
長崎暢子・田中敏雄・中村尚司・石坂晋哉編集（2008）『資料集　インド国民軍関係者聞き書き』研文出版
錦田愛子（2010）『ディアスポラのパレスチナ人：「故郷」とナショナル・アイデンティティ』有信堂高文社
西成彦・原毅彦編（2003）『複数の沖縄：ディアスポラから希望へ』人文書院
ネグリ,アントニオ・ハート,マイケル(2003)『帝国』水嶋一憲訳　以文社
野口道彦・戴エイカ・島和弘（2009）『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』明石書店
バーバ,ホミ(2005)『文化の場所』本橋哲也訳　法政大学出版局
バウマン,ジグムンド（2014）『リキッド化する世界の文化論』伊藤茂訳　青土社
濱下武志（1997）「歴史研究と地域研究―歴史にあらわれた地域空間」濱下武志・辛島昇編『地域の世界史１―地域史とは何か』山川出版社
早尾貴紀（2009）「ディアスポラと本来性―近代的空間の編制と国民/非国民」、白臼陽監修『ディアスポラから世界を読む』明石書店
平野健一郎・岸清香・芝崎厚士、他（1999）『国際文化交流の政治経済学』勁草書房
平野健一郎（2000）『国際文化論』東京大学出版会
廣谷鏡子・松山秀明（2012）「オーラル・ヒストリーを用いた新しい放送史研究の可能性」『放送研究と調査』NHK 放送文化研究所　62(1)　pp.46-55
フィオーリ,G（1972）『グラムシの生涯』藤沢道郎訳　平凡社
フーコー,ミシェル（1975）『狂気の歴史』田村俶訳　新潮社
フーコー,ミシェル（1977）『監獄の誕生』　田村俶訳　新潮社
フーコー,ミシェル（2012）『知の考古学』慎改康之訳　河出書房新社
藤田結子（2008）『文化移民：越境する日本の若者とメディア』新曜社

藤原良雄（2007）「ジャック・デリダ」『環⑬』藤原書店
フクヤマ,フランシス（2005）『歴史の終わり（上）』渡部昇一訳　三笠書房
フクヤマ,フランシス（2005）『歴史の終わり（下）』渡部昇一訳　三笠書房
フクヤマ,フランシス（2006）『アメリカの終わり』講談社 BIZ
フクヤマ,フランシス（2013）『政治の起源―人類以前からフランス革命まで』講談社
ブルーマー,ハーバート（1991）『シンボリック相互作用論―パースペクティブと方法論』後藤将之訳　勁草書房
ヘーゲル（1994）『歴史哲学講義（上）』長谷川宏訳　岩波文庫
ヘーゲル（1994）『歴史哲学講義（下）』長谷川宏訳　岩波文庫
ベフ,ハルミ（2002）『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院
ホリンガー,デイヴィット.A（2002）『ポストエスニック・アメリカ』藤田文子訳　明石書店
ホール,ステュアート（1998）「文化的アイデンティティとディアスポラ』小笠原博毅訳『現代思想』青土社　3月
ボヤーリン,ジョナサン・ボヤーリン,ダニエル（2008）『ディアスポラの力』平凡社
武者小路公秀監（2008）『ディアスポラと社会変容：アジア系・アフリカ系移住者と多文化共生の課題』国際書院
ムフ,シャンタル編、デリダ,ジャック・クリッチリー,サイモン他（2002）『脱構築とプラグマティズム：来るべき民主主義』青木隆嘉訳　法政大学出版会
ムフ,シャンタル（2009）『政治的なものについて』季報『唯物論研究』110 号
村川庸子（1996）「『砂漠の宝石：トパーズの日系人強制収容』日系アメリカ人史研究のフロンティア」『敬愛大学国際教養学論集』6　pp.161-180
本橋哲也（2002）『カルチュラル・スタディーズへの招待』大修館書店
森茂岳雄（1999）「アメリカの歴史教育における国民統合と多文化主義」、油井大三郎・遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ―揺らぐナショナル・アイデンティティー』東京大学出版会
森茂岳雄（1999）『多文化社会アメリカにおける国民統合と日系人学習』明石書店
安田浩一（2010）『ルポ　差別と貧困の外国人労働者』光文社新書
油井大三郎（1999）「いま、なぜ多文化主義論争なのか」油井大三郎・遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ－揺らぐナショナル・アイデンティティー』東京大学出版会

吉本隆明（2012)『第二の敗戦記：これからの日本をどうよむか』春秋社
米山リサ（2003)『暴力・戦争・リドレス―多文化主義のポリティクス』岩波書店
ローレンス,フリードマン.J（2003)『エリクソンの人生 上―アイデンティティの探求者』やまだようこ訳　新曜社
渡辺正清（2001)『ヤマト魂 アメリカ・日系二世、自由への戦い』集英社

英語文献

Arakaki, K.R. 2002. Theorizing on the Okinawan Diaspora. In Nakasone, R. Ed, *Okinawan Diaspora*, Honolulu: University of Hawai'i Press pp.26-43

Azuma, E. 2005. *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America*.New York: Oxford University Press

Bass, H.J., Billias A.G., and Lapsansky E. J. 1983. *America and Americans*. NJ: Silver Burdett

Berghe, V.D., Pierre L.1967. Race and Racism: A Comparative Perspective. New York: John Wiley & Sons

Bhabha, H. K. 1990. The Third Space. In J. Rutherford (Ed.), *Identity: Community, Culture, Difference* (pp. 207–221), London: Lawrence & Wishart

Bhabha, H. K. 1994. *The Location of Culture*, London: Routledge

Blight, E. 2001. *A Time to Choose*. Pacific Grove, CA: Park Place Publication

Bragdon,H.W., and McCutchen, S.P. 1964. *History of a Free People.* New York: The Macmillan

Brown, R. C., Helgeson, C. A., and George, L. H. 1964. *The United States of America: A History for Young Citizens*. Morristown, NJ: Silver Burdett

Brubaker, R. 2005. The 'Diaspora' Diaspora. In *Ethics and Racial Studies*, 28:1 pp.1-19

Burton. J. F. et al. 1999. Confinement and Ethnicity: An Overview of World War II Japanese American Relocation Sites. *Publication in Anthlopology*. 74. Tucson, AZ: Western Archeological and Concentration Center, National Park Service, U.S. Department of the Interior

Charmaz, K. 2006. *Constructing Grounded Theory*. Thousand Oaks, CA: Sage

Clandinin, D. J., & Connely, F. M. 2000. *Narrative Inquiry: Experience and Story in Qualitative Research*. San Francisco: Jossey-Bass

Chang, T. 1991. *"I Can Never Forget": Men of the 100th /442nd*. Honolulu, HI: Sigi Productions, Inc

Chow, R. 1998. *Ethics and Idealism: Theory-Culture- Ethnicity Reading*. Indianapolis, IN: Indiana University Press

Clifford, J. 1994. Diasporas. In *Cultural Anthropology*. Vol.9, No.3 pp.302-338

Collins, D.E. 1985. *Native American Aliens: Disloyal and the Renunciation of Citizenship by Japanese Americans During World War II*. Westport, Conn.: Greenwood Press

Corbin, J. M., and Strauss, A. C. 2007. *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory* (3rd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage

Creswell, J.W. 1998. *Qualitative Inquiry and Research Design: Choosing Among Five Traditions*. Thousand Oaks, CA: Sage.

Cox, R. 1996. *Approaches to World Order.* Cambridge: Cambridge University Press

Gill, S., and Law, D. 1988. *The Global Political Economy: Perspectives, Problems, and Policies*. Baltimore: Johns Hopkins University Press

Creswell, J. W. 2013. *Research Design: Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods Approaches* (4th ed.). Thousand Oaks, CA: Sage

Derrida, J, 1984. *Taking Chances :Derrida,Psychoanalysis,Literature,* Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press

Ditman, D. 2005. Difficult Choices in Dangerous Times: The Yasui Family in World War II. In *A Question of Loyalty: Internment at Tule Lake*. Oregon Institute of Technology, Klamath Falls, OG: Journal of the Shaw Historical Library

Drinnon,R. 1987. *Keeper of Concentration Camps: Dillon S. Myer and American Racism*. Berkley: University of California Press

Erlandson, D. A., Harris, E. L., Skipper, B. L., and Allen S. D. 1993. *Doing Naturalistic Inquiry: A Guide to Methods*. Newbury Park, CA: Sage

Funke, T. 2008. *The No-No Boys*. Fort Collins, CO: Victory House Press

Giorgi, A. 2009. *The Descriptive Phenomenological Method in Psychology: A Modified Husserlian Approach*. Pittsburgh, PA: Duquesne University Press

Gorton, A.F. 1996. *Mapping Multiculturalism*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press

Grant, C. A., and Sleeter, C. E. (2009). *Turning on Learning: Five Approaches for Multicultural Teaching Plans for Race, Class, Gender, and Disability* (5th ed.). New York: Wiley

Grodzins, M. 1956. *The Loyal and the Disloyal*. Chicago, University of Chicago Press

Guest, G., MacQueen, K. M., and Namey, E. E. (2012). *Applied Thematic Analysis*. Thousand Oaks, CA: Sage

Hall, S. 1997. *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, London: Sage

Hayashi, B.M. 2003. *Democratizing the Enemy: The Japanese American Internment*. Princeton, NJ: Princeton University Press

Hegel. 1967. *The Phenomenology of Mind*. trans. J.B. Baillie. New York: Harper and Row

Herzig-Yoshinaga, A. 2010. Words Can Lie or Clarify: Terminology of the World War 2 Incarceration of Japanese Americans. Torrance, CA

Hohri, W. et al. 2001. *Resistance: Challenging American's Wartime Internment of Japanese-Americans*. Kearney, KE: Morris Publishing.

Hollinger, D. A. 1995. *Postethnic America: Beyond Multiculturalsim*. New York: Basicbooks

Honda, T. 2013. A Critical Analysis of Multiculturalism from Japanese American Studies. *Afrasia Working Paper Series*, Afrasian Research Centre, Ryukoku University. No.16

Honda, T. 2014. A Critical Analysis of Multiculturalism and Deviant Identities: Untold Stories of Japanese Americans without Nations. In Shimizu, K and Bradley, W. Eds, *Multiiculturalism and Conflict Reconciliation in the Asia-Pacific*. Basingstoke, Hampshire: Palgrave Macmillan pp.44-61

Hosokawa, B. 1969. *Nisei: The Quiet Americans*. San Diego CA: Intentional Productions

Hosokawa, B. 1982. *JACL in Quest of Justice*. NY: William Morrow and Company

Japanese American Citizens League, National Education Committee . 1996. *A Lesson in American history: The Japanese American Experiences, Curriculum and Resources Guide*. San Francisco: JACL

Jacoby, H.S. 1996. *Tule Lake: From Relocation to Segregation*. Crass Valley, CA: Comstock Bonaza Books

Kashiwagi, H. 2005. *Swimming in the American: A Memory and Selected Writings*. San Mateo, CA: Asian American Curriculum Project, Inc

Kumei, T.I. 1996. Skelton in the Closet: The Japanese American Hokoku Seinen-dan and their "Disloyal" Activities at the Tule Lake Segregation Center during -World War. *The Japanese Journal of American Studies*. No.7 pp.67-102

Kymlicka, W. 2001. *Politics in the Vernacular: Nationalism, Multiculturalism, and Citizenship*. NY: Oxford University Press

Kimlicka, W., and Bashir, B. 2008. *The Politics of Reconciliation in Multicultural Societies*. New York: Oxford University Press

Kiyota, M. 1997. *Beyond Loyalty: The Story of a Kibei*. Honolulu: University of Hawii'i Press

Lecompte, M.D., and Schensul, J.J. 1999. *Designing and Conducting Ethnographic Research*. Walnut Creek, CA: AltaMira

Lee, D and Salas, A. 1999. *UNFAITHING U.S. COLONIALISM*, Fremont, CA: Dharma Cloud Publishers

Kowta, M. 1976. "Tule Lake War Relocation Project." In *Archaeological Overview for the Mt. Dome and Timbered Craters Regions*, North Central California, by Janet Friedman, Appendix 1. MS on file, California Historic Resource Information System, Chico, CA: California State University

Magunuson, E. 1997. Ideological Conflict in American Political Culture: the Discourse of Civic Society and American National Narratives in American History Textbook. In *International Journal of Sociology and Social Policy*, Vol.17,

No.6 pp.84-130

Marshall, C., and Rossman, G.B. 1999. *Designing Qualitative Research* (3rd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage

Matsuo, D. 1992. *Boyhood to War: History and Anecdotes of the 442nd Regimental Combat Team*. Honolulu, HI: Mutual Publishing

Merriam, S.B. 1988. *Qualitaive Research and Case Study Applications in Education*. San Francisco: Jossey-Bass

Michi, W. 1976. *The Untold Story of America's Concentration Camps*. New York: William Morrow

Miyakawa, E.T. 2002. *Tule Lake*. Victoria, B.C. Canada: Trafford Publishing

Moulin, P. 1993. *U.S. SAMURAIS in BRUYERS*, France: Peace and Freedom Trail Editor

Moustakas, C. 1994. *Phenomenological Research Methods*. Thousand Oaks, CA: Sage.

Muller, E.L. 2001. *Free to Die for their Country: The Story of the Japanese American Draft Resisters in World War II*. Chicago: University of Chicago Press

Muller, E. L. 2007. *American Inquisition: The Hunt for Japanese American Disloyalty in World War II*. Chapel Hill, NC: The University of North Carolina Press

Myer, D.S. 1971. *Uprooted Americans: The Japanese Americans And The War Relocation Authority During the World War II*. Tucson, AZ: The University of Arizona PressNakasone, R. Ed, *Okinawan Diaspora*, Honolulu: University of Hawai'i Press

Petersen, W. 1971. *Japanese Americans: Oppression and Success*. New York: Random House

Riessman, C. K. 2008. *Narrative Methods for the Human Sciences*. Thousand Oaks, CA: Sage

Russell, J and Cohn, R. 2012. *Tule Lake War Relocation Center*. Scotland: LENNEX Corp

Safran, W. 1991. *Diaspora in Modern Societies: Myths of Homeland and Return.* In *Diaspora*, Vol 1, No.1 pp.83-99

Said, E. W. 1993. *Culture and Imperialism*. New York: Alfred A. Knopf

Schlesinger Jr., A. M. 1992. *The Disuniting of America: Reflections on the Multicultural Society.* New York: Norton

Shimabukuro, R. S. 2001. *Born in Seattle: The Campaign for Japanese-American Redress*. Seattle : University of Washington Press

Shimizu, K and Bradley, W. Eds, *Multiiculturalism and Conflict Reconciliation in the Asia-Pacific*. Basingstoke, Hampshire: Palgrave Macmillan

Schlesinger, Jr. A. M. 1992. *The Disuniting of America: Reflections on the Multicultural Societies*, NY: W.W. Norton

Simpson, C.C. 2001. *An Absence Presence: The Japanese Americans in Postwar American Culture*, 1945-1960. Durham. NC: Duke University Press

Smith, J.H., Kerrigan, W., & Derrida, J, 1984. *Taking Chances: Derrida, Psychoanalysis, Literature*. :Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press

Sone, M. 1979. *Nisei Daughter*, Washington: University of Washington Press

Stake, R. E. 1995. *The Art of Case Study Research*. Thousand Oaks, CA: Sage

Starn,O. 1986. Engineering Internment: Anthropologists and the War Relocation Authority, *American Ethnologist*, vol13,no.4

Straus, A., and Corbin, J. 1990. *Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Techniques*. Thousand Oaks, CA: Sage

Takaki, R. 1998. *A Large Memory: A History of Our Diversity, with Voices.* New York: Little Brown and Company

Takaki, R. 1998. *Strangers From a Differnet Shore*.New York: Little Brown and Company

Takaki, R. 2008. *A Different Mirror: A history of Multicultural America*. New York: Little Brown and Company

Takei, B. 2005. Legalizing Detention: Segregated Japanese Americans and the Justice Department's Renunciation Program. In *A Question of Loyalty: Internment at Tule Lake*. Oregon Institute of Technology, Klamath Falls, OG: Journal of the Shaw Historical Library pp.75-105

Takei, B. and J, Tachibana. 2012. *Tule Lake Revisited: A Brief History and Guide to*

the Tule Lake Concentration Camp Site. San Francisco: Tule Lake Committee

Tanaka, C. 1982. *Go for Broke: A Pictorial History of the Japanese-American 100th Infantry Battalion and the 442th Regimental Combat Team*. Richmond, CA: Go for Broke, Inc

Taylor, C. 1994. The Politics of Recognition. In A. Gutmann (Ed.), *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition* (pp. 25–73). Princeton, NJ: Princeton University Press

tenBroek, J., Barnhart, E.N., and Matson, F.W. 1975. *Prejudice, War and the Constitution: Causes and Consequences of the Evacuation of the Japanese Americans in World War II*. Berkley, Los Angeles and London: University of California Press

The Shaw Historical Library. 2005. *A Question of Loyalty: Internment at Tule Lake*. Oregon Institute of Technology, Klamath Falls, OG: Journal of the Shaw Historical Library

Taylor, C. 1992. The Politics of Recognition, In Gutmann, A, ed, *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*, Princeton: Princeton University Press

Tomita, M, K. 1995. *Dear Miye : Letters Home From Japan 1939-1946*, Redwood City, CA: Stanford University Press

Tsukamoto, M. and Pinkerton, E. 1987. *We the People: A Story of Internment in America*. Elk Grove, CA: Laguna publishers

Tule Lake Committee. 2000. *Second kinenhi: Reflections on Tule Lake*. San Francisco: Tule Lake Committee

Tule Lake Committee. 2012. *Tule Lake Pilgrimage 2012: Understanding No-No and Renunciation*. Tule Lake Committee

Turner, G. 2003. After Hybridity: Muslim-Australians and the Imagined Community, *Continuum: Journal of Media and Cultural Studies*, 17(4) pp.411-418

Uchida, Y. *Desert Exiles: The Uprooting of a Japanese-American Family*. Seattle: University of Washington Press

Wolcott, H.T. 1999. *Ethnography: A Way of Seeing*. Walnut Creek, CA: AltaMira.

Yamato, I. 1997. *Morning Glory, Evening Shadow: Yamato Ichihashi and His*

Internment Writings, 1942-1945. Edited, annotated and with a biographical essay by Chang, G. Redwood City, CA: Stanford University Press

Yin, R. K. 2009. *Case Study Research: Design and Methods* (4th ed.). Thousand Oaks, CA: Sage

Yin, R. K. 2012. *Applications of Case Study Research* (3rd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage

URL

Civil Liberties Public Education Fund(CLPEF), *Education Resources: Tule Lake*, http://www.momomedia.com/CLPEF/index.html, 閲覧日 2014 年 11 月 22 日

CNN.Com, July 25, 2016, Hillary Clinton's full DNC speech (Entire speech), http://edition.cnn.com/videos/politics/2016/07/29/dnc-convention-hillary-clinton-entire-full-acceptance-speech-sot.cnn, 閲覧日 2016 年 10 月 3 日

Densho、「日系アメリカ人：日系アメリカ人の辿ってきた道を追うオンライン歴史資料館」、http://nikkeijin.densho.org/reference_ch4_04_tule_lake.html, 閲覧日 2014 年 11 月 24 日

Densho: The Japanese American Legacy Project. Terminology and Glossary, http://www.densho.org/default.asp?path=/assets/sharedpages/glossary.asp?section=home, 閲覧日 2014 年 10 月 31 日

New York Daily News, January 5, 2016, A year of Trump: The most controversial comments Donald Trump said in 2015, http://www.nydailynews.com/news/national/donald-trump-controversial-comments-2015-article-1.2482124, 閲覧日 2016 年 10 月 3 日

付録資料

インタビューA

私はカリフォルニア州サクラメント出身の二世です。両親は共に広島出身の日系一世でした。私には 8 人の兄弟がいました。1941 年にアメリカと日本が戦争をはじめました。そしてすぐさま、私たちは仮収容所にいくことになったのです。そのとき、両親も私も日本に帰りたかったのです。しかし日本に帰っても私たちを世話してくれる親戚がいませんでした。私たちはしょうがなく、ツールレイクに収容されることになったのです。耳の遠くなった隣にいる私の兄もツールレイクには絶対に行きたくなかったと今でも言っています。

私は 7 歳の時にツールレイクに収容されました。私は自分の境遇を知りたいと思い、ツールレイクについてたくさんのことを学びましたので、ツールレイクの歴史についてはよく知っています。

ツールレイクについて問題と思いますのは忠誠心調査についてです。その忠誠心調査にも二つの問題がありました。一つ目の問題はアメリカへの忠誠を示しますかという質問、そして二つ目はアメリカのために兵役につきますかという質問でした。それらのいずれかにノーと答えた場合、ツールレイクに送られたのです。この調査は 1943 年に行われましたが、その前の 1941 年から私たちの周りでは、多くの日系人がアメリカに対して不満を持っていました。だから 1943 年の忠誠心調査の後に、このキャンプに忠誠的でない人々を集めたのだと思います。でもキャンプに入る前から私達は常に敵性外国人という扱いを受けてきたのですよ。当然ながらアメリカに対して従順でいれるわけがないと思います。

ところでどうしてこの調査を行ったかについてお話します。政府は忠誠心調査を行いましたが、政府は私達が敵性外国人である以上、忠誠を示すものとそうでないものを見分けることを目的としていました。そしてもう一つの理由は、アメリカでも兵士が不足する中で市民権を持つ日系二世の労働力（兵力を含む）を必要としていました。そこで忠誠心調査の中で、アメリカの兵士として兵役につくための同意を得る調査を行ったのです。兵役についた多くの二世は戦地の最前線に送られたのです。

私の父は大変歳をとっていました。1884 年生まれの一世で、キャンプに収容された時はもう 60 歳に近かったのです。父はどういった意図かはわからないが、忠誠心調査にノー

と答えました。私が推測するにおそらく日本に帰りたかったのだと思います。これは大変重要なことと思います。私の家族で父のみが忠誠心調査に答えました。これは忠誠心調査でしたが、それにノー・ノーと答えたことは不忠誠を意味するものではなかったのです。父が質問に対して答えたことは、ナショナル・アイデンティティーを決定するためのもの（アメリカに忠誠を示さず、日本に忠誠を示すこと）ではなかったのです。というのも、アメリカから日本へ送還される日系人も多かったですし、政府は日本に帰りたければツールレイクに行くべきだという政府側の見方もあったからです。つまり、アメリカ政府からすれば（忠誠心調査を実施することで）日系人を日本へと送還できる理由ができるからです。

実際に私の家族も周りの家族も、家族が共に生活するために何が最善かを考えて忠誠心調査に答えていたのではないかと思います。皆、家族が離れ離れになることを恐れて、この苦境を生き抜くためにアメリカへの忠誠を拒んだのだと思います。父の姻戚は忠誠心調査で「あなたはアメリカ合衆国に忠誠を示すか」という質問に対して「私は私の神にのみ忠誠を示す」と答えたと言います。なぜそのように答えたかはわからないが、その当時収容所にいる日系人は大変な苦労をしてきたのです。決して国家への忠誠という言葉では解決できない複雑な事情があったのだと思います。

次に収容所内での生活についてお話したいと思います。父や姻戚はこのようなノー・ノーという選択をしましたが、実際にツールレイクでは（国民性を強調した）いくつかのグループがありました。私の一人の兄はツールレイクの中で日本を支持するグループにいました。また別の兄はアメリカを支持するグループにいました。つまりグループが異なっていたためよく口論になっていたのです。父はキャンプの中で調理師として生活していましたし、ツールレイクの敷地内にある畑で農作物も作っていました。しかしその敷地も兵士に常に管理されていました。毎朝作業に行くときはツールレイクの敷地であっても許可が必要でした。兵士から許可を得た収容者だけがトラックで移動して作業をしましたが、1944 年 5 月 24 日に事件が起きました。ソウイチ・オカモトがトラックに乗って許可が必要な農園に行こうとしたとき、兵士が「止まれ」と指示しました。しかしそれに従わずトラックに乗ろうとして走っていくとすぐに兵士に撃たれてしまい、彼は命を落としました。こうした事件があったのです。このような事実がある以上、強制収容所は決して自由な場所ではなく、キャンプ内でも行動が制限され管理されているところでした。私たちはいつも監視員によって管理されていたのです。ツールレイクのバ

ラックは新しいグループ（忠誠心調査後に他のキャンプから来たノー・ノーの人々）と古いグループ（もともとツールレイクにいてノー・ノーと答えた人々）に分かれていました。ハートマウンテン或いはアラスカから来た日系人グループもいました。皆それぞれグループごとに生活していまいた。

キャンプの至る箇所にガードタワーがあり、管理が大変厳しかったのを覚えています。そこには常に兵士が銃を持って待機しており、私たちを監視していました。気候は寒暖の差が大変激しく、大変砂埃の多い場所でした。

私達は1945年10月にツールレイクを出所しました。私達が収容所に送り込まれる前は、父は一世で市民権がなかったので、土地を所有することができませんでした。1940年に19歳である兄の名前で土地を買いました。しかしその後、収容所に行くことになり、土地を手放しました。日系人全体で80パーセントの人々が税を払えなかったので土地を手放したと聞いております。税金が払えなかった理由は収容所の中で働くことができなかったからです。

（筆者と同行し一緒にインタビューに参加した日系移民女性の発言）

私はボランティアで小学校に行き、収容所の話を子供たちにする活動をしています。ある日、いつものように子供たちに、日系人が収容所に入れられるまでに所有していた土地の話をしたことがありました。彼らにその話をして税金を納める必要があったことを伝えると、ある小学生が次のように質問しました。「じゃぁ収容所にいる人達はどうやってお金を払うの？」この質問に私は再び驚かされました。小学生の子供が言ったその通りだったからです。彼/彼女らには払うための方法がまったくなかったのです。彼の言うように、税金を払えず、土地を手放した人は本当に多かったと思います。

（ここで彼女の話は終わる。）

私達もやはり土地を手放しました。出所後、家をみつけることが大変むずかしかったです。私達は日本に帰りたいと何度も思いました。しかし日本で生活する当てがなかったのです。現地の人々にはどこに行ってもまったく歓迎されませんでしたね。私達は出所後、何度も引っ越しました。一年間に数回引っ越したこともありました。父は特に大変な苦労をしていたと思います。というのも仕事がまったくみつかりませんでした。彼はカリフォルニアで鉄道の仕事をみつけました。出所した時にはかなり年でしたから。鉄道の仕事は父にとって過酷で腰を二回ほど痛めました。しかしその他に仕事を選択することはできなかったのです。その翌年 4 月にはカリフォルニアのパーキンスでオキムラ

の小麦農園を手伝った。その年の 10 月に、フローリンに移り翌年の 9 月までそこで滞在した。サクラメントから南に 5 マイル程の場所です。一人での移動ではなく家族での移動であっため本当に大変でした。

インタビュイーB

サクラメントの日本町に住んでいました。両親は日本町で豆腐屋さんをしていました。その当時からアメリカでは日系人の排斥が厳しかったです。それでサクラメントでは病院やお店を自分達だけで作り、独自の日本町を形成しました。300 以上の店が日本町にありました。その当時はなかなか現地の人々が私達に商品を売ってくれなかったのです。その後、パールハーバーがあって、2 月 19 日にルーズベルト大統領が 9066 号を発令し、16 分の 1 の日系人の血が混じっているすべての日系人を収容所に入れたのです。しかし注目すべきことは、それまでに 500 以上のアジア人を迫害する法律が執行されていたことでした。特にここカリフォルニアは排斥が厳しかったのです。アジア人に対する排斥は主に日系人と中国人を対象にしていました。そのうちの一番厳しい法律は、中国人と日本人には市民権を与えないというものでした。一世の人々はそれによって市民権を与えられなかったのです。そして私たちを敵性外国人として扱い、一世が土地を所有することを完全に禁止しました。私はサクラメント生まれだったのでアメリカ人でした。私の両親は当然一世でしたので仕方がなく外国人扱いとなりました。

それでは収容所についてお話します。私たちは収容所に行く前に先にアッセンブリー・センター（仮収容所）に行きました。そこで一か月ほど生活しました。そしてその後、ツールレイク・キャンプが建設されました。キャンプには無数のブロックがあり、一つのブロックに数人（4～5 人）が生活していました。生活するバラックとは別に食べるところがあり、洗面所もありました。もしも家族が多ければブロックを二つ与えられました。食堂で作業すればお金が手に入ったのですが、一か月＄16 程度であって、一般的な課程の収入の 10 分の 1 にも満たなかったのです。そして、お金を使うところもキャンプには当然ありませんでした。なぜならキャンプは監獄（ジェイル）だったからです。まさに監獄（ジェイル）でした。

私はツールレイク・キャンプにはじめからいました。1943 年に忠誠心調査が行われ、アメリカのために兵役につきますかという質問と日本と戦いますかという質問がありました。よく考えてもみてください。一世にとっては市民権もなかったのです。それなのに

どうしてこのような質問に答えられるのでしょうか。みんな不満に思っていたはずです。なぜ強制収容所に行かなければならないのでしょうか。なぜ元の場所に帰れないのでしょうか。そう思うのは当然のことだと思います。私は長年忠誠心調査について考えてきました。なぜツールレイクの人々はアメリカに忠誠を示さなかったのでしょうか。それはアメリカへ忠誠を示さず日本に忠誠を示したのではありません。そうではなく、当時、彼らが置かれていた状況に対して抗議していたのではないでしょうか。日系移民の研究者や日系移民のグループは私たちツーリアンを不忠誠者といいます。しかし実際にそうといえるのでしょうか。例えば兵役につきたくない人々も多くいたはずです。

ツールレイクでは 21 人の二世が兵役を拒絶しました。そして彼らは別の牢屋に収容されました。更にツールレイクには悪い人間を集める収容所を建設しました。問題を起こした人々です。まさに監獄の中に監獄がありました。大変なキャンプだったのです。

ノー・ノーと答えてツールレイクに収容されたことは、個々人によってさまざまな理由があります。その要因はさまざまあり、決して不忠誠という一つの帰結に至ることはできません。私の経験からいえることは、忠誠か不忠誠かという問題ではなく、日米の狭間で悩み、生きるために抗議し続けたということでした。それが結果としてはアメリカ人である二世にとって、よくない歴史と認識されてしまったのです。

私は 1960 年に兵役につきました。しかし望んでそうしたのではありません。生活が大変苦しかったからです。そこで私は韓国で医療班のメンバーとして兵役につきました。決して国のために戦争に行ったわけではありません。

忠誠や不忠誠としてツールレイクの収容者や日系人が語られることには問題があります。ツールレイクの収容者は抑圧された状況の中で、忠誠心調査をさせられました。彼らはその時点で生きるために最善の方法を考えただけです。しかし共通していえることは彼らの選択がアメリカに対する抗議と抵抗を意味していたということです。しかし結果として強制収容所に入れられた私たちは抵抗する声すら奪われてしまったのです。

インタビューC

私の両親はトパーズ強制収容所にいました。1943 年の忠誠心調査でノー・ノーと答えた両親は、家族でトパーズからセグリゲーション・センター（隔離収容所）であるツールレイクに移送されました。私自身、収容所での記憶はあまりありませんが、被収容者の方々からお話を聞いたり、自分で調べたことを今日お話ししたいと思います。私の参加

しているツールレイク委員会（Tule Lake Committee） は、アメリカの日系人社会の中でも特にキャンプについて活動している中心的人物ジミー・ヤマイチらが中心となっているボランティア・グループです。二年に一回、pilgrimage（史跡）というツールレイク・キャンプのツアーを実施しています。350～400 人がこの史跡ツアーに参加しています。ツールレイクの跡地には当時の収容所の一部が残されていますが、そのツアーでは史跡を巡ることでツールレイクの生活の一部を体験することができます。そこから体験できることは、キャンプ内での劣悪な環境や、ツールレイクの気候がいかに過酷であったかです。また施設の跡地から推察すると、当時のツールレイク・キャンプには各々のトイレにパーテーションがまったくなかったと想定されます。

私は弁護士という立場からツールレイク・キャンプについてお話します。まず日系人に対して行われた強制的な退去と収容について政府がどのように呼んでいるのかについてです。私は強制収容所が、転移所や避難所として語られていることに憤りを感じています。実際に日系人に対して行われた強制収容は、relocation（「転移」或いは「再移住」を意味する語）として語られたり、或いは evacuation(「避難所」或いは「疎開」という語)として語られてきました。これを私たちは euphemism(婉曲法)と呼んでいます。これは否定的な意味を持つ語句を直接使わず、別の言葉を使って否定的な意味合いを歪曲することを意味します。ですからキャンプの不都合（強制的に日系移民を監禁したこと）を隠蔽しようとするためにこのような言葉が使われました。そして今でもキャンプを説明する際にこの言葉が使われています。

実際に政府は強制収容を relocation と evacuation と呼んでいました。しかし実際はどうでしょうか。政府は強制的に日系人を立ち退かせました。evacuation では無かったのです。この evacuation という言葉は人々をある危険から回避させる或いは避難させることを意味します。しかし当時のアメリカの社会経済上の理由から政府やアメリカ市民は、彼ら日系人を危険人物、スパイ、敵性外国人として認識し差別していました。だからこそ退去させ、監禁しました。それにも関わらずこのこと（強制収容所）を evacuation という言葉で説明すること自体に問題があります。assembly center（仮収容所）も同じです。assemble というと何か人が集まり交流する場として認識されています。自発的に集まるという意味合いが強いのです。しかしこの仮収容所は劣悪な環境に強制的に日系人を移動させ、廃れた小屋に近い場所に日系人を強制的にかき集めたものでした。しかも収容所ができるまでの仮収容所で彼らは不安だらけでした。現在でもこうした言葉の問

題によって日系人に対して行われた強制収容に対する誤解が生じています。確かに「強制収容所」はユダヤ人に対して行われたホロコーストを意味します。アメリカのユダヤ人コミュニティーは日系人がこの表現を彼らの収容経験として使用することを否定しました。というのもユダヤ人の悲劇と日系人の経験とは異なっていて（日系人の場合ホロコーストは行われなかった)、まったく性質が異なるものであるという認識から、ユダヤ人の強制収容の歴史を過小評価することに繋がると考えたようです。しかし私たちは強制収容という言葉を積極的に使っています。なぜなら私たちの強制収容所には高い鉄のフェンスがあり、ガードタワーがあり、中にいる人間を外に出さないように銃をもっていたからです。外にいる人々に向けて銃口が向けられていたのではないのです。まさに収容所の中の人々に向けられていたのです。それは私達にとって強制収容所であり監獄でした。

私は初め家族とトパーズ・キャンプに収容されました。その後、ツールレイク・キャンプに行くことになりました。ですから私の家族は忠誠心調査にノーと答えました。ツールレイクはオレゴン州とカリフォルニア州の州境にあり、1943 年の忠誠心調査の後には segregation center（隔離収容所）になりました。もともとツールレイクにいた人々（1943 年以前に収容された人々）には選択肢がありました。ツールレイクから出て別のキャンプに行く選択もありました。おそらく政府はトラブルメーカーを一つのキャンプに収容させたかったのだと思います。政府は不忠誠の人間を一カ所に集めたかったのです。誰であっても忠誠心調査で少しでも危険とマークされた人々はこの収容所に連行されました。つまりこの調査に答えなかった人々も不忠誠者の刻印を押されたのです。或いはもし忠誠心調査でイェス（自分自身が兵役についた場合も含む）と答えた場合、「その代わり家族をキャンプから出して自由の身にしてほしい。」と主張した場合にも彼らの家族は不忠誠者と判断されました。

私はツールレイクに収容された人々からこの忠誠心調査についてインタビューを取りました。そこで特に問題となったのは、質問項目 28 でした。この項目にある swear（誓う）という言葉を多くの日系人が重く受け止めたのです。質問項目 28 は「あなたは無条件でアメリカ合衆国に忠誠を誓い、外国や国内のいかなる攻撃からも合衆国を守り、また、日本国天皇をはじめ、いかなる外国の政府・権力・組織に対しても忠誠を示さず服従もしない、と誓えますか。」でした。

この中にある swear（誓う）という言葉は当時の日系人にとって、一度日本に忠誠を示

した人が今はその忠誠を捨ててアメリカ合衆国に忠誠を示すことを意味しているように解釈されました。忠誠心調査自体が意味するものは、まず日系人を日本に忠誠を示している集団として捉えており、そして日本に忠誠を示している集団が今度はその忠誠を捨ててアメリカに忠誠を示すということを意味していました。アメリカ合衆国はそのように彼らを分別し、忠誠をアメリカに示させるよう仕向けたのです。しかし問題は、日系人がどのようにこの忠誠心調査に答えればよいかということでした。彼らの中には当然日本に忠誠を示していない人々も多かったですし、国家への帰属を意識していない人々が多かったと思います。つまり、国家への忠誠を示せなかった人々、或いは忠誠心調査に困惑し答えられなかった人々もツールレイクに収容されました。

18 歳以上の人々はみんなその調査の対象となりました。私の知人の女性は自分には小さな子供がいて兵役にはつけないと答えました。すると彼女らはツールレイクに送りこまれた。このように強制収容所内では個人の主張や立場は全く無視され、従わない者はすべて「不忠誠者」として人々を隔離したのです。そうした状況の中で彼/彼女らがいかに苦労したのかを想像することができるでしょう。もちろん日本に忠誠を示すグループもツールレイク・キャンプにはありました。また、アメリカに従う方針を示したグループもありました。しかし私の知る限りではほとんどのツールレイク被収容者はこれらのグループに属していなかったのです。

政府はツールレイクでの活動を鎮静化するためにキャンプ内に兵士を増員し、戦車を運びました。それはまさに監獄でした。そしてその中に更に「問題児」を軟禁する施設まで日系人に作らせました。私は弁護士ですので法律的なことを申しますが、やはり憲法上強制収容を実行することは不可能だったのです。政府はなぜツールレイクに日系人を収容するのかについての明確な理由を提示する必要がありました。しかしそうした理由はどこにも見当たらなかったのです。

これは当然ながらマイノリティーの移民に向けられた暴力です。どれくらい長い間収容所内にいればよいのかもわかりませんでした。突然持てるだけのものを持って、移動しなさいと言われたわけです。学校も仕事もすべて失ったのは日系人です。土地もビジネスも全て失いました。移住してやっと手に入れた家具や他のものは全て失わなければならなかったのです。「これだけ持っていくので、あとは持って行ってください」とみんな言って自分達の家を後にしたのです。

更にアメリカ政府は日系人に対して任意で市民権を放棄できる法案を制定しました。ア

メリカ政府には日本にいる米兵の捕虜を取り戻したいという考えがありました。戦時中に日本兵をつかまえ捕虜にしようとしたのですが、捕まえれば自殺する者が多かったため、日系人を人質にして日本にいる米兵捕虜と交換しようと考えました。そこで日系人にも市民権の放棄をさせて、日本にいるアメリカの捕虜を彼らと引き換えに交換しようとしました。このことはアメリカにとって利益がありました。アメリカ政府は日系人のグループを振り分けることができ、政府にとって不要な人々を送還することが可能でした。実際にツールレイク被収容者を中心に 5000 人ほどの人が市民権の放棄をしたのです。その時の混乱を想像できるでしょうか。私たちはこうして善良な日系人とそうでないものというふるいにかけられたのです。